小矢部市埋蔵文化財報告書第 53 冊

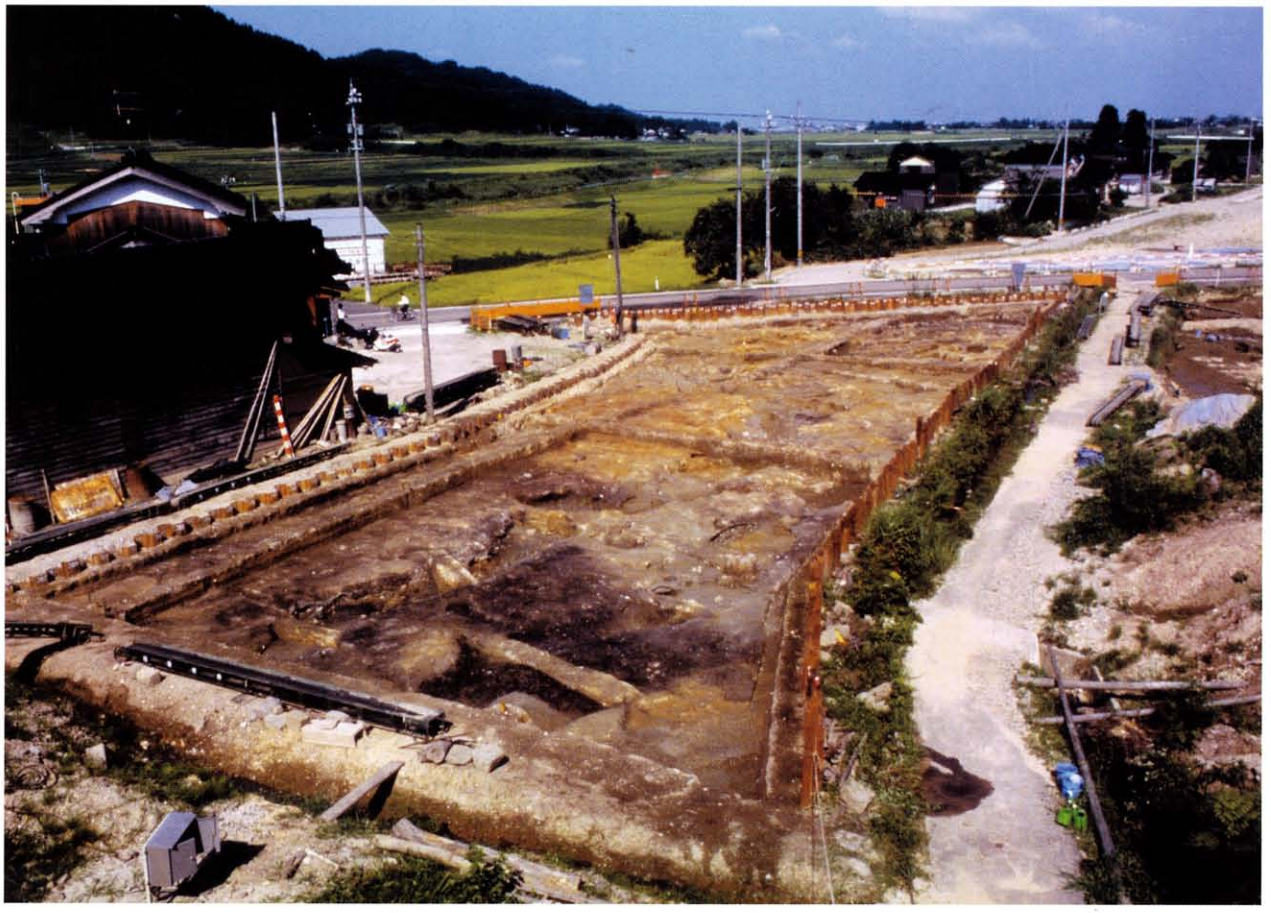
富山県小矢部市

桜町遺跡発掘調査報告書

縄　文　遺　構　編　Ⅰ
弥生・古墳・古代・中世編Ⅱ
第1分冊

2004年
小矢部市教育委員会

舟岡地区近景（東南上空から）



第６調査区全景（西から）

第６調査区西側土坑群（東から）

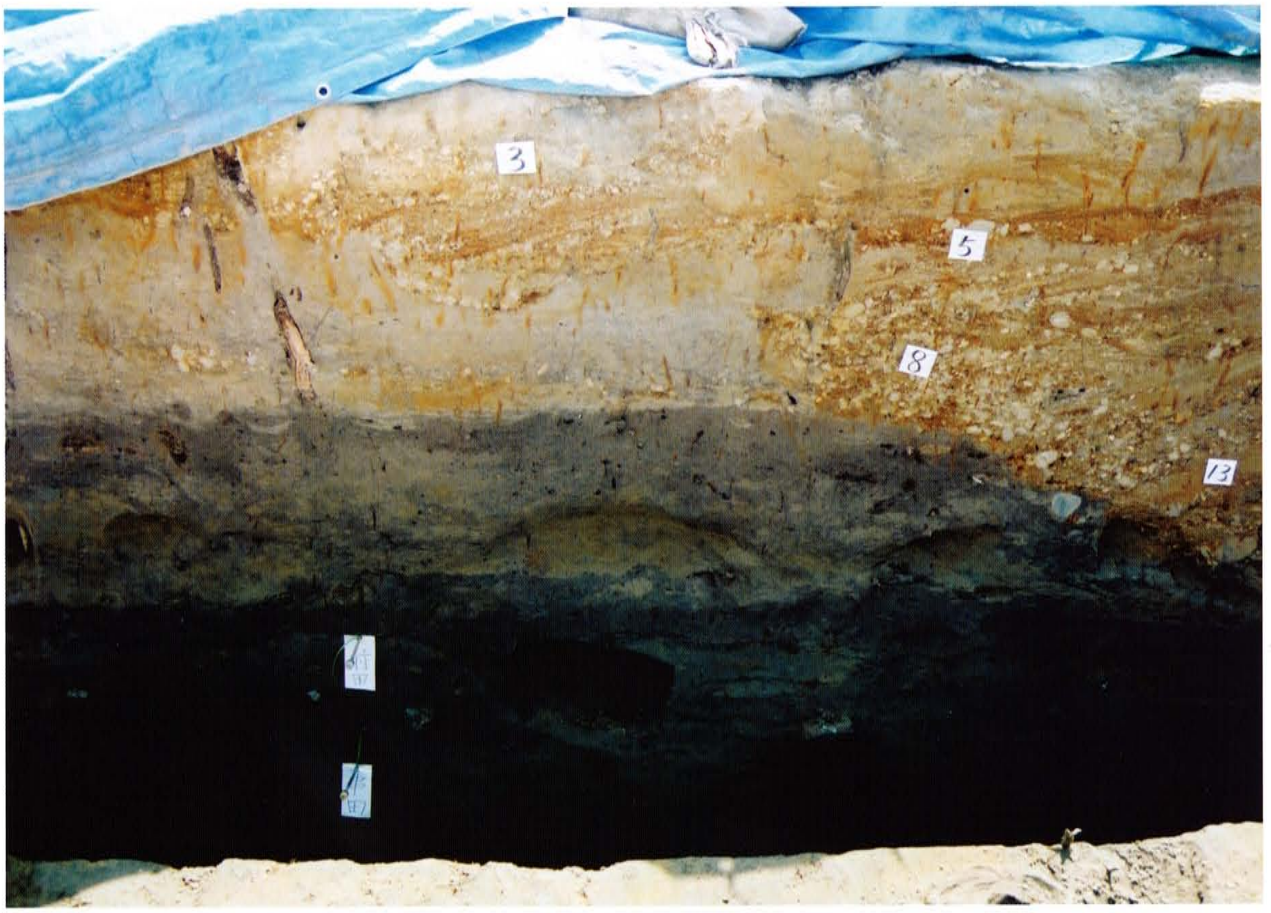
第６調査区焼土F 10・11（東から）

第６調査区 SD06 土層断面（南から）

第１調査区小型高床柱出土状況（東から）

第６調査区巨木柱出土状況（西から）

第１調査区木材出土状況（東から）



第１調査区 SD06土層断面（西から）

第１調査区 SX01木組み（東から）

第１調査区 SX02木組み（西から）

第１調査区 SX02木組み（東から）

第２調査区樹皮列を伴う木組み全景（東から）

第２調査区樹皮列を伴う木組み東部分（東から）

小矢部市埋蔵文化財報告書第 53 冊

富山県小矢部市

桜町遺跡発掘調査報告書

縄　文　遺　構　編　Ⅰ
弥生・古墳・古代・中世編Ⅱ
第１分冊

2004年
小矢部市教育委員会

序

本書は、国道８号小矢部バイパス建設に伴い、昭和62年から平成11年にかけて実施した桜町遺跡の発掘調査報告書です。

この調査区は、舟岡地区と呼んでいる遺跡西端の谷の中にあたります。調査では、縄文時代中期末から後期初頭の川・焼土・貯蔵穴・埋甕・土器溜まり・巨木柱根・水場木組みなどの遺構が発見され、水場木組みの木材には、貫穴やえつり穴などの加工がある木材が含まれていました。これらの木材は、高床建物の建築材とみられ、それまで弥生時代からとされていた高床建物の出現が、縄文時代に遡ることを示すものとして全国の人々の注目を集めました。

このほかにも、斧柄、掘棒、漆塗鉢、漆塗弓、クリやクルミなどの木の実、ザルやカゴなどの編物、シカ・イノシシ・サケ・マスの骨など、有機質遺物が大量に出土しました。

これらの出土品は、通常の遺跡では腐って残らないもので、縄文人の木工技術やその暮らしぶりを具体的に知ることができる貴重なものといえます。

本書には、それらが出土した縄文時代の遺構と、弥生時代以降の遺構･遺物についての報告を収めています。このあと、縄文土器、石器、木製品などについても順次報告していく予定です。

この発掘成果が、今後の研究の参考となり、埋蔵文化財に対する理解並びに保護の一助となれば幸いです。

終わりに、調査に協力していただきました地元の方々及び、国土交通省、富山県埋蔵文化財センターをはじめとします関係諸機関の方々に心から感謝申し上げます。

平成16年３月

小矢部市教育委員会

教育長　楠　　公尚

例　　言

1．本書は、富山県小矢部市桜町に所在する桜町遺跡舟岡地区で、昭和58年度、昭和62年度、昭和63年度、平成２年度、平成８年度、平成９年度、平成10年度、平成11年度、平成12年度に実施した発掘調査の発掘調査報告書である。

2．この発掘調査は、国道８号小矢部バイパスの建設に伴うもので、小矢部市教育委員会が国土交通省（前建設省）から委託を受けて実施した。

3．調査年度、調査地区名、発掘面積、調査期間は次のとおりである。

・1983（昭和58）年度　舟岡地区第８調査区、47㎡、1983年12月。

・1987（昭和62）年度　中出地区、3,500㎡、1987年５月20日から11月10日。

・1988（昭和63）年度　舟岡地区東側の谷口（のちの第１調査区と第６調査区）、2,600㎡。
1988年５月９日～12月27日。

・1990（平成２）年度　舟岡地区西側の谷奥（のちの第10調査区）、1,270㎡。
1990年６月26日～10月16日。

・1996（平成８）年度　舟岡地区第１調査区、1,655㎡。
1996年４月22日～1997年１月24日。

・1997（平成９）年度　舟岡地区第１調査区、継続。
1997年４月２日～12月26日。

・1998（平成10）年度　舟岡地区第１調査区、継続。
1998年５月19日～12月25日。

・1999（平成11）年度　舟岡地区第２調査区・第３調査区、2,752㎡。
1999年４月１日～2000年１月28日。

・2000（平成12）年度舟岡地区第２調査区・第３調査区、継続。
2000年４月21日～12月22日。

4．調査主体は小矢部市教育委員会である。調査の実施にあたり、富山県教育委員会から調査員の派遣を受けた。発掘調査担当者は下記のとおりである。

・1983年度　小矢部市教育委員会嘱託　山森伸正

・1987年度　富山県教育委員会派遣文化財保護主事　岡本淳一郎
小矢部市教育委員会主任　伊藤隆三
同　上　主事　高木場万里
同　上　嘱託　塚田一成・山森伸正

・1988年度　富山県教育委員会派遣文化財保護主事　岡本淳一郎
小矢部市教育委員会主任　伊藤隆三
同　上　主事　高木場万里・山森伸正
同　上　嘱託　塚田一成

・1990年度　富山県教育委員会派遣文化財保護主事　島田修一
小矢部市教育委員会主事　山森伸正
・1996年度　小矢部市教育委員会主事　塚田一成
・1997年度　小矢部市教育委員会主事　塚田一成
・1998年度　小矢部市教育委員会文化 課課長補佐　伊藤隆三
同　上　主事　高木場万里・塚田一成・大野淳也・辻谷真夕
・1999年度　小矢部市教育委員会文化課主事　中井真夕
・2000年度　小矢部市教育委員会文化課主事　大野淳也・中井真夕

5．本書の作成は、小矢部市教育委員会が行った。作成にあたり、桜町遺跡調査等検討委員会（田中琢委員長）の指導を受けた。担当者は下記のとおりである。

・2003年度　総括　文化課　課　長　日光久悦
主務　同　上　課長代理　久々忠義　主任　塚田一成　主事　中井真夕
事務　同　上　主　任　高木場万里　主事　大野淳也

6．本書の編集・執筆は、小矢部市教育委員会文化課職員の協力を得て、久々忠義、塚田一成、中井真夕が行った。ただし、「付載　自然科学分析」については、分析を委託した専門機関の報告を掲載した。

7．本書は、ほかに付図４枚と本書を収めたＣＤ－ＲＯＭ１枚が付いている。本書の図・写真図版の表示は次のとおりである。

1）遺構番号は、調査年度毎に、遺構の種別ごとに付した。遺構番号は調査現場で付したものをそのまま使用し、川・溝－SD、土坑－SK、柱穴・小穴－P、木組等－SX、掘立柱建物－SB、焼土－F、畠－SFと表記し、番号の先に付した。埋甕はそのままとした。

3）本書で示す方位はすべて磁北、水平基準は海抜高である。

4）引用・参考文献は、著者と発行年（西暦）を［　］で文中に示し、巻末に一括して掲載した。

6）遺構図版の縮尺は、原則として１/40としたが、他に１/20と１/80のものがある。土層は、１/60と１/120としたものがある。土器図版の縮尺は、原則として１/３とした。金属器は１/１、木器は１/４である。

7）遺物の写真図版については、縄文土器は１/４とし、その他は１/３とした。金属器・銭貨は１/１、石製品は１/２、木器は１/２である。

8．出土遺物と調査に関する資料は、すべて小矢部ふるさと歴史館が保管している。

9．発掘調査中および報告書作成中、下記の方々・機関から多大な御教示・御協力を得た。記して深甚なる謝意を表したい。（敬称略、五十音順）

赤羽仁諭・網谷克彦・泉　拓良・池野正男・上野　章・上野幸夫・宇野隆夫・岡村道雄・河西健二・苅谷俊介・狩野　睦・河原純之・岸本雅敏・楠瀬　勝・黒崎　直・小島俊彰・高妻洋成・佐伯安一・酒井重洋・坂井秀弥・佐藤洋一郎・神保孝造・鈴木三男・高橋学・田中　琢・西井龍儀・能城修一・長谷川益夫・松井　章・宮本長二郎・桃野真晃・山田昌久・山本正敏・渡辺　晶

目　　次

第Ⅰ章　位置と環境…… 1
　1　位置の位置…… 1
　2　歴史的環境…… 1
第Ⅱ章　調査に至る経緯…… 3
第Ⅲ章　調査の概要…… 9
第Ⅳ章　縄文時代の遺構…… 11
　1．中出地区（1987年度調査）…… 11
　　A．概　要…… 11
　　B．遺　構…… 11
　　C．遺物の分布…… 11
　2．第6調査区（1988・1989年度調査）…… 12
　　A．概　要…… 12
　　B．遺　構…… 12
　3．第10調査区（1990年度調査）…… 16
　　A．概　要…… 16
　　B．遺　構…… 16
　4．第1調査区（1988・1997・1998年度調査）…… 16
　　A．概　要…… 16
　　B．遺　構…… 17
第Ⅴ章　弥生・古墳・古代・中世の遺構・遺物…… 21
　1．第8調査区（地山地区、1983年度調査）…… 21
　　A．概　要…… 21
　　B．飛鳥時代…… 21
　　C．中世・近世…… 21
　2．第10調査区（1990年度調査）…… 21
　　A．概　要…… 21
　　B．弥生時代…… 21
　　C．平安時代…… 21
　　D．中世・近世…… 21
　3．第1・第6調査区（1988・1996年度調査）…… 22
　　A．概　要…… 22
　　B．弥生時代…… 22

C．古墳時代…… 22
D．飛鳥時代…… 23
E．奈良時代…… 23
F．平安時代…… 23
G．中世・近世…… 24
4．第２調査区（1998・1999・2000年度調査）…… 24
A．概　要…… 24
B．古墳時代…… 25
C．飛鳥時代…… 26
D．平安時代…… 26
E．中　世…… 26
5．第３調査区東側（1999・2000年度調査）…… 26
A．概　要…… 26
B．弥生時代…… 26
C．古墳時代…… 26
D．飛鳥時代…… 27
E．平安時代…… 27
F．中世・近世…… 27
第Ⅵ章　まとめ…… 29
参考文献…… 34

付載１　第10調査区における自然科学分析…… 36
パリノ・サーヴェイ株式会社
付載２　第１調査区における自然科学分析…… 45
パリノ・サーヴェイ株式会社
付載３　第１調査区・第６調査区・中出地区採取試料の放射性炭素年代測定結果…… 73
付載４　第２調査区出土「樹皮列を伴う木組み」の自然科学分析…… 75
抄　録…… 96

図版目次

巻首図版

巻首図版１　舟岡地区近景（東南上空から）
巻首図版２　上：第６調査区全景（西から）

下：第６調査区西側土坑群（東から）
巻首図版３　上：第６調査区焼土Ｆ10・11（東から）
下：第６調査区 SD 06土層断面（南から）
巻首図版４　上：第１調査区小型高床柱出土状況（東から）
下：第６調査区巨木柱出土状況（西から）
巻首図版５　第１調査区木材出土状況（東から）
巻首図版６　上：第１調査区 SX 02木組み（西から）
下：第１調査区 SD 06土層断面（西から）
巻首図版７　上：第１調査区 SX 01木組み（東から）
下：第１調査区 SX 02木組み（東から）
巻首図版８　上：第２調査区樹皮列を伴う木組み全景（東から）
下：第２調査区樹皮列を伴う木組み東部分（東から）

図版

第１図　遺跡位置図…… 2
第２図　調査区位置図…… 5
第３図　第１調査区南北断面模式図…… 17
第４図　第２・３調査区基本土層図…… 24
第５図　遺跡の時代…… 29
第６図　中出地区遺構図(1)遺構全体図・SX 01 …… 97
第７図　中出地区遺構図(2)土層・SX 01断面図 …… 98
第８図　第10調査区遺構図(1)遺構全体図…… 99
第９図　第10調査区遺構図(2)埋甕…… 100
第10図　第10調査区遺構図(3)土層 …… 101
第11図　第10調査区遺構図(4)土層 …… 102
第12図　第１・６調査区遺構図(1)土層位置図…… 103
第13図　第１・６調査区遺構図(2)土層…… 104
第14図　第１・６調査区遺構図(3)土層…… 105
第15図　第１・６調査区遺構図(4)土層…… 106
第16図　第１・６調査区遺構図(5)土層…… 107
第17図　第６調査区遺構図(1) SG 01上層 …… 108
第18図　第６調査区遺構図(2) SG 01下層流路・土層 …… 109
第19図　第６調査区遺構図(3) SG 01土層 …… 110
第20図　第６調査区遺構図(4) SG 01最下層流路・土層 …… 111

第21図　第６調査区遺構図(5) SG 02遺物出土状況 …… 112
第22図　第６調査区遺構図(6) SG 04 …… 113
第23図　第６調査区遺構図(7)焼土位置…… 114
第24図　第６調査区遺構図(8)焼土Ｆ１ …… 115
第25図　第６調査区遺構図(9)焼土Ｆ２～４ …… 116
第26図　第６調査区遺構図(10)焼土Ｆ10・11 …… 117
第27図　第６調査区遺構図(11)土坑…… 118
第28図　第６調査区遺構図(12)土坑…… 119
第29図　第６調査区遺構図(13)土坑…… 120
第30図　第６調査区遺構図(14)土坑…… 121
第31図　第６調査区遺構図(15)土坑…… 122
第32図　第６調査区遺構図(16)木柱…… 123
第33図　第１調査区遺構図(1) SX 01 …… 124
第34図　第１調査区遺構図(2) SX 02 …… 125
第35図　第１調査区遺構図(3) SX 03 …… 127
第36図　第１調査区遺構図(4) SX 04・05 …… 128
第37図　第１調査区遺構図(5) SX 14 …… 129
第38図　第１調査区遺構図(6) SX 08・09 …… 130
第39図　第１調査区遺構図(7)土坑…… 131
第40図　第１調査区遺構図(8)埋甕…… 132
第41図　第１調査区遺構図(9)土層…… 133
第42図　第１調査区遺構図(10)土層…… 134
第43図　第１調査区遺構図(11)土層…… 135
第44図　第１調査区遺構図(12)土層…… 136
第45図　第１調査区遺構図(13)湖沼堆積…… 137
第46図　第10調査区遺構図(1)畠 …… 138
第47図　第10調査区遺構図(2)掘立柱建物・土層 …… 139
第48図　第１・６調査区遺構図(1)明治以降の取り水…… 140
第49図　第１調査区遺構図(1)中世の柱穴群…… 141
第50図　第１調査区遺構図(2)平安時代の川 SD 06新 …… 142
第51図　第１調査区遺構図(3)平安時代の川 SD 06新…… 143
第52図　第１・６調査区遺構図(1)溝の土層 …… 144
第53図　第１・６調査区遺構図(2)溝の土層…… 145
第54図　第１・６調査区遺構図(3)溝の土層 …… 146
第55図　第１・６調査区遺構図(4)溝の土層…… 147

第56図　第１・６調査区遺構図(5)包含層・SD 06土層 …… 148
第57図　第１・６調査区遺構図(6)包含層…… 149
第58図　第２調査区遺構図(1)土層…… 150
第59図　第２調査区遺構図(2)土層…… 151
第60図　第２調査区遺構図(3)樹皮列を伴う木組み…… 152
第61図　第２調査区遺構図(4)樹皮列を伴う木組み…… 153
第62図　第３調査区遺構図(1)土層…… 155
第63図　第３調査区遺構図(2)土層・土坑…… 156
第64図　第８調査区遺物図　須恵器・珠洲・土師器・青磁…… 157
第65図　第10調査区遺物図弥生土器・須恵器・土師器・土錘・珠洲・越中瀬戸・銭…… 158
第66図　第１・６調査区遺物図(1)土師器・須恵器・製塩土器・支脚…… 159
第67図　第１・６調査区遺物図(2)土師器…… 160
第68図　第１・６調査区遺物図(3)土錘…… 161
第69図　第１・６調査区遺物図(4)珠洲・瓦器・越中瀬戸・るつぼ・羽口・火鉢…… 162
第70図　第２調査区遺物図(1)土師器…… 163
第71図　第２調査区遺物図(2)土師器・須恵器…… 164
第72図　第２調査区遺物図(3)鍬・滑石製品…… 165
第73図　第３調査区遺物図(1)弥生土器・土師器…… 166
第74図　第３調査区遺物図(2)土師器・須恵器・製塩土器…… 167
第75図　第３調査区遺物図(3)珠洲・加賀・青磁・土師皿・こうがい…… 168

表

表１－１　調査の経過(1)…… 7
表１－２　調査の経過(2)…… 8
表２　縄文土器編年表…… 28
表３　時期区分…… 35
表４　第６調査区焼土一覧表…… 79
表５　第６調査区木柱の入った土坑一覧表…… 79
表６－１　第６調査区土坑一覧表(1)…… 79
表６－２　第６調査区土坑一覧表(2)…… 80
表６－３　第６調査区土坑一覧表(3)…… 81
表６－４　第６調査区土坑一覧表(4)…… 81
表６－５　第６調査区土坑一覧表(5)…… 82
表７　第１調査区木柱の入った土坑一覧表…… 83

表８－１　第１調査区土坑一覧表(1)…… 83
表８－２　第１調査区土坑一覧表(2)…… 84
表８－３　第１調査区土坑一覧表(3)…… 85
表９－１　第１調査区埋甕一覧表(1)…… 85
表９－２　第１調査区埋甕一覧表(2)…… 86
表10－１　第１調査区木組み及び木材集中箇所(1)…… 86
表10－２　第１調査区木組み及び木材集中箇所(2)…… 87
表11　第６調査区土坑一覧表…… 87
表12　第６調査区木柱の入った土坑一覧表…… 88
表13　第８調査区遺物一覧表…… 89
表14－１　第10調査区遺物一覧(1)…… 89
表14－２　第10調査区遺物一覧(2)…… 90
表15－１　第１・６調査区遺物一覧表(1)…… 90
表15－２　第１・６調査区遺物一覧表(2)…… 91
表15－３　第１・６調査区遺物一覧表(3)…… 92
表15－４　第１・６調査区遺物一覧表(4)…… 93
表16－１　第２調査区遺物一覧表(1)…… 94
表16－２　第２調査区遺物一覧表(2)…… 94
表17－１　第３調査区遺物一覧表(1)…… 94
表17－２　第３調査区遺物一覧表(2)…… 95

付図

付図１　第１・６調査区縄文遺構全体図
付図２　第１・６調査区上層遺構全体図
付図３　第２・３調査区遺構全体図300分の１
付図４　第１調査区中世遺構図

第Ⅰ章　位置と環境

遺跡の位置（第１図）

桜町遺跡は、富山県小矢部市桜町、西中野に所在する。小矢部市は、富山県の西端中央に位置し、石川県に隣接する。市内中央をＪＲ北陸線が通り、石動駅がある。南部には北陸自動車道が東西に走り、西部には能越自動車道が南北に走っており、両道は市内南東部で交差する。

市域の地形は、北・西・南の三方が山地、東が平地、中央部が台地となっている。山地は、北に市内最高所である稲葉山（標高347m）、西に三国山（標高323m）や倶利伽羅峠（標高276m）がある石動丘陵、南に蟹谷丘陵（標高199m）がある。東側は、庄川の堆積作用によって形成された砺波平野が広がる。砺波平野は、散居村の景観で知られている。中央の台地は、庄川と小矢部川が形成した河岸段丘である。小矢部川は、川幅が50～100mで、段丘と平地の境を南から北へ蛇行しながら流れ、市街地南部で渋江川が合流し、市街地北部では、子撫川が合流する。

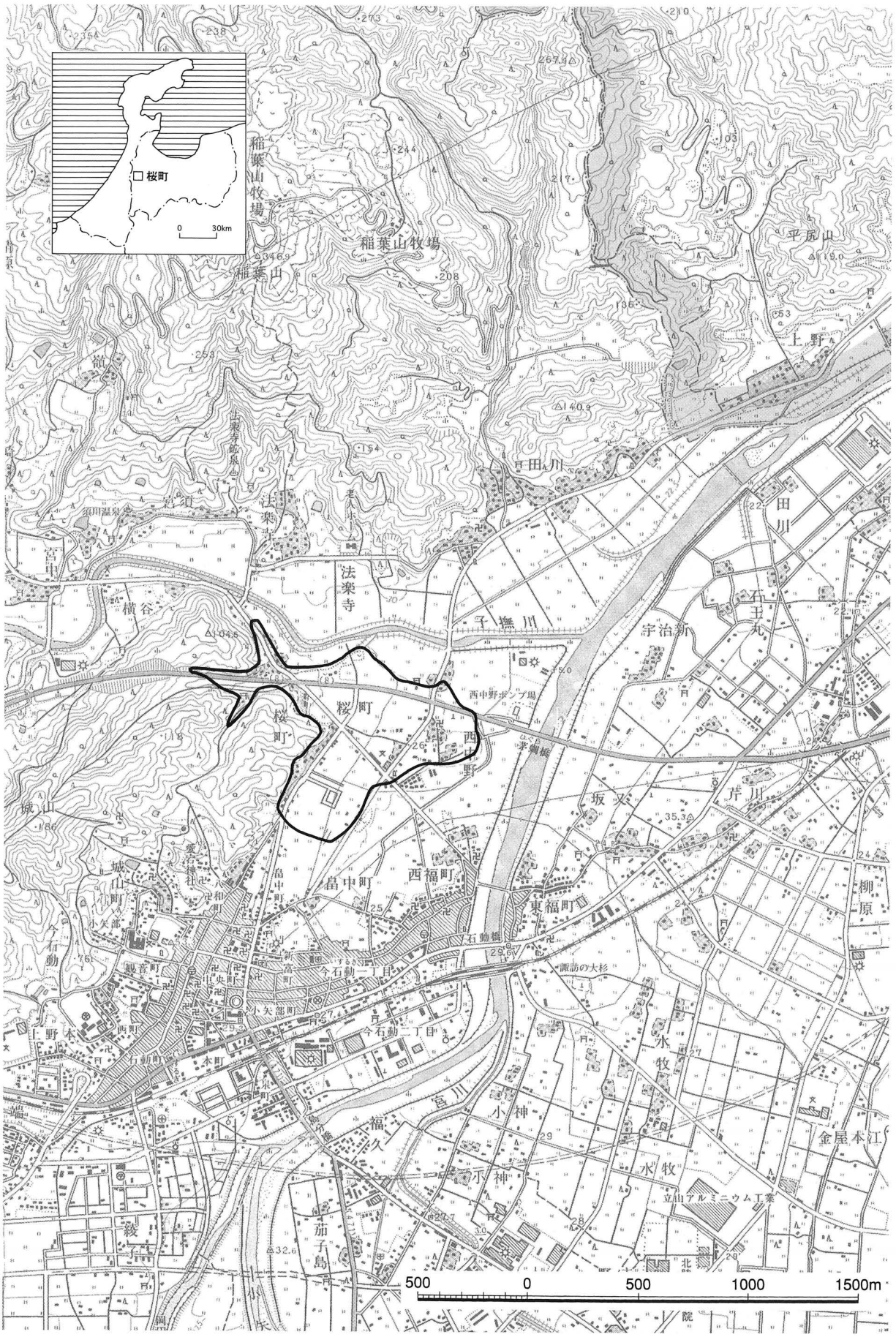
桜町遺跡は、小矢部川と子撫川の合流部西側にあり、遺跡は、東西約１km南北800m面積約60万kmと推計されている。標高は、北側の丘陵下で約30m、小矢部川付近の北東部で約23mを測り、北西部から北東部へ傾斜している。遺跡の北側を画する子撫川は、現在の川底との比高差が約５m、その両岸には、比高差約４mの旧川床面がある。

舟岡地区は、桜町遺跡の北西部に位置し、丘陵谷部の入り口部にあたる。谷は、入り口部の幅が約100m、西方へ150m入ったところで、西方へ伸びる谷と南方へ伸びる谷とに分かれる。谷の標高は29～45mで、南北の丘陵の標高は84mである。谷の中は調査以前は水田であり、南谷の入り口部には、ため池があり、その南東丘陵斜面に神明社が祀られている。

歴史的環境

小矢部市街地である石動は、天正13年（1585）前田利秀が開いた城下町である。利秀死去により今石動城が廃された後は、北陸街道の宿場町として発展してきた。古代、中世は、遺跡の南約４kmにある蓮沼が、砺波郡の軍事・交通の拠点であった。蓮沼の西方丘陵地には、関野１号墳や若宮古墳などの大型古墳があり、大伴家持が「焼太刀を砺波の関に明日よりは守部遣り添え君を留めむ」と詠んだ砺波関の位置が、倶利伽羅峠下の石坂字関野あたりに想定されている。古代北陸道は、加賀の深見駅（津幡町）からここに至り、丘陵沿いに伏木方面へ向かうものと考えられている。越中最初の駅「坂本駅」を、ここあるいは桜町遺跡付近に想定する説がある。

石川県との境にある砺波山は、寿永２年（1183）に木曽義仲軍が平維盛軍を火牛の計で破った倶利伽羅合戦の戦場として名高い。室町時代には、砺波郡守護代遊佐氏の居城があり、蓮沼と放生津を往来する舟運がさかんであった。中世の小矢部市域には、田河保、宮島保、埴生保、松永庄、蟹谷庄などの保や荘園があったといわれ、蓮沼は埴生保に、桜町遺跡は宮島保に含まれるものと考えられている。桜町遺跡そばの丘陵上には、弥生終末期か古墳前期と見られる天狗山古墳群、北西の丘陵斜面には飛鳥時代の桜町横穴墓群が残されている［小矢部市2003］。



第1図　遺跡位置図（1：25,000）

第Ⅱ章　調査に至る経緯

遺跡の発見

桜町遺跡は、1971年（昭和46）に富山県教育委員会が国庫補助を受けて実施した分布調査事業で発見された。西井龍儀氏が、桜町地内で土師器や須恵器が散布していることを発見し、『富山県遺跡地図』（1972年刊）に、桜町Ａ遺跡と桜町Ｂ遺跡の２ヶ所が登載された。

詳細分布調査

1977年（昭和52）に、国道８号の混雑解消のため、桜町および西中野地内にバイパスが建設されることが決定された。一方、小矢部市教育委員会は、1979年（昭和54）から国庫補助を受けて遺跡分布調査事業を実施することになった。調査は、富山大学人文学部考古学研究室の協力を得て小矢部市埋蔵文化財分布調査団を結成し、５ヶ年にわたって行うことになったが、国道８号バイパスの建設計画があることから、初年度はその地域を対象に行われた。

その結果、桜町Ａ遺跡と桜町Ｂ遺跡の周辺にも遺物の散布が確認され、その広がりが東西1.25㎞南北900ｍ、面積が約60万㎢におよぶことが判明した。そして、採集遺物から、奈良・平安時代と中世の集落跡が埋もれていることが推測された［市教委1980Ａ］。

その後、1993年（平成５）に『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』が作成された際、その地割りから、遺跡の範囲と重複して、また遺跡の東南へ張り出す形で桜町条里遺跡が設定された［県教委1993］。

試掘調査

舟岡地区で最初に発掘調査が行われたのは1983年（昭和58）である。谷部中央（第７調査区と第８調査区の境）で用水管埋設工事が行われるのに伴い、幅1.7ｍ、長さ28ｍのトレンチ状の調査区が発掘された。この調査で、地表下約1.5ｍのところに縄文後期後半から晩期の土器を大量に含む黒色土が堆積していることがわかり、縄文時代の遺跡でもあることがわかった［市教委1990］。

国道８号の建設に先立つ試掘調査は、1986年（昭和61）に行われた。この調査は、鋼矢板で囲んだ10ｍ×10ｍの発掘区を４ヶ所（Ａ～Ｄ区）と1983年の用水管工事調査区の東隣接地で、５ｍ×５ｍの試掘区を１ヶ所（Ｅ区）、第４調査区と第５調査区中央部で幅１ｍ長さ27ｍのトレンチ１ヶ所が調査された。この調査では、地表下４ｍから縄文早期の土器が出土し、縄文時代早期・前期・中期・晩期の各時期の土器・石器、縄文晩期の玉類・漆塗櫛、骨角器、種子類などが出土した［市教委1990］。

以上の調査から、重要な遺跡であるとの認識が生まれ、国道８号用地外への広がりを確認するため、1989年（平成元）に国及び県の補助金を受けて「重要遺跡確認緊急調査」が実施された。この調査は、3.2～７ｍ×４～41.5ｍの試掘区を７ヶ所（ｊＡ～ｊＧ区）掘り、ボーリング調査を７ヶ所（ｊ１～ｊ７区）で実施した。この調査では、南支谷の入り口部分で、柱根を含む縄

文晩期の柱穴などが検出されており、国道８号用地の南側に縄文晩期の遺構の広がりが認められた。

本調査

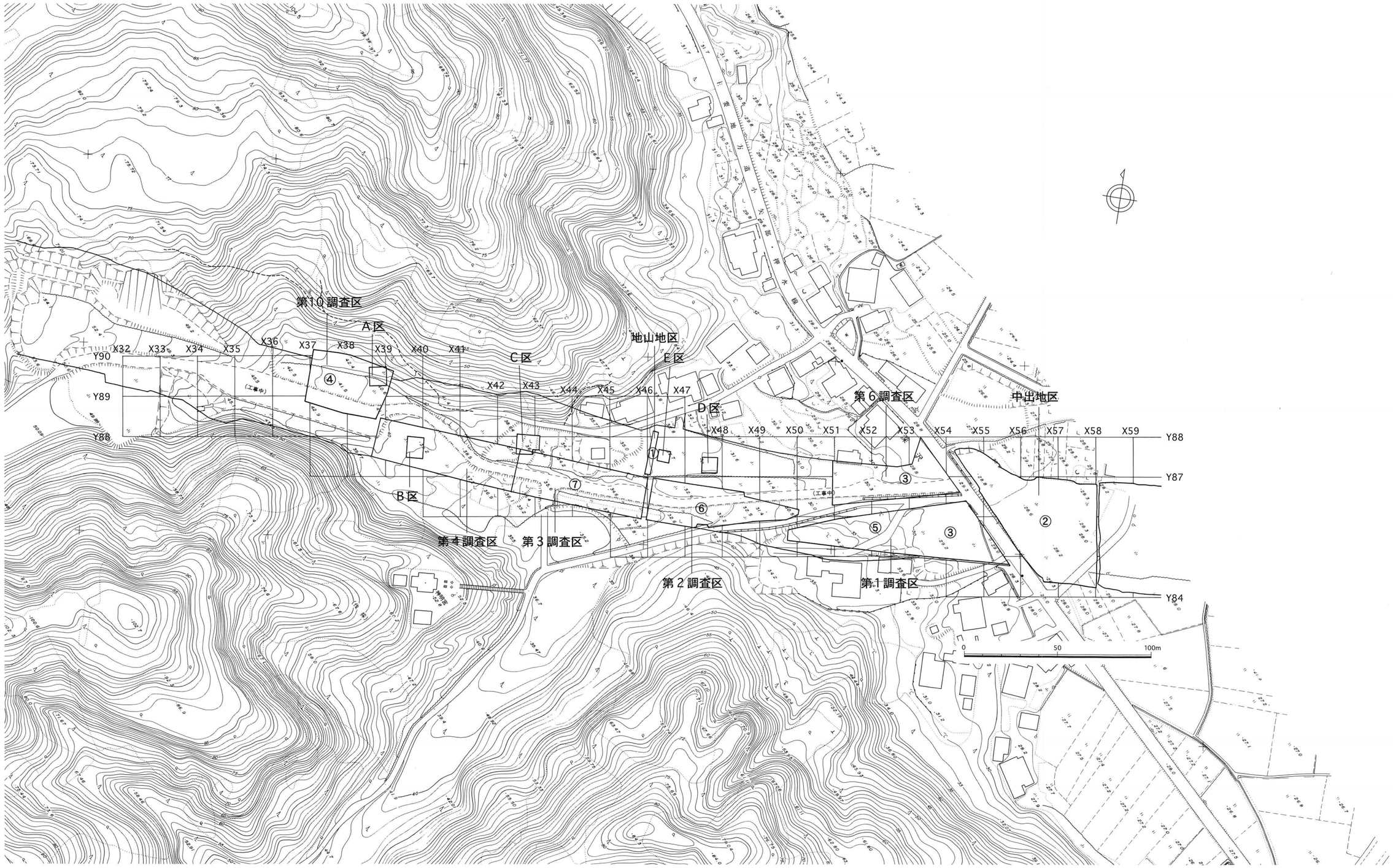
舟岡地区の本調査は、1988年（昭和63）から始まった。この年とその翌年は、谷の入り口部分（のちの第１調査区と第６調査区）で、2,600㎡を対象とした。その結果、第１調査区にあたる所では、貫穴とえつり穴のある木柱・石斧柄・漆塗片口鉢・掘棒などが出土し、第６調査区にあたる所では、平安時代後期の溝や縄文時代の焼土・巨木柱根・イノシシの下顎骨やサケなどの骨類も出土した。その中でも、貫穴とえつり穴のある木柱は、高床建物の柱材とされ、それまで高床建物は弥生時代に大陸から伝わったものと考えられていたため、定説を覆す発見として注目を集めることになった。

そのような状況から、国道８号用地の発掘調査が長期化することが予想された。そのため、市と建設省富山工事事務所（現国土交通省富山河川国道事務所）は、用地幅のうち北側２車線分を遺跡の上に盛り土して暫定供用することし、南側２車線分の発掘調査を先に進めることにした。

そのため、1990年（平成２）には、遺跡西端（のちの第10調査区）で、1,270㎡の発掘調査を行った後、1991年（平成３）から1995年（平成７）まで発掘調査は中断された。遺跡西端の調査では、縄文時代晩期の埋甕、中世とみられる掘立柱建物や畠跡が検出された。

南側２車線分の発掘調査は、1996年（平成８）から始まり、この調査では、国道８号用地を10の調査区にわけて第１～第10の調査区が設定された（第２図）。調査は、東側から掘り進め、第１調査区は1997年（平成９）と1998年（平成10）に、第２調査区は、1999年（平成11）に、第３調査区は1999年から2002年（平成14）まで、第４調査区は2001年から2003年（平成15）までそれぞれ行われた。

その結果、第１調査区からは、縄文時代のさまざまな加工のある木材があらたに出土し、第２調査区からは、古墳時代の水路、屋根材とみられていた樹皮列を伴う木組み、平安時代の水路、中世の柱穴が、第３調査区からは、縄文時代後期末～晩期の土器溜まり、縄文晩期の環状木柱列・貯蔵穴・木組みが、第４調査区からは、縄文晩期の貯蔵穴がそれぞれ検出された。



第2図　調査区位置図（2000分の1）

表１－１　調査の経過(1)

地区番号	年度	所　在　地	調査目的・調査面積	時代・特記事項
①	1983年 昭和58	桜町字舟岡 （第８調査区）	用水管埋設工事に伴う本調査　発掘面積　47㎡	縄文（晩期） 古代・中世
	1986年 昭和61	桜町字舟岡	国道８号小矢部バイパス建設に伴う試掘調査 発掘面積　500㎡	縄文（前期・中期・後期・晩期） 弥生・古墳・古代・中世
②	1987年 昭和62	桜町字中出	国道８号小矢部バイパス建設に伴う本調査 発掘面積　3,500㎡	縄文・弥生・古墳・飛鳥・奈良・平安・中世・近世 木簡や「長岡神祝」などの墨書土器
③	1988年 昭和63	桜町字舟岡 （第６調査区）	国道８号小矢部バイパス建設に伴う本調査 発掘面積　2,600㎡	縄文（中期・後期・晩期） 平安・中世 縄文後期初頭の建築部材
③	1989年 平成元	桜町字舟岡 （第６調査区）	国道８号小矢部バイパス建設に伴う本調査 発掘面積　600㎡	縄文（前期・中期）
		桜町字舟岡・蟹坪	重要遺跡確認緊急調査事業に伴う試掘調査 発掘面積　550㎡	縄文（前期・後期・晩期）・弥生終末・古墳・中世
④	1990年 平成２	桜町字舟岡 （第10調査区）	国道８号小矢部バイパス建設に伴う試掘調査 対象面積　2,000㎡	縄文（晩期）・古墳・平安 縄文晩期の埋甕
⑤	1996年 平成８	桜町字舟岡 第１調査区	国道８号小矢部バイパス建設に伴う本調査 発掘面積　1,655㎡	縄文後期・古墳・古代・中世・近世
⑤	1997年 平成９	桜町字舟岡 第１調査区	国道８号小矢部バイパス建設に伴う本調査 発掘面積　1,655㎡	縄文（中期・後期）・古代・中世・江戸 縄文後期初頭の大量の木材
⑥	1998年 平成10	桜町字舟岡 第１調査区 第２調査区	国道８号小矢部バイパス建設に伴う本調査 発掘面積　3,000㎡	縄文（早期～晩期）・古墳・古代・中世 彫刻柱
⑥ ⑦	1999年 平成11	桜町字舟岡 第２調査区 第３調査区	国道８号小矢部バイパス建設に伴う本調査 発掘面積　2,752㎡	縄文（中期～晩期）・古墳・古代・中世 縄文晩期の半割柱

表１－２　調査の経過（２）

地区番号	年度	所　在　地	調査目的・調査面積	時代・特記事項
	1999年 平成11	桜町字舟岡 第11調査区	遺跡の範囲を把握するための試掘調査 対象面積　1,473㎡	縄文・古墳・古代・中世・江戸
⑦	2000年 平成12年	桜町字舟岡 第３調査区	国道８号小矢部バイパス建設に伴う本調査 発掘面積　1,120㎡	縄文（後期・晩期）・古墳・平安・中世 環状木柱列遺構
		桜町字舟岡 第３調査区 第４調査区 第５調査区	国道８号小矢部バイパス建設に伴う試掘調査 対象面積　3,749㎡	縄文
		桜町字舟岡 第11調査区	遺跡の範囲を把握するための試掘調査 対象面積　211㎡	縄文（中期・後期・晩期）・古墳・平安・中世
	2001年 平成13	桜町字舟岡 第１調査区 第２調査区 第３調査区 第４調査区 第５調査区	国道８号小矢部バイパス建設に伴う試掘調査 発掘面積　3,498㎡	縄文（中期・後期・晩期） 古代・中世・近世
		桜町字舟岡 第３調査区 第４調査区	国道８号小矢部バイパス建設に伴う本調査 発掘面積　1,478㎡	縄文（中期・後期・晩期） 古代・中世・近世
		桜町字舟岡 第11調査区	遺跡の範囲を把握するための試掘調査 対象面積　1,473㎡	縄文中期
	2002年 平成14	桜町字舟岡 第３調査区 第４調査区	国道８号小矢部バイパス建設に伴う本調査 発掘面積　2,220㎡	縄文（前期・中期・後期・晩期） 環状木柱列・貯蔵穴群
	2003年 平成15	桜町字舟岡 第４調査区	国道８号小矢部バイパス建設に伴う本調査 発掘面積　600㎡	縄文（晩期） 古代・中世・近世

第Ⅲ章　調査の概要

調査地の現況（巻首図版）

調査地は、遺跡の北西部にあたり、石動市街地の北西にある城山（標高186m）の北麓谷部に立地する。城山北麓部は、小矢部川支流の子撫川に注ぐＹ字状の谷地形が入り込んでおり、調査地は、その谷の入り口にあたる。

谷は、間口幅約100mで、500m入ったところで幅20mとなる西谷と、180m入ったところで南に分岐する南谷がある。南谷は間口50mで、160m入ったところで幅20mとなる。谷の中は、海抜28.5～40m、谷の周囲の丘陵は、海抜84～107mで、比高差が大きい。

調査地は、現在国道８号の北側２車線が暫定使用されて現在自動車が通っているが、調査前は、そのほとんどが水田で、谷の入り口では民家も立っていた。

調査区の区割（第２図）

調査区は、1982年（昭和57）度の発掘調査から、遺跡全体を覆うことができるよう市内泉町地内に任意の点を置き、南北方向を磁北に合わせたＹ軸と、それに直交する東西方向をＸ軸とする座標を設定した。Ｙ軸は南から北方向へ、Ｘ軸は西から東方向へ、20mごとに数字を刻んでいる。

各調査区の位置及び調査年度はつぎのとおりである。

中出地区	Ｘ58～61Ｙ84～87	1987（昭62）年度調査
第１調査区	Ｘ51.1～55.4Ｙ85.2～86.2	1988（昭63）年度、1996（平８）～1998（平10）年度調査
第２調査区	Ｘ46.5～50.5Ｙ85.8～86.9	1999（平11）年度調査
第３調査区東	Ｘ45.6～46.7Ｙ85.9～87.1	1999（平11）～2002年（平14）度調査
第６調査区	Ｘ51.1～54.2Ｙ86.3～87.4	1988（昭63）～1989（平１）年度調査
第10調査区	Ｘ36.8～39.2Ｙ87.9～89.6	1990（平２）度調査

なお、遺物の取り上げは、２m四方を一区画とし、少数点以下に１桁目に１～９の数字で示し、その中をさらに１mごとに区分して取り上げた場合には、２桁目に５の数字を付した。例えば、Ｘ51.15というのは、Ｘ50とＸ60の間20mのうちの１mと２mの間を示している。ただし、本書では、２桁目の数字を省略した。

発掘調査

調査の諸段階としては、表土・包含層掘削、遺構検出・掘削、遺構の記録写真撮影・実測図化、空中写真測量、自然科学分析がある。

表土・包含層掘削は、人力でスコップを使った。遺構検出・掘削は、人力でジョレンやねじり鎌を使って行った。遺構番号は、調査年度毎に、遺構の種類毎に番号をつけた。遺構は、埋土の堆積状況を観察・記録するためのセクションベルトを残し、移植ゴテで発掘した。掘立柱建物の

柱穴のセクションは、平面的に少しずつ下げて柱痕跡を確認したのち断ち割り図化している。

遺構のセクション図は基本的に1/20で作成した。遺構によっては、遺物の出土状況図も作成しており、その場合は1/10で作成しているものある。写真は、セクションについては基本的に35㎜カメラで、個別の完掘写真や重要な箇所についてはブローニー判カメラも併せて撮影した。全景・ブロック写真は35㎜カメラ、ブローニー判カメラ、4×5インチ判カメラで撮影した。フィルムは、35㎜・ブローニー判はカラーと白黒、4×5インチ判は白黒を使用した。

遺構の平面図作成には空中写真測量を利用した。撮影には、ラジコンヘリを使用し、6×7判の写真で測量を行った。

自然科学分析は、花粉分析、樹種同定、骨同定、放射性炭素年代測定を実施した。樹種同定は、東北大学鈴木三男教授に、骨同定は、奈良文化財研究所埋蔵文化財センターの松井　章主任研究官とパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。花粉分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に、放射性炭素年代測定は学習院大学理学部年代測定室と地球科学研究所にそれぞれ委託した。

現地説明会等

昭和63年11月6日に、第6調査区で現地説明会を開催した。また、平成9年9月4日～9月10日には、第1調査区で出土した木材の出土状況などを一般公開し、平成11年7月23日～8月5日には、第2調査区で出土した「縄文時代の屋根」を一般公開した。ただし、「縄文時代の屋根」は、その後の調査で、縄文時代ではなく古墳時代であることが判明し、平成13年6月15日に訂正の発表を行った。また、第1調査区から出土した「渡腮仕口材」についても、その加工が「渡腮」ではなく「貫穴」であったことが判明したので、平成15年7月14日に名称の変更を行なった。

遺物整理・保管

出土遺物の水洗は、現場のプレハブ事務所で行い、注記・接合・復元・実測作業は、埴生にある小矢部ふるさと歴史館桜町遺跡整理棟で行った。遺物の写真撮影は、高精度のデジタル撮影とし、アーガス．フォト．スタジオに委託した。

出土品および図面・写真は、小矢部ふるさと歴史館桜町遺跡整理棟、鷲島にある桜町遺跡出土木製品管理センター等で保管している。

第Ⅳ章　縄文時代の遺構

1．中出地区（1987年度調査）

A．概　要（付図1、第6・7図、図版2～5・53）

この調査区は、県道小矢部・津幡線の東側隣接地で、子撫川沿いの自然堤防上に立地する。

遺構は、調査区西端に、縄文時代中期末から後期初頭の川1条（SD 06）があり、その中に木組み1ヶ所（SX 01）がある。検出面は、地表面から深さ約1mにある㉚層（青灰色砂礫層）上面である。

遺物は、縄文時代前期・中期・後期のものがある。遺構の輪郭はつかめないが、㉚層から中期の大型破片が出土している。遺構・遺物の時期区分については、表2による。

B．遺　構

SD 06と木組み SX 01　SD 06は、川幅は約25m、深さは約1.5mである。川底の高さは海抜約26mである。中出地区では、その右岸部を検出した。左岸部は舟岡地区第6調査区にある。川は、舟岡地区の谷を東流した流れが、ここで方向を北へ変えて子撫川に合流する。川の覆土は、青灰色シルトと黒灰色シルトの互層で、右岸下には、太さ10～20cmの樹根があり、トチの実が含まれていることから、トチノキが生えていたものと見られる。

木組み SX 01は、川の北寄りのほぼ中央部にある。青灰色砂礫上に長さ約1.5m幅5～30cmの木材がL字型に横たわり、その縁に一辺5cm前後の割材の杭を打ち込んで固定してある。また、L字型の西側約2mのところには、斜めに打ち込まれた木材の集合があり、両者を四角く囲むかのように杭の打ち込みが見られる。杭の長さは、30～78cmの幅があり、ばらつきが大きい。

川の覆土からは、縄文前期・中期・後期の土器が出土している。前期のものは、地山の㉚層（青灰色砂礫層）の下にある黒色土のなかに含まれていた可能性がある。同層のピート層の放射性炭素年代測定値は、5930±120年前である（GaK-13284、学習院大学平成1991年測定）。

川底の青灰色砂礫中からは、縄文中期前葉・中葉の土器が出土しているが、木組みはその堆積後に設置されている。木組みにからんで、串田新式土器が出土している。木組みの木材で放射性炭素年代測定を行ったところ、4160±50年前の数値が得られた（付載3参照）。最も新しい土器は前田式であるので、川の時期は、中期後葉から後期初頭にかけてとみることができる。

C．遺物の分布状況

縄文時代の遺物は、縄文土器、打製石斧、磨製石斧、石鏃、磨石、凹石、敲石、石錘、石刀、石冠、砥石がある。SD 06内、古代遺構及び包含層、Ⅲ層（『桜町遺跡・発掘調査報告書　弥生・古墳・古代・中編編Ⅰ』）から出土しており、SD 06以外のものはほんらいはⅢ層に含まれていたものと考えられる。縄文中期の土器は、同一個体の大型破片が潰れた状態で出土するものがある。

2．第6調査区（1988・1989年度調査）

A．概　要（付図1・2、表4～6、第12～32図、巻首図版、図版9～21・53～58）

この調査区は、県道小矢部・津幡線の西側隣接地で、西へ入り込む谷の入り口部分にあたる。

地表面から深さ30～50cmのところで、第21図⑬層（黒色土、縄文時代包含層）上面に至り、その上には、耕土（20cm）及び盛土（10～30cm）が堆積している。

⑬層には、縄文時代中期後葉から晩期までの遺物を含む。その下の地山を約3m掘り込んだが、黒色土と黄色あるい青色の砂や礫の互層となっている（第15図G－G’土層）。砂や礫の層は、土石流の堆積とみられるが、最上の黒色土（第21図A－A´⑮層）には、縄文前期中葉の蜆ヶ森式土器が含まれ、中間の黒色土（第19図A－A´⑱層）には、縄文前期前葉の極楽寺式土器が含まれている。その下層には、押型文土器が含まれており、縄文早期の土石流層とみられる。さらにその下層には、湖沼堆積層とされる縞状の地層（第45図）が堆積しており、その放射性炭素年代は10790±40年前であった（付載参照）。

遺構は、縄文時代の川2条（SD 06古・10）、焼土21ヶ所（F1～17）、土器溜まり4ヶ所（SG 01～04）、木柱5基（木柱1～3・SK 08・18）、貯蔵穴とみられる土坑24基（SK 02・03・04・09・11・13・14新・14古・15・23・24・25・26西・26東・27・28・29・30・31・32・33・34・35西・35東・36・42）、柱穴状の土坑約100基がある。

B．遺　構

川 SD 06古と土器溜まり SG 01　SD 06古は調査区東端にある。中出地区で検出したSD 06古の対岸にあたる。川は、遺構確認面から深さ2.9m（海抜25.95m）のところに川底がある。覆土は、川岸部に中期前葉の新崎式土器や中葉の古府式土器を含む黄褐色砂（⑨層）があり、川底近くに中期後葉の古串田新式土器を含む砂礫土（⑬層）があり、その上には、中期後葉の串田新Ⅰ式土器と木材を含む黒褐色土（⑦層）があり、その上には黄色あるいは青色砂（④層）があり、その上に中期後葉の串田新Ⅱ式土器と炭などを含む黒色土（①層）が厚く堆積している。これらの土器包含層をSG 01と呼んでいる（第19図）。この黒色土を、中出地区SD 06の㉔～㉗層に相当する青灰色砂が覆う。この層には木材が含まれる。

以上の堆積状況から、SD 06の埋積過程をたどるとつぎのようである。新崎式期・古府式期・古串田新式期は、川は比較的流れが強く、土器はその流れによって上流から運ばれてきた。串田新Ⅰ式期は、川の流れがほとんどないところに、川岸から黒色土の流入があった。その後、再び水の流れがあり、串田新Ⅱ式期になるとまた流れがなくなり、川岸から投げ込まれたとみられる黒色土の厚い堆積がある。その後、おそらく前田式期になってからだと思われるが、再び水の流れが生まれ、湿地のような状態となり、木材が滞留するようになったと考えられる。

SG 01の下でSD 06古の川底にあたるところで土坑P1が検出された。P1の大きさは、径約80cm深さ12cmである。自然の窪みであるかもしれない。

川 SD 18と土器溜まり SG 02　SD 18は調査区西端にある（調査時にはこの川の北側をSD 19とし

ているが、同一の遺構とみられるのでSD19を欠番とする)。この川はSD06古の上流部にあたるものとみられる。SD06古は、調査区東端では南北方向であるが、第1調査区では流れが東西方向にあり、西端で再び南北方向となるらしい。

この川岸の傾斜地に、幅約5m長さ14m厚さ約30cmの土器集中区がある。ここには、焼土群や土坑群もあり、土器は、土坑群の覆土でもある。この土器集中区の南端1m×1.5mの範囲を特にSG02としている。SG02は、その上に、SD18の覆土に含まれるものとみられる木材が被さっている(第21図)。

土器溜まりSG03・04　SG03は、調査区東寄りの南端(X53.1～53.2Y86.8)にある。SG04は、調査区西寄りの南端(X51.8～52Y86.7)にある。いずれも、南側にあるSD06の川縁に位置する。SG04は、第1調査区の土器溜まりSG04の一部と見られる(調査時は盛り土遺構と呼ばれている)。時期は、いずれも串田新Ⅱ式期と見られる。

焼土F1　調査区西端のSD06古の川岸に5ヶ所の焼土がある。各焼土は、一辺10～50cm、厚さ2cmの不整形なもので、前田・岩峅野式土器が伴う。

5ヶ所のうち北側3ヶ所(F1)は、L字型になった2個の石の周囲にあり、他の2ヶ所は、その南側に50～70cmの間隔をおいてある。2個の石は、長さ21cm、幅5cm、高さ10cmと長さ約40cm、幅10cm、高さ15cmで、ひび割れており加熱を受けたことを示している。南側の焼土は、焼土の下に厚さ約13cmの青灰色の砂のブロックがあり、焼土の下に貼床が行われているらしい。

2個の石の西側は、江戸時代の溝SD14で切られているので、本来は方形石組炉であった可能性が考えられ、竪穴住居と認識されてSI記号が付されたが、焼土群の上に住居の上屋を想定すると、住居面の東側半分がSD06古の中に入ることになる。また、柱穴も明らかでない。そのようなことから、ここで火が焚かれていたことは確かだが、この場所に竪穴住居があったと速断することはできない。

焼土F2～4　調査区西端の北寄りに、焼土F2、F3、F4がある。F2は、一辺80cmの不整形な焼土面で、この面の下約10cmに別の焼土が重なってある。F3は、F2の北側1.7mのところにある長辺1m短辺50cmの南北に長い焼土である。F4は、F3の西側80cmのところにある長辺70cm、短辺20cmの細長い焼土である。

調査者は、焼土F2～4を竪穴住居の炉とみなして、SI02と名付けている。F2焼土の西側1.5mに約10cmの段があるが、竪穴の壁面立ち上がりとは見られない。焼土面の高さ(海抜約29.8m)は、周囲の地山面よりは、10cm～20cmも高い。

焼土F10～14　F2～4の西側2.7mのところに、長さ1.5m幅45cmの東西方向の焼土F10、F11が連続し、さらに西側に20cmほど離れて長さ60cm幅30cmの不整形な焼土F12があり、さらにその西側に長辺40cm短辺25cmの不整形な焼土F13・14が連なる。

F10とF11は、いずれも土器敷炉であり、接している。土器は、串田新Ⅱ式土器である。

F10は直径約50cmで、土器破片を2重に敷いており、その間約2cmが焼土である。下層の土器敷きの下は、黒褐色を深さ約9cm掘り込んで、その中には砂礫土がつまっている。

F11は直径約55cmで、黒褐色土を約８cm掘り込み、中に土器破片を３重に敷いている。上層土器敷きと中層の土器敷きの間約４cmが焼土で、中層の土器敷きと下層の土器敷きの間は砂礫土がつまっている（第26図）。

F10とF11の周囲には、炉の外周から10～40cmに厚さ約４cmの灰色粘土の貼床が行われている。砂礫土と貼床は、いずれも除湿を目的としているものと考えられる。

F12は、焼土溜まりであり骨が多く含まれているとされる。F13・14も焼土溜まりとみられ、その下に直径40cm前後の土坑がある。

調査者は、焼土F10～14を竪穴住居の炉とみなして、SI 03とと名付けているが、地山面の高さは、炉上面より約12cm低いので、掘り込みはなかった可能性がある。焼土の北側には、隣接して木柱が入った土坑が２ヶ所（SK 18・P 99）ある。これについては後述する。

焼土Ｆ５～９　調査区西端の黒褐色土上面にところどころに焼土が残る。Ｆ５は、SK 29の上部に重なる。長辺60cm、短辺30cm厚さ10cmの焼土塊である。Ｆ６は、ほぼ中央にあり、SK 35の上部に重なる。長辺40cm、短辺30cmの焼土塊である。Ｆ７は、Ｆ６の南側2.8mのところにあり、SK 24の東寄り上部に重なる。長辺約50cm、短辺約40cmの焼土面のようである。写真でみると、黒褐色土の面に白色粘土の貼床のようなものがみえる。その北側にも焼土塊のようなものが見える。Ｆ８は、Ｆ７の西側2.1mのところにあり、SK 26の上部にある。長辺35cm、短辺20cmの焼土塊のようである。Ｆ９は、Ｆ８の西側約１mのところにあり、SK 42の北側上部にある。長辺40cm、短辺30cmの焼土塊のようである。F10は、Ｆ９の北側2.5mのところにあり、SK 36の西側上部にある。長辺40cm、短辺30cmの焼土塊のようである。F11は、Ｆ９の南側約１mのところにあり、SK 14の中央上部にある。長辺40cm、短辺35cmの焼土塊のようである。

焼土は、Ｆ７は中期後葉の土坑SK 24の埋土上面にある。また、F11は、貯蔵穴SK 14の埋土上面にある。その他の焼土も土坑や柱穴群が埋まった後に堆積した黒褐色土の上面に見られる。焼土F10～14は串田新Ⅱ式期かその後に残されたものである。

木柱が入った土坑　木柱がはいった土坑は、調査区中央に３基（木柱１・２・SK 08）、調査区西側２基（木柱３・SK 18）の合計５基がある。また、木柱３とSK 18の周囲には、細い木柱や杭が入った土坑がある。

木柱１・２・SK 08は、調査区のなかでも高い所にあり、そこでは他に縄文時代の遺構は認められない。木柱１とSK 08木柱は径が70～80cmと大きく、いずれも中空である。残っている長さは木柱１が長く、底の高さは60cmの比高差がある。木柱２は径40cmでやや細い。底の高さは、SK 08木柱とは1.3mの比高差がある。また、木柱１と木柱２の心々間隔は6.2m、木柱１とSK 08木柱の心々間隔は3.6m、木柱２とSK 08木柱の心々間隔は5.5mである。３つの柱を結んでも直交するところはない。そのようなことから、これらの柱が大型高床柱建物跡とするには問題が多い。（平成11年小矢部市教育委員会文化課発行パンフレット『桜町遺跡’99』）

木柱３・SK 18木柱は、土坑や柱穴などが集中し、遺物包含層の残りもよい調査区西側にある。木柱の径はいずれも40～50cmで、底の高さも28.5mと28.8mで近いが、長さは木柱３が80cm

で残りがよい。木柱３とSK 18木柱の心々間隔は4.7mである。

木柱３の西側には、径18cmの細い木柱が入った土坑がある。その心々間隔は90cmである。また、木柱３の柱穴は、北側に一段浅い土坑（長辺1.5m短辺1.1m深さ47cm）があり、木柱３の北70cmのところに長辺約10cm短辺約５cm長さ約16cmの半割杭が打ち込まれていたらしい。

SK 18木柱の西側には、長辺約25cm短辺約15cmの半割状木柱がはいったＰ99がある。その心々間隔は80cmである。SK 18木柱の西側に焼土Ｆ10～14が隣接する。

土坑　土坑は、一辺80cm深さ40～80cmほどの隅丸方形の貯蔵穴とみられる土坑と、一辺60cm以下の柱穴状の土坑が多い。

貯蔵穴とみられる土坑（SK 02・03・04・09・11・13・14新・14古・15・23・24・25・２６西・26東・27・28・29・30・31・32・33・34・35西・35東・36・42）

一辺80cm深さ40～80cmほどの隅丸方形の土坑は、貯蔵穴と考えられる。SD 18･19の川岸の９m幅に集中している。木の実が入った土坑は、クルミが出土したSK 14古・24だけであるが、覆土に貯蔵のための蓋として用いられた木や石が入っている。貯蔵穴は、SK 14・21･26のように重なりがあるものがある。SK 14古のクルミは、学習院大学年代測定室での放射性炭素年代測定ではSK 14古　GaK-14922　2830±120B.C.であったが、再測定では、4080±50年前であった。

柱穴状の土坑（Ｐ１～96）　径30～80cmの柱穴状の土坑は、100基を越えるが、番号が付されているものは96基である。その分布状況は、調査区中央にある第１群（Ｐ35～41・45～47)、調査区西側のＦ２～４の周囲にある第２群（Ｐ５～27・29～33・62～72･91)、貯蔵穴の周囲にある第３群（Ｐ１～４・49～61・73～87・92～96）に分けられる。

第１群は、建物の柱穴を思わせる規則的な配列は認められない。古代の遺構もあり、時期も特定できない。第２群は、焼土Ｆ２～４の周囲にあり、焼土の上に屋根があったと仮定すれば、その柱穴の可能性がないとはいえないが、西側が水道管工事でかく乱されていることもあり、規則的な配列を認めることができない。第３群は、貯蔵穴の周囲に点在しており、建物を構成する柱穴とはいえないだろう。貯蔵穴の位置を表示する柱が立っていた可能性は考えられるかもしれない。

その他の土坑（SK 05・06・33・34・40）　SK 05は、調査区中央にあり、一辺180cmの方形で、深さが40cmの竪穴状の土坑である。中から後期初頭前田式の土器が出土している。

SK 06・33・34・40は、貯蔵穴ほどの大きさがあるが深さが比較的浅いものである。貯蔵穴の可能性もある。

3．第10調査区（1990年度調査）

A．概　要（第８・９図、図版６・61）

この調査区は、県道小矢部・津幡線から300m西側に入った谷奥にあり、北側山地の山裾に位置する。

地表面から深さ約0.8～1.2mのところで、⑧層（黒色粘土、縄文時代・弥生中期）上面に至る。その上には、耕土・旧表土（①②褐色土、20～40cm）、③・⑤層（黒褐色土、40～80cm、古代・中世）、④・⑥・⑪層（青灰色砂、70cm、弥生・古墳時代）が堆積している。

出土遺物には、縄文時代、弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、平安時代、中世・近世のものがあり、検出した遺構は、縄文時代の埋甕、古代の川、中世の掘立柱建物・川・畠がある。
弥生遺構は、第Ⅵ章で説明する。

B．遺　構

埋甕　調査区北西のX37.2Y89.6区にある。長さ（南北）約１m幅（東西）67cmの土坑のなかに、長さ63cm幅43cm厚さ15cmの縄文土器が潰れた状態で出土し、その上には、南北115cm東西100cmにわたり、一辺３～７cmの河原石が散らばっている。土器は、条痕文を施した深鉢で、時期は、晩期後葉の下野式である。土器は高さ39cmのほぼ完形品である。

4．第１調査区（1988・1997・1998年度調査）

A．概　要（付図１、表７～10、第12～16・33～45図、巻首図版６・７、図版22～39・59・60）

この調査区は、県道小矢部・津幡線の西側隣接地で、第６調査区の南側である。第６調査区は、谷の中の中州状のところであったが、ここはその南側を流れる川（あるいは低地、SD 06とする）にあたる。中出地区のSD 06と第６調査区のSD 18とは連続する川である。

この川の堆積土は、X52.5列（メインセクション２）では第55図のようであった。堆積土は59層に区分されているが、大きくⅠ～Ⅶ層の７層にまとめることができる（第３図⑥～⑨層）。

Ⅰ層　No.１～９・12・21層。黄色砂質土で、粘土礫を含む。幅約５～６m深さ1.2mの川の埋積土である。出土遺物には、古墳時代前期の土師器があり、No.６層の炭化物の放射性炭素年代測定では、1200±40年前の数値が出ている。８世紀後半から９世紀前半に相当する。

Ⅱ層　No.10・11・13・14・39～47・57層。褐色砂質土と黄色砂質土の互層で、粘土礫も含まれる。

Ⅲ層　No.48～50層。褐色砂質土を主体とし、その上は黒色土、その下は褐色砂である。黒色土に縄文晩期の土器を含む。

Ⅳ層　No.22～27層。灰白色シルトの互層。

Ⅴ層　No.15～19・28～30・35・36層。有機物を含む灰黒色シルトと褐色砂の互層。No.15層の炭化物の放射性炭素年代測定では、3790±50年前の数値が出ている。

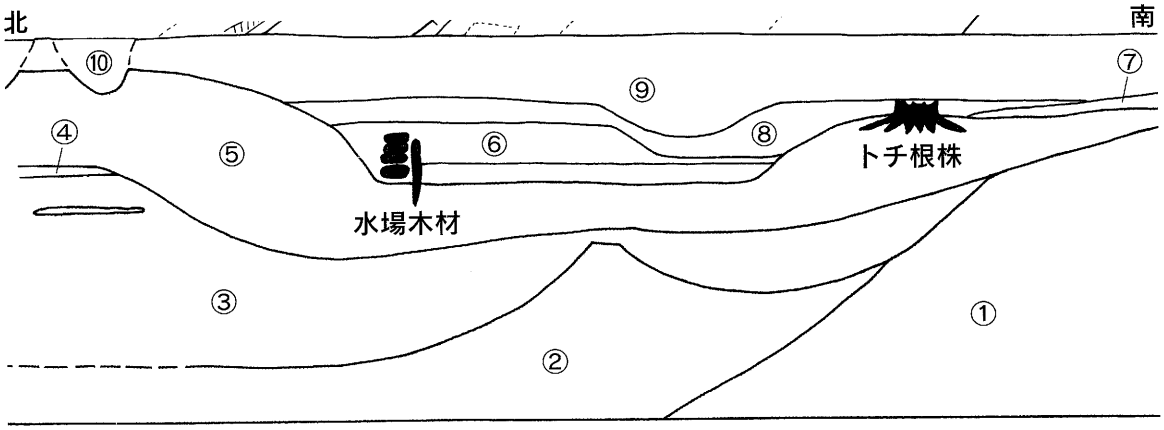
Ⅵ層　No.51～57層。No.51層は黒色土。その下は青灰色シルトで、一番下層のNo.57は褐色砂である。No.54層には前田式土器が含まれ、No.57層には串田新式土器が含まれるという。No.57層の炭化物の放射性炭素年代測定では、3990±50年前の数値が出ている。

Ⅶ層　No.31～33・36・38層。No.31層は、黒色粘質土である。トチノキの樹根が生えている。SD 06の南岸辺である。No.37層の炭化物の放射性炭素年代測定では、3920±50年前の数値が出ている（年代測定については付載２参照）。

B．遺　構

第６調査区から検出された縄文時代の遺構は、川２条（SD 05古・06）、土器だまり１ヶ所（盛土遺構と呼ばれてきたが、第６調査区のSG 04のとのつながりとみられるので、同一番号とする）、木柱の入った穴８基、木組み及び木材集中箇所23ヶ所、柱穴８基、埋甕７基（埋甕１～７）、その他の土坑がある。

SD 05　調査区東寄りにある南北方向の川である。上幅約4.5m、深さ1.2m、底幅1.5mである。覆土は、上半分は古代以降の堆積とみられる黄灰色砂で埋まっている。下層に20～40cmの縄文土器を多量に含む黒色土がある。この層は東側に厚く、東側からの流れ込みあるいは投げ込まれたものとみられる。黄灰色砂と黒色土の間には、木材を含む灰黒色シルトがある。土器は、中期中葉古府式土器が多い。



第３図　第１調査南北断面模式図

①大桑累層・埴生層（約50万年前）
②湖沼堆積（１万年前以前）
③縄文早期土石流（7000～8000年前）
④縄文前期初頭包含層（約6000年前）
⑤縄文中期中葉の堆積（約4300年前）
⑥縄文中期末～後期初頭水場（約4000年前）
⑦縄文前期包含層の流れ込み
⑧縄文晩期中葉までの堆積
⑨平安前期包含層
⑩平安後期の溝（約900年前）

SD 06古　調査区中央を東西に流れる谷川である。流路は、東端では北へ向かい、第６調査区のSD 06や中出地区SD 06と接続する。谷川の上幅は約11.4m、深さ約1.4m、底幅約９.6mである。この谷川の中には、木材を杭で止めたところや木材の集中するところがある23ヶ所あり、SX記号が付されている。

SG 04　調査区西寄りのX51.8～52.3Y85.8～86.1にある土器溜まりである。川の斜面にあり、厚さ約30cmの黒色土の堆積である。黒色土には、大量の土器が含まれており、クルミ殻、マメ類、イノシシ下顎骨なども含まれている。黒色土は、SX 02木材の下にも入り込んでおり、木材が置かれたのは、黒色土の堆積より新しいものと考えられる。SG 04の下には土坑群がある。

土器は、新崎式土器、古府式土器、串田新式土器、前田式土器がある。新崎式土器、古府式土器は、下層から出土しており、下層にSD 06古のなかでも古い流れの堆積の中に含まれていたものとみられる。土器溜まりの時期は、串田新Ⅱ式土器、前田式土器の時期である。

木柱の入った穴　木柱がはいった穴は、調査区中央に８基（Ｐ１・２・20・22・45・65・柱根２）がある。Ｐ１・２・20・22・27・45・柱根２は、径20～30cmの柱根が１～３ｍの距離を置いて散在している。

Ｐ２は、木柱の底が穴の底から16cm余り浮いている。Ｐ65は、板状の木材と杭が入っていた。

平成11年発行のパンフレット『桜町遺跡’99』及び平成13年発行の『桜町遺跡調査概報』では、これらの柱根から、この場所に２棟の掘立柱建物があったと想定しているが、規則的な配列は認められず、建物となるかどうかは断言できない。水辺に位置することから、水辺での作業に関わる立木あるいは柵のようなものである可能性がある。

土坑　土坑には、一辺50cmを超える大きいものと、それ以下の小さいものがある。大きいものはSK記号が付され、小さいものはＰ記号が付されているが、その区別は必ずしも明確ではない。

SK 01・02は、調査区中央の川の中にある。いずれもSX 03木材が灰褐色砂層に覆われて埋もれた後に掘り込まれている。灰褐色砂層の上には、縄文晩期の土器を含む黒色土の堆積があるので、これらは縄文晩期の遺構である可能性もある。

SK 06は、それらとは離れた調査区東寄りにあるが、矢板にかかっており詳細は不明である。

その他の土坑及び穴は、SG 04付近にある。

SK 03～05・07・Ｐ３～20・46は柱根の入った穴群の周囲にある。

Ｐ25は、穴の底に土器片があり、その上に一辺３～10cmの石が60個以上入っていた。

以上のほかにもたくさんの土坑があるが、川の中に位置するものは川の流れが作った自然の凹凸の可能性がある。

埋甕　埋甕として取り上げられているものは、調査区西寄りに３ヶ所（埋甕１～３）、調査区東寄りに４ヶ所（埋甕４～７）が、それぞれまとまりをなしている。

埋甕１～３は、それぞれ40cmと150cmの間隔がおき、口縁部と底部を欠いた径約30～40cmの土器胴部が、礫層の中に埋め置かれているものである。埋甕３は、後期初頭の前田式土器である。

埋甕４～７は、径20～35cmの穴が20cmほどの間隔を置いて並んでいるもので、両端の穴に底部のみが残っていた。

木組み及び木材集中箇所

SX 01　調査区西よりにあり、木材の長軸が南北方向に並んでいる。木材は二重になっており、上層には、北寄りに欠込と貫穴のある柱Ｗ１（大型高床建物柱材）、Ｗ２（柵状木製品）、貫穴の

ある材W41（小型高床柱隅柱）を含む柱が並んでいる。

下層には、水溜施設（水場）とみられる木組みがある。木材は、北側の西側辺は両側を杭で固定したW22（ほぞ穴のある材）が置かれ、中央には、水をせき止める板４枚が杭で固定されている。杭は太さ50～70cmである。木材は、本来はH状に木材が置かれていたと見られるが、北側東側辺の木材は失われている。水溜の内側の幅は80～100cm、板４枚の高さは48cmである。南側東側辺の放射性炭素年代測定値は4040±40年前、板を止める杭の放射性炭素年代測定値は3930±40年前である（付載３参照）。

SX 02　調査区中央にあり、SD 06の北岸に沿ってある木材群である。川岸に設けられた水場の足場とみられる。幅10～40cm、厚さ10～20cmの木材が４段ほど厚さ80cmほどに積み重ねてあり、その南辺に太さ10cmほどの杭が打ち込まれている。川岸と木材の間には幅80cmの隙間があり、その間にはクルミの殻が大量に入っていた。木材の底の高さは海抜27.8mである。

木材には、半割柱材W179（３つ貫穴のある材）、板材W186（相欠きの平桁材）、W18（ほぞ穴のある材）、W187（めど穴のある材）、W49（床板材）などがある。

この遺構は、川岸との間及び木材の下にクルミ殻を含む黒色土の堆積があり、黒色土の堆積より新しいことがわかる。木材の放射性炭素年代測定値は4050±40年前、クルミの放射性炭素年代測定値は4000±40年前である（付載３参照）。

SX 03　調査区中央にあり、川の中にある木材群である。幅16～26cmの木材が東西方向に横たわり、その周囲に太さ50cmの割材や幅３～５cm厚さ３mmのスギの薄板が散在している。木材には、貫穴のある材がある。

スギの薄板は、部分的に木材と直交しているように見えることから、この木材群は高床建物の壁であって、スギの薄板は網代壁の芯材であると考えられている。しかし、薄板の配列は、そう言い切ることができるほどはっきりとしたものではない。

木材群の底は海抜28.5mの高さにあり、SX 02の設置面より上位に位置する。スギの薄板の放射性炭素年代測定値は4050±40年前である（付載３参照）。木材と同一面に前田式土器がある。

SX 04　調査区中央にあり、川の中にある木材群である。幅30～45cmの木材が５本ほど東西方向に横たわる木材群である。北側には、W29（２つ貫穴のある材）、W28（床板材か）、W１（柵状木製品）があり、南側にＹ字材２本が股の部分を下流（東側）に向けて並んでいる。

木材群の底は海抜28.1mの高さにあり、SX 02より30cmほど高く、SX 03より40cmほど低い位置にある。Ｙ字材の外側の放射性炭素年代測定値は、3930±40年前である（付載３参照）。

SX 05　太さ10～20cmの木材が、東西あるいは南北方向に横たわる木材群である。割材や板材がある。木材群の底は海抜28.3mの高さにある。木材の放射性炭素年代測定値は、4060±40年前である（付載３参照）。

SX 06・07　調査区中央にあり、川の南岸に生えていたトチノキの樹根である。根の太さは10～20cmで、長辺13m、短辺７mの範囲にあり、１本でなく複数本あるのかもしれない。当時の南岸の地表面は、海抜28.9mあたりにあったものと推定される。樹根の放射性炭素年代測定値は4080

±50年前である。

SX 08　調査区東寄りの川の中にあり、南から向かってくるSD 05との合流部である。昭和63年調査時には、木道（橋状遺構）とされたものである。長さ2.7～3.4m、太さ約15cmの木材を３本南北方向に並べて横たえ、木材の間に太さ５cmの杭を打ち込んで止めてある。木材群の幅は65cmで、木材の底は海抜27.65mの高さにある。

調査者は、この木材の上層に幅2.2mの川SD 06新があり、それに掛かる橋状遺構と見ているらしいが、SD 06新とは時期が合わないので関係がないものである。

SX 09　調査区東端の川の中にある。太さ10～40cmの木材が、不規則にまとまっている。木材には、貫穴とえつり穴のある材（小型高床柱）がある。木材の底は海抜27.9mの高さにある。

SX 11　SX 02とSX 14の間にあり、SG 04の上にかぶさっていた木材群である。掘棒や割材がある。

SX 12　SX 01の西側にある木の実の集合で、「クリ塚」と呼んでいたものである。

SX 13　調査区西寄りの川の中にあり、SX 14の上に含まれていた木材群である。漆塗弓、斧柄未製品、板材、ミカン割材などがある。木材の底は海抜約28.2mの高さにある。

SX 14　SX 01の西側で、SX 13の下にある木材群である。長さ１m前後、幅10～30cmの木材４～５本を約60cmの間隔を南北方向に並べ、その間に板が置かれてH状となっている。木材は杭で留められている。板は水の流れを止めるためのものとみられ、水溜施設と考えられる。木材には、W２・W32（彫刻柱）、W１（樋状木製品）、割材がある。木材群の底は海抜28.2mの高さである。

SX 16・17　調査区東寄りにあった木材群である。材W４（欠込のある材）、W26（彫刻柱）、割材、板材がある。遺構ではないようでる。

SX 19　調査区中央SX 02の東側、SD 06の川岸に打ち込まれた７本の柱根群である。柱根の太さは10cmのものと20cmのものがある。川岸に平行して並んでおり、木材を止める杭のようなものとみられる。

SX 20・22・23　調査区中央にあり、SX 02・03の下にあった木材群である。割材や板材もあるが、土石流に含まれる自然木もあるらしい。遺構ではないようである。

SX 21　調査区東寄りの地山中の堆積土の中に含まれているもの。土石流に含まれる流木とみられる。

第Ⅴ章　弥生・古墳・古代・中世の遺構・遺物

1．第8調査区（地山地区、1983年度調査）

A．概　要（表13、第64図、図版62）

この調査区は、第3調査区の北側にあたり、第8調査区の東端に相当する。用水管の埋設に伴い発掘調査が行われた。幅1.5mのトレンチ状の調査区である。

出土遺物には、縄文時代、飛鳥時代、中世、近世のものがある。遺構は明らかでない。

なお、弥生時代以降の出土遺物の時期区分は、表3による。

B．飛鳥時代

遺物は、前期の須恵器の杯蓋1、杯2、提瓶3がある。

C．中世・近世

遺物は、珠洲4～9、土師皿10～15、青磁16、瀬戸17、唐津18があり、時期は、鎌倉、室町、戦国、江戸時代のものである。

2．第10調査区（1990年度調査）

A．概　要（表14、第8・10・11・46・47・65図、図版6～8・63）

弥生時代以降の出土遺物は、弥生時代、飛鳥時代、平安時代、中世・近世のものがあり、検出した遺構は、古代の川、中世の掘立柱建物・川・畠がある。

B．弥生時代

遺構は認められない。遺物は、弥生中期の甕1がある。調査区西端の黒色粘土層（⑧層上面か）から出土した。

C．平安時代

遺構は、川1条（SD 01）がある。

SD 01　調査区西寄りに、幅約3.5m深さ約40～60cmの川が北から南へ向かい、途中で二又に分かれる。覆土は、暗灰黒色砂である。時期はあきらかでないが、弥生・古墳時代の包含層を掘り込み、古代・中世の包含層で覆われている。

遺物は、須恵器の蓋2、高台杯3、杯4、双耳瓶5・6・33、灰釉陶器31、土師器の椀8～11、高台椀12・13、甕14・15、鍋16～18、土錘19・20がある。11は外底面に「十」の墨書がある。土師器甕・鍋の口縁部形態には、端部断面が三角となる14～16、内面が肥厚する17・18があり、前者は8世紀末～9世紀前半、後者は9世紀末～10世紀初めと考えられ、その他の土師器・須恵器・灰釉陶器も両時期に含まれる。

D．中世・近世

遺構は、掘立柱建物1棟（SB 01）・川1条（SD 02）・畠1群（SF 01）がある。

SB 01　調査区中央北寄りにある。南北２間（10.4m）×東西２間（10.4m）の床面積108㎡の総柱建物である。主軸方向は、北に対して15度東に振れる。柱穴は、径約８cm深さ20cm前後の円形で、柱根は残っていない。柱穴から遺物は出土していないが、柱穴が小さいこと、総柱であることから、時期は中世前半代と見ておきたい。

SD 02　調査区の南半分を占める。西から東へ向かう流れで、その左岸部である。右岸部は調査区外に広がる。覆土は、青灰色砂で、深さは２m以上である。

SF 01　調査区東北部にある。幅30～40cm、深さ５～10cmの溝が格子状になっている。南北方向の溝は1.5～２mの間隔で４本あり、その主軸方向は、北に対して38°ほど東に振れる。東西方向の溝は50～100cmの間隔で３本あり、南北方向の溝にほぼ直交する。東西方向の溝が南北方向の溝より深いので、同時にあったものではなく時期差があるのかもしれない。この溝群の西側は、1986（昭和61）年度の試掘調査で、南北方向の幅40～60cmの溝が、約1.8m間隔で４本検出されており、一連の遺構と見られる。これらの広がりを畠とみると、その広がりは東西16m南北８mほどである。畠の時期を特定できる遺物はないが、掘り込み面が中世の堆積とみられる茶褐色土面であり、中世後半以降の可能性がある。

中世の遺物は、南北朝時代の珠洲すり鉢21･22、鎌倉時代の珠洲小型壺23があり、時期は鎌倉時代、南北朝時代のものである。近世の遺物は、戦国時代の青磁椀26、瀬戸美濃天目茶碗27、土師皿24･25、銭貨34～37、越中瀬戸28・29、唐津30があり、戦国時代、江戸時代前期のものである。

３．第１・第６調査区（1988・1996年度調査）

A．概　要（付図２、表15、第13～16・49～57・66～69図、図版40～46・67～70）

この調査区は、県道小矢部・津幡線の西側隣接地で、西へ入り込む谷の入り口部分にあたる。第１調査区は南側に、第６調査区は北側にあたる。

第１調査区では、地表面から深さ2.4cmのところで、⑧層（縄文時代包含層）上面に至る。その間は上から表土・盛土（70cm）、Ⅰ層（20cm、中世）、地滑り土（100cm）、⑨層（50cm、平安前期）が堆積している（第３図参照）。

第６調査区では、地表面から深さ30～50cmのところで、⑬層（縄文時代包含層）上面に至る。その上には、耕土（20cm）及び盛土（10～30cm）が堆積している。

出土遺物には、縄文時代、弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、中世、近世ものがあり、検出した遺構は、平安時代の溝、鎌倉時代の柱穴と土坑、江戸時代の道路などがある。

B．弥生時代

遺構は認められない。弥生後期とみられる小型土器98が、平安前期の溝内から出土している。

C．古墳時代

遺構は認められない。遺物は、前期の土師器壺１・２、甕３・４、中期の土師器甕５・６、杯

7、高杯8～11がある。平安前期と平安後期の溝内から出土している。

D．飛鳥時代

遺構は認められない。遺物は、前期の須恵器杯蓋12、杯13・14・97、製塩土器20、支脚21がある。平安後期の溝などから出土している。

E．奈良時代

遺構は認められない。遺物は、奈良中期の須恵器杯15、高台杯16・17、甕18がある。表土などから出土している。

F．平安時代

遺構は、前期の川1条（SD 06新）、後期の木柱が入った土坑5基（P 3・45・101～103）、溝2条（SD 09（04と同一溝）・11（08と同一溝）・12）がある。

SD 06新　第1調査区中央を東から西へ蛇行しながら流れる川である。幅は約1.5m、深さは約60cmである。覆土は、白色粘土塊を多く含み、それは谷奥山地に含まれており、上流から流れてきたものと考えられる。溝内からは、摩滅した古墳前期の土師器がわずかに含まれるが量は少ない。1997年9月5日に出土が発表された「縄文中期末のクサソテツ（こごみ）」は、この覆土中から出土した。その出土地点は、縄文晩期土器包含層より上位にあたる。このクサソテツは、直径約10cmの黒色土の塊の中から割れたクルミ殻約10点とともに出土したもので、クルミの放射性炭素年代測定値は5890±40年前であり、縄文前期の数値を示す。また、SD 06覆土内の木材の放射性炭素年代測定値は1200±40年前で、8世紀後半～9世紀中頃の数値を示す。以上のことから、このクサソテツは、縄文中期末のものとは特定できず、平安前期の川が縄文前期包含層（第3図⑦層）を攪乱した際に紛れ込んだ可能性がある。この川の川底は、下層の縄文時代の包含層に達しており、1988年の調査で発見された「貫穴のある柱（小型高床建物柱）」や「木道（橋状遺構）」は、この川の下層に含まれるものである。

SD 09　第6調査区の南西部にあり、西から東へ向かう溝である。幅は1.4m、深さは30cmで、覆土は上層が灰褐色砂、下層が褐色砂礫土である。この溝は、第1調査区へ抜けて、SD 04へ接続するものと考えられている。

遺物は、SD 09から土師器の椀29～32、皿23・34～38、高台椀33・43・44、柱状高台皿39～42、高杯45、土錘54・56・57・59・62～67・70～75・78・80、羽口95が、SD 04から土錘79が出土している。時期は、11世紀後半とみられる。

SD 11・12　SD 09の北側に並行し、第6調査区中央を西から東へ向かい、調査区東で向きを北へ変える溝である。幅は2～3m、深さは30cmで、覆土はSD 09と同じである。SD 12は、この溝が調査区中央部で分流する幅約1mの溝である。調査中この溝の西寄りをSD 08としており、遺物の注記はそのままにしてある。

遺物は、土師器の椀46、大皿47、壺48、小皿50～52、高杯か49、柱状高台皿53、土錘55・58・60・68・69・76がある。時期は、11世紀後半とみられる。

平安後期の遺物には、ほかに須恵器壺19、中実の柱状高台の皿26、断面三角形の高台をもつ椀

25・27・28、トリベ93がある。25は、粗雑な印花文とみられる放射状の刻みが施されている。

木柱が入った土坑　一辺40～100cmの土坑内に、径10～15cmの木柱が入ったP36・45と、径25～32cmのやや太い木柱が入ったP101～103がある。P36・45は調査区中央、P101～103は調査区西寄りにあるが建物としてはまとまりがない。

G．中世・近世

遺構は、中世の溝1条（SD02）、江戸時代の道路1条（SD07・14の間）がある。

中世・近世の遺物には、珠洲81～85、黒色土師器すり鉢86、土師Ⅲ89・90、越中瀬戸91・92、火鉢93があり、時期は、鎌倉、室町、戦国、江戸時代のものである。ほかに、近世以降の取り水施設や攪乱が見られるが、説明を割愛する。

SD02　第1調査区を西から東へ向かい、東側で南へ折れる。幅は2.2cm、深さは40cmである。覆土は、ジャリであり、越中瀬戸87が含まれており、時期は戦国時代と考えられる。

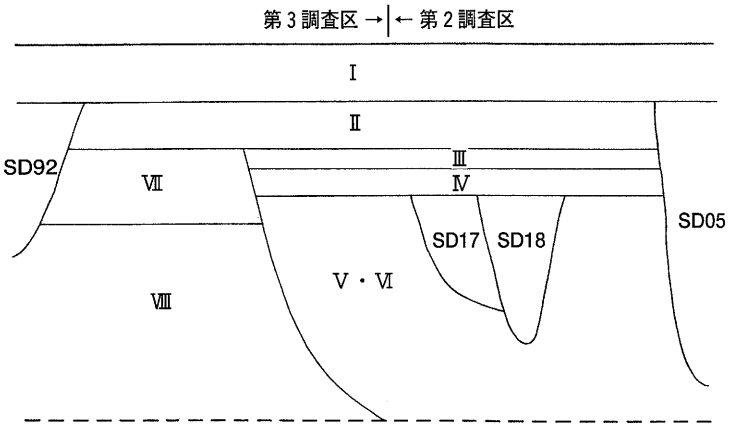
SD07・14　第1調査区と第6調査区の東端にある道路側溝である。東側のSD07は幅1.8cm、深さ70cmの底が平坦である。溝底東寄りには、土止めと見られる杭列がある。覆土は、上が黒灰色粘土で下が礫である。西側のSD14は幅1.8cm、深さ60cmの断面V字状の溝である。覆土は黒灰色粘性砂である。溝の方向は北に対して25度西に傾く方向にあり並行する。その間の幅約4mが道路面になるものと考えられる。路面には厚さ20cmほどのジャリが敷かれている。出土遺物はよくわからないが、江戸時代中期以降のものとみられる。

4．第2調査区（1998・1999・2000年度調査）

A．概　要（付図3、表16、第4・58～61・70～72図、巻首図版、図版47～50・69～71）

この調査区は、第1調査区の西側に続く部分である。

土層　地表面（水田面）から深さ約80cmのところで、V・Ⅵ層（縄文晩期以降の土石流層）上面に至る。その間は5層に区分される。Ⅰ層は、厚さ30cmの水田耕土、Ⅱ層は、厚さ約25cmの暗褐色砂で、古代・中世の遺物を含む。Ⅲ層は、厚さ約10cmの暗灰褐色砂で、古墳時代中期・後期（飛鳥？）の遺物を含む。Ⅳ層は、厚さ約15cmの黄褐色砂で、古墳時代前期の遺物を含む。V



第4図　第2・3調査区基本土層図

Ⅰ 10YR1/3 黒褐色砂質ローム（耕作土）
Ⅱ 暗褐色砂質
Ⅲ 暗灰褐色砂質
Ⅳ 黄褐色砂層
Ⅴ 暗灰褐色砂層
Ⅵ 灰黄褐色レキ層
Ⅶ 2.5Y2/1 黒色シルト
Ⅷ 灰褐色砂層

層は、暗灰褐色砂で、その上面の黒色土壌の放射性炭素年代測定では、弥生時代後期に相当する1900±40年前の測定値が得られている。Ⅵ層は、厚さ約40cm以上の灰黄褐色礫の土石流である。Ⅴ・Ⅵ層からは、縄文後・晩期の土器・石器が大量に出土している。この遺物は、第2調査区からさらに西側に続く第3調査区の縄文遺構が縄文時代末に起きた土石流によって流されたものである。Ⅴ・Ⅵ層の時期は、遺物からは判断できないが、Ⅵ層出土木片の放射性炭素年代測定では、縄文時代晩期に相当する2310±40年前の測定値が得られている。

出土遺物には、縄文時代、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代のものがあり、検出した遺構は、古墳前期の川、古墳中期の土坑・川、奈良時代の川などがある。

B．古墳時代

遺構は、古墳前期の川と樹皮列を伴う木組み（SX 01）、川3条（SD 05・17・18）がある。

樹皮列を伴う木組み SX 01　調査区西寄りの南端にある。木材と樹皮を組み合わせたもので、幅（南北）約2m、長さ（東西）約13m、高さ約90cmの大きさである。東半分は、太さ約15cm長さ1.5～2.5mの木材（横材と呼ぶ）に太さ約10cmのやや細い木材（縦材と呼ぶ）を40cm間隔にその先端部をのせて組み、その上に太さ2～3cm、長さ20～125cmの枝付きで樹皮が付いたままの木材を置き、その上に樹皮が覆っている。

その面は南側に15～20度傾斜しており、北側（川下）が南側（川上）より、約60cm高くなっている。

木材は、端部に鉄製刃物による切断面が見られるものがあるが、その他に特別な加工は見られない。樹種は、表1のとおり、キハダ・ガマズミ属・カエデ属・トチノキなど多種にわたり、周辺に生えていた木を伐採して用いたようである（付載4参照）。

東側は、樹皮が二面重なり、その間に約30cmの土がある。樹皮の上にはススキが乗っていた。樹皮は、樹種はオニグルミで、幅10～20cm、厚さ5mmに切りそろえたものを敷き並べたもである。長辺は約2m残っているが、本来はもっと長く上部へ延びていたものと考えられる。

この遺構は、発見当時「縄文時代の屋根」と発表したが、その後、木材の放射性炭素年代測定を実施したところ、3世紀後半～4世紀前半の年代値が得られた（付載4参照）。この遺構の下から、同時期の土師器も出土している。

屋根とする根拠は、横材を側桁、それに直交して並んでいる縦材を垂木、横材の上に乗る枝を木舞、樹皮列を葺き材と考えるものである。出土状況については、近くにあった建物が倒壊して、流れてきたものと見る。鑑定された宮本長二郎氏によれば、壁の可能性も考えられという。

しかし、樹皮列の下に横材と縦材があるのは東側だけで、西側にはないのに、樹皮列は全体に整然と並んでいること、この遺構が南北方向の川を横断するようにあること、上層の木組と下層の木組み間の土が、盛り土と考えられる混じった土であること、木材には縛った痕跡が見られないことから、この遺構は、流れ着いたものではなく、ここに設置されたものである可能性が高い。

南北方向の川（SD 17）は、幅約8～10m深60～80cmで、覆土は黄褐色砂である。流れは、南

から北に向かうが、調査区北部で東へ折れる。SX 01の両端は、川岸の地山層である礫層にその両端が掛かっている。

縦材と横材を組み合わせた遺構は、県内では、上市町中小泉遺跡（弥生中期・後期）や小杉町南太閤山Ⅰ遺跡で類例がある［上市町教委1981・県教委1983］。そのようなことから、この遺構は、堰を作る際の芯となる木組みで、おそらく、この上に盛り土があったものと考えられる。

この遺構があるために、谷奥から流れる水がせき止められて、川は、SD 18・SD 05へと流路を変えていったのであろう。

遺物は、古墳前期の土師器の甕３、小型甕24が出土している。

SD 18　調査区中央を南から北へ流れる川である。川の左岸を検出したが、右岸は別の流路に切られているて検出されていない。深さは約1.5mである。覆土は黄褐色砂で、川底から木材に混じって鍬28が出土したが、これは、SX 01が横断している川の最下層の覆土の中である可能性がある。

C．飛鳥時代

遺構は、土坑３（SK 01・02・03）がある。

SK 01・02・03　SK 01は、長軸2.5m、短軸1.6m、深さ20cmである。

その他の遺物には、飛鳥前期の須恵器杯25が出土している。

D．奈良時代

中世の川から奈良時代後期の須恵器高台杯30が出土している。

E．中　世

遺構は、鎌倉時代とみられる川１条（SD 05）がある。

SD 05　調査区中央にあり、西から東へ流れる幅約10m、深さ約1.8mの川である。覆土は褐色砂で、石鍋の転用品とみられる滑石製品31が出土している。四角く整形されており、温石として転用されたものであろうか。滑石製品は、県内では鎌倉時代の遺跡から出土しており、SD 05はその時期の川と考えられる。

５．第３調査区東側（1999・2000年度調査）

A．概　要（付図３、表17、第62・63・73～75図、図版51・52・74～76）

この調査区は、第２調査区の西側に続く部分で、西と南に二又に分かれる谷の合流部にあたる。

地表面から深さ約60mのところで、Ⅷ層上面に至る。その上には、耕土（10cm）、Ⅰ層（15cm、近世）、Ⅱ層（30cm、中世）、Ⅶ層（10cm、縄文晩期）が堆積している。

出土遺物には、縄文時代、弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、平安時代、中世・近世のものがあり、検出した遺構は、縄文時代の環状木柱列、貯蔵穴、木組み、古墳時代の川・土坑、中世の川・柱穴がある。縄文時代については、別に報告する予定である。

B．弥生時代

遺構は認められない。遺物は、弥生中期の甕１がある。調査区中央Ⅶ層として取り上げた土層から出土した。中世の川 SD 92に含まれていたものかもしれない。

C．古墳時代

遺構は、後期の土坑１基（SK 19）がある。

その他に、人為的とは判じえない落込み（SX 76）から古墳前期の土師器甕６、高杯18・21が出土している。同じ時期の遺物はこの他に土師器甕８、小型壺９・10などがあり、９は中世の川 SD 92から出土している。

SK 19　調査区中央南寄りにある。東西2.8m、南北1.8m、深さ15cmで、覆土は暗黒褐色砂質土である。覆土から、土師器の杯54・55、高杯53・56、甕57、須恵器高杯58が出土している。同じ時期の遺物には、古墳後期の土師器杯11～17、高杯18があり、SD 92から出土が多い。

D．飛鳥時代

遺構は認められない。遺物は、前期の須恵器杯23、杯蓋46、製塩土器24、支脚47が、Ⅰ～Ⅲ層から出土している

E．平安時代

遺構は認められない。遺物は、前期の須恵器杯25・壺27、土師器高台椀26が、SD 92及びⅢ層から出土している。

F．中世・近世

遺構は、中世とみられる川１条（SD 92）、溝１条（SD 20）と柱穴群（P 35・44・78）がある。

SD 92　調査区西端にあり、南から北東へ向かう川である。幅約10m、深さ１～1.5mで、覆土は、上層が暗灰黄色砂質土、下層が黒褐色シルトと灰色砂である。出土遺物には、鎌倉時代の珠洲すり鉢32がある。

SD 20　調査区中央よりやや西側に位置し、南から北西へ向かう。幅約50cm、深さ約10～20cmで、覆土は黒褐色砂質土である。土師皿とみられる小破片が少量出土している。

調査区東寄りに約42基の柱穴群が見られるが、きれいに並ばない。簡易な建物であったのかもしれない。柱穴は、径15～30cm深さ10～20cmの大きさで覆土は黒褐色砂質土である。P 78から鎌倉時代とみられる土師皿39が出土しており、P 35・44・78からも同様の土師皿が出土している。

この他の中世の遺物は、珠洲壺28・すり鉢29～31・33～35、加賀甕36、青磁椀37・49、瀬戸壺52、土師皿38・40・41があり、時期は鎌倉～南北朝時代のものがある。近世の遺物は、越中瀬戸皿42、すり鉢43があり、江戸時代前期のものである。こうがい44もこの時期のものと見られる。

表２　縄文土器編年表

大別	略別	地域区分		
		北　陸	関東・東北	近畿・中国
早期	後半	桜峠 〔常世〕	田戸上層 子母口 野島 鵜ヶ台 芽山下層 芽山上層	高山寺 穂谷
前期	前葉	佐渡・極楽寺	花積下層 関山	羽島下層Ⅱ 北白川下層Ⅰ
	中葉	朝日Ｃ 福浦下層 蜆ヶ森Ⅰ 蜆ヶ森Ⅱ	黒浜 諸磯ａ 諸磯ｂ 諸磯ｃ	北白川下層Ⅱａ 北白川下層Ⅱｂ 北白川下層Ⅱｃ
	後葉	福浦上層 朝日下層	十三菩提	北白川下層Ⅲ 大歳山
中期	前葉	新保Ⅰ 新保Ⅱ 新崎Ⅰ 新崎Ⅱ 新崎Ⅲ	五領ヶ台	船元Ⅰ・鷹島
	中葉	上山田・天神山Ⅰ 上山田・天神山Ⅱ 古府 （古府Ⅱ）	阿玉台 勝坂 加曾利ＥⅠ　大木８ａ 加曾利ＥⅡ　大木８ｂ	船元Ⅰ 船元Ⅱ
	後葉	古串田新 串田新Ⅰ〔大杉谷〕 串田新Ⅱ （＋）	大木９ 加曾利ＥⅢ 加曾利ＥⅣ　大木10	里木Ⅱ・醍醐Ⅱ 里木Ⅲ・醍醐Ⅲ
後期	前葉	前田・岩峅野 気屋Ⅰ 気屋Ⅱ	称名寺 堀之内Ⅰ 堀之内Ⅱ	中津 福田Ｋ・四ツ池 北白川上層
	中葉	（＋） 酒見・井口Ⅰ	加曾利Ｂ１ 加曾利Ｂ２ 加曾利Ｂ３	一乗寺Ｋ 元住吉山Ⅰ
	後葉	井口Ⅱ （井口Ⅲ） 八日市新保Ⅰ 八日市新保Ⅱ	安行Ⅰ 安行Ⅱ	元住吉山Ⅱ 宮滝 滋賀里Ⅰ
後期	前葉	御経塚Ⅰ・勝木原 御経塚Ⅱ （御経塚Ⅲ）	大洞Ｂ　（東北） 大洞Ｂ-Ｃ　（東北）	滋賀里Ⅱ 滋賀里Ⅲ
	中葉	中屋Ⅰ 中屋Ⅱ （中屋Ⅲ）	大洞Ｃ１　（東北）	滋賀里Ⅳ
弥生	後葉	下野Ⅰ 下野Ⅱ・長竹	大洞Ｃ２　（東北） 大洞Ａ　（東北）	船橋 長原
		柴山出村・大境Ⅴ	大洞Ａ′　（東北）	

（注）桜町遺跡発掘調査団編2001『桜町遺跡調査概報』掲載のものに、中期後葉に古串田新式を加えた。

第Ⅵ章　まとめ

1．遺跡の時代

国道８号バイパス建設に先立ち、1983年、1987年、1988年、1990年、1996～2000年の９ヶ年に亘り発掘調査を実施した桜町遺跡中出地区及び舟岡地区では、縄文時代、弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代、戦国時代、江戸時代の遺物や遺構が発見された。長期に亘り人々の活動の痕跡が残されているが、第５図のように、その間には盛衰がある。

2．縄文時代

縄文時代早期・前期・中期・後期・晩期の土器・石器等が出土したが、中期末（串田新Ⅱ式）から後期初頭（前田・岩峅野式期）の時期は、舟岡地区第１調査区と第２調査区（以下舟岡地区の地区名を略する）に土器溜まり・焼土・土坑（柱穴及び貯蔵穴）・木組みなどの遺構があり、土器の出土量も多い。

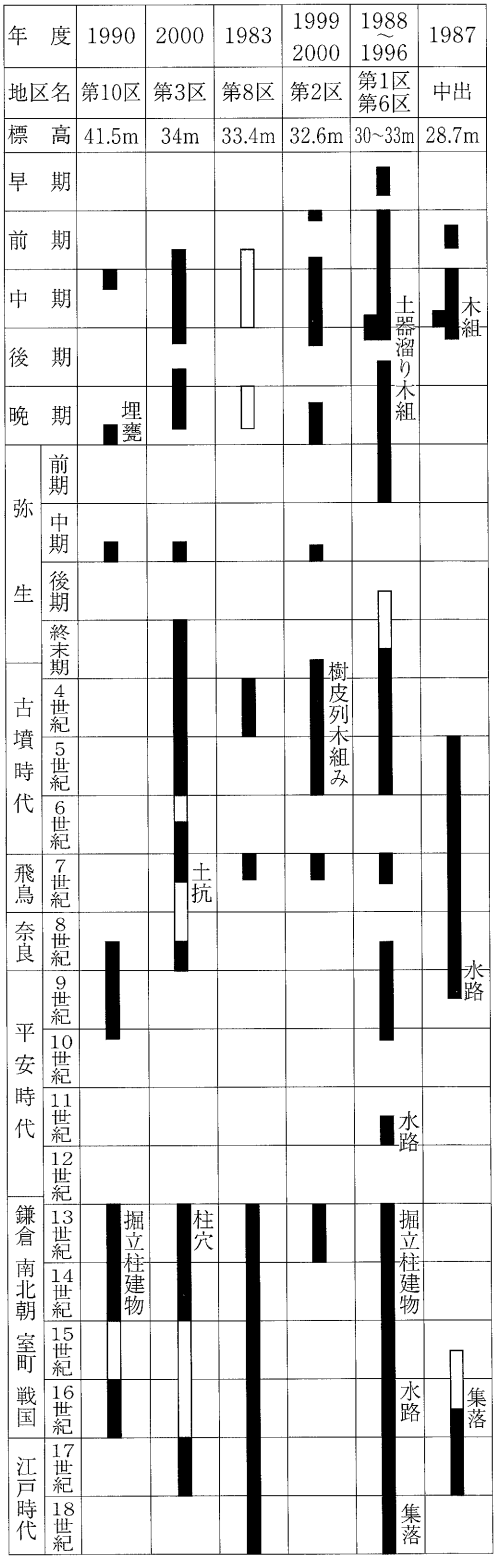
遺物の詳細については、平成17年度刊行予定の『土器・石器編』で紹介するが、以下では、縄文土器の出土状況について紹介しておく。

(1)　縄文土器の出土状況

早期　早期中葉の押型文土器が、舟岡地区第１調査区から出土した。SD 06川底下の土石流の中に含まれていた。摩滅しているので、周辺からの流れ込みとみられる。

前期　前期初頭（佐波・極楽寺式）が、第１調査区・第２調査区・第６調査区から、前期中葉（朝日Ｃ式・福浦下層式、蜆ヶ森式）が中出地区・第１調査区から出土した。第６調査区では、前期初頭が基本土層第Ⅳ層に含まれ、前期中葉（蜆ヶ森Ⅱ式期）が中期遺構の地山上面に含まれる。

前期後葉（福浦上層式・朝日下層式）は、第１調査・第２調査区・第３調査区・第６調査区にあり、分



第５図　遺跡の時代

布が西側へ広がる。

前期は、いずれの時期も遺構は検出されていない。

中期　中期前葉（新保式、新崎式）・中期中葉（上山田・天神山式、古府式）・中期後葉（古串田新式、串田新Ⅰ式、串田新Ⅱ式）が、中出地区・第１調査区・第２調査区・第３調査区・第６調査区、第10調査区から出土した。第６調査区では、SD 06古の川底に、中期中葉（天神山式）・中期後葉（古串田新式）の土器を含む川の流れがある。

遺構は、中出地区の川底に中期後葉（串田新Ⅱ式）とみられる木組みが、第１調査区と第６調査区に、中期後葉（串田新Ⅱ式）とみられる土器溜まりや貯蔵穴がある。

後期　後期初頭（前田・岩峅野式）が、中出地区・第１調査区・第２調査区・第３調査区・第６調査区から出土した。第１調査区の木組み・埋甕、第６調査区の土坑・焼土・木柱根は、この時期のものである。

後期前葉（気屋式）が、第２調査区・第３調査区から、後期中葉（井口式）が、第１調査区・第６調査区から出土した。古代あるいは中世以降の川や溝内に含まれていたもので遺構はない。

後期後葉（八日市新保式）は、第３調査区・第６調査区から出土した。古代の川に含まれていたもので遺構はない。

晩期　晩期前葉（御経塚式期）が、第１調査区・第３調査区から、晩期中葉が、第１調査区・第２調査区・第３調査区から出土した。第１調査区では、SD 06埋積土№16層（褐色砂礫）に晩期前葉が含まれているらしい。同№48層（黒色Ⅰ）からは、晩期中葉（中屋式）が出土している。いずれも量は数点である。第２調査区・第３調査区のものは、中世以降の川に含まれていたものである。

晩期後葉（下野式）が、第２調査区・第３調査区・第８調査区から出土した。遺構は、第８調査区に埋甕があるが、他は古代・中世遺構の川に含まれていた。

(2)　縄文中期末から後期初頭の遺構について

中出地区・第１調査区・第６調査区に、縄文中期末から後期初頭にかけての遺構がある。場所は、西に開く谷の出口（間口約150m）中央部にあたる。北方約150mのところには、現在の子撫川が西へ流れているが、中出地区 SD 06の川底の高さが約26mであること、北方約50mに26m以下となる段丘崖があることから、当時の子撫川は、川幅が今より広く、遺構に近い所に川岸があった可能性がある。

第６調査区は、海抜28.5～29.5mの高さのところに、焼土・木柱が入った土坑・土坑・土器溜まりがあり、その東と西の端は川である。第１調査区には、幅10～15m、深さ約１mの川が西から東へ流れている。第６調査区の北方にも川が流れていた可能性があり、そうであれば、遺構は、東西55m南北約35mの中洲にあったことになる。第１調査区では、その川岸に、土坑・木柱・土器溜まり・埋甕があり、川の中に木組みが設けられている。中出地区では、川の中に木組みがある。

焼土は、10ヶ所ある。これらを竪穴住居の炉と考える見方がある。しかし、焼土は、２個の石

を伴うもの、貼床に土器敷きのもの、焼土が面的にあるもの、土坑の上に堆積する焼土ブロックのものなどいろいろな形態があり、近接しているものが多いこと、竪穴の掘り込みがはっきりしないこと、柱穴の配列が明確でないことなど、竪穴住居の炉と単純にとらえてよいか問題である。

木柱が入った土坑は、15ヶ所あり、木柱の太さが、70～80cmの太いもの、45～50cmほどの中ほどのもの、20～30cmほど細いものがある。第６調査区中央には、太いもの２本と中ほどのもの１本があり、西寄りに太さが45cmのものと80cmのものが２本ある。これらから、それぞれの場所に大型掘立柱建物が立っていたとする見方があるが、柱の太さが違うし、数も不足しており、並び方も規則的でないので、建物とするには問題がある。大型掘立柱建物であったと想像する理由には、川の中から高床建物の柱や壁の構成材と考えられる木材が出土しているということがあるのだが、柱根の出土状況からは、トーテムポールのように独立した柱が立っていた可能性もないとはいえない。また、第１調査区の川岸にも、細い柱が入った土坑が８本あり、掘立柱建物の柱と考えられているが、川岸に近く、並びも不規則であり、建物を構成していたかどうかは、これだけでは判断できないであろう。

土坑は、直径80～100cm、深さ40～70cmの大型のものが40ヶ所ほどある。重なりの結果だと思われるが一辺が150cmの大きいものもある。これらの中には、クルミがまとまって入ったものや樹皮や木が入ったものがあることから、その多くは貯蔵穴ではないかと思われる。

大型土坑のまわりには、径80cm以下の小型の土坑がある。第１調査区の柱根の入った土坑と大きさが似ているので、柱穴であろう。柱穴とすれば、掘立柱建物の可能性があるが、柱並びなどまだ十分に検討できていない。しかし、建物ではなく、貯蔵穴に付随する立柱（標柱）の可能性も考えられるのではないだろうか。

土器溜まりは、第６調査区では、川の中にあるもの、土坑群や焼土群に重なるもの、川岸斜面にあるもの（第１調査区で盛土遺構と呼ばれているものも土器溜まりである）がある。川の中にあるものは、串田新式Ⅱ式までの堆積である。土坑群や焼土群に重なるものは、遺構を覆う包含層ともいえるものである。川岸斜面にあるものには、クリ・クルミ・トチの実、イノシシ・ニホンジカ・ウサギなどの獣骨、サケ・コイなどの魚骨、マメ類が出土している。石器には、石鏃・石錘・凹石などがある。これら土器溜まりは、土器その他の捨て場と見られる。

木組みは、木材を杭でとめた方形木枠のもの、川岸に沿うよう木材を積み重ねて杭で止めたもの、木材を並べて杭で止めたもの、木製品や木材が集積したところがある。方形木枠は、水溜め施設であろう。川岸の木材も川の水を組む足場と考えられる。木材を並べて杭で止めたものの中には、木道と考えられているものがあるが、掛け渡された川は、平安時代の川であり、時期が異なる。川の中には、斧柄や木製鉢の未製品もあり、川の中に並べてあったり、集積しているものは、貯木が目的であるものがあるかもしれない。

中出地区の方形木枠は、高さ26mの所にある。第１調査区SX 02の木組みは、上面の高さが28.5mであり、そこで川底は27.8mである。最も高い位置にあるSX 03は28.4mの高さにある。

そのようなことから、川の水位は、時期によって変動した可能性がある。すなわち、中期末葉には、川の中や斜面に土器溜まりが流れずに堆積していることや木組みの高さから、水位は26mほどの所にあったと考えられる。ところが、土器溜まりの上に木材がかぶる状況や、木組みとともに出土する土器が後期初頭の前田式であることから、後期初頭には、水位が28.5mあたりまで上昇したものと考えられる。その後、再び水位が下がった時期があったようで、木材の上を覆う砂の上面には、黒色土の薄い堆積が認められる。

以上のことから、中期末から後期初頭にかけて、子撫川のそばの谷の中で、イノシシやシカなどの狩猟を行い、クリやクルミなどの採集を行い、サケやコイなどの漁をし、煮たり焼いたりして食料に加工し、木の実などを貯蔵穴に蓄える作業や木材の加工が行われていたことが推測されるが、縄文人がいつもこの場に居住していたのかどうか、木柱が建物であったのかどうかということについては、今後の検討課題としておきたい。

3．弥生時代

弥生時代前期、中期、後期・終末期の土器があるが、遺構は検出されていない。

前期　第1調査区の西端の土器溜まり上面から壺が、第6調査区平安溝から鉢が出土している。

中期　第2調査区、第3調査区、第10調査区から、中期第Ⅳ期の甕や壺が数点出土した。

後期・終末期　第1調査区から後期とみられる小型台付甕が、第3調査区から終末期の甕が出土しているが、量は少ない。

4．古墳時代

古墳時代は、前期、中期、後期のものがあり、土師器と鍬がある。遺構は、第2調査区に樹皮列を伴う木組み、第3調査区に土坑がある。

前期　第1調査区、第2調査区、第3調査区、第6調査区、第8調査区から出土した。第1調査区、第6調査区では、平安時代の溝内から出土し、上流からの流れ込みである。第2調査区では、樹皮列木組みの間から出土している。第3調査では、中世の川の中に混じって出土した。

鍬は、古墳時代前期に多くみられるナスビ形のものである。出土区は、樹皮列を伴う木組みが設置された川の中とみられる。樹皮列木組みについては、宮本長二郎東北芸術工科大学教授は、屋根または壁が流れ着いたものと見ているが、川を横断して設置された堰あるいは護岸施設の可能性がある。

中期　第1調査区、第2調査区、第3調査区、第6調査区から出土した。第1調査区と第6調査区では、平安時代以降の溝内からの出土である。第2調査区では、基本土層Ⅲ層からややまとまって土師器が出土したが、遺構はよくわからない。第3調査区では、中世の川の中に混じって出土した。

後期　第3調査区から出土した。飛鳥時代前期の土坑から出土したもので混入である。

5．飛鳥時代

飛鳥時代は、前期のものがあり、土師器、須恵器、製塩土器、土製支脚がある。第1調査区、第2調査区、第3調査区、第6調査区、第8調査区から出土しており、遺構は、第3調査区に土

坑１基がある。第１調査区、第６調査区では、表土層などからの出土であり、第２調査区・第３調査区では、Ⅲ層と土坑から出土した。

６．奈良時代

奈良時代は、その後半期の土師器、須恵器が、第１調査区、第３調査区、第６調査区、第１０調査区から出土しているが、遺構は検出されていない。第１調査区・第６調査区では、表土や平安時代以降の溝などから、第３調査区では中世の溝などから、第10調査区では、中世の包含層から出土している。

７．平安時代

平安時代は、前期と後期のものがあり、土師器、須恵器、灰釉陶器、土錘、羽口、トリベがある。第１調査区、第６調査区、第10調査区から出土しており、遺構は、第１調査区に前期の溝１条、第１調査区から第６調査区にかけて後期の溝３条がある。

第１調査区の溝は、時期的には、東にある「長岡神祝」などの墨書土器が出土した中出地区の溝 SD 11へと続く可能性がある。

第６調査区の溝内土器は、底部に回転糸切りを残す椀・皿、底部に回転糸切り痕を残す円柱状高台の皿、内面黒色の三角高台の椀、内面黒色の高杯などから構成されるもので、時期は、11世紀後半に位置づけされている［内田2003］。

11世紀後半のこの地域については、文献上の記録はないが、県内各地で荘園が成立することが知られる。そのようなことから、この地域も荘園の設定に伴う開発が進行したことを推測させる。発見された遺構は、溝だけであり、灌漑用の水路であろう。土錘が多く出土しており、網漁も行われていたことわかる。羽口、るつぼが出土しており、製鉄作業が行われているが、金属製農具あるいは漁具の生産のためのものであろうか。

飛鳥、奈良、平安時代は、産田・中出地区に掘立柱建物等があるが、ここは谷の中でもあり、居住地とはなっておらず、水源地あるいは生産の場といえる。

８．中世・近世

鎌倉時代から江戸時代中期までのものがあり、土師器、珠洲、加賀、青磁、瀬戸・美濃、唐津、越中瀬戸、瓦器、銭貨、滑石、こうがいがある。遺構は、第１調査区に鎌倉時代の柱穴群、土坑１基、戦国時代の溝１条、第３調査区に鎌倉時代の柱穴群、第10調査区に鎌倉時代とみられる掘立柱建物、中世後半以降の畠の溝１群がある。柱穴群はまとまりが捉えにくい。第10調査区の建物も面積100㎡ほどの小規模なものである。鎌倉時代は、この地域は宮島保と呼ばれていたことが知られている［小矢部市1971］。鎌倉時代の遺構は、当時の人々の生活形態の一端を示すものである。

第１調査区の柱穴群は、海抜30.2ｍのところに立地する。第６調査区の古代遺構確認面の高さは約29.4ｍであり、その比高差が80㎝ある。第６調査区古代遺構面の高さとほぼ同じ高さの面で平安前期の溝が確認できる。そのようなことから、平安時代の前期（９世紀）と後期（11世紀後半）の間のある時期に、第１調査区に厚い土層の堆積があったことがわかる。その土は、等高線

のありようから、調査区南西部の丘陵地が崩れて第１調査区に堆積したものと考えられる。

江戸時代以降の遺構については、道路跡、取り水、木枠施設等がある。道路跡は、第１調査区と第６調査区の東端に南北方向にあり、幅は1.8mで両側に側溝がある。この場所には、江戸中期以前に、石動から山麓沿いに氷見へ向かう山根道が通っていたとされる。出土遺物からは、このこの道路の時期を特定できないが、この道がそれにあたるとすれば、江戸中期に遡る道路ということになる［県教委1980］。

参考文献

小矢部市史編纂委員会編1971『小矢部市史』
富山県教育委員会1972『富山県遺跡地図－埋蔵文化財包蔵地地図』
小島俊彰1974「北陸の縄文時代中期の編年－戦後の研究史と現状－」『大境第５号』富山考古学会
富山県教育委員会1980『富山県歴史の道調査報告書－北陸街道－』
小矢部市教育委員会・小矢部市埋蔵文化財分布調査団1980Ａ『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報1987年度』
上市町教育委員会1981『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町遺構編－』
富山県教育委員会1983『都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要』
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会1988『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』
伊藤隆三・山森伸正1989「富山県小矢部市桜町遺跡（舟岡地区）の発掘調査」『縄文時代の木の文化』富山考古学会縄文時代研究グループ
小矢部市教育委員会1990『富山県小矢部市桜町遺跡－船岡地区の重要遺跡確認緊急調査－』
吉岡康暢1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
大川清・鈴木公雄・工楽善通1996『日本土器事典』雄山閣出版株式会社
小矢部市教育委員会文化課1999『桜町遺跡’99』パンフレット
桜町遺跡発掘調査団編2001『桜町遺跡調査概報』学生社
南久和2001『編年－その方法と実際－』南書会
小矢部市教育委員会2003『富山県小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書　弥生・古墳・古代・中世編Ｉ』
内田亜紀子2003「富山県の黒色土器（２）－９～11世紀の県内資料を中心にして－」『富山考古学研究第６号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

表3　時期区分

時代		時期区分	年代	土器型式・遺跡・併行関係
弥生		中期　Ⅱ期	前2世紀	矢木ジワリ式
		Ⅲ期	前1世紀前半	小松式　石塚遺跡
		Ⅳ期	前1世紀後半	磯部遺跡　埴生南遺跡
			1世紀前半	戸水B式
		後期　Ⅴ期	1世紀後半	猫橋式
			2世紀前半	法仏式　平田・藤森遺跡
			2世紀後半	月影Ⅰ式　平桜川東遺跡　庄内0式
		終末期	3世紀前半	月影Ⅱ式　庄内1・2式
古墳		初期	3世紀後半	古府クルビ式　布留0・1式
		前期	4世紀	高畠式　竹倉島遺跡　布留2式
		中期	5世紀	宮地式　五社遺跡　道林寺遺跡
		後期	6世紀	若宮古墳　TK47→MT15
古代	飛鳥	前期	7世紀前葉	流団№7窯　飛鳥Ⅰ　TK209
		中期	7世紀中葉	安居ロノ部窯　飛鳥Ⅱ・Ⅲ　TK46
	(白鳳)	後期	7世紀後葉	山王奥堤窯　飛鳥Ⅳ　TK48
	奈良	前葉	8世紀前葉	松永Ⅰ窯　平城Ⅰ・Ⅱ　須恵器Ⅲ期
		中葉	8世紀中葉	平桜岡山窯　平城Ⅲ・Ⅳ　Ⅳ1期
		後葉	8世紀後葉	南太閤山Ⅱ窯　平城Ⅴ　Ⅳ2期
	平安	前葉	9世紀前葉	高沢島Ⅱ遺跡　平城Ⅵ　Ⅴ1期
			9世紀中葉	末窯　高瀬遺跡　Ⅴ2期
			9世紀後葉	増山笹山窯　K－90　Ⅵ1・2期
		中葉	10世紀前半	O－53　Ⅵ3・Ⅶ1期
			10世紀後半	Ⅶ2古期
		後葉	11世紀前半	Ⅶ2新期
			11世紀後半	桜町遺跡舟岡SD09・11
		末葉	12世紀前半	八俵西遺跡　寛治5年井戸併行
			12世紀後半	北反畝遺跡　珠洲第Ⅰ期
中世	鎌倉		13世紀前半	第Ⅱ期
			13世紀後半	第Ⅲ期
	南北朝		14世紀	第Ⅳ期
	室町		15世紀前半	第Ⅴ期
			15世紀後半	第Ⅵ期
	戦国		16世紀前半	日の宮遺跡24区穴12
近世			16世紀後半	弓城城跡SD1002
	江戸	前期	17世紀	増山城下町

(注) 古代については、内田亜紀子　1998「北陸古代土器研究小史－編年と実年代観の問題を中心として－」『富山考古学研究創刊号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所を参考にした。

付載１　第10調査区における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の発掘調査区（平成２年度調査区）は、遺跡西部の礪波山丘陵縁辺の小開析谷の谷奥に位置する。発掘調査の結果、縄文時代晩期の集石遺構や中世とみられる区画溝群などが検出された（第９・47図）。ここでは、中世とみられる区画溝群の機能・用途および当時の植生に関する情報を得ることを目的として、花粉分析を行った。また、縄文時代晩期の集石遺構が墓壙であるか否かを検討することを目的として、遺構内から出土した甕内・外の土壌についてリン・カルシウム分析を行った。以下に各分析結果を報告する。

第１節　中世とみられる区画溝群に対する花粉分析

平成２年度の調査区の北東部から検出された区画溝群の機能・用途については、区画内から牛の足跡が確認されているものの他の物的証拠は得られておらず未だ不明な点が多い。また、この時期の周辺植生についても舟岡地区で推定されているにすぎない。そこで今回の分析調査では、本遺構の用途・機能に関する情報と当時の周辺植生に関する情報を得ることを目的として、区画溝群の溝内に堆積している堆積物と区画内の堆積物について花粉分析を行った。

溝や井戸を埋積する堆積物中に保存されている花粉化石は、泥炭地などの自然状態で堆積した堆積物中に保存されている花粉化石とは異なった情報を内在している場合がある。例えば遺構に近接する場所に生育していた植物の影響を強く反映している場合や、季節性などの情報を反映している場合である（辻，1984、金原，1990）。したがって、今回のような溝埋積物中に保存されている花粉化石の組成を明らかにすることは、遺構の性格や遺構周辺の植生を考える上でも有効と考えられる。

１．試料

分析試料は、発掘調査担当者により、区画溝群の溝内と溝によって区画されている区画内の遺構検出面直下から採取された５点である（図３）。採取された試料の内訳は、溝内から採取された試料が３点（試料番号Ｋ－１・Ｋ－３・Ｋ－４）、区画内から採取された試料が２点（試料番号Ｋ－５・Ｋ－６）である。なお、区画溝の代表的な断面（B － B'）を図４に示す。

溝内試料のうち試料番号K- １が採取された溝は、添付試料を見る限り、他の溝内試料が採取された溝とは溝の方向が異なり、また溝の切り合い関係から上位にあることがわかる。このことから、試料番号K- １が採取された溝は他の溝より構築時期が多少異なり、やや新しいことが示唆される。

２．分析方法

湿重約15ｇの試料について、HF処理、重液分離（ZnBr ２：比重2.2)、アセトリシス処理、KOH処理の順に物理・化学処理を行い花粉化石を分離・濃集する。得られた残渣をグリセリン

で封入しプレパラートを作成した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら出現する種類（Taxa）の同定・計数を行った。

結果は、一覧表と花粉化石群集の分布図として示した。この際の図中の各種類の出現率は、木本花粉が木本花粉総数、草本花粉・胞子が総花粉・胞子から不明花粉を除く数をそれぞれ基数として、百分率で算出した。また＋で表示したものは、化石の保存が悪かった試料から検出された種類を示す。

3．結果

区画溝群の各試料における花粉化石の産状を表１に、また花粉化石群集の分布図を図５に示す。今回の試料のうち、花粉化石が良好に産出したのは、溝内試料の試料番号Ｋ－１だけである。この他の溝内試料および溝外試料では化石数が少なく、わずかに産出した化石の保存状態は悪い。

試料番号Ｋ－１の花粉化石群集は、木本花粉では際だって優占する種類はなく、スギ属、クマシデ属－アサダ属、ハンノキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ属が10％前後の出現率を示す。草本花粉ではイネ科が高率に出現し、次いでカヤツリグサ科・ヨモギ属が多産し、ガマ属・オモダカ属・アサザ属といった水生植物の種類を伴う。

4．考察

今回の区画溝群の試料における花粉化石の産状は、結果に示したように、溝内試料の試料番号Ｋ－１で良好に産出したが、この他の溝内試料および区画内試料では保存の悪い花粉化石が僅かに産出しただけである。古植生の復元を目的とする花粉分析では、試料中の花粉化石の組成を正確に推定する必要があり、そのためには最低150－200個以上の花粉化石を計数する必要がある。

また花粉化石は堆積中にさまざまな腐蝕作用の影響を受けるが、この腐蝕作用に対する抵抗性は花粉化石の種類によって異なり、一般に落葉樹花粉より針葉樹花粉の方が強いとされ、試料中の落葉樹花粉の半数以上が腐蝕の痕跡が認められた場合、その試料中の花粉化石の組成は偏ったものになっている可能性がある。したがって、今回の試料のうち試料番号Ｋ－１以外の試料では、産出した花粉化石の組成から当時の植生を推定することは問題が多く、ここでは控えることにする。

溝内試料のうち試料番号Ｋ－１だけから花粉化石が良好に産出したことは、本区画溝群の機能・用途を考える上で興味深い結果といえる。上記したように試料番号Ｋ－１が採取された溝は、他の溝内試料が採取された溝とは方向および層位が異なり、構築時期が新しいと考えられる。このような花粉化石の産状の差が、構築時期と関係しているとすれば、溝内の堆積環境（とりわけ水域の有無）が各時期で異なっていたかもしれない。このことについては、今後区画溝群の切合い関係を重視した試料採取を行い、珪藻分析などを通じて再検討する必要があろう。次に、溝内試料である試料番号Ｋ－１の花粉化石群集から推定される溝内および周辺植生について述べることにする。

試料番号Ｋ－１の花粉化石群集には、ガマ属・オモダカ属・アサザ属・サンショウモといっ

た水生植物の種類が認められる。本溝埋積物が搬入土でないとすれば、当時の溝内には水が存在した、あるいは溝付近にはこれら水生植物が生育する水湿地が存在したことが示唆される。なお、草本花粉化石のうち高率を占めたイネ科について、ノマルスキー干渉装置によって栽培型とされるイネ属花粉化石の判別を試みた。計数はしていないが、イネ属はほとんど認められず栽培型以外のイネ科花粉化石が大部分であった。今後他の溝についても検討する必要があろうが、現状ではこの溝が稲作に関与したことを強く示唆する結果ではなかったと言わざるを得ない。また、クマシデ属－アサダ属、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属といった落葉広葉樹の種類が、当時の植生を構成する主な要素であったことが伺われる。常緑広葉樹のアカガシ亜属も認められるがその出現率は低率であり、照葉樹林といえる林分が存在したとは考え難い。一方、本試料と同時期の花粉化石群集が、本調査区の位置する谷の谷口に位置する船岡地区でも得られている（未公表）。その花粉化石群集は、出現率に若干の違いが認められるものの、本地点と同様に落葉広葉樹の種類が卓越しており、概ね類似している。このことから、古墳時代から平安時代頃の本地域では、ナラ類などの落葉広葉樹を主とする植生が広がっていたことが示唆される。

5．まとめ

今回の桜町遺跡の発掘調査で検出された、古墳時代から平安時代の区画溝群の機能・用途に関する情報と当時の植生に関する情報を得ることを目的として、花粉分析を行った。その結果、以下のような結果が得られた。

(1)調査対象とした試料のうち、花粉化石が良好に産出したのは、溝内試料の試料番号Ｋ－１だけで、その他の試料では花粉化石の保存状態が悪かった。花粉化石が良好に産出した溝が他の溝内試料が採取された溝とは方向・層位が異なっており、新旧関係も認められることから、溝の構築時期によって溝内の堆積環境が異なっていた可能性がある。

(2)花粉化石が良好に産出した溝内試料の試料番号Ｋ－１の花粉化石群集の組成から、本溝埋積物が搬入土でないとすれば、溝内あるいはその周辺には水生植物が生育するような水域が存在したことが推定された。また、周辺にはナラ類などの落葉広葉樹からなる植生が成立していたことが推定された。なお、現状ではこの溝が稲作に関与したとする結果は得られていない。

このように花粉分析の結果では、区画溝群に関する断片的な情報しか得られなかった。今後は、本区画溝群の性格について様々な角度から総合的に検討するという視点に立ち、花粉化石より腐蝕に対する抵抗性が強いとされる珪藻化石や植物珪酸体の分析を行い、当時の堆積環境や局地的な植生について検討し、今回の結果も含めて総合的に検討することが望まれる。

引用文献

辻　誠一朗（1984）Ｉ－２．井戸内堆積物の季節性.「古文化財の自然科学的研究」（古文化財編集委員会編）p.492－493.

金原正明（1990）遺跡における植物遺体分析について－堆積物の季節性など－．日本文化財科学会第７回大会研究発表要旨集，日本文化財科学会，p.22－23.

表１　区画溝群試料の花粉分析結果

種　　類（Taxa）　　試料番号	K−1	K−3	K−4	K−5	K−6
木本花粉					
モミ属	6	−	−	−	−
ツガ属	8	−	−	−	−
トウヒ属	1	−	−	−	−
マツ属単維管束亜属	3	−	−	−	−
マツ属複維管束亜属	3	−	−	−	−
マツ属（不明）	3	−	−	−	−
コウヤマキ属	1	−	3	1	−
スギ属	20	7	1	1	4
イチイ科−イヌガヤ科−ヒノキ科	8	1	−	1	−
クルミ属	4	−	−	−	−
クマシデ属−アサダ属	21	1	−	−	−
ハシバミ属	5	−	1	1	−
カバノキ属	8	−	−	−	−
ハンノキ属	26	1	−	−	−
ブナ属	10	−	1	2	2
コナラ属コナラ亜属	33	−	1	−	1
コナラ属アカガシ亜属	27	−	−	−	−
クリ属	1	−	−	2	−
ニレ属−ケヤキ属	21	−	−	−	−
エノキ属−ムクノキ属	10	−	−	−	−
カツラ属	3	−	−	−	−
コクサギ属	1	−	−	−	−
ユズリハ属	1	−	−	−	−
モチノキ属	1	−	−	−	−
カエデ属	1	−	−	−	−
トチノキ属	2	−	−	−	−
ブドウ属	1	−	−	−	−
ウコギ科	1	−	−	−	−
ツツジ科	1	−	−	−	−
トネリコ属	4	1	−	−	−
草本花粉					
ガマ属	5	−	−	−	−
オモダカ属	6	1	−	−	−
イネ科	164	7	3	2	10
カヤツリグサ科	26	4	−	−	1
クワ科	7	1	−	1	1
ギシギシ属	1	−	−	−	−
サナエタデ節−ウナギツカミ節	−	1	1	−	−
タデ属	1	2	−	−	−
アカザ科	2	1	−	−	−
ヒユ科	−	4	−	−	−
ナデシコ科	−	−	1	−	−
キンポウゲ科	−	1	−	−	−
アブラナ科	−	−	−	1	1
バラ科	1	−	−	−	−
フロウソウ属	−	1	−	1	−
アリノトウグサ属	−	1	−	−	−
セリ科	2	2	−	1	−
アサザ属	1	−	−	−	−
オミナエシ属	−	−	−	−	1
ヨモギ属	50	4	1	7	1
オミモミ属	2	−	−	−	−
他のキク亜科	2	1	−	1	−
タンポポ亜科	−	1	−	−	2
不明花粉	40	11	5	3	1
シダ類胞子					
ヒカゲノカズラ属	−	−	−	−	1
ゼンマイ属	−	−	2	2	1
サンショウモ	2	−	−	−	−
シダ類胞子	26	70	48	18	18
フウ属	1	−	−		
合　計					
木本花粉	235	10	7	8	7
草本花粉	270	32	6	14	17
不明花粉	40	11	5	3	1
シダ類胞子	28	70	50	20	20
総花粉・胞子	573	123	68	45	45

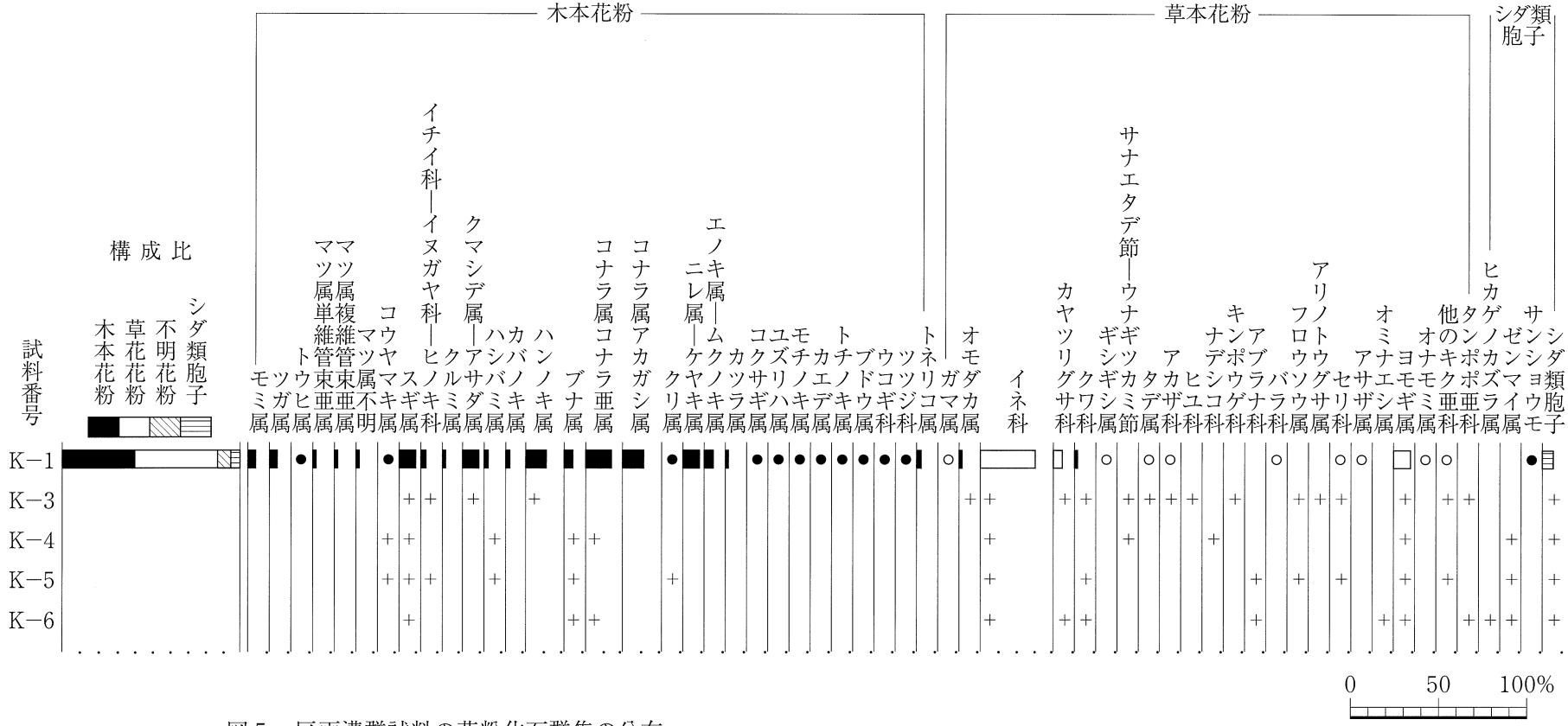


図５　区画溝群試料の花粉化石群集の分布

出現率は、木本花粉が木本花粉総数、草木花粉・胞子が総花粉・胞子数から不明花粉を除く数を基数として算出した。なお、●○は１％未満の出現、＋は木本花粉が100個体未満の試料において産出した種類を示す。

第２節．縄文時代晩期集石遺構のリン・カルシウム分析

１．はじめに

近年、我国では考古試料を対象にした土壌学的アプローチが学会レベルでも盛んに行われるようになり、「土壌学と考古学」といったシンポジウムも開催され、書籍としてまとめられるようにもなった（久馬・永塚他、1987)。その中で土壌のリン酸濃度を調査するリン分析は、考古学の分野においても馴染みが深く、集落位置やその広がり、墓壙の確認、生活面の検出などに利用されている。また、最近ではリン酸の他にカルシウム成分（骨の主成分がリン酸カルシウムであることから）を測定し、骨埋納の可能性をより積極的に探ろうとする調査も行われている。

今回の調査対象とされる縄文時代晩期の集石遺構では、遺構内から甕が出土したものの、その他に副葬品らしき遺物は検出されず、遺構あるいは土器の機能・用途を推定し得る充分な知見は得られていない。したがって、土器内外に堆積する土壌のリン酸および、カルシウム成分の濃度から、本集石遺構が墓壙であるかどうか検討を行う。

２．試料

調査対象となる集石遺構は、ｂ３区西側で検出された中世（？）河道付近に位置し（図２)、その確認面はＡ－Ａ’土層断面における８層最上部の黒色粘土層上面である（図６)。なお、この８層下部では縄文時代中期の遺物が包含され、８層全体には種実遺体等が多く含有されている。

分析に供した試料は、遺構内に埋積する黒色粘土３点（試料番号２、３、４)、およびその対比試料としてほぼ同レベルの遺構外の土壌１点（試料番号５）の計４点である（第10図)。

３．分析方法

粉砕、篩別した試料について、硝酸・過塩素酸分解を行った後、リンについてはバナドモリブデン酸法、カルシウムについては原子吸光光度法でそれぞれ測定した。

具体的な分析工程は、以下に示すとおりである。

①試料を風乾後、軽く粉砕して２㎜の篩を通過させる（風乾細土試料)。

②風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。

③風乾細土試料２ｇをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO_3）５㎖を加えて加熱分解し、放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）10㎖を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100㎖に定容してろ過する。

④ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて、分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定し、土壌中のリン酸含量を求める。

⑤別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定し、土壌中のカルシウム含量を求める。

４．結果および考察

結果は、表２に示した。

表２　縄文時代晩期の集石遺構内土壌のリン・カルシウム分析結果

試料採取場所	試料番号	リン酸含量 P_2O_5 mg/g	カルシウム含量 CaO mg/g
遺　構　内	2	1.25	1.79
	3	1.62	1.82
	4	1.22	1.78
遺　構　外	5	1.10	1.70

注）単位：リン酸・カルシウムともに乾土１ｇあたりのmgで表示。

リン酸：試料番号２～４の遺構内試料では試料番号５の遺構外試料よりも僅かに高い値を示している。また、遺構内試料間においても試料番号３でやや高い傾向が認められる。ただし、土壌中に含まれるリン酸の一般的な含量について、G.H. Bolt・M.G.M. Bruggenwert（1980）は、例外的な条件を除き普通0.1～0.25％（1.0～2.5mg/g）のリン酸（P_2O_5）であるとしている。また山崎（1966）によれば、わが国で調べられた土壌中の全リン酸は0.054～0.121％（0.54～1.21mg/g）で、平均して0.108％（1.08mg/g）であったとされる。これらのことから、今回の遺構内試料の値が高濃度なリン酸の集積とは考えにくい。

カルシウム：試料全体の含量は、1.7～1.8mgの比較的近似した値を示し、遺構内試料で僅かに高い傾向が認められる。これは、リン酸と同様である。

以上のことから、今回の試料では遺構外と遺構内のリン酸およびカルシウム含量に僅かな違いが認められ、遺構内でやや高い傾向にあるとの結果を得ることができた。しかし、それを有為な差として結論づけるには比較対象とした遺構外試料の点数が１点とあまりにも少なすぎることから危険な面があり（遺構外試料の試料番号５の値が遺構外土壌全体を代表しているか否かわからない）、表土以深各層試料の再分析をする必要がある。また、リン酸については、遺構内試料の含量が土壌の一般的な含量の範囲と変わらず極端なリン酸の富化が認められない。したがって、遺構内にリン酸成分の高いものが埋納されたことを積極的に支持する結果とは言えない。

引用文献

土壌標準分析・測定法委員会編（1986）土壌標準分析・測定法．354p., 博友社.

土壌養分測定法委員会編（1981）土壌養分分析法．440p., 養賢堂.

G.H.Bolt, M.G.M.Bruggenwert（1980）土壌の化学．岩田進午他訳，309p., 学会出版センター.

久馬一剛・永塚鎮男編（1987）土壌学と考古学．214p., 博友社.

京都大学農学部農芸化学教室編（1957）農芸化学実験書（第１巻）．411p., 産業図書.

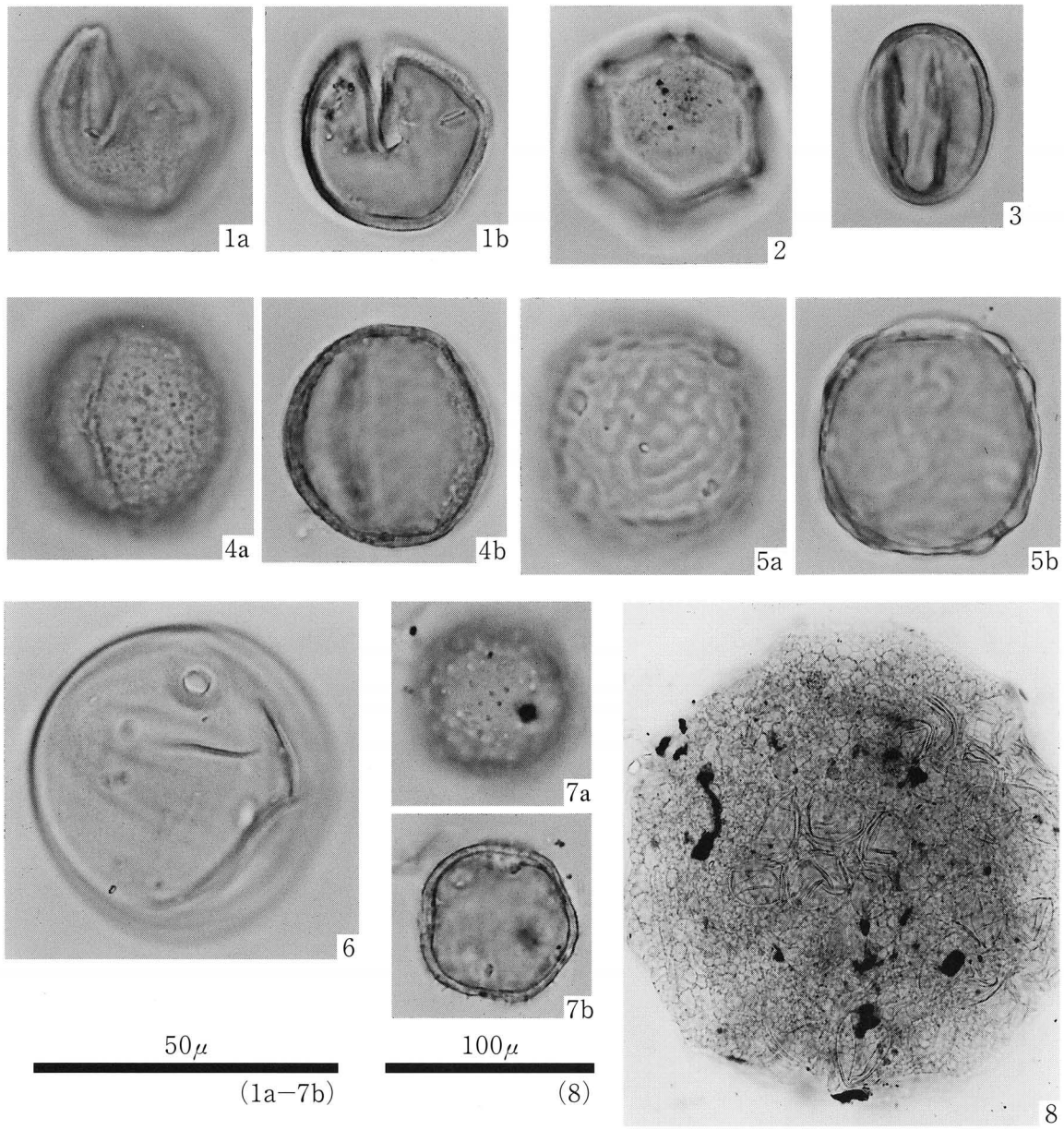
坂上寛一（1983）小山田 No. 23遺跡・土坑に関する若干の土壌学的考察．小山田遺跡調査会編「東京都町田市・小山田遺跡群Ⅱ」，p. 221－228.

竹迫　紘（1981）11号住居址内埋甕中の土壌リン酸分析，横浜市道高速２号線文化財埋蔵文化財発掘調査報告，横浜市道高速２号線文化財埋蔵文化財発掘調査団，p. 156－158.

竹迫　紘・加藤哲郎・坂上寛一・黒部　隆（1981）神谷原遺跡への土壌学的アプローチ．神谷原Ⅰ，p. 412－416, 八王子市椚田遺跡調査会.

山崎　傳（1966）微量要素と多量要素－土壌・作物の診断・対策－．p. 171., 博友社.

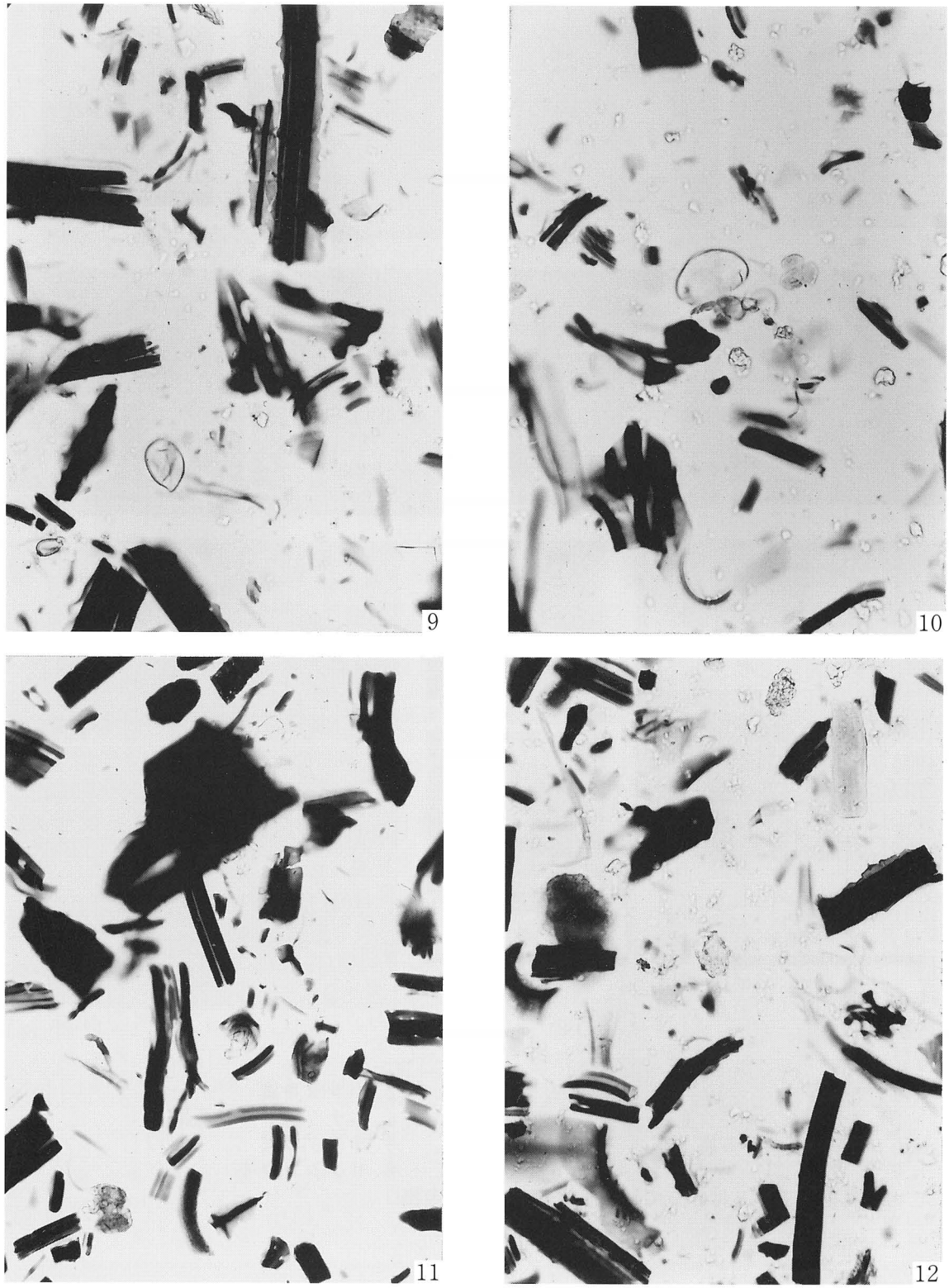
図版１　花粉化石の顕微鏡写真



1．マツ属
2．ハンノキ属
3．コナラ属アカガシ亜属
4．コナラ属コナラ亜属
5．ニレ属－ケヤキ属
6．オモダカ属
7．イネ科
8．サンショウモ

＊写真番号１～８は、全て試料番号Ｋ－１より産出

図版２　花粉分析プレパラートの状況の顕微鏡写真



9．状況写真（試料番号Ｋ－３）
10．状況写真（試料番号Ｋ－４）
11．状況写真（試料番号Ｋ－５）
11．状況写真（試料番号Ｋ－６）

付載２　桜町遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

桜町遺跡（富山県小矢部市桜町所在）は、小矢部川の支流にあたる子撫川右岸に立地する遺跡である。本遺跡は、子撫川が形成した自然堤防上を中心に、奈良・平安時代を中心とした遺構・遺物が確認されている。また、西側の小谷では縄文時代の遺構・遺物が多量に出土している。

今回の分析調査は、本遺跡西側の小谷出口に設定された第１調査区のメインセクションLoc.１（第56図　第１調査区南北壁）から採取した土壌試料について、堆積環境や古植生に関する情報を得るため、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、微細植物片分析、粒度分析、鉱物分析を実施する。また、出土した木材の放射性炭素年代測定を実施し、年代資料を得る。

１．試料

試料は、第１調査区メインセクションLoc.１（以下Loc.１と表記）から1997年に採取した土壌57点（試料番号１～57)、出土した木材６点である。試料採取地点は、遺跡が展開する小谷の出口付近にあたり、遺跡の標準的な層序や環境変遷を知る上で、重要な試料であると考えられる。一方土器捨て場にみられる盛土についても、その由来や時期などを知る目的で、上層・中層・下層から各層１点ずつ採取された。これらを対象に、放射性炭素年代測定、鉱物分析、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、微細植物片分析、粒度分析を実施する。分析項目と試料の詳細を表１に示す。

２．分析方法

(1)　放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。なお、δ^{13}Cの値は加速器を用いて試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C／^{12}C）を測定し、標準試料PDB（白亜紀のベレムナイト類の化石）の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差（‰；パーミル）で表したものである。今回の試料の補正年代は、この値に基づいて補正をした年代である。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5570年を使用した。また、測定年代は1950年を基点とした年代（ＢＰ）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。

(2)鉱物分析

試料約40gに水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が１/16㎜より小さい粒子を除去する。乾燥させた後、篩別して、得られた粒径１/４㎜－１/８㎜の砂分を、ポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離し、重鉱物および軽鉱物をそれぞれ偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉱物の同

表１　分析試料一覧

	試料番号	14C	M	D	P	PO	微細	粒度	備考
Loc.1	1								古墳時代包含層
	2								古墳時代包含層
	3								古墳時代包含層
	4								古墳時代包含層
	5								古墳時代包含層
	6	○	○	○	○	○		○	古墳時代包含層
	7								古墳時代包含層
	8								古墳時代包含層
	9								古墳時代包含層
	10	○		○	○	○	○	○	縄文時代晩期中葉
	11								縄文時代晩期中葉
	12								縄文時代晩期中葉
	13								縄文時代晩期中葉
	14								縄文時代晩期中葉
	15	○	○	○	○	○	○	○	縄文時代中期末～後期初頭
	16								縄文時代中期末～後期初頭
	17								縄文時代中期末～後期初頭
	18								縄文時代中期末～後期初頭
	19			○					縄文時代中期末～後期初頭
	20								縄文時代中期末～後期初頭
	21								古墳時代包含層
	22								縄文時代晩期中葉
	23			○					縄文時代晩期中葉
	24								縄文時代晩期中葉
	25								縄文時代晩期中葉
	26		○	○	○	○		○	縄文時代晩期中葉
	27								縄文時代晩期中葉
	28	○	○	○	○	○		○	縄文時代中期末～後期初頭
	29								縄文時代中期末～後期初頭
	30								縄文時代中期末～後期初頭
	31		○	○	○	○		○	縄文時代中期中葉土石流
	32								縄文時代中期中葉土石流
	33			○					縄文時代中期中葉土石流
	34								縄文時代中期末～後期初頭
	35								縄文時代中期末～後期初頭
	36								縄文時代中期末～後期初頭
	37	○							縄文時代中期中葉土石流
	38			○	○	○		○	縄文時代中期中葉土石流
	39								縄文時代晩期中葉
	40								縄文時代晩期中葉
	41								縄文時代晩期中葉
	42			○				○	縄文時代晩期中葉
	43								縄文時代晩期中葉
	44								縄文時代晩期中葉
	45								縄文時代晩期中葉
	46		○	○	○	○		○	縄文時代晩期中葉
	47								縄文時代晩期中葉
	48		○	○	○	○		○	縄文時代中期末～後期初頭
	49								縄文時代中期末～後期初頭
	50								縄文時代中期末～後期初頭
	51		○	○	○	○		○	縄文時代中期末～後期初頭
	52								縄文時代中期末～後期初頭
	53								縄文時代中期末～後期初頭
	54			○					縄文時代中期末～後期初頭
	55								縄文時代中期末～後期初頭
	56			○	○	○		○	縄文時代中期末～後期初頭
	57	○							縄文時代中期末～後期初頭
盛土	上層			○	○	○	○		土器捨て場の上にある盛土層
	中層								土器捨て場の上にある盛土層
	下層			○	○	○	○		土器捨て場の上にある盛土層

凡例
14C：放射性炭素年代測定（ＡＭＳ法）、D：珪藻分析、P：花粉分析
PO：植物珪酸体分析、微細：微細植物片分析、粒度：粒度分析、M：鉱物分析

定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。また、火山ガラスは、便宜上軽鉱物に入れる。火山ガラスは、その形態によりバブル型、中間型、軽石型の３つの型に分類する。バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるＹ字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

(3) 珪藻分析

試料を湿重で７ｇ前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体を基準に同定・計数する。なお、珪藻化石の産出数の少ない試料は100個体を基準に計数し、100個体未満の試料に関しては産出率の評価が不可能なものとする。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer and Lange-Bertalot（1986, 1988, 1991a, 1991b）などを参照する。

同定結果は、海水生種、海水～汽水生種、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率２％以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水生種・海水～汽水生種・汽水生種については小杉（1988）、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については Asai and Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

(4) 花粉分析

試料約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重２．３）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に

扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を＋で表示するにとどめておく。

(5)植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の分布図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

(6)　微細植物片分析

土壌試料各200ccを水に一晩液浸し、試料の泥化を促す。0.5㎜の篩を通して水洗し残渣を集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な植物遺体等を抽出する。植物遺体の形態的特徴を当社所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川，1994)、日本植物種子図鑑（中山ほか，2000）と比較し、種類の同定・計数をおこなう。細片のため個体数推定が困難である種類は、表中に「破」と表示する。同定・計数後の種実遺体等は、種類毎にビンに詰め、50％程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。

(7)　粒度分析

砕屑性堆積物研究会（1983）の方法を参考に礫・砂粒子画分はふるい分け法、シルト・粘土粒子画分はピペット法で行った。また、粒径区分は Wentworth（1922）に従った。

試料を風乾して２㎜φ篩でふるい分ける。２㎜φ篩上粒子は水洗して重量を測定する。一方、２㎜φ篩下粒子は40.00g をビーカーに秤量し、蒸留水と30％過酸化水素水を加え、熱板上で有機物分解を行う。分解終了後、蒸留水と分散剤（４％カルゴン）を加え、撹伴しながら30分間音波処理を行う。沈底瓶にこの懸濁液を移し、往復振とう機で１時間振とうする。振とう終了後、水で全量を1000㎖にする。この沈底瓶を１分間手で激しく振り、直ちに静置する。ピペット法に準じて所定時間に所定深度から粘土・シルト画分（0.063㎜＞)、粘土画分（0.0039㎜＞）を10㎖採取し、105℃で24時間乾燥させた後、重量を測定し加積通過率（質量％）を求める。ピペット法終了後、懸濁液を63μｍ篩で水洗いする。63μｍ篩残留物を105℃で５時間熱乾後、1.0、0.5、0.25、0.125㎜φ篩でふるい分け、各篩毎に篩上残留物の質量を測定し、加積通過率（質量％）を求める。ピペット法およびふるい分けで求められる加積通過率（質量％）から粒径加積曲線を描き、Wentworth（1922）の粒径区分毎の質量を算出する。

3．結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表２に示す。１点（試料番号６）を除き、ほとんどの試料は縄文時代後期頃の年代値を示す。

(2) 鉱物分析

分析結果を表３、図１に示す。重鉱物組成では、８点の試料はともに類似した組成を示す。すなわち、斜方輝石が最も多く、40～60％占め、斜方輝石以外では、数～10％程度の単斜輝石、角閃石、不透明鉱物を伴い、試料によっては酸化角閃石、ザクロ石、緑レン石、紅柱石などの鉱物が微量含まれる。詳細にみれば、試料番号15は他の試料に比べて不透明鉱物の量比がやや高く、試料番号48は角閃石の量比が高いことが指摘できる。

軽鉱物組成においても、８点の試料間で特に顕著な差異は認められない。いずれの試料においても、砂粒中の70～80％が未分解の粘土粒や微細な岩片などからなる。同定できた鉱物片のほとんどは長石であり、いずれの試料にも数％の石英粒が含まれる。

(3) 珪藻分析

結果を表４・図２に示す。以下に地点毎の傾向を示す。

・Loc. 1

珪藻化石の産出数は少なく、試料番号51・56でのみ100個体以上産出する。産出種の約50～60％は陸生珪藻であり、中でも陸生珪藻Ａ群（伊藤・堀内，1991）の Navicula mutica などが約10～20％産出する。その他は、流水不定性種の Gomphonema parvulum、流水不定性種・沼沢湿地付着成種（安藤，1990）の Navicula elginensis 等が10％前後産出する。

その他の試料での産出数は、０～27個体と少ない。なお、陸生珪藻とは多少の湿り気のある、乾いた環境に生育する珪藻であり、中でも、乾燥に耐性のある種がＡ群とされる。沼沢湿地付着性種とは、水深が１ｍ前後で、一面に水生植物が繁茂するような沼沢や水深が浅い湿地に生育する種とされる。

・盛土遺構

上層と下層で産出種の傾向が異なる。上層は全体の約70％を陸生珪藻が占め、中でも陸生珪藻Ａ群の Navicula mutica が約40％産出する。下層は全体の約30％を流水性種が占め、中でも好流水性種・中～下流性河川指標種（安藤，1990）の Achnanthes lanceolata が約15％産出する。その他は、流水不定性種の Gomphonema parvulum が約20％、流水不定性種の Gomphonema pumilum が約10％、流水不定成種・好汚濁性種（Asai and Watanabe，1995）の Sellaphora pupula が約10％産出する。

なお、中～下流性河川指標種とは、主に中～下流部、すなわち、河川沿いの河成段丘・扇状地・自然堤防・後背湿地といった地形が見られる水域環境で生育する種とされる。好汚濁性種は有機的に汚濁した水域に生育する種とされる。

表２　放射性炭素年代測定結果

試料番号	試料の質	測定年代	δ13C	補正年代	Code.No.
6	木材	1210±40BP	−25.15±1.36‰	1200±40BP	IAAA −30155
10	木材	3810±40BP	−23.46±0.92‰	3830±50BP	IAAA −30156
15	木材	3830±40BP	−23.53±1.28‰	3850±50BP	IAAA −30157
28	木材	3780±40BP	−24.40±1.13‰	3790±40BP	IAAA −30158
37	木材	3850±40BP	−20.73±1.03‰	3920±50BP	IAAA −30159
57	木材	3970±40BP	−23.72±1.03‰	3990±50BP	IAAA −30160

1）測定は、加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による。
2）年代は、1950年を基点とした年数で、補正年代はδ13Ｃの基に同位体効果による年代誤差を補正した値。
3）放射性炭素の半減期は、5568年を使用した。

表３　重軽鉱物分析結果

試料番号	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	角閃石族	ジルコン	ざくろ石	緑廉石	斜ゆうれん石	紅柱石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石	その他	合計
6	146	7	16	7	1	0	1	0	0	0	10	62	250	0	0	0	8	44	198	250
15	115	9	8	3	3	1	1	0	0	0	38	72	250	0	0	0	7	32	211	250
26	118	23	15	3	0	1	0	0	2	0	15	73	250	0	0	0	3	36	211	250
28	127	17	8	1	4	0	4	0	0	0	27	62	250	0	0	0	5	52	193	250
31	125	18	18	5	4	0	1	0	2	0	15	62	250	0	0	0	5	56	189	250
46	150	10	11	6	1	0	0	1	0	0	10	61	250	0	0	0	5	45	200	250
48	112	15	54	12	1	1	0	0	0	1	7	47	250	0	1	0	9	49	191	250
51	114	20	11	3	0	2	0	3	0	3	29	65	250	0	1	0	9	65	175	250

図１　重軽鉱物組成

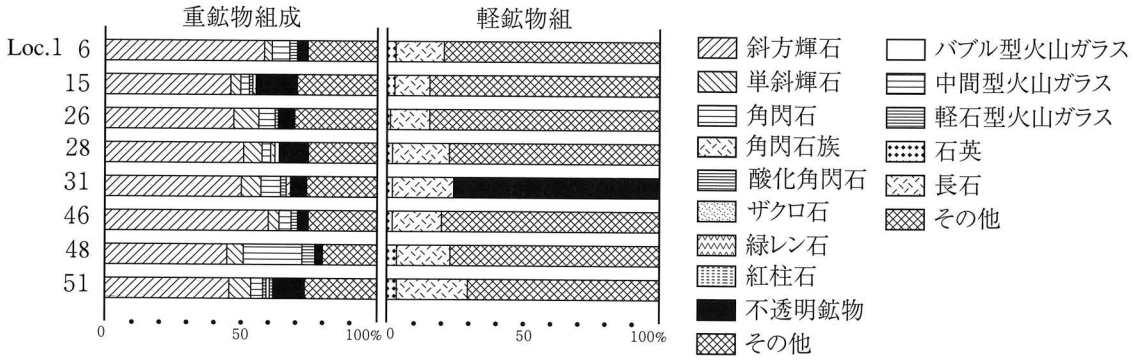


表 4　珪藻分析結果(1)

種　　類	生態性			環境	Loc. 1																盛土	
	塩分	pH	流水	指標種	6	10	15	19	23	26	28	31	33	38	42	46	48	51	54	56	上層	下層
Navicula formenterae Cleve	Euh				—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Thalassionema nitzschioides var. parva Heiden and Kolbe	Euh				—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—
Cocconeis scutellum Ehrenberg	Euh — Meh			C 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—
Fragilaria fasciculata (Agardh)Lange — B.	Meh				—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh — Meh	al — il	ind		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	2	—
Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow	Ogh — ind	ind	r — ph	K,T	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	1	7	28
Achnanthes subhudsonis Hustedt	Ogh — ind	ind	r — ph	T	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
Achnanthes tropica Hustedt	Ogh — ind	ind	ind		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
Achnanthes spp.	Ogh — unk	unk	unk		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
Amphora affinis Kuetzing	Ogh — ind	al — il	ind	U	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	1	1	3
Amphora montana Krasske	Ogh — ind	ind	ind	RA	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	10	—
Amphora normanii Rabenhorst	Ogh — ind	ind	ind	RB	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	1	1	2
Amphora spp.	Ogh — unk	unk	unk		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—
Caloneis leptosoma Krammer & Lange — Bertalot	Ogh — ind	ind	l — ph	RB	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	6	—	—	3	—
Cocconeis placentula var. lineata (Ehr.)Cleve	Ogh — ind	al — il	r — ph	T	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	5
Cymbella aspera (Ehr.)Cleve	Ogh — ind	al — il	ind	O,T	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh — ind	ind	ind	O	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3
Cymbella sinuata Gregory	Ogh — ind	ind	r — ph	K,T	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1	1	—	10
Cymbella turgidula Grunow	Ogh — ind	al — il	r — ph	K,T	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
Cymbella spp.	Ogh — unk	unk	unk		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
Denticula spp.	Ogh — unk	unk	unk		1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Diatomella balfouriana (W.Smith)Grevil	Ogh — ind	ind	ind	RA	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve	Ogh — ind	al — il	ind		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh — hob	ac — il	ind	O	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
Eunotia pectinalis var. undulata (Ralfs)Rabenhorst	Ogh — hob	ac — il	ind	O	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
Eunotia spp.	Ogh — unk	unk	unk		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	2	—
Fragilaria pinnata Ehrenberg	Ogh — ind	al — il	l — ph	S	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	3
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh — ind	al — il	ind	U	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	2
Gomphonema angustum Agardh	Ogh — ind	al — il	ind		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	—	1	—	—
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh — ind	al — il	l — ph	O,U	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	4
Gomphonema helveticum Brun	Ogh — unk	ind	r — ph	T	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh — ind	ind	ind	U	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	11	3	20	18	51
Gomphonema pumilum (Grun.)Reichardt & Lange — Bertalot	Ogh — ind	al — il	ind		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	21
Gomphonema spp.	Ogh — unk	unk	unk		—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1	—	1	10	1	5	2	11
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh — ind	al — il	ind	RA,U	—	—	—	—	—	1	1	1	—	1	—	—	—	8	2	29	24	1
Martyana martyi (Heribaud)Round	Ogh — ind	al — il	ind		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2	—	—	—
Meridion circulae var. constrictum (Ralfs)V.Heurck	Ogh — ind	al — il	r — bi	K,T	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
Navicula contenta Grunow	Ogh — ind	al — il	ind	RA,T	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—
Navicula elginensis (Greg.)Ralfs	Ogh — ind	al — il	ind	O,U	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	6	—	25	17	6
Navicula elginensis var. cuneata H.Kobayasi	Ogh — ind	al — il	ind		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.)Patrick	Ogh — ind	al — il	r — ph	U	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	5
Navicula mutica Kuetzing	Ogh — ind	al — il	ind	RA,S	—	—	—	—	1	—	2	—	—	5	—	2	2	19	5	53	80	5
Navicula paramutica Bock	Ogh — ind	ind	ind	RB	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2	—	1	1	—
Navicula tantula Hustedt	Ogh — ind	ind	ind	RI,U	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—
Navicula spp.	Ogh — unk	unk	unk		—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	3	3	2
Neidium affine (Ehr.)Cleve	Ogh — hob	ind	l — bi		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—
Neidium bisulcatum (Lagerst.)Cleve	Ogh — ind	ac — il	ind	RI	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
Neidium iridis (Ehr.)Cleve	Ogh — hob	ac — il	l — bi	O	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
Neidium spp.	Ogh — unk	unk	unk		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—

種　　類	生態性			環境	Loc. 1																盛土	
	塩分	pH	流水	指標種	6	10	15	19	23	26	28	31	33	38	42	46	48	51	54	56	上層	下層
Orthoseira roeseana (Rabh.)O'Meara	Ogh − ind	ind	ind	RA	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh − ind	ind	ind	RA	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	11	2	−
Pinnularia borealis var. scalaris (Ehr.)Rabenhorst	Ogh − ind	ind	ind	RA	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	5	−	−
Pinnularia brebissonii (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh − ind	ind	ind	U	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh − ind	ac − il	ind	O	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
Pinnularia lagerstedtii (Cleve)Cleve − Euler	Ogh − ind	ind	ind	RI	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−
Pinnularia microstauron (Ehr.)Cleve	Ogh − ind	ac − il	ind	S	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−
Pinnularia obscura Krasske	Ogh − ind	ind	ind	RA	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	4	3	−
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh − hob	ac − il	ind		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	1	−
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh − ind	ind	ind	RI	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	8	3	14	11	−
Pinnularia schroederii (Hust.)Krammer	Ogh − ind	ind	ind	RI	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	4	−	−	1	−
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh − ind	ac − il	ind	RB,S	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
Pinnularia spp.	Ogh − unk	unk	unk		−	−	−	1	−	−	1	−	−	−	−	1	1	1	−	3	4	1
Rhoicosphenia abbreviata (Ag.)Lange − B.	Ogh − hil	al − il	r − ph	K,T	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh − ind	ind	ind	S	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	13
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh − ind	ind	ind	T	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh − ind	ind	ind	RB	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh − ind	ind	l − ph	O	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	2
Stauroneis phoenicenteron fo. hattorii Tsumura	Ogh − ind	ind	ind	O	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
Stauroneis tenera Hustedt	Ogh − ind	ind	ind	RB	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−
Stauroneis spp.	Ogh − unk	unk	unk		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−
海水生種合計					0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
海水～汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0
汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	0
淡水生種合計					1	0	1	2	1	1	4	2	0	10	3	6	13	101	27	199	199	190
珪藻化石総数					1	0	2	2	1	1	4	2	0	11	3	6	14	102	27	200	202	190

凡例

H.R　：塩分濃度に対する適応性
Euh　：海水生種
Euh-Meh：海水生種－汽水生種
Meh　：汽水生種
Ogh-Meh：淡水－汽水生種
Ogh-hil　：貧塩好塩性種
Ogh-ind　：貧塩不定性種
Ogh-hob　：貧塩嫌塩性種
Ogh-unk　：貧塩不明種

pH　：水素イオン濃度に対する適応性
al-bi　：真アルカリ性種
al-il　：好アルカリ性種
ind　：pH 不定性種
ac-il　：好酸性種
ac-bi　：真酸性種
unk　：pH 不明種

C.R　：流水に対する適応性
l-bi　：真止水性種
l-ph　：好止水性種
ind　：流水不定性種
r-ph　：好流水性種
r-bi　：真流水性種
unk　：流水不明種

環境指標種群

Cl：海水藻場指標種（以上は小杉，1998）
K　：中～下流性河川指標種，O：沼沢湿地付着生種（以上は安藤，1990）
S　：好汚濁性種，U：広域適応性種，T：好清水性種（以上は Asai and Watanabe，1995）
R　：陸生珪藻（RA：A 群，RB：B 群，RI：未区分，伊藤・堀内，1991）

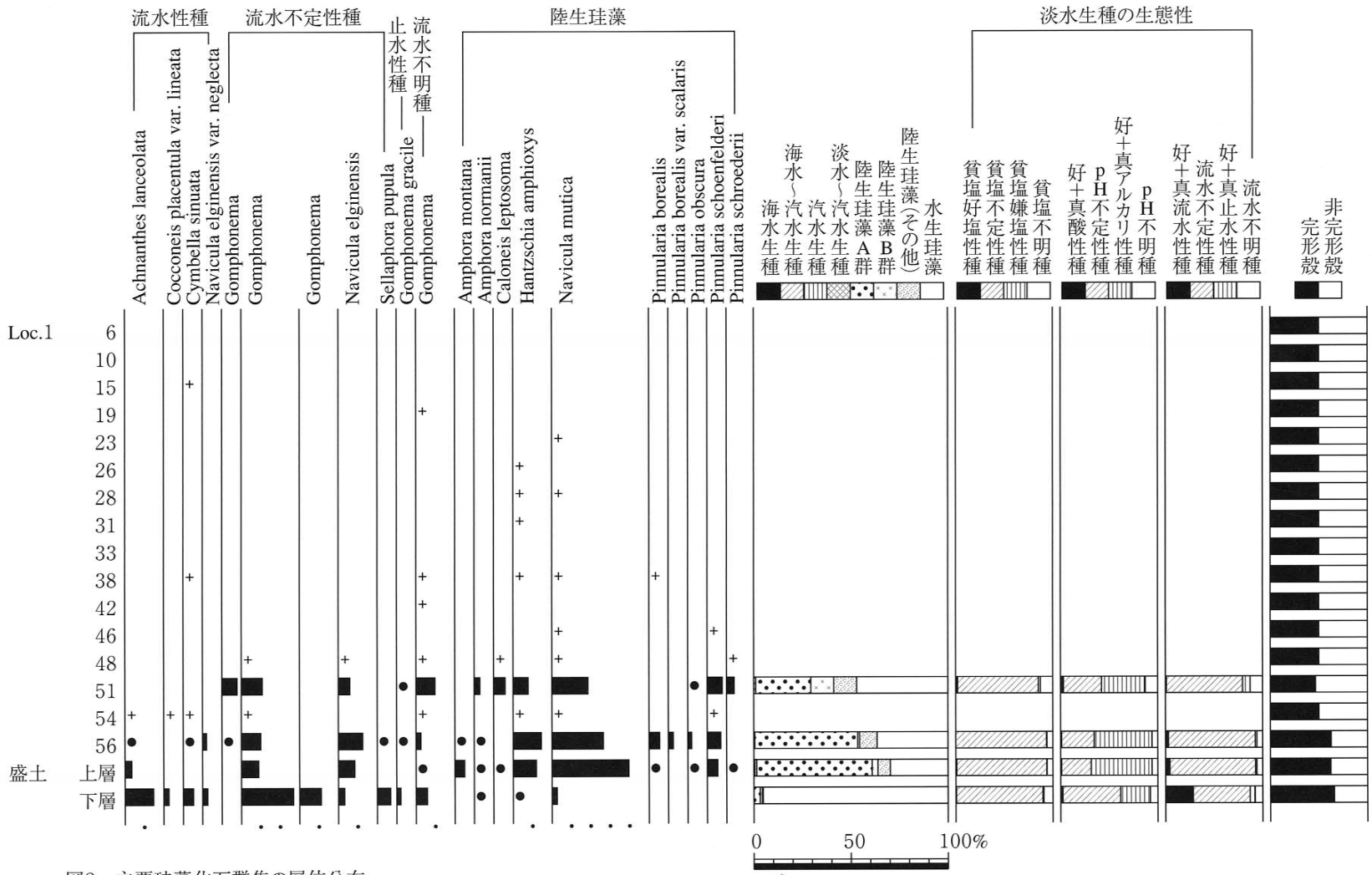


図2　主要珪藻化石群集の層位分布

海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

(4) 花粉分析

結果を表５・図３に示す。以下に地点毎の傾向を示す。

・Loc. 1

全体的に草本類に比べ、木本類が多産する傾向にある。木本花粉化石をみると、試料番号46・48とそれ以外とで組成に違いがみられる。試料番号46・48は、マツ属の割合が高いのが特徴で、スギ属、クリ属、トチノキ属などが若干検出される。それ以外の試料では、クリ属とトチノキ属の割合が高く、マツ属、ハンノキ属、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属などが検出される。一方、草本花粉は、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが検出されるものの、その割合は低い。

・盛土遺構

下層は、スギ属、ブナ属、コナラ属、クリ属、トチノキ属などが検出されるものの、際だって多い種類は認められない。一方草本花粉は、イネ科がやや多く検出されている。上層は、花粉化石の保存状態が悪く、検出数も少ないが、下層で多い種類を中心に検出されている。

(5) 植物珪酸体分析

結果を表６に示す。

各試料からは、植物珪酸体がわずかに検出されるに過ぎない。また保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

Loc. 1は、タケ亜科などが認められる。一方、盛土遺構では下層でタケ亜科などが認められる。盛土遺構上層では他の試料よりも検出個数が多く、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。

(6) 微細植物片分析

結果を表７に示す。検出された種実遺体の状態は、比較的良好である。被子植物24種類の種実が同定されたほか、木の芽、材、炭化材、不明炭化物（木材組織を持たない、部位・種類ともに不明の炭化物を示す）、蘚苔類、菌類の菌核（おそらく樹皮の表面に付着していた肉座菌などが考えられる）、昆虫遺骸の破片などが検出された。木本種実は、広葉樹19種類（オニグルミ、コナラ属、クリ、ブナ科、ヤマグワ、カジノキ属、マタタビ属、キイチゴ属、カラスザンショウ、キハダ、アカメガシワ、カエデ属、トチノキ、イイギリ、タラノキ、エゴノキ属、ムラサキシキブ属、ニワトコ、タニウツギ属）が同定された。草本種実は、単子葉植物１種類（カヤツリグサ科）、双子葉植物４種類（カラムシ属、ナデシコ科、キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属、イヌコウジュ属）が同定された。草本に比べ、木本種実が多く検出された。以下に、同定された種実遺体の形態的特徴を、木本、草本の順に記す。

＜木本＞

・オニグルミ（Juglans mandshurica Maxim. subsp. Sieboldiana（Maxim.）Kitamura）

クルミ科クルミ属

核の破片が検出された。灰褐色、完形ならば広卵形で先端部分がやや尖る。大きなもので10㎜程度。完形ならば、１本の明瞭な縦の縫合線がある。核表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走

表5　花粉分析結果

種　類	Loc. 1											盛土	
試料番号	6	10	15	26	28	31	38	46	48	51	56	上層	下層
木本花粉													
モミ属	−	3	3	2	1	−	−	−	5	1	−	1	−
ツガ属	1	1	−	2	−	−	1	−	3	−	−	−	1
トウヒ属	−	1	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−
マツ属	11	29	8	29	9	18	19	52	97	21	17	23	6
スギ属	5	12	3	8	4	5	6	22	16	13	18	5	29
イチイ科−イヌガヤ科−ヒノキ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
マオウ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	1	−
ヤナギ属	1	2	1	5	2	−	1	1	2	−	3	1	1
サワグルミ属	1	−	1	1	−	−	−	1	−	−	1	−	2
クルミ属	15	1	16	1	−	3	2	−	18	2	17	5	27
クマシデ属−アサダ属	3	3	4	−	−	−	−	−	5	−	2	−	14
ハシバミ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
カバノキ属	2	−	−	−	−	1	−	−	−	−	2	−	−
ハンノキ属	13	5	7	27	10	3	11	8	13	12	9	2	4
ブナ属	5	1	1	3	2	−	1	−	10	2	5	1	64
コナラ属コナラ亜属	33	6	13	15	9	4	6	6	23	8	15	5	35
コナラ属アカガシ亜属	6	2	3	5	−	5	6	3	1	2	6	3	4
クリ属	54	17	103	68	97	44	61	6	19	65	143	6	80
シイノキ属	−	−	2	1	2	1	−	−	−	2	2	−	2
ニレ属−ケヤキ属	27	15	20	6	4	10	4	8	16	7	10	6	18
エノキ属−ムクノキ属	4	−	2	1	−	−	−	−	1	−	1	−	14
キハダ属	3	−	1	1	1	1	−	−	−	−	−	−	−
アカメガシワ属	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ウルシ属	2	−	−	−	3	−	−	−	−	−	−	−	−
モチノキ属	1	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
カエデ属	−	−	1	2	1	−	−	−	−	−	1	−	3
トチノキ属	65	25	62	112	123	28	49	14	12	24	27	8	46
シナノキ属	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
ツタ属	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ウコギ科	14	1	3	3	1	−	1	−	1	−	3	1	1
ツツジ科	−	1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
トネリコ属	−	1	−	1	1	−	−	1	1	−	−	−	15
ガマズミ属	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
タニウツギ属	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
スイカズラ属	1	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−
草本花粉													
イネ科	15	6	6	4	4	4	3	6	14	2	28	1	94
カヤツリグサ科	8	7	5	13	3	7	7	−	12	1	8	1	17
クワ科	−	−	2	−	−	−	1	−	−	−	2	−	3
ギシギシ属	2	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
サナエタデ節−ウナギツカミ節	2	−	3	1	−	1	−	11	2	4	−	1	1
タデ属	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
アカザ科	2	−	−	1	−	3	2	4	−	−	5	−	−
カラマツソウ属	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1
キンポウゲ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
バラ科	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
マメ科	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1
ツリフネソウ属	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−
キカシグサ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
アカバナ属−ミズユキノシタ属	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
セリ科	2	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ゴキヅル属	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
ヨモギ属	2	4	3	2	2	3	2	10	5	3	2	−	2
オナモミ属	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−	−
キク亜科	2	2	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
タンポポ亜科	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
不明花粉	13	11	8	12	19	17	8	4	24	15	8	10	6
シダ類胞子													
シダ類胞子	117	169	125	182	62	123	68	88	205	31	24	25	19
合　計													
木本花粉	268	128	256	294	270	123	168	123	248	159	286	68	367
草本花粉	37	20	23	24	10	18	17	32	34	11	46	3	122
不明花粉	13	11	8	12	19	17	8	4	24	15	8	10	6
シダ類胞子	117	169	125	182	62	123	68	88	205	31	24	25	19
総計（不明を除く）	422	317	404	500	342	264	253	243	487	201	356	96	508

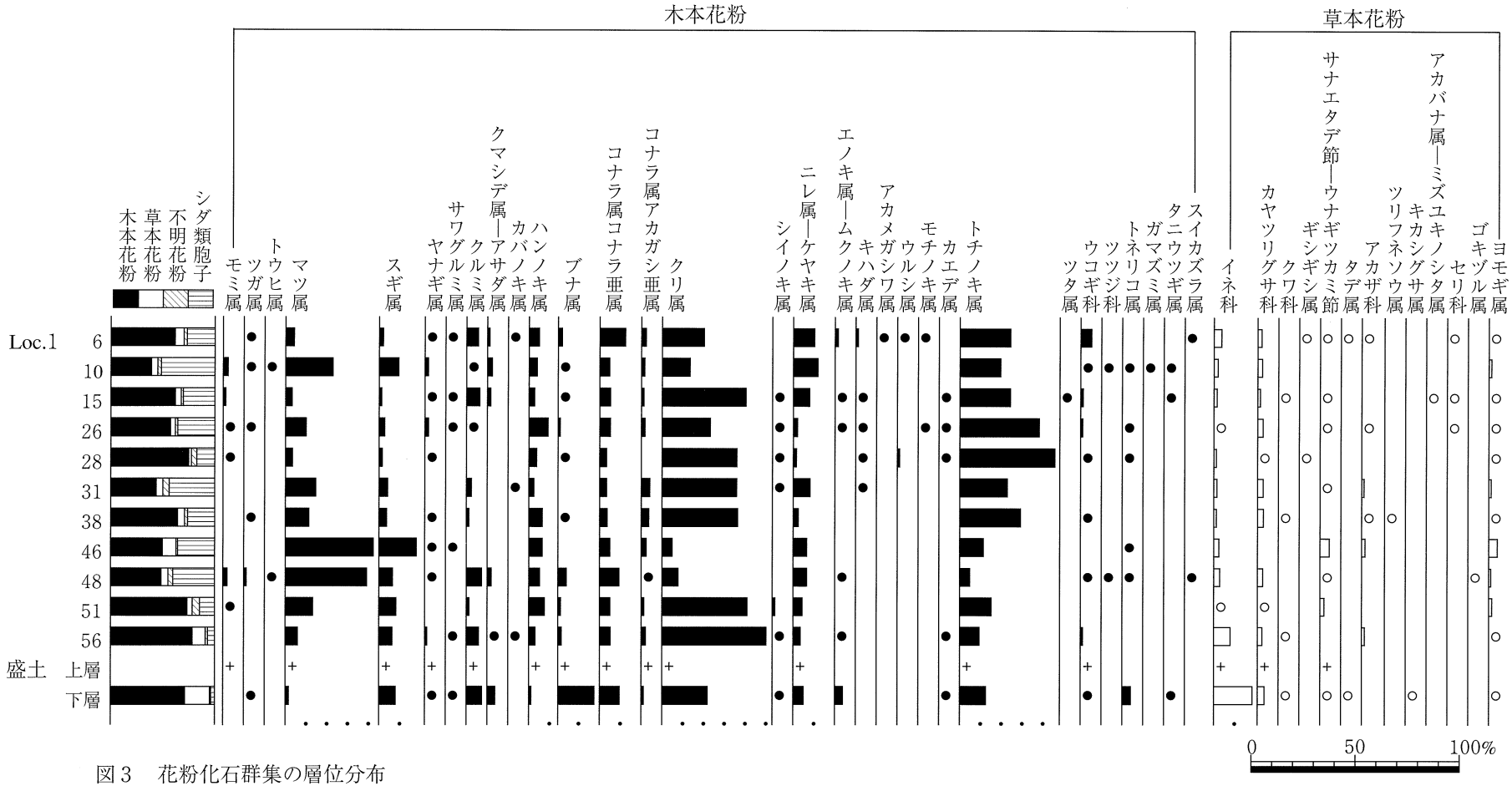


図３　花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満、＋は木本花粉１00個体未満の試料について検出した種類を示す。

り、ごつごつしている。内部には隔壁と子葉が入る２つの大きな窪みがある。

・コナラ属（Quercus）　ブナ科

果実破片（基部）が検出された。灰褐色、完形ならば卵形か。基部の着点の径は５㎜程度。果実頂部を欠損し、輪状紋の有無が認められないので、コナラ属と同定するにとどめた。基部の着点は円形、淡褐色で維管束の穴が輪状に並ぶ。果皮外面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

果実破片が検出された。黒褐色、完形ならば三角状広卵形。一側面は偏平で、反対面は丸みがある。果皮外面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。内面は、内果皮いわゆる渋皮の保存が良好である。着点は灰褐色で基部の全面を占め、ざらつく。

・ブナ科（Fagaceae）

果実破片が検出された。頂部や基部を欠損する。果実表面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。上述のコナラ属、クリの他に、マテバシイ属の可能性も考えられるため、ブナ科にとどめた。

・ヤマグワ（Morus australis Poiret）　クワ科クワ属

種子が検出された。黄褐色で三角状広倒卵形。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になって薄い。長さ２㎜、幅1.5㎜程度。一辺が鋭利で、基部に爪状の突起を持つ。表面には微細な網目模様がありざらつく。

・カジノキ属（Broussonetia）　クワ科

種子が検出された。黄～茶褐色、長方形状楕円形。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になって薄い。長さ2.5㎜、幅２㎜程度。基部に突起をもつ。表面には疣状の微細な隆起が散在する。

・マタタビ属（Actinidia）　マタタビ科

種子が検出された。黒褐色、楕円形で両凸レンズ形。長さ2.5㎜、幅1.5㎜程度。基部はやや突出し、切形。種皮は硬く、表面には円形・楕円形などの凹点が密布し網目模様をなす。

・キイチゴ属（Rubus）　バラ科

核（内果皮）が検出された。淡黄褐色、半円形～三日月形。長さ２㎜、幅１㎜程度。腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。

・カラスザンショウ（Fagara ailanthoides（Sieb. et Zucc.）Engler）　ミカン科イヌザンショウ属

核（内果皮）が検出された。黒褐色、偏円形で長さ3.5㎜、幅4.3㎜程度。片方の側面に核の長さの半分以上に達する深く広い臍がある。内果皮は厚く硬く、表面にやや深く大きな網目模様がある。

・キハダ（Phellodendron ammrense Ruprecht）　ミカン科キハダ属

核（内果皮）が検出された。黒色、半横広卵形でやや偏平。長さ4.5㎜、幅３㎜程度。種皮は厚く硬い。表面には浅く細かい網目模様があり、ざらつく。

・アカメガシワ（Mallotus japonicus（Thunb.）Mueller- Arg.）　トウダイグサ科アカメガシワ属

種子が検出された。黒色、偏平な球形。径４㎜程度。基部にはＹ字形の稜があり、稜に沿って

割れている個体もみられる。種皮は硬く、表面に瘤状突起を密布しゴツゴツしている。

・カエデ属（Acer）　カエデ科

果実が検出された。暗褐色、楕円形でやや偏平。翼を欠損する。長さ8.5㎜、幅９㎜、厚さ３mm 程度。背腹両面の正中線上に稜がある。果実表面には葉脈状の隆条模様がある。

・トチノキ（Aesculus turbinata Blume）　トチノキ科トチノキ属

幼果と種子の破片が検出された。果実は灰褐色、歪な倒卵球形。長さ10㎜、径８㎜程度。表面には基部と頂部を結ぶ３本の溝が走る。果皮は厚く、スポンジ状で弾力があり、表面には皮目状の斑点がある。種子は、完形ならばやや偏平な球形。破片は大きなもので10㎜程度。種皮は薄く硬く、表面にはほぼ赤道面を一周する特徴的なカーブを境に、掻傷様の微細な模様があり光沢がある黒色の上部と、光沢のない灰褐色の下部に別れる。

・イイギリ（Idesia polycarpa Maxim.）　イイギリ科イイギリ属

種子が検出された。褐灰色、広倒卵形。長さ２㎜、径1.5㎜程度。頂部に大きな円形の窪みがある。ここから基部の臍に向かって一本の溝がある。表面はスポンジ状の微細な網目模様があり、ざらつく。

・タラノキ（Aralia elata（Miq.）Seemann）　ウコギ科タラノキ属

核（内果皮）が検出された。茶褐色、半月形でやや偏平。長さ2.5㎜、幅1.5㎜程度。腹面はほぼ直線状で、片端に突起が見られる。背面には数本の浅い溝が走る。表面はざらつく。

・エゴノキ属（Styrax）　エゴノキ科

種子が検出された。黒褐色、卵形で長さ10㎜、幅７㎜程度。基部は切形で淡褐色の大きな臍点がある。表面には３本程度の縦溝が走る。種皮は厚く（１㎜程度）硬く、外面は微細な網目模様があり、内面はスポンジ状でざらつく。

・ムラサキシキブ属（Callicarpa）　クマツズラ科

核（内果皮）が検出された。淡～黄褐色、偏平で卵形。長さ２㎜、幅1.5㎜程度。背面は円みがあり、腹面中央はやや窪む。腹面方向に湾曲し、側面観は三日月形。中央部の内果皮が極めて薄く柔らかいため、破損してドーナツ状になっている。縁部分の内果皮は厚く、やや弾力がある。

・ニワトコ（Sambucus racemosa L. subsp. Sieboldiana（Miq.）Hara）　スイカズラ科ニワトコ属

核（内果皮）が検出された。淡～黄褐色、広倒卵形で偏平。基部はやや尖る。長さ2.5㎜、幅1.5㎜程度。背面は円みがあり、腹面の中央は縦方向の鈍稜をなす。腹面下端には小さな孔がある。内果皮はやや硬く、表面には横皺状模様が発達する。

・タニウツギ属（Weigela）　スイカズラ科

種子が検出された。赤褐色、長楕円形で両凸レンズ形。長さ１㎜、幅0.5㎜程度。稜角がある。表面は円形や楕円形の凹みによる網目模様が発達している。

＜草本＞

・カヤツリグサ科（Cyperaceae）

果実が検出された。淡褐色ないし茶褐色。倒卵形で三稜形。長さ1.5㎜、径１㎜程度。頂部の柱頭部分は伸び、鈎状にやや曲がる。果実表面には微細な網目模様があり、ざらつく。おそらくスゲ属（Carex）と思われる。

・カラムシ属（Boehmeria）　イラクサ科

果実が検出された。淡黄褐色、非対称な広倒卵形で偏平。径1.2㎜程度。先端部や基部は尖り、中央部は両凸レンズ形。果皮は薄く表面はざらつく。

・ナデシコ科（Caryophyllaceae）

種子が検出された。茶褐色、腎臓状円形でやや偏平。径１㎜程度。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、臍を取り囲むように瘤状突起が同心円状に配列する。

・キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属（Potentilla － Duchesnea － Fragaria）　バラ科

核（内果皮）が検出された。灰褐色、腎形でやや偏平。長さ0.9㎜、幅0.5㎜程度。内果皮は厚く硬く、表面は微細な網目模様がありざらつく。

・イヌコウジュ属（Mosla）　シソ科

果実が検出された。茶褐色、卵円形。径1.4㎜程度。基部は舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面には大きく不規則な網目模様がある。

(7) 粒度分析

粒度分析結果を表８、表９に示した。また、粒度分析加積曲線を図３に示した。全体的に淘汰が悪く、平均値からいえばシルト質な堆積物である。ただし、試料番号10は砂粒、試料番号26は細粒なシルトの画分でそれぞれ突出しており、他の試料と比較して若干淘汰が良い。

４．考察

(1) 堆積層の年代

Loc.１の試料採取地点における土層堆積時期は、縄文時代中期末～後期初頭、縄文時代晩期中葉、古墳時代に分けて考えられている。測定試料は、試料番号57、37、28、15が縄文時代中期～後期の堆積層、試料番号10が縄文時代晩期中葉の堆積層、試料番号６が古墳時代の堆積層と想定した箇所から採取されている。測定年代値（補正年代値）は、試料番号10以外はいずれも約3800年前～4000年前の値を示す。この値は、キーリ・武藤（1982）によれば、関東地方や東北地方における縄文時代後期前半に相当する。またこれらの結果は、これまでに測定を行った杭材や柱材、Ｙ字材などの年代値ともよく一致する。

一方、試料番号10の測定年代値（補正年代値）は約1200年前である。放射性炭素年代は、測定法自体が持つ誤差や、測定の前提条件である大気中の14Ｃの濃度が過去において一定ではなかったことなどから、年輪などから測定されたいわゆる暦年代とは一致しない。これらのことから、年輪年代による暦年代既知の年輪についての放射性炭素年代測定を実施することで、暦年代と放射性炭素年代を両軸とする補正曲線が作られている（Stuiver, M. et al, 1998）。この補正曲線によれば、今回測定された年代値では補正された暦年代が、約1100～1200年前の間で値がばらつ

表6　植物珪酸体分析結果

種　類　試料番号	Loc. 1											盛土	
	6	10	15	26	28	31	38	46	48	51	56	上層	下層
イネ科葉部短細胞珪酸体													
タケ亜科クマザサ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	15	−
タケ亜科	−	−	2	4	−	2	22	2	−	4	8	8	1
ヨシ属	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	1	−
ウシクサ族ススキ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	11	−
イチゴツナギ亜科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	6	−	2	−
不明キビ型	−	−	−	−	1	−	1	−	−	1	6	18	1
不明ヒゲシバ型	−	−	−	−	1	−	2	−	−	−	−	4	−
不明ダンチク型	−	−	−	−	−	−	3	−	−	1	−	1	−
イネ科葉身機動細胞珪酸体													
タケ亜科クマザサ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	38	−
タケ亜科	−	−	3	2	−	7	16	8	1	6	5	10	−
ヨシ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	8	−
ウシクサ族	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	4	−
不明	1	1	1	−	1	1	2	1	−	−	2	10	1
合　計													
イネ科葉部短細胞珪酸体	0	0	2	4	2	2	30	2	0	12	16	60	2
イネ科葉身機動細胞珪酸体	1	1	4	2	1	8	18	9	1	6	7	70	1
総　計	1	1	6	6	3	10	48	11	1	18	23	130	3

表8　粒度分析結果

粒径区分	礫	砂					泥	
試料名	2.00㎜<	極粗粒砂 2.00～1.00㎜	粗粒砂 1.00～0.50㎜	中粒砂 0.50～0.25㎜	細粒砂 0.25～0.125㎜	極細粒砂 0.125～0.063㎜	シルト 0.063～0.0039㎜	粘土 0.0039㎜>
Loc. 16	0.0	0.0	0.2	2.8	20.5	36.2	26.4	13.9
Loc. 110	0.0	0.0	0.7	11.2	39.7	29.2	12.9	6.2
Loc. 115	0.0	0.0	4.6	17.7	29.1	26.7	15.1	6.8
Loc. 126	0.0	0.0	0.0	0.3	4.8	15.6	56.9	22.4
Loc. 128	0.0	0.0	1.1	7.6	24.9	28.3	25.8	12.3
Loc. 131	0.0	0.2	0.8	3.5	20.2	35.1	27.1	13.0
Loc. 138	0.0	0.0	0.3	2.3	21.4	30.2	30.2	15.5
Loc. 142	0.0	0.0	0.1	0.3	7.2	30.2	45.0	17.1
Loc. 146	0.0	0.2	0.9	2.6	16.2	27.7	37.5	14.8
Loc. 148	0.0	0.1	0.2	0.2	15.0	38.9	33.5	12.1
Loc. 151	0.0	0.1	0.8	3.0	17.1	32.4	32.3	14.2
Loc. 156	0.2	0.9	3.5	9.4	24.1	26.8	22.5	12.5

注.）　単位は重量％で表示。

表9　粒度組成解析結果

試料名	Md（中央値）	Mz（平均値）	Mo（最頻値）	Sk（歪度）	σ（分級度）	Kg（尖度）
Loc. 16	5.03φ(0.031mm)	5.37φ(0.024mm)（シルト）	3.32φ(0.100mm)	0.29 正の歪み	2.30 非常に悪い	0.78 偏平
Loc. 110	3.46φ(0.091mm)	4.20φ(0.054mm)（シルト）	2.99φ(0.126mm)	0.57 著しい正	1.93 悪い	1.16 突出
Loc. 115	3.46φ(0.091mm)	4.21φ(0.054mm)（シルト）	2.99φ(0.126mm)	0.47 著しい正	2.25 非常に悪い	1.02 中間的
Loc. 126	7.48φ(0.006mm)	7.13φ(0.007mm)（シルト）	7.64φ(0.005mm)	−0.19 負の歪み	1.97 悪い	1.82 非常に突出
Loc. 128	4.59φ(0.041mm)	5.08φ(0.030mm)（シルト）	3.32φ(0.100mm)	0.33 著しい正	2.39 非常に悪い	0.74 偏平
Loc. 131	5.00φ(0.031mm)	5.33φ(0.025mm)（シルト）	7.64φ(0.005mm)	0.27 正の歪み	2.30 非常に悪い	0.77 偏平
Loc. 138	5.45φ(0.023mm)	5.54φ(0.022mm)（シルト）	7.64φ(0.005mm)	0.17 正の歪み	2.36 非常に悪い	0.78 偏平
Loc. 142	6.77φ(0.009mm)	6.33φ(0.012mm)（シルト）	7.64φ(0.005mm)	−0.15 負の歪み	2.08 非常に悪い	0.97 中間的
Loc. 146	6.15φ(0.014mm)	5.81φ(0.018mm)（シルト）	7.64φ(0.005mm)	−0.08 ほぼ対称	2.30 非常に悪い	0.81 偏平
Loc. 148	5.56φ(0.021mm)	5.64φ(0.020mm)（シルト）	7.64φ(0.005mm)	0.14 正の歪み	2.08 非常に悪い	0.76 偏平
Loc. 151	5.60φ(0.021mm)	5.60φ(0.021mm)（シルト）	7.64φ(0.005mm)	0.10 正の歪み	2.30 非常に悪い	0.79 偏平
Loc. 156	4.27φ(0.052mm)	4.89φ(0.034mm)（シルト）	3.32φ(0.100mm)	0.36 著しい正	2.56 非常に悪い	0.81 偏平

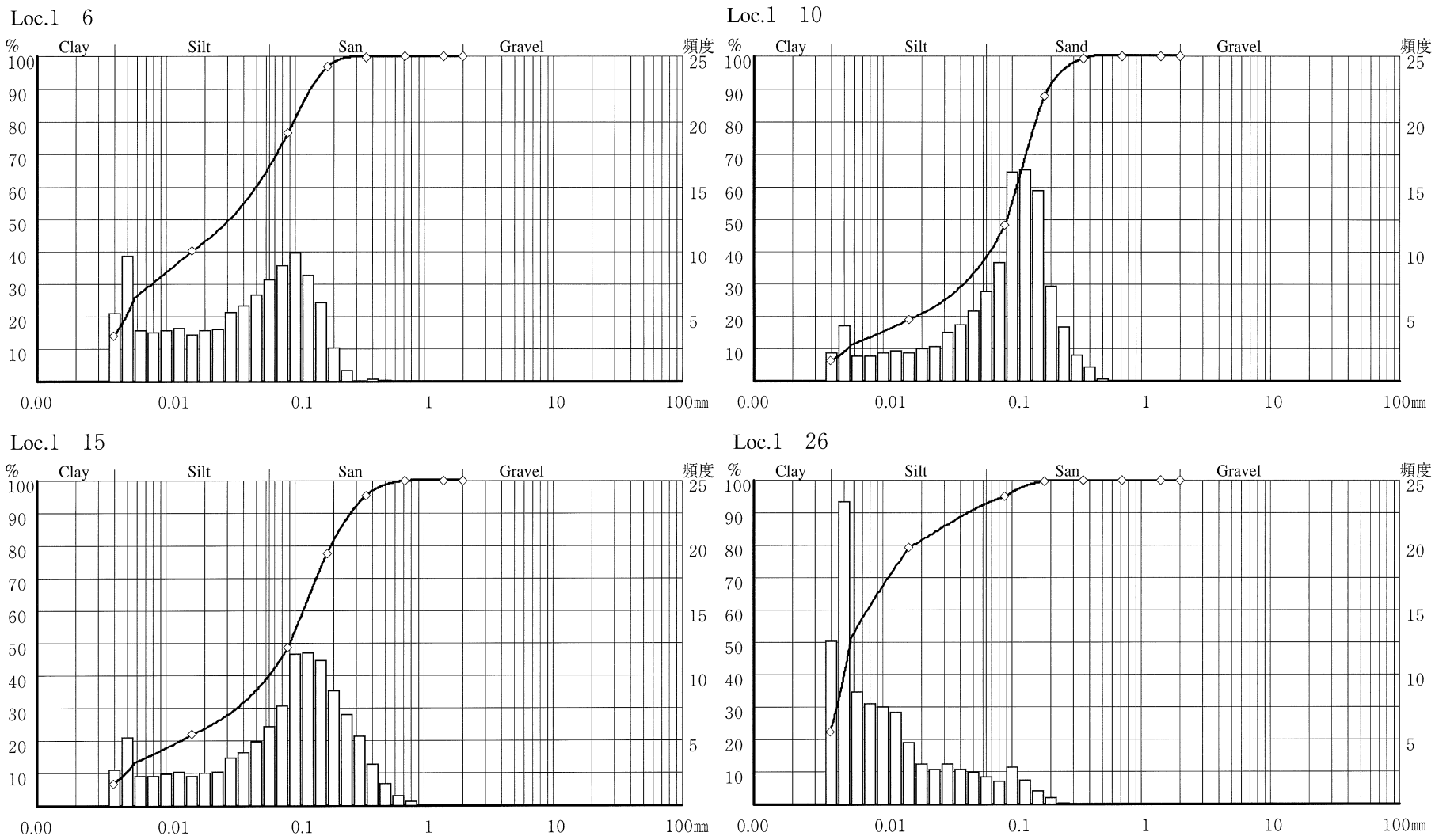


図4　粒度分析加積曲線(1)

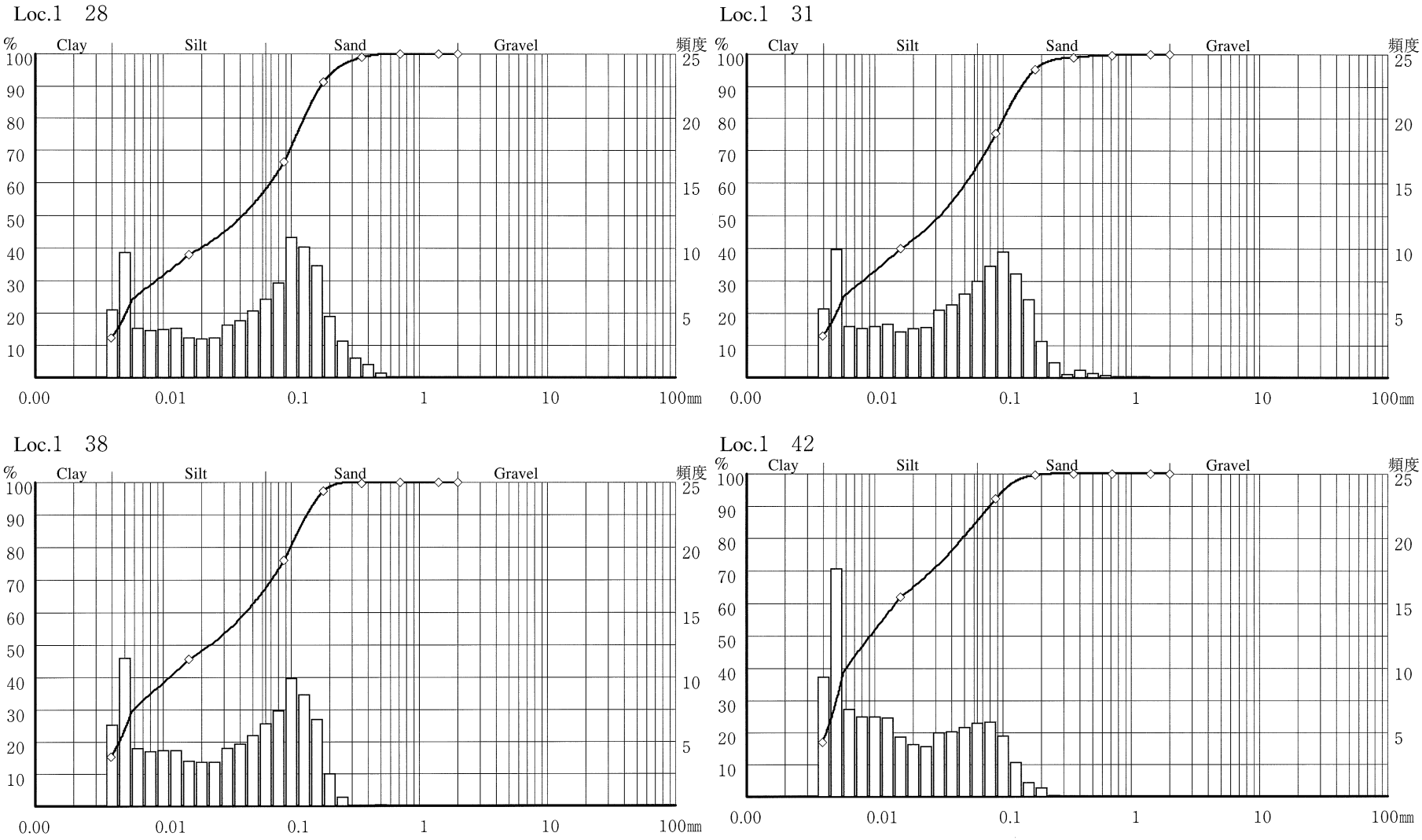


図4　粒度分析加積曲線(2)

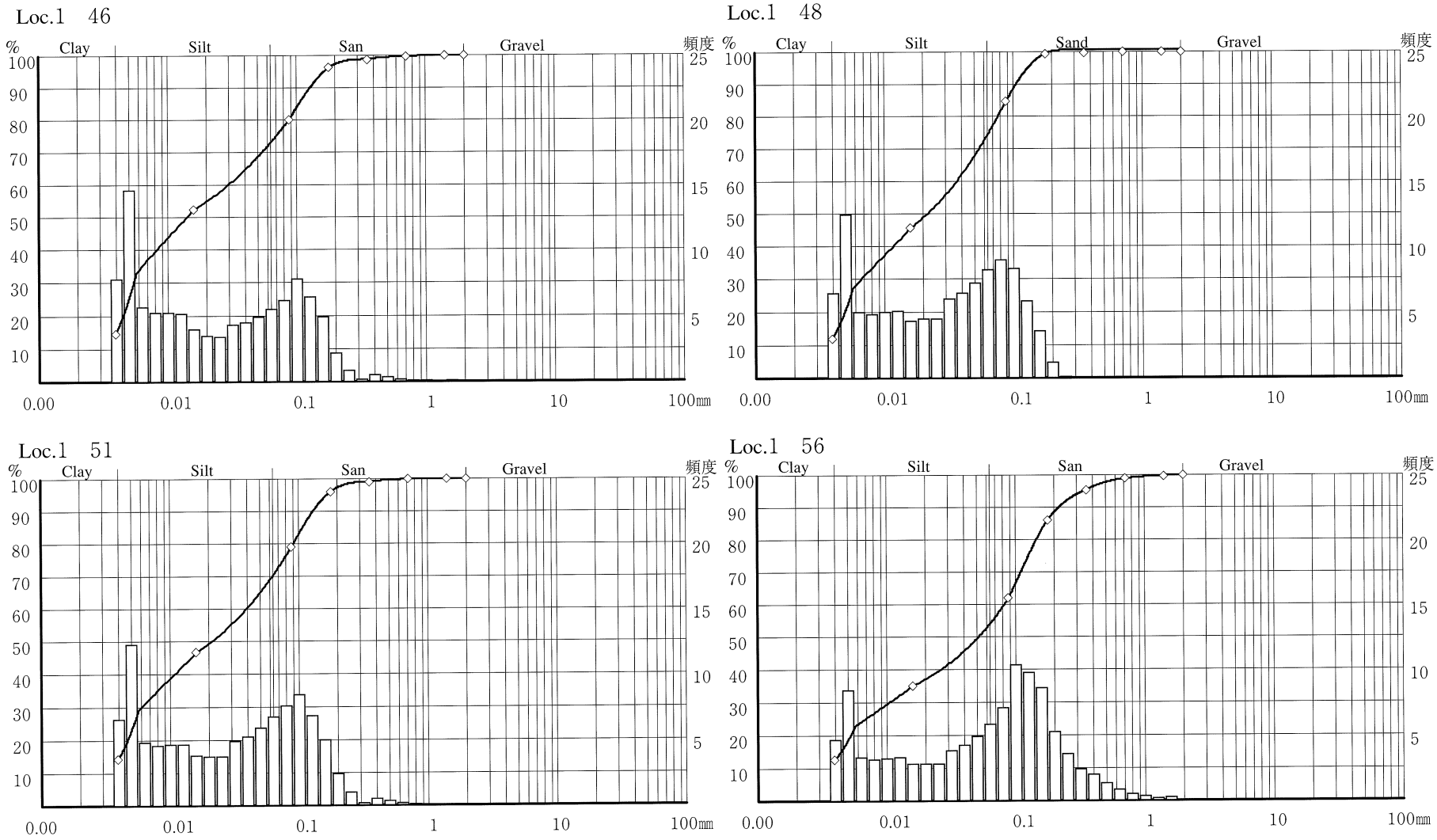


図4　粒度分析加積曲線(3)

く。よって、試料番号10の暦年代は、8世紀後半～9世紀中頃と考えられる。

以上のことから、縄文時代中期末～後期初頭頃、縄文時代晩期中葉頃と想定された堆積層ではいずれも縄文時代後期前半頃、古墳時代と想定された堆積層では奈良時代後半～平安時代頃の年代値が得られたことになる。ただし、堆積時に過去に形成された炭化物が混入した可能性があるため、今後は堆積状況の把握、出土遺物との供伴関係の検討、考古学的な所見などと総合して評価することが望まれる。

(2) 堆積環境

メインセクションでみられる堆積状況は、谷からの土石流や氾濫堆積、また子撫川からの氾濫堆積などによって複雑な堆積層になっている。珪藻化石をみると、ほとんどの試料で産出数が少ないが、51層（試料番号51）と56層（試料番号56）は陸生珪藻が多産し、流水不定性種のGomphonema parvulum 、流水不定性種・沼沢湿地付着成種の Navicula elginensis 等を伴う。若干の水生珪藻の産出を考慮すると、Loc. 1は氾濫堆積物がある程度の期間地表面として露出し、再び氾濫堆積物で覆われることを繰り返す、後背湿地のような体積環境であったと思われる。堆積物の層相からみて、珪藻化石が検出されない試料にいても、同様な堆積環境が推定される。おそらく氾濫の間隔が長く、長期にわたって植生が被覆するような状態の時に腐植層が作られたものと考えられる。

なお、Loc. 1の堆積層は、堆積層の時代や層相などにより大きく区分されている。これらの鉱物組成や粒径組成に違いが見られれば、堆積物の供給元が異なっていた可能性があり、堆積環境や地形発達を考える上で重要である。堆積物の由来は、堆積物中に珪藻化石や花粉化石では第三紀層に由来する消滅種や絶滅種を含むことから、後背山地に分布する第三紀層に由来すると思われる。鉱物の由来も同様と考えられるが、その組成は多少の変動があるものの、大きな変化はない。一方淘汰が悪く、無層理であることから、氾濫や泥流など急速に埋積が進んだ堆積物であると思われる。この他地形条件等も加味して考えると、堆積物の供給元は小谷内の解析作用によりもたらされたものと考えられる。なお、試料番号26は砂質、試料番号10は粘土質である点で、他の試料とは異なっている。他に比べて比較的淘汰も良いことから、堆積の中心軸が移動したなど堆積環境に変化が生じた可能性がある。

盛土遺構についてみると、上層は、Loc. 1と同様に陸生珪藻が多産し、若干の沼沢湿地付着成種を伴う。よって、Loc. 1を構成するような氾濫堆積物が盛土として利用されていた可能性がある。一方下層は、上層に比較して流水性種の産出率が高く、流水不定性種・止水性種・陸生珪藻・好汚濁性種等が若干産出している。よって、有機的にやや汚濁した水域で、流水の影響を受ける水域環境であったと考えられる。以上のことから、下層は水場遺構の機能していた時期の堆積物で構成されている可能性がある。

(3) 古植生と植物利用

植物珪酸体化石はほとんど産出しないため、花粉化石と微細植物片の産状を中心に古植生について検討する。縄文時代の堆積物は、これまで何回かにわたって分析調査を行っている。今回の

結果をみると、試料番号46、48を除き、これまでの結果と類似する。

これまでの結果を総合すると、桜町遺跡の縄文時代における花粉化石群集は、マツ属、スギ属、クルミ属、ハンノキ属、コナラ亜属、クリ属、ニレ属－ケヤキ属、トチノキ属が多く検出される。これらは、種実化石と種類が重なるものが多く、特に渓谷や林縁部に生育する種類が多いことから、花粉や種実は谷内の植生を反映しているものと考えられる。その種類構成は、カヤ、イヌガヤ、スギ、オニグルミ、クマシデ、ナラ類、クリ属、ニレ属－ケヤキ属、ムクノキ、ヤマグワ、カジノキ属、ホオノキ、アケビ属、マタタビ属、キイチゴ属、サンショウ、カラスザンショウ属、キハダ、アカメガシワ、ミツバウツギ、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、ノブドウ、ミズキ、クマノミズキ、タラノキ、ツバキ、クマヤナギ属、エゴノキ属、イボタノキ属、クサギ、ニワトコ、ガマズミ属などがあげられ、豊富な樹種構成であったことが推測される。また、ブナやナラ類など極相林を作る種類も検出されることから、これらはより深い場所に生育していたものと考えられる。

盛土遺構の結果はこれまで得られた成果に近いが、Loc. 1のうち、試料番号46、48を除く試料はクリ属とトチノキ属がやや多くなっている。これまでの成果の中でも、これらの種類が多い地点は存在したが、多くない地点もあり、今回の結果も含めてその産出率にばらつきがある。おそらく、これらは局地性を反映していると考えられ、クリやトチノキが生育していた場所からの距離によって、産出率のばらつきが生じているものと考えられる。クリやトチノキはいずれも収量が多く、貯蔵可能であることから、古くから植物質食料として利用されてきた種類である。トチノキは食用に適さない幼果も河道から多量に検出されることから、採取場所と加工場が近接していたことが示唆される。しかし、水場遺構からはトチノキの種実は多量に検出されるものの、クリは見つかっていない。クリはトチノキと違い、生食できるので長時間の水さらしが必要ないため（ただし、虫殺しのための水漬は必要）、水場遺構での加工は行っていなかった可能性もあるが、その理由は不明である。なお、クリは谷奥や尾根に近い谷斜面など、河川からやや離れた場所に発達していた可能性もある。また、クリは当時の用材としても多用していることから、木材に関してみても採取地と消費地が近かったものと思われる。

Loc. 1の試料番号46・48をみると、マツ属の割合が高くなっている。試料番号46・48は縄文時代とされるが、表層に近い点、組成が他の層位と異質な点などから、後代の攪乱を受けている可能性が考えられる。マツ属の多産は人為的な植生干渉による二次林の増加に起因するとされ、宝達丘陵地域の周辺遺跡においても、いくつかの事例が知られている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1994など）。本遺跡で、マツ属の割合が高い組成は、古墳時代以降の堆積物を対象にした板東地区で見られる。これまでの分析結果からは、古墳時代以降でマツ属が多産する事例が板東地区以外にみられなかったことから、板東地区では化石の保存が悪いため風化に強いマツ属の花粉が相対的に増加したと報告した。しかし、今回マツ属が多産する層位が検出されたことから、古墳時代以降にマツ属花粉が多い時期が存在した可能性があり、今後情報蓄積を行って総合的に判断していきたい。

検出された種実遺体群には、有用植物が認められる。木本では、オニグルミ、コナラ属、クリ、トチノキなどの堅果類が挙げられる。これらは、コナラ属の一部、トチノキはアク抜きが必要であるが、果実が食用・長期保存が可能で収量も多いため、古くから里山で保護、採取されてきた種類である。その他に、カジノキ属は果実が食用に、樹皮が紙や布に利用可能である。ヤマグワ、マタタビ属、ニワトコなどは、果実が多汁で生食が可能である。これらの自生する有用植物は、当該期の本遺跡で採取され利用された可能性がある。今後さらに資料の蓄積を行い、植物資源の利用状況などを検討していきたい。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，p. 73-88.

Asai, K. and Watanabe, T.（1995）Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom，10，p. 35-47.

原口和夫・三友　清・小林　弘（1998）埼玉の藻類　珪藻類.「埼玉県植物誌」，p. 527-600.，埼玉県教育委員会.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p. 23-45.

キーリ C. T.・武藤康弘（1982）縄文時代の年代，「縄文文化の研究1縄文人とその環境」，p. 246-275. 雄山閣.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p. 1-20.

Krammer, K.（1992）PINNULARIA，eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA，BAND 26，p. 1-353.，BERLIN・STUTTGART.

Krammer，K. and Lange-Bertalot，H.（1986）Bacillariophyceae，Teil 1，Naviculaceae. Band 2/1 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa，876p.，Gustav Fischer Verlag.

Krammer，K. and Lange-Bertalot，H.（1988）Bacillariophyceae，Teil 2，Epithemiaceae，Bacillariaceae，Surirellaceae. Band 2/2 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa，536p.，Gustav Fischer Verlag.

Krammer，K. and Lange-Bertalot，H.（1991a）Bacillariophyceae，Teil 3，Centrales，Fragilariaceae，Eunotiaceae. Band 2/3 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa，230p.，Gustav Fischer Verlag.

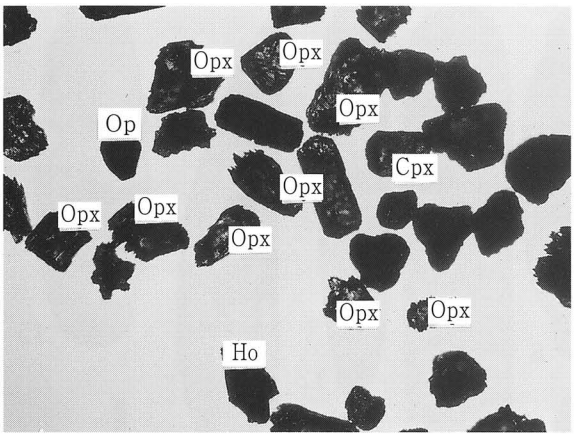
Krammer，K. and Lange-Bertalot，H.（1991b）Bacillariophyceae，Teil 4，Achnanthaceae，Kritsche Ergaenzungen zu Navicula（Lineolatae）und Gomphonema. Band 2/4 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa，248p.，Gustav Fischer Verlag.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1994）吉崎・次場遺跡の古環境について.「吉崎・次場遺跡　第13次発掘調査」，p. 135-164，石川県羽咋市教育委員会.

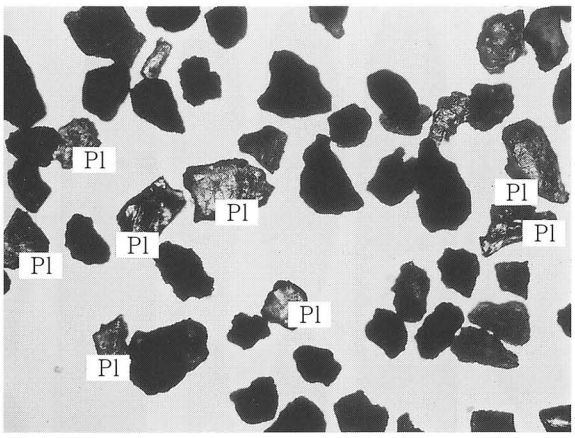
砕屑性堆積物研究会編（1983）「地学双書24　堆積物の研究法」．377p, 地学団体研究会．Stuiver, M. Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A.,Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M.（1998）:INTCAL 98 radiocarbon age calibration, 24,000-0 calBP. Radiocarbon, 40, p. 1041-1083.

Wentworth,C.K.（1922）A scale of grade and class terms for clasticsediments . J.Geol，30，p. 377-392.

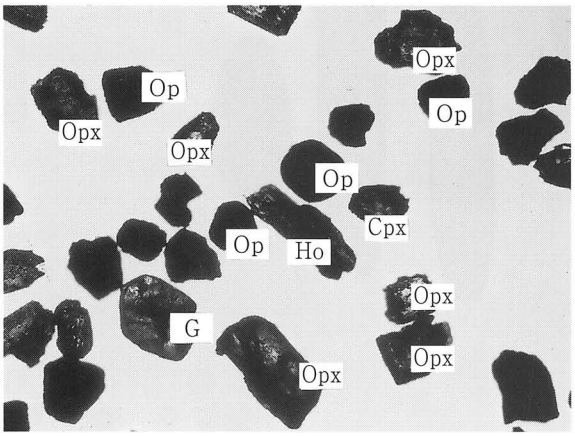
図版１　重軽鉱物



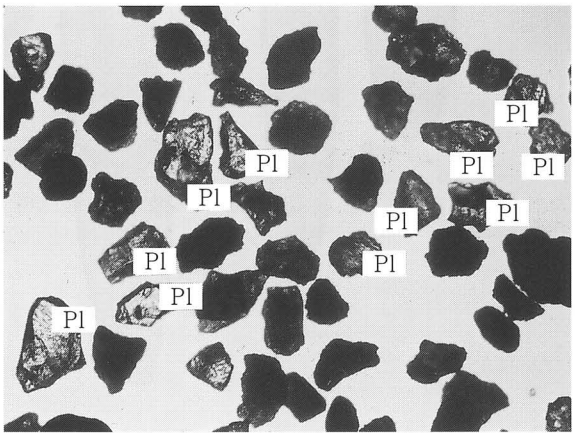
１．重鉱物（Loc.1;6）



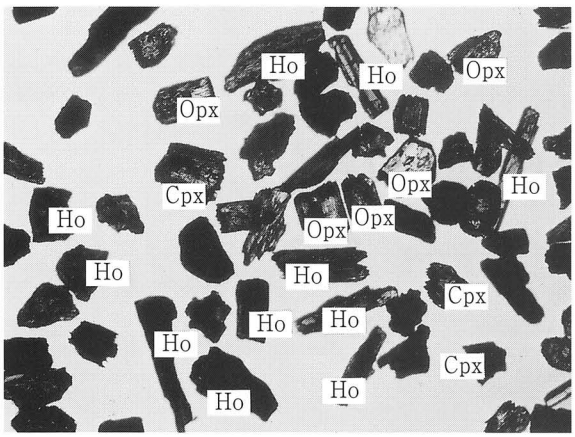
２．軽鉱物（Loc.1;6）



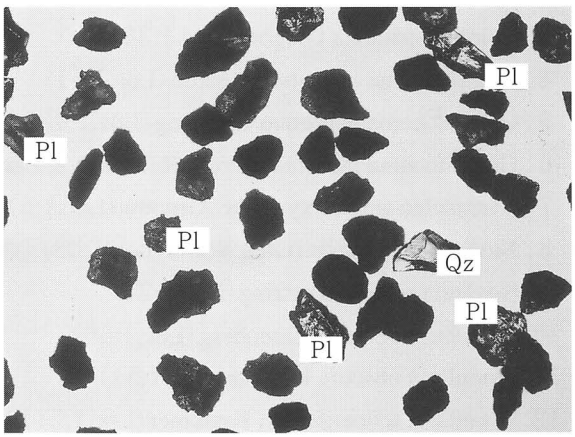
３．重鉱物（Loc.1;15）



４．軽鉱物（Loc.1;15）



５．重鉱物（Loc.1;48）

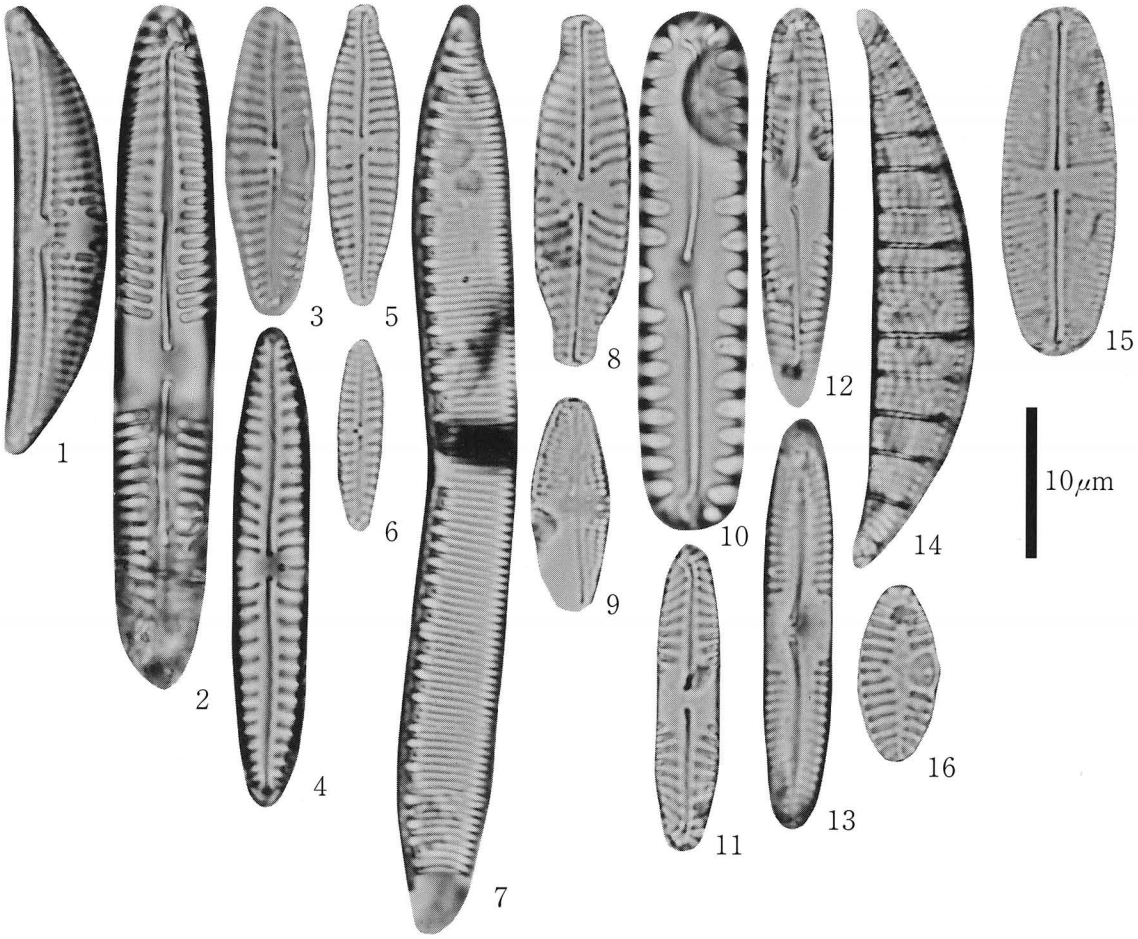


６．軽鉱物（Loc.1;48）

0.5㎜

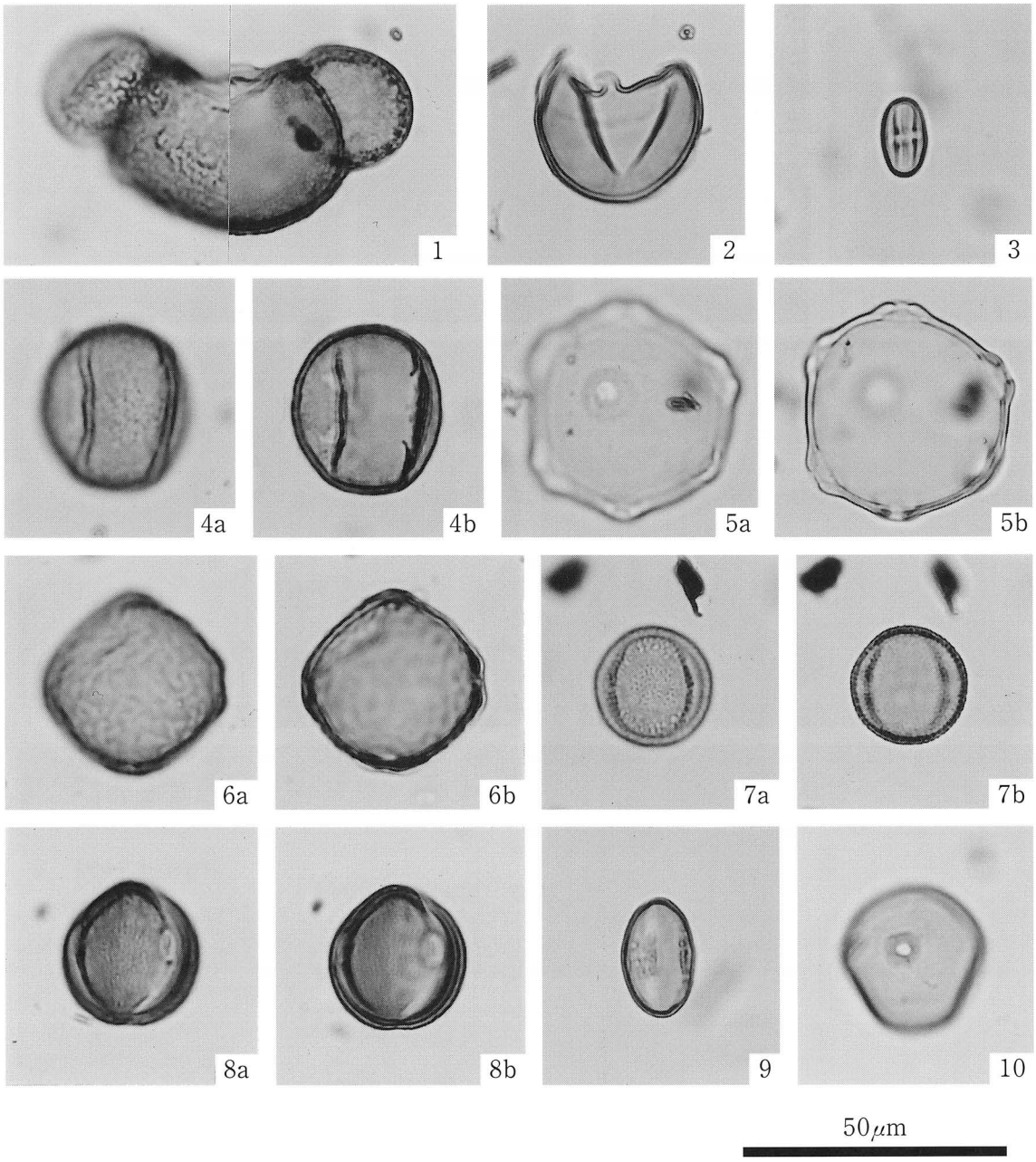
Opx:斜方輝石．Cpx:単斜輝石．Ho:角閃石．G:ザクロ石．Op:不透明鉱物．Qz:石英．Pl:斜石．

図版 2　珪藻化石



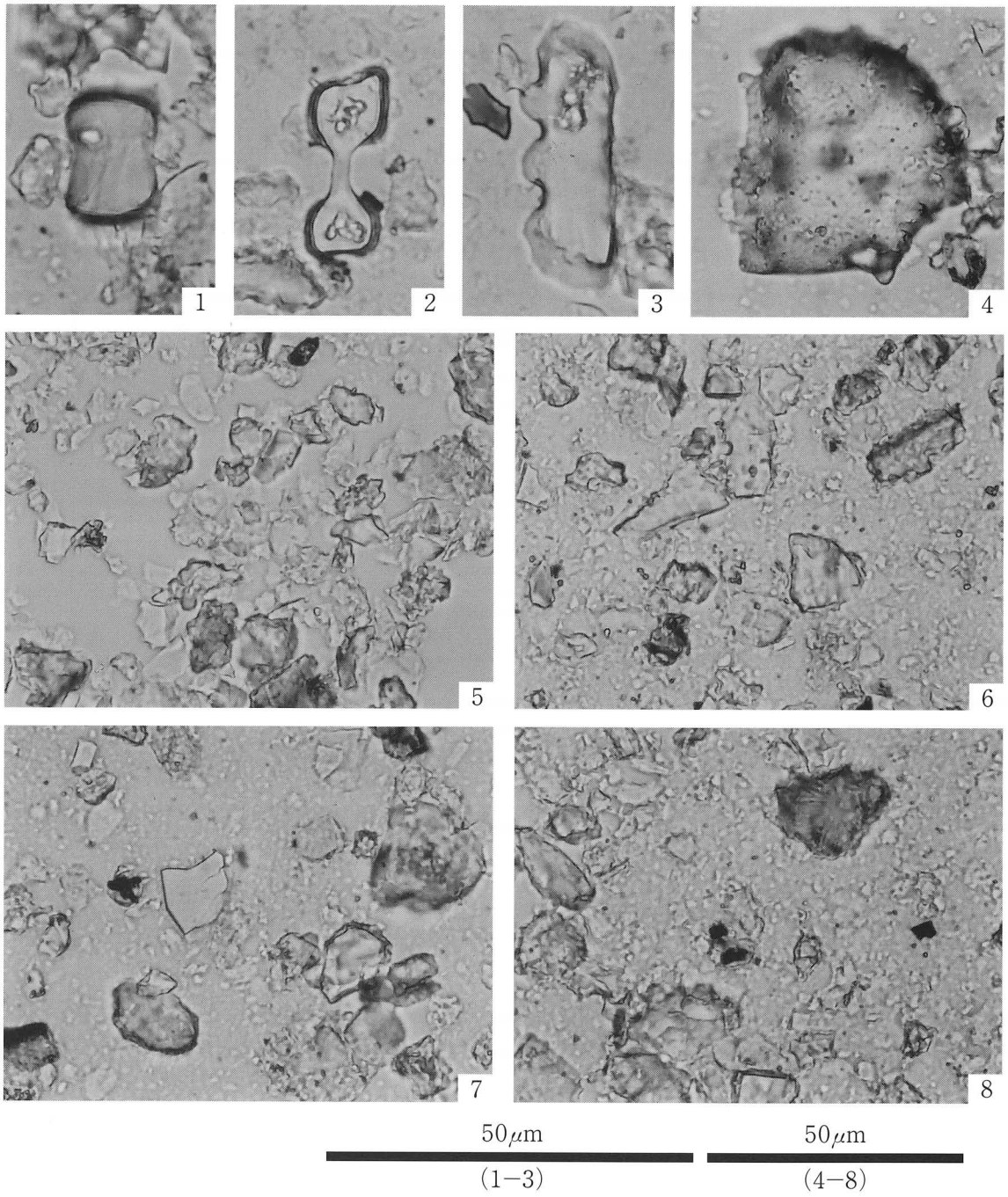
1 . Amphora affinis Kuetzing (Loc.1;46)
2 . Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot (Loc.1;51)
3 . Cymbella sinuata Gregory (Loc.1;38)
4 . Gomphonema angustum Agardh (Loc.1;51)
5 . Gomphonema parvulum Kuetzing (Loc.1;48)
6 . Gomphonema pumilum (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot (盛土;下層)
7 . Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow (Loc.1;51)
8 . Navicula elginensis (Greg.)Ralfs (Loc.1;48)
9 . Navicula mutica Kuetzing (Loc.1;28)
10. Pinnularia borealis Ehrenberg (Loc.1;56)
11. Pinnularia obscura Krasske (Loc.1;51)
12. Pinnularia schoenfelderi Krammer (Loc.1;51)
13. Pinnularia schroederii (Hust.)Krammer (Loc.1;48)
14. Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller (Loc.1;48)
15. Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky (盛土;下層)
16. Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow (盛土;下層)

図版 3　花粉化石



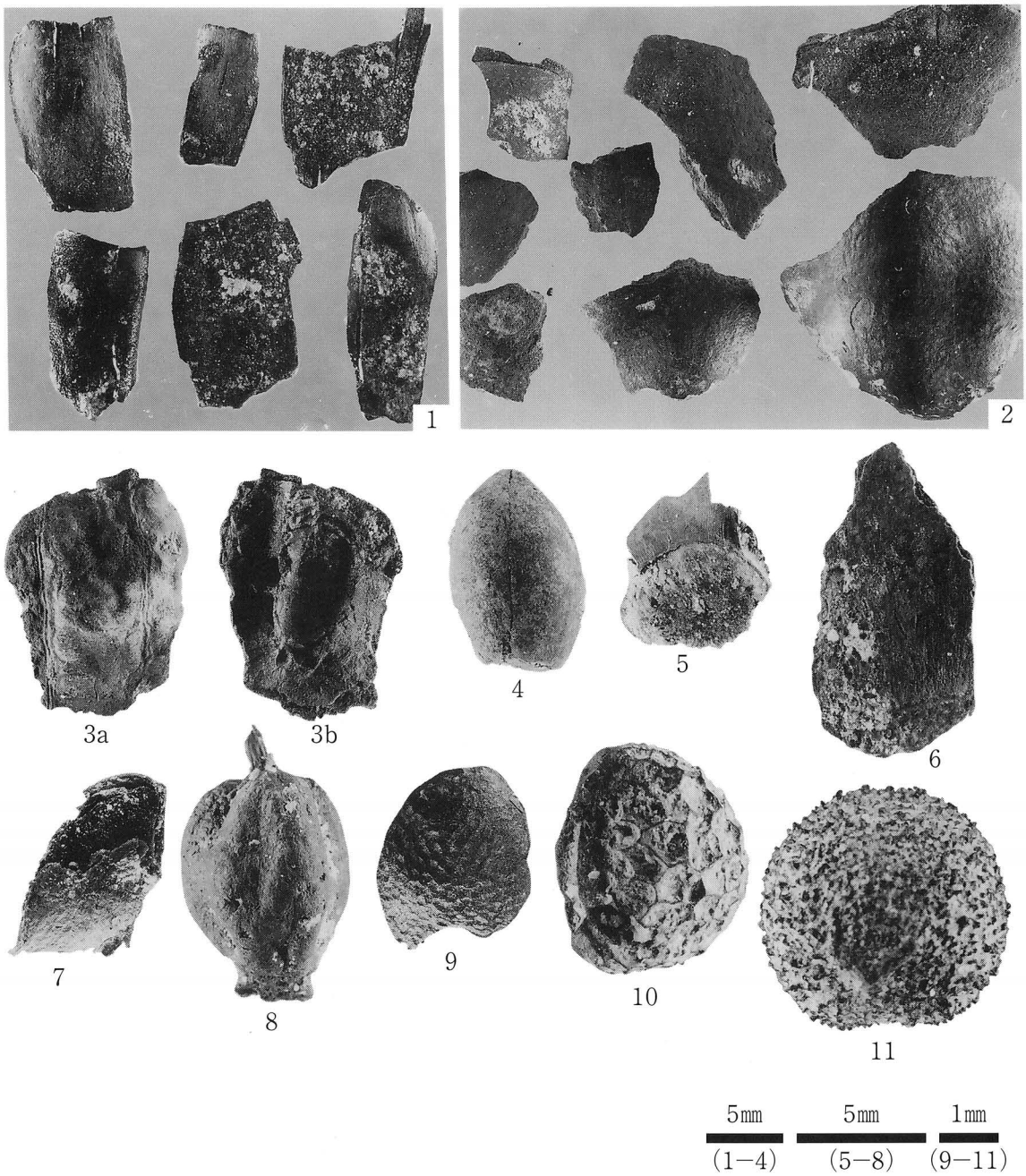
1.マツ属（盛土;下層）　　2.スギ属（盛土;下層）
3.クリ属（盛土;下層）　　4.コナラ属コナラ亜属（盛土;下層）
5.クルミ属（盛土;下層）　　6.ニレ属－ケヤキ属（盛土;下層）
7.トネリコ属（盛土;下層）　　8.カエデ属（盛土;下層）
9.トチノキ属（盛土;下層）　　10.イネ科（盛土;下層）

図版 4　植物珪酸体



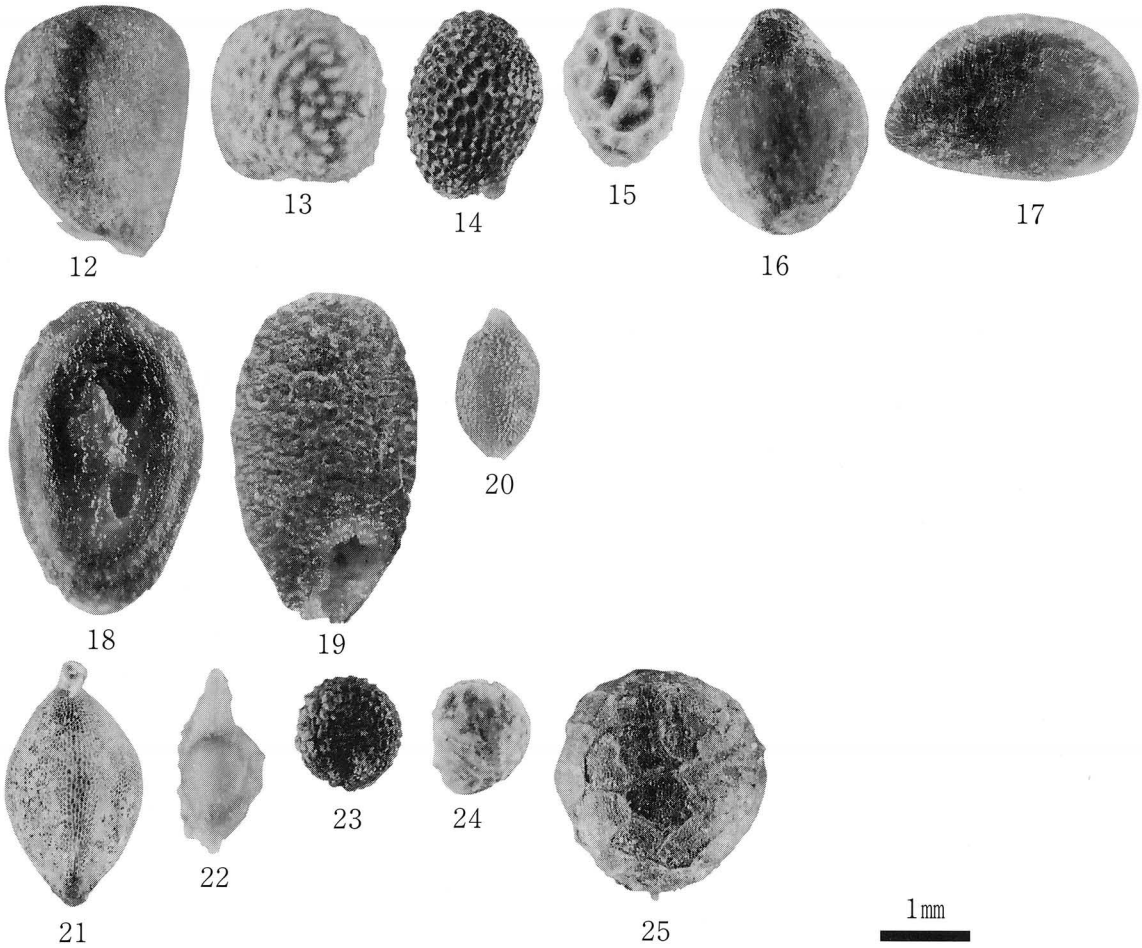
1.クマザサ属短細胞珪酸体（盛土;上層）
2.ススキ属短細胞珪酸体（盛土;上層）
3.イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（盛土;上層）
4.クマザサ属機動細胞珪酸体（盛土;上層）
5.状況（鉱物粒子が散在）(Loc. 1;10)
6.状況（鉱物粒子が散在）(Loc. 1;28)
7.状況（鉱物粒子が散在）(Loc. 1;38)
8.状況（鉱物粒子が散在）(Loc. 1;51)

図版 5　種実遺体(1)



1.ブナ科 果実 (Loc. 1;15)
2.トチノキ 種子 (Loc. 1;15)
3.オニグルミ 核 (Loc. 1;15)
4.エゴノキ属 種子 (Loc. 1;10)
5.コナラ属 果実 (Loc. 1;15)
6.クリ 果実 (Loc. 1;15)
7.カエデ属 果実 (Loc. 1;10)
8.トチノキ 幼果 (Loc. 1;10)
9.キハダ 核 (Loc. 1;10)
10.カラスザンショウ 核 (Loc. 1;15)
11.アカメガシワ 種子 (Loc. 1;10)

図版 6　種実遺体(2)



12.ヤマグワ 種子（Loc. 1;10）
13.カジノキ属 種子（Loc. 1;10）
14.マタタビ属 種子（Loc. 1;10）
15.キイチゴ属 核（Loc. 1;10）
16.イイギリ 種子（Loc. 1;10）
17.タラノキ 核（Loc. 1;10）
18.ムラサキシキブ属 核（盛土;下層）
19.ニワトコ 核（Loc. 1;10）
20.タニウツギ属 種子（Loc. 1;10）
21.カヤツリグサ科 果実（Loc. 1;10）
22.カラムシ属 果実（Loc. 1;10）
23.ナデシコ科 種子（盛土;上層）
24.キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属 核（盛土;上層）
25.イヌコウジュ属 果実（盛土;下層）

付載３　第１調査区・第６調査区・中出地区採取試料の放射性炭素年代測定結果

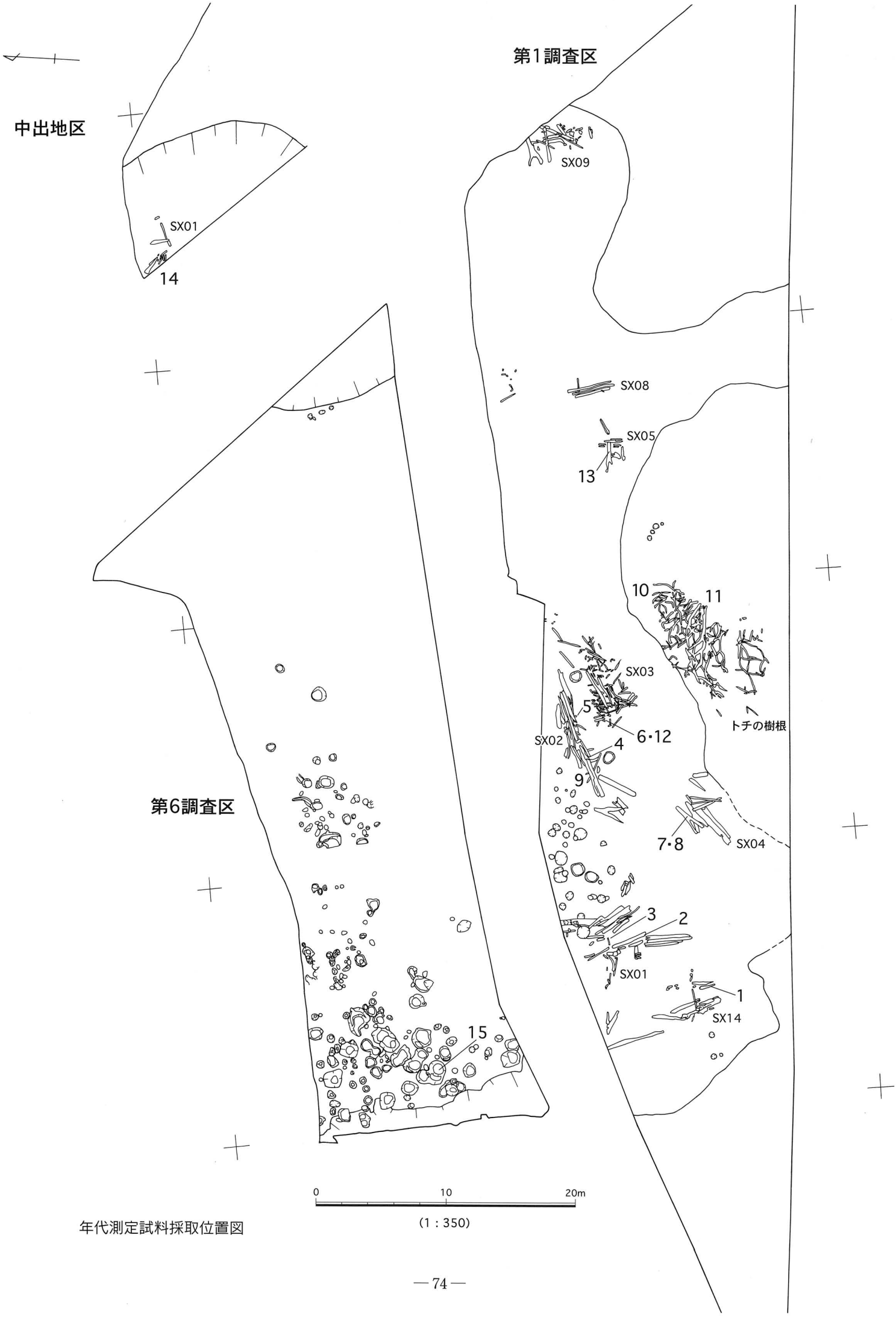
桜町遺跡第１調査区、第６調査区および中出地区では、縄文中期末～後期初頭の遺物とともに水場の木組みや貯蔵穴などの遺構群が検出された。これらの遺構からは、木材や種実などの有機質が得られたことから、その詳細な年代を知る手がかりを得るために放射性炭素年代測定を行った。また、遺跡の形成過程を知るために下層より採取した試料も併せて測定した。測定はすべてＡＭＳ法により行い、その結果を表に示した。

第１調査区・中出地区の水場木材採取試料（番号１～８・12～14）より得られた補正Ｃ14年代は3930±40BP～4160±50BP、第６調査区の貯蔵穴出土クルミより得られた補正Ｃ14年代は4080±50BPで、いずれもおよそ4,000年前を中心とする時期であった。

また、水場の基盤となっている土石流堆積物層採取の試料（番号16～21・23・24）より得られた補正Ｃ14年代は、7100±40BPから8000±40BPで、およそ7,000～8,000年前の時期にこの土石流が発生しているものと考えられる。さらにその下では、8125±30BPの年代を示す黒色土壌、10790±40BPの年代を示す年縞堆積が確認された。

表　桜町遺跡第１、第６調査区および中出地区採取試料の放射性炭素年代測定結果

番号	測定番号	調査区	試料の属性	試料の種類	炭素年代 δ13C(‰)	炭素年代 補正C14年代	暦年補正結果	
1	Beta-157568	第１	SX14（W－12）	水場施設材	－27.6	3950±40BP	cal BC2570～2520	cal BC2500～2330
2	Beta-157569	第１	SX01（W－52）	水場施設材	－28.6	4040±40BP	cal BC2830	cal BC2650～2470
3	Beta-157570	第１	SX01（W－40）	水場施設材	－27.7	3930±40BP	cal BC2550～2540	cal BC2490～2300
4	Beta-157571	第１	SX02（W－１）	水場施設材	－27.1	4050±50BP	cal BC2860～2810	cal BC2690～2470
5	Beta-157572	第１	SX02（W－23）	水場施設材	－27.6	4030±40BP	cal BC2630～2470	
6	Beta-157573	第１	SX03（W－194）	薄板	－20.9	4050±40BP	cal BC2850～2820	cal BC2670～2470
7	Beta-157574	第１	SX04（W－35）、年輪内側	Ｙ字材	－27.8	4110±40BP	cal BC2870～2570	cal BC2520～2500
8	Beta-157575	第１	SX04（W－35）、年輪外側	Ｙ字材	－28.4	3930±40BP	cal BC2550～2540	cal BC2490～2300
9	Beta-157576	第１	SX02のクルミ	種実	－27.1	4000±40BP	cal BC2590～2450	
10	Beta-157577	第１	コゴミと共伴したクルミ	種実	－27.2	5890±40BP	cal BC4820～4690	
11	Beta-157578	第１	トチの樹根	樹根	－27.3	4080±50BP	cal BC2870～2800	cal BC2770～2480
12	Beta-157581	第１	SX03のクリ材	木材	－27.1	4030±40BP	cal BC2630～2470	
13	Beta-157582	第１	SX05（W－10）	木材	－26.0	4060±40BP	cal BC2850～2820	cal BC2680～2480
14	Beta-157580	中出	SX01杭（№２－１）	水場施設材	－27.6	4160±50BP	cal BC2890～2580	
15	Beta-189413	第６	SK14（貯蔵穴）のクルミ	種実	－25.4	4080±50BP	cal BC2870～2800	cal BC2770～2480
16	Beta-157553	第１	水場基盤の土石流層	自然木(流木)	－28.7	7230±40BP	cal BC6200～6010	
17	Beta-157554	第１	水場基盤の土石流層	自然木(流木)	－28.8	7830±40BP	cal BC6710～6580	
18	Beta-157555	第１	水場基盤の土石流層	自然木(流木)	－29.5	7500±40BP	cal BC6430～6240	
19	Beta-157556	第１	水場基盤の土石流層	自然木(流木)	－27.3	7440±40BP	cal BC6400～6220	
20	Beta-157557	第１	水場基盤の土石流層	自然木(流木)	－29.4	8000±40BP	cal BC7060～6760	
21	Beta-157558	第１	水場基盤の土石流層	自然木(流木)	－26.1	7100±40BP	cal BC6020～5890	
22	Beta-157559	第１	土石流以前の黒色土	土壌	－26.5	8125±30BP	cal BC7170～7060	
23	Beta-157560	第１	土石流層中の黒色土	土壌	－28.1	7575±30BP	cal BC6455～6400	
24	Beta-157561	第１	土石流層中の黒色土	土壌	－27.2	7910±40BP	cal BC7030～6650	
25	Beta-157562	第１	年縞（湖沼堆積）	土壌	－25.8	10790±40BP	cal BC11030～10850	cal BC10790～10690



年代測定試料採取位置図

(1：350)

付載４　第２調査区出土「樹皮列を伴う木組み」の自然科学分析

⑴放射性炭素年代結果（表１）

目的：木組みを検出したSD 17は、西と南方向へ向かう谷筋の合流部付近に位置する。調査時と整理を進めていく段階で年代観に疑問点が生じたため、放射性炭素年代測定を行った。

試料：木組みを構成する各部材から採取した。

方法：ＡＭＳ（加速器質量分析）法

所見

いずれの年代値も、誤差幅を考慮すると採取した材はほぼ同時期のものである可能性が高い。各部材はほとんど樹皮が付いたまま使用されており今回の年代値に切り出されあまり時間を置かずに木組みがつくられたと考える。２枚の木組みの間に埋まっていた土から出土した土器と今回の補正Ｃ14年代等の測定結果を照らし合わせると、古墳時代初頭の時期が相当する。

⑵樹種同定結果（表２、表３）

目的：木組みについては、「堰」の内部構造、あるいは「屋根材」という二通りの可能性が考えられている。そこで各部材の樹種構成を比較し、SD 17における木組みの存在を考える。

試料：木組みを構成する各部材から採取した。「部材名称」は「屋根材」と仮定した場合のものである。

方法：切片採取→プレパラート作成→生物顕微鏡に観察後、同定。

所見

現地調査時は南北方向に流れるSD 17は視野にいれず、木組みは東西方向の大きな流路の比較的流れの緩やかな場所に位置していると考えていた。

木組みを構成する材は樹種が23種類にわたり各部材は樹皮付であること、また材と樹皮を結んだ痕跡も現地で明確に観察されなかったことから、このような木組みが倒壊したならばバラバラになると考えられる。

対して木組み本体と土もしくは土塁との組合せを想定し、検出場所が自然流路（SD 17）の中にあることから『堰』である可能性が高い。しかし『堰』とした場合、杭等の流れを留める材が１本も見つかっていないという問題がある。

表１　桜町遺跡第２調査区出土「樹皮列を伴う木組み」放射性炭素年代測定結果

番号	測定番号	調査区	試料の属性	試料の種類	炭素年代 δ13C(‰)補正C14年代		暦年補正結果	
3	Beta - 151943	第２	樹皮列を伴う木組み	木組み構成木材	−26.7	1640±40BP	cal AD340～530	
23	Beta - 151944	第２	樹皮列を伴う木組み	木組み構成木材	−26.4	1640±40BP	cal AD340～530	
35	Beta - 151945	第２	樹皮列を伴う木組み	木組み構成木材	−27.7	1620±40BP	cal AD370～540	
42	Beta - 151946	第２	樹皮列を伴う木組み	木組み構成木材	−27.5	1630±50BP	cal AD350～530	
78	Beta - 151947	第２	樹皮列を伴う木組み	木組み構成木材	−26.6	1610±40BP	cal AD380～540	
81	Beta - 151948	第２	樹皮列を伴う木組み	木組み構成木材	−18.0	1680±40BP	cal AD250～430	
93	Beta - 151949	第２	樹皮列を伴う木組み	木組み構成樹皮	−29.0	1650±40BP	cal AD330～460	cal AD480～520
94	Beta - 151950	第２	樹皮列を伴う木組み	木組み構成樹皮	−22.8	1710±40BP	cal AD240～420	
97	Beta - 151951	第２	樹皮列を伴う木組み	木組み構成樹皮	−26.8	1690±40BP	cal AD250～430	
100	Beta - 136082	第２	樹皮列を伴う木組み	木組み構成樹皮	−28.3	1720±50BP	cal AD225～425	
101	Beta - 136083	第２	樹皮列を伴う木組み	木組み構成樹皮	−27.3	1730±50BP	cal AD215～420	

桜町遺跡第２調査区出土「樹皮列を伴う木組み」樹種同定結果

表２　同定結果一覧表

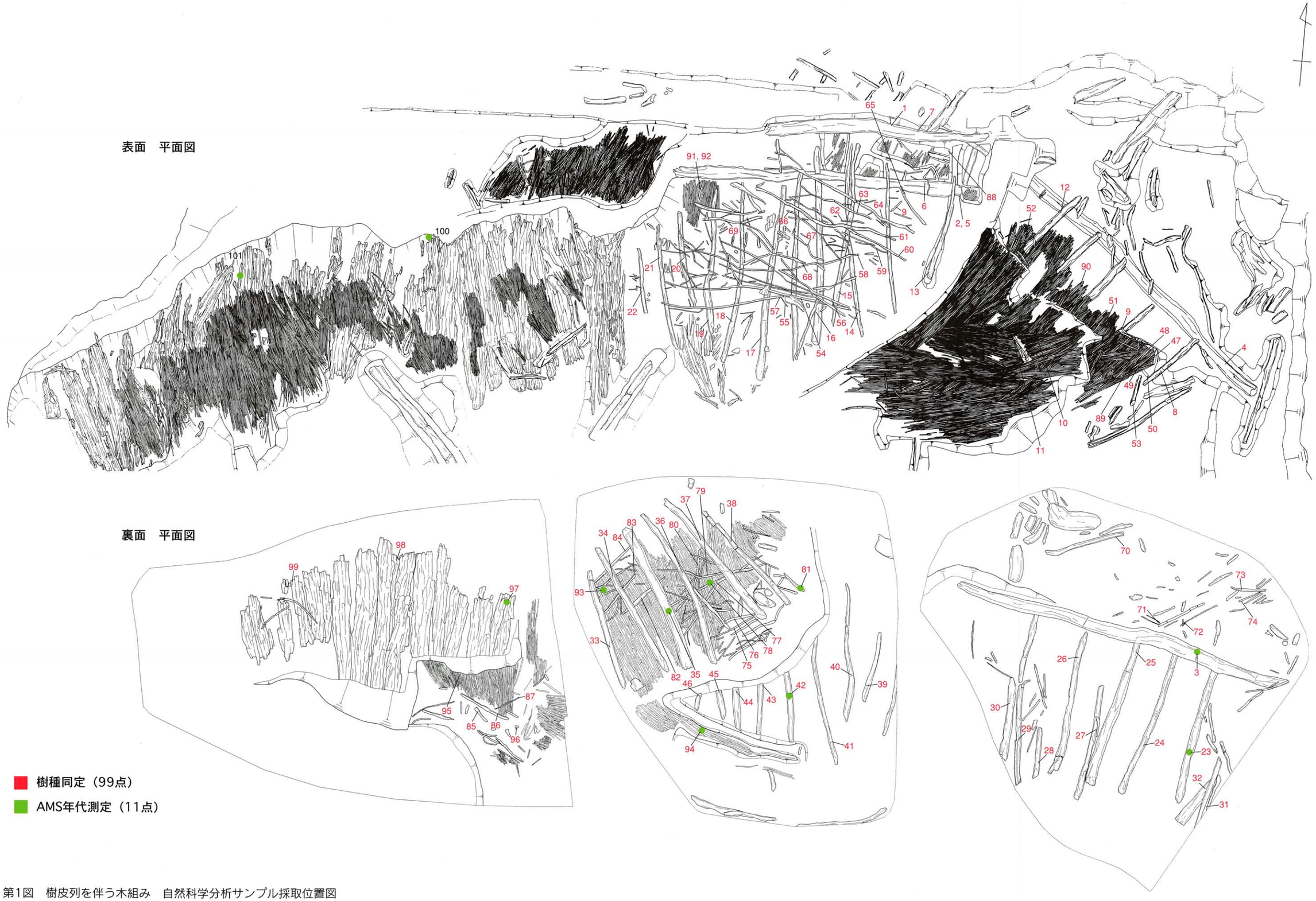
番号	部材名称	樹種名
1	ハナコマイ	トチノキ
2	桁材	ユズリハ属
3	桁材	キハダ
4	桁材	ヤナギ属
5	桁材	ユズリハ属
6	垂木	イヌシデ節
7	垂木	キハダ
8	垂木	キハダ
9	垂木	ガマズミ属
10	垂木	キハダ
11	垂木	キハダ
12	垂木	イヌシデ節
13	垂木	キハダ
14	垂木	アカメガシワ
15	垂木	クマノミズキ類
16	垂木	アカメガシワ
17	垂木	ミズキ
18	垂木	ミズキ
19	垂木	ウルシ属
20	垂木	キハダ
21	垂木	アカメガシワ
22	垂木	キハダ
23	垂木	キハダ
24	垂木	キハダ
25	垂木	ミズキ
26	垂木	キハダ
27	垂木	タラノキ
28	垂木	キハダ
29	垂木	キハダ
30	垂木	キハダ
31	垂木	キハダ
32	垂木	サクラ属
33	垂木	キハダ
34	垂木	タラノキ
35	垂木	タラノキ
36	垂木	タラノキ
37	垂木	タラノキ
38	垂木	キハダ
39	垂木	ウルシ属
40	垂木	ミズキ
41	垂木	アブラギリ？
42	垂木	クマノミズキ類
43	垂木	タラノキ
44	垂木	アカメガシワ
45	垂木	キハダ
46	垂木	ヌルデ
47	木舞	ガマズミ属
48	木舞	ガマズミ属
49	木舞	ガマズミ属
50	木舞	ガマズミ属
51	木舞	ガマズミ属
52	木舞	ガマズミ属
53	木舞	サクラ属
54	木舞	ガマズミ属
55	木舞	ガマズミ属
56	木舞	ガマズミ属
57	木舞	ガマズミ属
58	木舞	カエデ属
59	木舞	トチノキ
60	木舞	トチノキ
61	木舞	トチノキ
62	木舞	カエデ属
63	木舞	カエデ属
64	木舞	カエデ属
65	木舞	カエデ属
66	木舞	カエデ属
67	木舞	カエデ属
68	木舞	カエデ属
69	木舞	カエデ属
70	木舞	ムラサキシキブ属
71	木舞	ミツバウツギ
72	木舞	キハダ
73	木舞	スギ
74	木舞	トチノキ
75	木舞	ミツバウツギ
76	木舞	ガマズミ属
77	木舞	サクラ属
78	木舞	サクラ属
79	木舞	サクラ属
80	木舞	ガマズミ属
81	木舞	タラノキ
82	木舞	ミツバウツギ
83	木舞	ミツバウツギ
84	木舞	ミツバウツギ
85	木舞	ガマズミ属
86	木舞	ガマズミ属
87	木舞	ガマズミ属
88	葺き材	オニグルミ
89	葺き材	双子葉樹木：枝材
90	葺き材	モクレン属：枝材
91	葺き材	ススキ
92	葺き材	ススキ
93	葺き材	ススキ
94	葺き材	ススキ
95	葺き材	竹笹類
96	葺き材	トチノキ
97	葺き材	オニグルミ
98	葺き材	オニグルミ
99	葺き材	オニグルミ

表３　部材別樹種一覧表

部材名称／樹種	桁材	垂木	木舞	葺き材
キハダ	1	16	1	
ユズリハ属	2			
ヤナギ属	1			
タラノキ		6	1	
アカメガシワ		4		
ミズキ		4		
イヌシデ節		2		
ウルシ属		2		
クマノミズキ類		2		
ガマズミ属		1	15	
サクラ属		1	4	
ヌルデ		1		
カエデ属			9	
トチノキ			5	1
ミツバウツギ			5	
スギ			1	
ムラサキシキブ属			1	
オニグルミ樹皮				4
ススキ				4
モクレン属				1
双子葉樹木茎				1
竹笹類				1
アブラギリ？		1		

表面　平面図

裏面　平面図



■ 樹種同定（99点）

■ AMS年代測定（11点）

第1図　樹皮列を伴う木組み　自然科学分析サンプル採取位置図

0　0.5　1.0　1.5m

S=1/30

表4　第6調査区焼土一覧表

遺構番号	所在区	縦・横・厚 cm	遺構番号	所在区	縦・横・厚 cm
SI01F1−1	X53.7Y87	48・18・2	F7	X51.2Y86.9	40・30・不明
SI01F1−2	X53.7Y87	52・52・2	F8	X51.4Y86.8	45・30・不明
SI01F1−3	X53.7Y87	35・10・不明	F9	X51.2Y86,7	40・40・不明
SI01F1−4	X53.7Y87	30・28・2	SI03F10	X51.5Y86.9	45・40・20
SI01F1−5	X53.7Y87	44・22・1	SI03F11	X51.5Y86.9	50・45・40
SI02F2	X51.7Y87	80・80・不明	F12	X51.5Y86.9	60・32・不明
F3	X51.7Y87.1	100・30・2.5	F13・14	X51.5Y86.9	40・20・不明
F4	X51.6Y87.1	60・20・1.5	F15	X51.2Y86.7	50・30・不明
F5	X51.4Y87.2	50・25・10	F16	X51.2Y86.8	50・30・不明
F6	X51.4Y86.9	40・30・不明	SI04F17	X51.4Y86.8	100・80・不明

表5　第6調査区木柱が入った土坑一覧表

遺構番号	所在区	穴の大きさ	木柱の大きさ	木柱の樹種・特徴
木柱1	X52.9Y87.2	径90cm深さ40cm	径70cm長さ60cm 底高28.2m	TOM1539・二重の中空
木柱2	X52.6Y87.2	径70cm深さ16cm	径40cm長さ22cm 底高28.9m	断面三日月形
SK 08木柱	X52.8Y87	径110cm深さ20cm	径80cm長さ15cm 底高27.6cm	TOM1539・井戸側状の中空
木柱3	X51.6Y86.7	径80cm深さ80cm	径45cm長さ80cm 底高28.8m	芯持ち
P99	X51.6Y86.7	径約50cm深さ35cm	径18cm長さ約25cm	
SK 18木柱	X51.5Y86.9	径70cm深さ60cm	径50cm長さ46cm 底径28.5m	芯持ち
P100	X51.5Y86.9	径50cm深さ不明	長辺約25cm短辺約 15cm長さ不明	

表6－1　第6調査区土坑一覧表(1)

番号	所在区	形　状	穴の大きさ	出土遺物	時　期
SK 01	第1調査区中世				
SK 02	X51.5Y86.8	方　形	長辺80cm短辺70cm深さ50cm	木・石・縄文土器	
SK 03	X51.8Y86.6	楕円形	長辺100cm短辺90cm深さ50cm	木・石・打製石斧・ 縄文土器	

表６－２　第６調査区土坑一覧表(2)

番号	所在区	形　状	穴の大きさ	出土遺物	時　期
SK 04	X51.3Y87.1	方　形	長辺140cm短辺140cm深さ55cm	木・石・縄文土器	
SK 05	X52.2Y87	楕円形	長辺180cm短辺170cm深さ53cm	石・縄文土器	前田式
SK 06	X51.5Y87.2	楕円形	長辺90cm短辺50cm深さ19cm	石・縄文土器	
SK 07	X52.2Y87.1	長方形	長辺57cm短辺34cm深さ40cm		
SK 08	木柱の入った穴				
SK 09	X51.4Y87	方　形	長辺130cm短辺130cm深さ74cm	木・縄文土器	
SK 10	X51.6Y87.2	円　形	長辺46cm短辺46cm深さ17cm		
SK 11	X51.2Y86.6	楕円形	長辺105cm短辺95cm深さ50cm		
SK 12	X51.8Y87.2	長方形	長辺88cm短辺54cm深さ29cm		
SK 13	X51.3Y86.7	楕円形	長辺130cm短辺75cm深さ42cm	樹皮	
SK 14新	X51.3Y86.7	方　形	長辺164cm短辺64cm深さ40cm	縄文土器	
SK 14古	X51.3Y86.7	方　形	長辺110cm短辺64cm深さ62cm	クルミ	中　期
SK 15	X51.2Y86.7	円　形	長辺110cm短辺85cm深さ65cm	石	
SK 16	欠番				
SK 17	X51.4Y51. 1	楕円形	長辺90cm短辺65cm深さ35cm		
SK 18	木柱の入った穴				
SK 19・20・21	古代				
SK 22	X52.3Y87.1	楕円形	長辺95cm短辺65cm深さ51cm		
SK 23	X51.1Y87.1	方　形	長辺120cm短辺105cm深さ46cm	石・縄文土器	
SK 24	X51.4Y86.8	方　形	長辺155cm短辺145cm深さ43cm	木・石・縄文土器 クルミ 覆土上面に焼土Ｆ７	中　期
SK 25	X51.2Y86.9	方　形	長辺130cm短辺125cm深さ70cm	木・石・縄文土器	
SK 26西	X51.3Y86.8	方　形	長辺130cm短辺110cm深さ51cm	漆塗木鉢・石・縄文土器	
SK 26東	X51.3Y86.8	方　形	長辺95cm短辺90cm深さ40cm	骨片	
SK 27	X51.3Y86.5	楕円形	長辺75cm短辺50cm深さ40cm		
SK 28	X51.5Y87	楕円形	長辺170cm短辺155cm深さ40cm		
SK 29	X51.5Y87.2	方　形	長辺110cm短辺100cm深さ40cm	木・縄文土器覆土上面に焼土Ｆ５	
SK 30	X51.3Y86.4	方　形	長辺130cm短辺110cm深さ51cm	縄文土器	
SK 31	X51.3Y86.4	方　形	長辺150cm短辺130cm深さ84cm	縄文土器	
SK 32	X51.2Y86.8	円　形	長辺130cm短辺110cm深さ44cm	漆塗土器	

表６－３　第６調査区土坑一覧表(3)

番号	所在区	形　状	穴の大きさ	出土遺物	時　期
SK 33	X51.3Y87	楕円形	長辺80cm短辺85cm深さ46cm	木・石・縄文土器	
SK 34	X51.4Y87	円　形	長辺95cm短辺85cm深さ15cm	縄文土器	
SK 35西	X51.4Y86.9	方　形	長辺125cm短辺130cm深さ51cm	石・縄文土器	
SK 35東	X51.4Y86.9	方　形	長辺140cm短辺130cm深さ44cm	木・石・砥石・縄文土器	
SK 36	X51.3Y87	方　形	長辺110cm短辺90cm深さ48cm	石・縄文土器覆土上面に焼土Ｆ10	
SK 37	X51.3Y86.9	円　形	長辺70cm短辺55cm深さ40cm		
SK 38・39	欠番				
SK 40	X51.4Y86.9	円　形	長辺80cm短辺70cm深さ不明		
SK 41	X51.3Y86.9	長方形	長辺180cm短辺110cm深さ52cm		
SK 42	X51.3Y86.8	円　形	長辺105cm短辺100cm深さ40cm		

表６－４　第６調査区土坑一覧表(4)

番号	所在区	径・深さcm	備　考	番号	所在地	径・深さcm	備　考
Ｐ１	X51.4Y86.8	25・不明	串田新Ⅱ	Ｐ19	X51.8Y87	50・38	
Ｐ２	X51.5Y86.8	25・不明	〃	Ｐ20	X51.6Y87.2	50・不明	
Ｐ３	X51.6Y86.9	30・不明		Ｐ21	X51.5Y87.2	50・不明	
Ｐ４	X51.7Y86.7	45・不明	串田新Ⅱ	Ｐ22	X51.6Y87.1	30・13	
Ｐ５	X51.8Y87.1	20・25	〃	Ｐ23	X51.6Y87.1	60・23	
Ｐ６	X51.8Y87.1	30・不明	〃	Ｐ24	X51.6Y87	30・31	
Ｐ７	X51.8Y87.1	25・不明	〃	Ｐ25	X51.6Y87	35・33	
Ｐ８	X51.8Y87.2	30・17	〃	Ｐ26	X51.8Y87	45・24	
Ｐ９	X51.7Y87.1	45・17	〃	Ｐ27	X51.7Y87.1		串田新Ⅱ
Ｐ10	X51.7Y87.1	70・19	〃	Ｐ28	X51.8Y87.2	30・28	
Ｐ11	X51.7Y87.1	50・21	〃	Ｐ29	X51.7Y87.2	50・24	
Ｐ12	X51.7Y87.1	30・17	〃	Ｐ30	X51.8Y87.1	40・24	
Ｐ13	X51.8Y87	25・23		Ｐ31	X51.8Y87.1	40・22	
Ｐ14	X51.8Y86.9	40・23	串田新Ⅱ	Ｐ32	X51.6Y87.2	50・不明	
Ｐ15	X51.8Y86.9	50・26	〃	Ｐ33	X51.7Y87	50・不明	
Ｐ16	X51.8Y87	30・20	〃	Ｐ34	X51.7Y87	30・15	
Ｐ17	X51.7Y87	20・22	〃	Ｐ35	X52.3Y87	70・54	串田新Ⅱ
Ｐ18	X51.7Y87.1	30・不明		Ｐ36	X52.3Y86.9	35×60・49	柱根

表６－５　第６調査区土坑一覧表（５）

番号	所在区	径・深さcm	備　考	番号	所在地	径・深さcm	備　考
P37	X52.4Y87.1	70・52	貯蔵穴か	P68	X51.7Y87	70・32	前田か
P38	X52.4Y87	50・32		P69	X51.7Y87	40・25	串田新Ⅱ
P39	X52.6Y87	60・19		P70	X51.7Y87.1	30・不明	
P40	X52.5Y87.1	60・37		P71	X51.8Y86.9	40・19	
P41	X52.4Y87	35×50・38		P72	X51.6Y87	40・31	
P42	X52.3Y87	30・ 8		P73	X51.2Y87	40・22	
P43	X52.3Y86.9	30・14		P74	X51.3Y87	30・19	
P44	X52.3Y87.1	20・14		P75	X51.3Y87.1	45・20	串田新Ⅱ
P45	X52.3Y87.1	40・49	柱根	P76	X51.2Y87	50・33	
P46	X52.2Y87.1	40×80・17		P77	X51.2Y87	50・10	串田新Ⅱ
P47	X52.2Y87.1	40・35	串田新Ⅱ	P78	X51.4Y87.1	50・27	
P48	X52.3Y87.1	30・18		P79	X51.5Y87	40・19	
P49	X51.3Y86.7	30・32	串田新Ⅱ	P80	X51.2Y86.7	60・29	
P50	X51.5Y86.7	65・不明	串田新Ⅱ	P81	X51.2Y86.6	40・23	
P51	X51.4Y86.7	50・23	〃	P82	X51.1Y87.2	70・42	串田新Ⅱ
P52	X51.3Y86.8	30・10		P83	X51.3Y86.9	25・16	
P53	X51.3Y86.8	30・25	串田新Ⅱ	P84	X51.3Y87	80・15	
P54	X51.2Y87	65・50		P85	X51.5Y86.9	40・13	串田新Ⅱ
P55	X51.1Y87	50・44		P86	X51.5Y86.9	55・38	〃
P56	X51.4Y86.7	50・21		P87	X51.5Y86.9	80・18	〃
P57	X51.3Y86.6	45・40		P88	X Y		
P58	X51.2Y86.8	40・13		P89	X Y		
P59	X51.1Y86.8	40・29		P90	X51.3Y86.9	20・26	串田新Ⅱ
P60	X51.4Y87.1	40・31	串田新Ⅱ	P91	X51.6Y86.9	35・13	
P61	X51.3Y87.2	55・28	〃	P92	X51.3Y86.7	30・27	串田新Ⅱ
P62	X51.7Y87	30・36		P93	X Y		
P63	X51.8Y87	30・31		P94	X Y		
P64	X51.6Y87	20・不明		P95	X Y		
P65	X51.6Y87	35・34	串田新Ⅱ	P96	X51.5Y86.8		消滅
P66	X51.7Y87	25・36		P97	X Y		
P67	X51.7Y87.1	40・38	串田新Ⅱ	P98	X51.6Y87.1	35・21	

表７　第１調査区木柱の入った土坑一覧表

遺構番号	所在区	穴の大きさ	木柱の大きさ	木柱の樹種・特徴
Ｐ１ 柱根１	X52Y86.1	長辺84cm短辺75cm	深さ38cm	径20cm長さ60cm底高28.2m
Ｐ２ 柱根６	X52.1Y86.1	長辺83cm短辺67cm	深さ50cm	径32cm長さ14cm底高28.41m 径10cmの杭
Ｐ20 柱根７	X52.1Y86.2	径50cm深さ38cm	径30cm長さ50cm 底高28.3cm	
Ｐ22 柱根４	X51.8Y86.2	径45cm深さ57cm	径28cm長さ20cm 底高27.8m	
Ｐ27 柱根３	X52Y86	径50cm深さ40cm	径32cm長さ44cm 底高28.3m	
Ｐ45 柱根５	X51.9Y86.9	長辺55cm短辺45cm 深さ28cm	径20cm長さ約70cm 底高28m	
Ｐ65	X51.8Y85.8	径40cm深さ25cm	幅13cm長さ30cm 底高27.8cm	厚さ５mmの板、径３cmと 径６cmの杭２本
柱根２	X52Y86	径60cm深さ17cm 掘形不明	径30cm長さ26cm 底高28.3m	径15cmの杭

表８－１　第１調査区土坑一覧表(1)

番号	所在区	形　状	穴の大きさ	出土遺物	時　期
SK 01	X52.7Y86	楕円形	長辺60cm短辺50cm深さ不明	縄文土器・石・木	晩期か
SK 02	X52.4Y85.9	楕円形	長辺80cm短辺70cm深さ29cm	木・トチ・クルミ・ ヒョウタン・縄文土器	晩期か
SK 03	X52.3Y86.1	楕円形	長辺50cm短辺40cm深さ不明		
SK 04	X　Y				
SK 05	X52.7Y86.1	円　形	径90cm深さ７cm	クルミがつまっている	
SK 06	X53.5Y86.1	円形か	一辺65cm他辺不明深さ不明		
SK 07	X52.2Y85.9	円　形	径65cm深さ35cm		
Ｐ３	X52.1Y86.1	円　形	径45cm深さ24cm		
Ｐ４	X52.1Y86.1	円　形	径100cm深さ32cm		
Ｐ５	X52.1Y86.1	円　形	径60cm深さ18cm	木・石	
Ｐ６	X52.1Y86.1	円　形	径50cm深さ31cm		
Ｐ７	X52.2Y86.1	円　形	径50cm深さ36cm	径５cmの杭３本あり	
Ｐ８	X52.2Y86.2	円形	径50cm深さ不明		

表８－２　第１調査区土坑一覧表(2)

番号	所在区	形　状	穴の大きさ	出土遺物	時　期
Ｐ９	X52.1Y86	円　形	径50cm深さ不明		
Ｐ10	X52.2Y86.1	円　形	径30cm深さ16cm		
Ｐ11	X52.2Y86.1	円　形	径20cm深さ不明		
Ｐ12	X52Y86.2	楕円形	長辺110cm短辺100cm深さ36cm		
Ｐ13	X52Y86.2	楕円形	長辺80cm短辺50cm深さ21cm		
Ｐ14	X52.2Y86.1	円　形	長辺65cm短辺55cm深さ24cm	石	
Ｐ15	X52.2Y86.1	円　形	径40cm深さ不明		
Ｐ16	X52.2Y86	円　形	径40cm深さ19cm	石	
Ｐ17	X52.8Y86.1	円　形	径50cm深さ19cm		
Ｐ18	X52Y86.2	円　形	径40cm深さ14cm	木？	
Ｐ19	X52.1Y86.2	円　形	径55cm深さ38cm		
Ｐ20	柱根が入った土坑				
Ｐ21	X52Y85.9	円　形	径30cm深さ不明		
Ｐ22	柱根が入った土坑				
Ｐ23	X51.7Y86.1	円　形	径30cm深さ34cm		
Ｐ24	X51.9Y86.1	円　形	径65cm深さ31cm		
Ｐ25	X51.9Y86	楕円形	長辺110cm短辺85cm深さ35cm	縄文土器	
Ｐ26	X51.9Y86	円　形	径30cm深さ41cm		
Ｐ27	柱根が入った土坑				
Ｐ28	X51.9Y85.8	円　形	径40cm深さ不明		
Ｐ29	X52Y85.9	円　形	径30cm深さ不明		
Ｐ30	X52Y85.8	円　形	径25cm深さ不明		
Ｐ31	X51.9Y85.8	円　形	径40cm深さ不明		
Ｐ32	X52.1Y85.8	円　形	径30cm深さ不明		
Ｐ33	X51.9Y85.8	円　形	径45cm深さ16cm		
Ｐ34	X51.9Y85.8	円　形	径15cm深さ５cm		
Ｐ35	X51.9Y85.8	円　形	径45cm深さ16cm		
Ｐ36	X51.9Y85.6	楕円形	長辺60cm短辺35cm深さ不明		
Ｐ37	X51.9Y85.7	円　形	径40cm深さ不明		
Ｐ38	X51.8Y85.6	円　形	径30cm深さ不明		
Ｐ39	X51.8Y85.6	楕円形	長辺25cm短辺18cm深さ不明		
Ｐ40	X51.8Y85.6	円　形	径25cm深さ不明		
Ｐ41	X51.8Y85.6	円　形	径35cm深さ不明		

表８－３　第１調査区土坑一覧表(3)

番号	所在区	形　状	穴の大きさ	出土遺物	時　期
P42	X51.9Y85.6	円　形	径30cm深さ不明		
P43	X51.9Y85.6	楕円形	長辺38cm短辺35cm深さ不明		
P44	X51.9Y85.8	楕円形	長辺40cm短辺20cm深さ９cm		
P45	柱根が入った土坑				
P46	X51.9Y86	円　形	長辺70cm短辺60cm深さ15cm		
P47	X51.9Y86.1	楕円形	長辺45cm短辺38cm深さ22cm		
P48	X51.9Y86.2	楕円形	長辺100cm短辺80cm深さ14cm		
P49	欠番（P13）				
P50	X52.2Y86	円　形	径30cm深さ16cm		
P51	X52.2Y86.1	円　形	径25cm深さ22cm		
P52	X52.1Y85.8	円　形	径53cm深さ不明		
P53～55	欠番				
P56	X51.9Y85.8	円　形	径		
P57	X51.9Y85.8	円　形	径70cm深さ３cm	木・縄文土器	串田新
P58	X51.9Y85.8	楕円形	長辺40cm短辺30cm深さ22cm		
P59	X51.9Y85.8	楕円形	長辺40cm短辺23cm深さ17cm		
P60	X52Y85.8	円　形	径40cm深さ29cm		
P61	X51.5Y85.9	円　形	径60cm深さ不明		
P62	X52.1Y85.8	楕円形	長辺50cm短辺43cm深さ16cm		
P63	X51.8Y86	円　形	径50cm深さ不明		
P64	X51.8Y86	楕円形	長辺65cm短辺60cm深さ30cm		
P65	柱根が入った土坑				

表９－１　第１調査区埋甕一覧表(1)

遺構番号	所在区	穴の大きさ	土器の大きさ	特　　徴
埋甕１	X52.2Y85.6	径70cm深さ42cm 底の高さ28.45m	径32cm高さ13cm	口縁部・底部欠け
埋甕２	X52.3Y85.6	径125cm深さ35cm 底の高さ28.10m	径45cm高さ21cm	口縁部・底部欠け
埋甕３	X52.3Y85.6	径45cm深さ12cm 礫層の中	径28cm深さ26cm	口縁部・底部欠け 前田式土器
埋甕４	X53.2Y85.7	径20cm深さ８cm	底径15cm高さ４cm	底部
埋甕５	X53.2Y85.7	径25cm深さ６cm	なし	

表９－２　第１調査区埋甕一覧表(2)

遺構番号	所在区	穴の大きさ	土器の大きさ	特徴
埋甕６	X53.3Y85.7	径35cm深さ７cm	なし	
埋甕７	X53.3Y85.7	径22cm深さ３cm	底径15cm高さ５cm	底部

表10－１　第１調査区木組み及び木材集中箇所(1)

番号	所在区・おもな木材	大　き　さ	性　　格
SX 01上	X52.7～52.8Y85.7～86.1	長さ4.3m幅1.5m	水場足場または貯木
	W１（大型高床建物柱）、W38（はつりのある材）、W40・51・54・75（柱材）、W97・98（板材）、W11（柵状木製品）、W66（土掘具）、W59（柱根）、ひょうたん		
SX 01下	X52.7～52.8Y85.9～86	長さ５m幅0.7m	水溜め木組み
	W２（柵状木製品）、W95・96（板材）、W22（ほぞ穴のある材）、W38（はつりのある材）、W８（中柱）		
SX 02	X52.2～52.7Y85.9～86.1	長さ4.4m幅0.6m	水場足場
	W37（欠込のある材）、W136（板材）、W179（３つ貫穴のある材）、W49（床板材）、W18（ほぞのある材）、W186（相欠きの平桁材）、W187（めど穴のある材）、W118（ミニＹ字材）、W131（輪）、W111・112（壁材）、W104掘棒、編物、丸太材、割材、板材		
SX 03	X52.5～52.7Y85.8～86	長さ7.4m幅3.8m	貯木か
	貫穴のある材、丸太材、割材、薄板材		
SX 04	X51.9～52.3Y85.4～85.7	長さ5.5m幅3.1m	貯木か
	W１・２（柵状木製品）14・16・26（編物）、62（輪）、W28（床板材か）、W29（２つ貫穴のある材）、Ｙ字材、丸太材、割材、杭		
SX 05	X53.5～53.6Y85.8～85.9	長さ４m幅３m	貯木か
	丸太材、割材、杭		
SX 06・07	X52.5～52.9Y85.4～85.7	長さ13m幅7.5m	自然木
	トチの樹根、割材		
SX 08	X53.8～53.9Y85.8～86	長さ3.7m幅70m	貯木か
	柱、杭		
SX 09	X54.7～54.9Y85.8～86	長さ５．５m幅３m	流木か
	貫穴とえつり穴のある材		
SX 10	欠番		
SX 11	X51.9～52.2Y85.8～86		流木か
	掘棒、割材		

表10－2　第1調査区木組み及び木材集中箇所(2)

番号	所在区・おもな木材	大　き　さ	性　　格
SX 12	X51.6Y85.9	長辺60cm短辺30cm	クリなど木の実の集合
	板材、割材、板材、杭		
SX 13	X51.2～51.5Y85.6～85.7	長辺５m短辺４m	貯木か
	斧柄、漆塗弓、編物、丸太材、割材、板材、ミカン割材		
SX 14	X51.4～51.5Y85.6～85.9	長さ5.5m幅3.3m	水溜め木組み
	W１（樋状木製品）、W２・32（彫刻柱）、輪、割材、板材		
SX 15	欠番		
SX 16・17	X53～53.9Y85.7～86		流木か
	W26（彫刻柱）、W４（欠込のある材）、割板、板材		
SX 18	欠番		
SX 19	X52.9～53Y86		水場か
	柱（杭）		
SX 20 22・23	X51.7～53Y85.8～86.1		流木か
	丸太材、割材、板材		
SX 21	X54～54.7Y85.2～85.5		流木か
	丸太材か、割材か		

表11　第6調査区土坑一覧表(1)

番号	所在区	形　状	穴の大きさ	出土遺物	時　期
SK 01	X52.8Y85.3	円　形	長辺cm短辺cm深さ18cm	珠洲	鎌倉
SK 19	X52.3Y87	楕円形	長辺124cm短辺66cm深さ52cm		平安
SK 20	X52.4Y87	方　形	長辺115cm短辺96cm深さ50cm		平安か
SK 21北	X52.3Y87	長方形	長辺100cm短辺46cm深さ40cm		平安以降
SK 21南	X52.3Y87	長方形	長辺106cm短辺56cm深さ72cm		平安以降
SK 22	X52.3Y87.1	楕円形	長辺105cm短辺60cm深さ51cm		
SK 43	X53.6Y86.7	方　形	長辺120cm短辺116cm深さ56cm	土師器	平安

表12　第6調査区木柱が入った穴一覧表

遺構番号	所在区	穴の大きさ	木柱の大きさ	木柱の樹種・特徴
P36	X52.3Y86.8	長辺65cm短辺35cm 深さ49cm、長円形	径10cm長さ16.5cm 底高29m	古代か
P101	X51.5Y86.6	径60cm深さ40cm	径32cm45cm 底高28.4cm	平安
P102	X51.7Y86.6	長辺80cm短辺75cm 深さ35cm、方形	径28cm長さ35cm 底高29m	古代か、芯持ち
P103	X51.9Y87	長辺100cm短辺85cm 深さ50cm、方形	径25cm長さ65cm 底高29.2cm	古代、芯持ち、東側へ倒れている
P45	X52.3Y86.8	径40cm深さ49cm	径15cm長さ50cm 底高29.2m	古代か、中空か

表13　第８調査区遺物一覧(1)

番号	種　類	器　種	出土遺構・地区・層位	大　き　さ	特　徴	時　期
1	須恵器	杯蓋	地山地区	口径13cm、器高3.6cm	天井部ヘラケズリ	飛鳥前期
2	〃	杯	〃	口径13cm、器高４cm	立ち上がり低い	〃
3	〃	提瓶	〃		肩部に環状把手	〃
4	珠洲	すり鉢	〃	口径22cm	口縁部内端尖る、珠洲Ⅱ期	鎌倉前期
5	〃	〃	〃		口縁部内端尖る、珠洲Ⅱ期	〃
6	〃	壺	〃		綾杉状叩き目、珠洲Ⅲ期	鎌倉後期
7	〃	すり鉢	〃		卸し目12本、珠洲Ⅳ期	南北朝
8	〃	〃	〃	口径20.5cm	口唇部水平外へ引き出し珠洲Ⅳ期	〃
9	〃	〃	〃		卸し目14本、珠洲Ⅳ期	〃
10	土師器	小皿	〃	口径８cm、器高1.7cm	手づくね、口縁部横ナデして立つ	〃
11	〃	〃	〃	口径12cm	手づくね、口縁部内湾して開く	〃
12	〃	〃	〃	口径7.5cm、器高1.7cm	手づくね、口縁部横ナデして立つ	〃
13	〃	〃	〃	口径7.5cm	手づくね、口縁部内湾して開く	〃
14	〃	〃	〃	口径5.8cm	手づくね、底部平坦	鎌倉
15	〃	〃	〃	口径９cm	手づくね、口縁端部内面ナデ	戦国
16	青磁	椀	〃		高台断面四角、内面片切彫り文様	室町
17	瀬戸	茶椀	〃		灰色釉	江戸
18	唐津	皿	〃	高台径4.2cm	緑灰色釉、内面蛇の目釉ハギ	江戸中期

表14－１　第10調査区遺物一覧表(1)

番号	種　類	器　種	出土遺構・地区・層位	大　き　さ	特　徴	時　期
1	弥生土器	壺	X37.1Y89黒色粘土	口径19.2cm	有段口縁に×刻み　Ⅳ期	弥生中期
2	須恵器	蓋	X38Y89.1～89.2黒褐色土	口径10.8cm	口縁端部丸い	平安前期Ⅴ2
3	〃	高台杯	X38.1Y89黒褐色土	台径６cm	底部境に稜	〃
4	〃	杯	X37.3Y89.2黒褐色土	底径８cm	底部境丸い	〃
5	〃	双耳瓶	X37.4Y89青灰色砂	口径11cm	口縁端部立つ	〃
6	〃	〃	X38.2Y89.1黒褐色土	口径18cm	〃	〃
7	〃	長頸壺	X38.8Y88.9表土	口径不確定	口唇部やや外へ張る	〃
8	土師器	椀	X38.1Y89.2黒褐色土	口径13cm	体部ロクロナデ	〃
9	〃	〃	X38.5Y89.4側溝	底径4.2cm	底部回転糸切り、内面黒色	〃
10	〃	〃	X38.1Y89.2黒褐色土	底径５cm	底部回転糸切り	〃
11	〃	〃	X38.2Y89.2黒褐色土	底径５cm	底部回転糸切り外底面に墨書「＋」	〃
12	〃	高台椀	X38.1Y89.2黒褐色土	台径8.2cm	高台断面四角い	〃

表14－2　第10調査区遺物一覧表(2)

番号	種　類	器　種	出土遺構・地区・層位	大　き　さ	特　徴	時　期
13	土師器	高台椀	X38.2Y89.2黒褐色土	底径7cm	高台断面四角い	平安前期
14	〃	甕	X37～37.3Y89.1～89.3黒色粘土		口縁端部角張る	奈良中期
15	〃	〃	X38Y89.1～89.2黒褐色土		口縁端部尖る	奈良後期
16	〃	鍋	X39.1Y89.1黒褐色土		口縁端部内面三角肥厚	平安前期
17	〃	〃	X38.1Y89.2黒褐色土		口縁端部内面丸く肥厚	平安中期
18	〃	〃	X38.2Y89.2黒褐色土		〃	〃
19	土製品	土錘	X38.2Y89.1黒褐色土	長さ3.2cm、径2.4cm	筒形に近い紡錘形	奈良か
20	〃	〃	X38.2Y89.2黒褐色土	長さ4cm、径3.5cm	〃	平安か
21	珠洲	すり鉢	X38.1Y89.2黒褐色土	口径23cm	口縁端部断面四角い	南北朝 Ⅳ
22	〃	〃	X37.5～38Y88.9～89黒褐色土		口唇部やや外へ張り出す	〃
23	〃	壺	X38.2Y89.1黒褐色土		胴部に櫛波波状文	鎌倉
24	土師器	土師皿	X37.2Y88.5表土	口径11cm	口縁部外反、端部丸い	戦国
25	〃	〃	X38.5Y88.5表土	口径12.5cm	口縁部直線的に開く、口縁内面に粘土貼付けあり	〃
26	青磁	椀	X38Y88.7黒褐色土		緑色釉薬	〃
27	瀬戸美濃	天目茶碗	X38.1Y89表土		茶色鉄釉	〃
28	越中瀬戸	皿	X38.5Y88.5表土	口径12cm、器高2.7cm	〃　向付形	〃
29	〃	〃	X37Y89表土	底径4.5cm	〃　削り出し高台	〃
30	唐津	〃	X37Y89表土	底径4cm	内面に黒っぽい灰釉	〃
31	灰釉陶器	椀か皿	X37.5Y88.7黒褐色土		体部外面下半釉薬なし	平安中期
32	土師器	椀	X38.2Y89.2黒褐色土		体部ロクロナデ	〃
33	須恵器	双耳瓶	X38Y89.1～89.2黒褐色土			〃
34	銭貨	永楽通寶	X38.9Y88.6黒褐色土	径2.4cm、厚さ1.6mm	重さ4g、真書	戦国
35	〃	〃	〃	径2.4cm、厚さ1.4mm	重さ2.5g、真書	〃
36	〃	皇宋通寶	〃	径2.4cm、厚さ1.1mm	重さ2.2g、隷書	〃
37	〃	元祐通寶	〃	径2.4cm、厚さ1.1mm	重さ2.6g、篆書	〃

表15－1　第1・6調査区遺物一覧表(1)

番号	種　類	器　種	出土遺構・地区・層位	大　き　さ	特　徴	時　期
1	土師器	壺	SD06		有段口縁外反	古墳前期
2	〃	〃	SD01X54.3Y85.7	口径18cm	有段口縁、内側に段なし	古墳中期
3	〃	甕	SD08X51.5Y不明	口径16cm	くの字口縁外反	古墳後期
4	〃	〃	X52.3Y86.7	口径16cm	くの字口縁外反、内面粘土接合痕	〃
5	〃	〃	SD11X52.6Y88.7	口径13.7cm	内外ハケメ、胴部張る	古墳中期
6	〃	〃	不明	口径15cm	くの字口縁	〃
7	〃	杯	SD09X52.4Y86.4	口径14.6cm	口縁部内湾、内面黒色	飛鳥前期
8	〃	高杯	SD11X53Y86.7	台径12.2cm	脚端部大きく開く	古墳中期
9	〃	〃	SD08X51.4Y86.9	脚部基部径3.6cm	〃	〃
10	〃	〃	SK覆土X53.3Y86.6	脚部基部径4.2cm	〃	〃
11	〃	〃	X52.2Y86.7	脚部基部径4.4cm	〃	〃
12	須恵器	杯蓋	X53.2Y86.2青ジャリ砂	口径12cm	口縁部開く	飛鳥前期

表15－2　第1・6調査区遺物一覧表(2)

番号	種　類	器　種	出土遺構・地区・層位	大きさ	特　徴	時　期
13	須恵器	杯	X52.5Y86.8Ⅰ層	口径12cm	かえり短い	飛鳥前期
14	〃	〃	SD 09X52.2Y86.5	口径11cm	〃	〃
15	〃	〃	X52.5Y86.7表土	口径12cm		奈良中期
16	〃	高台杯	X53.5～54Y85.5～86	台径9.4cm	高台小さい	〃
17	〃	〃	X54.3Y85.6表土	台径12cm	高台低い	〃
18	〃	甕	〃 X54.6Y85.9表土		頸部に櫛歯波状文	〃
19	〃	〃	SD 02X54.1Y86.8		口縁端部外へ張り出す	平安前期
20	土師器	製塩土器	SG 01X53.5Y86.9	胴下部径5.4cm	棒状尖底型	飛鳥
21	土製品	支脚	SD 08X不明Y86.7	径3.5cm	断面隅丸方形、棒状	〃
22	土師器	椀	X不明Y86.8	口径15cm	体部内湾ぎみに開く	平安後期
23	〃	〃	SD 09X52.2Y86.5	口径8.2cm、器高2cm	体部直線的に開く	〃
24	〃	〃	X53.4Y86.7	口径8.4cm、器高1.9cm	体部内湾ぎみに開く、底部回転糸切り	〃
25	〃	高台椀	SD 10X52.3Y86.5Ⅰ層	台径5.7cm	高台断面三角形、底面に花弁状の刻み、内面黒色	〃
26	〃	〃	SD 05	台径5cm	高台筒状	〃
27	〃	〃	SD 06X53.3Y86	台径6cm	高台断面三角形、内面黒色	〃
28	〃	〃	SD 02X不明Y85.9	台径5.8cm	〃　〃	〃
29	〃	椀	SD 09X52.3Y86.6	口径16.2cm、器高3.7cm	口縁部直線的に開く底部回転糸切り	〃
30	〃	〃	〃 X52.8Y86.9	口径14.2cm、器高4.9cm	〃	〃
31	〃	〃	〃 X51.4Y86.6	口径13.8cm、器高4.4cm	〃	〃
32	〃	〃	〃 X51.8Y86.6	口径13.5cm	口縁部直線的に開く	〃
33	〃	〃	〃 X52.5Y86.5	台径6cm	高台断面三角形、内面黒色	〃
34	〃	皿	〃 X51.4Y86.6	口径8.8cm、器高2cm	口縁部直線的に開く底部回転糸切り	〃
35	〃	〃	〃 X51.7Y86.6	口径9.1cm、器高2.1cm	〃	〃
36	〃	〃	〃 X53.2Y86.7	口径9.4cm、器高1.9cm	〃	〃
37	〃	〃	〃 X52.2Y86.5	口径9.6cm、器高1.8cm	口縁部直線的に開く	〃
38	〃	〃	〃 X52.2Y86.5	口径9.2cm、器高1.9cm	〃	〃
39	〃	高台皿	〃 X51.6Y86.5	口径9.7cm、器高3.8cm	柱状高台	〃
40	〃	〃	〃 X52.2Y86.5	口径9.3cm、器高3.9cm	〃	〃
41	〃	高台皿	〃 X52.3Y86.6	口径8.5cm、器高2.9cm	柱状高台	平安後期
42	〃	〃	〃 X52.2Y86.5	底径4.6cm	〃	〃
43	〃	高台椀	〃 X53.2Y85.5	底径6.9cm	高台断面丸みのある方形	〃
44	〃	〃	〃 X51.4Y86.6	底径6.6cm	高台断面方形	〃
45	〃	高杯	SD 12X52.2Y85.5	脚径4.5cm	内面黒色	〃
46	〃	椀	SD 11X52.8Y86.6	口径13.7cm、器高4.1cm	口縁部直線的に開く底部回転糸切り	〃
47	〃	皿か	〃 X53.3Y85.6	底径5.9cm	柱状高台底部回転糸切り	〃
48	〃	甕	SD 11X53.3Y86.7	口径10.8cm	口縁端部尖る	平安後期
49	〃	甕か	SD 08X55.7Y86.8		口縁端部丸い	〃
50	〃	皿	SD 11X53.6Y87	口径8.9cm、器高1.8cm	口縁部直線的に開く底部回転糸切り	〃

表15－3　第1・6調査区遺物一覧表(3)

番号	種　類	器　種	出土遺構・地区・層位	大　き　さ	特　徴	時　期
51	土師器	Ⅲ	SD 11 X 53.3 Y 85.6	口径8.3cm、器高2.2cm	口縁部直線的に開く底部回転糸切り	平安後期
52	〃	〃	〃 X 53.6 Y 86.9	口径9.3cm、器高2.3cm	〃	〃
53	〃	〃	SD 12 X 52.2 Y 86.5	口径9cm、器高3.5cm	〃	〃
54	土製品	土錘	SD 09 X 51.3 Y 86.7	長さ5cm、径5.3cm	紡錘形（短胴）	〃
55	〃	〃	SD 11	長さ4.4cm、径5cm	〃	〃
56	〃	〃	SD 09 X 53.4 Y 86.6	長さ5.3cm、径4.2cm	〃	〃
57	〃	〃	〃 X 52.2 Y 86.7 Ⅰ層	長さ5cm、径5.9cm	〃	〃
58	〃	〃	SD 11 X 53.3 Y 85.6	長さ5.1cm、径5.5cm	〃	〃
59	〃	〃	SD 09 X 52.2 Y 86.7 Ⅰ層	長さ5.8cm、径5.4cm	〃	〃
60	〃	〃	SD 11 X 53.4 Y 86.6	長さ5.2cm、径5.6cm	〃	〃
61	〃	〃	X 51.8 Y 86.8 Ⅰ層	長さ5.5cm、径5.8cm	〃	〃
62	〃	〃	SD 0 9 X 52.2 Y 86.5	長さ4.6cm、径5cm	〃	〃
63	〃	〃	〃 X 52.2 Y 86.5	長さ5.8cm、径5.4cm	〃	〃
64	〃	〃	〃 X 52.3 Y 86	長さ5.8cm、径5.4cm	〃	〃
65	〃	〃	〃 X 51.4 Y 86.6	長さ6.3cm、径6.4cm	〃	〃
66	〃	〃	〃 X 52.2 Y 86.7 Ⅰ層	長さ6.2cm、径6.3cm	〃	〃
67	〃	〃	〃 X 52.2 Y 86.7 Ⅰ層	長さ6.5cm、径6.6cm	〃	〃
68	〃	〃	SD 11 X 53.6 Y 87.2	長さ7.4cm、径4.2cm	紡錘形（長胴）	〃
69	〃	〃	SD 09 X 52.2 Y 86.7 Ⅰ層	長さ8cm、径4cm	〃	〃
70	〃	〃	〃 X 51.5 Y 86.6	長さ7.2cm、径5.3cm	〃	〃
71	〃	〃	〃 X 51.3 Y 86.7	長さ6.4cm、径5.2cm	紡錘形（短胴）	〃
72	〃	〃	〃 X 52.2 Y 86.7	長さ7.5cm、径5.8cm	〃	〃
73	〃	〃	〃 X 52.2 Y 86.7 Ⅰ層	長さ6.7cm、径6.3cm	〃	〃
74	〃	〃	SD 08 X 51.5 Y 86.6	長さ8cm、径6.3cm	〃	〃
75	〃	〃	SD 09 X 52.3 Y 86.4	長さ5.9cm、径5.9cm	〃	〃
76	〃	〃	SD 08 X 51.5 Y 86.6	長さ6.3cm、径6.3cm	〃	〃
77	〃	〃	X 51.4 Y 86.8 クロ層	長さ5.7cm、径5.6cm	〃	〃
78	〃	〃	SD 09 X 52.5 Y 86.5	長さ4.9cm、径5.4cm	〃	〃
79	〃	〃	SD 04 X 53.2 Y 86.2	長さ4.9cm、径4.5cm	〃	〃
80	〃	〃	SD 09 X 52.2 Y 86.5	長さ5.6cm、径5.6cm	〃	〃
81	珠洲	甕	X 53.5 Y 86.2 Ⅰ層	口径44cm	くの字口縁、丸頭	室町
82	〃	壺	表採		綾杉状叩き目、Ⅲ期	鎌倉
83	〃	〃	X 51.5 Y 85.7 試掘表土		綾杉状叩き目、Ⅳ期	南北朝
84	〃	すり鉢	表採		19本単位の卸し目、Ⅳ期	〃
85	〃	〃	SD 02 X 53.5 Y 86 ジャリ		口縁端部丸い、8本単位の卸し目	室町
86	〃	〃	X 53.7 Y 86.9 Ⅰ層	口径21.5cm	口縁部肥厚・口唇部水平	室町 Ⅴ期
87	〃	〃	SD 01 X 54.3 Y 85.7		おろし目なし、Ⅱ期	鎌倉
88	〃	〃	X 54.5 Y 85.7		おろし目1cm幅に9本Ⅴ期	室町
89	瓦器	〃	SG 02 X 51.1 Y 86.3 クロ	口径27.5cm	黒色、10本単位の卸し目	〃
90	越中瀬戸	〃	SD 02 X 53.2 Y 86 ジャリ	底径14.4cm	鉄釉、10本単位の卸し目	戦国
91	〃	〃	SD 12 X 53.8 Y 不明	口径28cm	鉄釉、口唇部肥厚水平	〃
92	〃	〃	SD 02 X 53.2 Y 86 ジャリ	底径5.6cm	鉄釉、削り出し高台	江戸
93	〃	茶入れ	SG 01 X 53.8 Y 81 クロ	胴部径9.6cm	内外鉄釉、外面灰釉掛け	〃

表15－4　第1・6調査区遺物一覧表(4)

番号	種　類	器　種	出土遺構・地区・層位	大　き　さ	特　徴	時　期
94	瓦器	火鉢	SX 2		口縁部内湾、口唇部水平凸帯下に花紋	室町
95	土製品	るつぼ	SD 07 X 52.3 Y 86.6	口径7.5cm、器高4cm	内面に鉄滓付着	平安後葉
96	〃	羽口	SD 09 X 51.5 Y 86.6	直径8.6cm		〃
97	〃	有孔円板	X 51.1 Y 87.1黒炭層	長径2.6cm、短径2.1cm厚さ8mm	中央に直径4mmの円孔	不明
98	須恵器	杯	X 52.5 Y 86.2 I 層	口径14cm	かえり短い	飛鳥前期
99	弥生土器	小型台付甕	SD 06 X 54 Y 86.1	台径4cm	内面ハケメ	弥生後期
100	土師器	製塩土器	SG 01 X 54.1 Y 86.9クロ	胴部径5cm	棒状尖底型	飛鳥前期
101	土師器	皿	SD 02 X 52.6 Y 86	口径8.8cm、器高1.8cm	底部回転糸切り	平安後葉
102	〃	〃	SI 03 X 51.2 Y 86.9クロ	口径10.5cm、器高2.3cm	手づくね	鎌倉
103	〃	土錘	SK X 53.3 Y 86.6	長さ5.5cm、径6cm	紡錘形	平安後期
104	〃	高台皿	SD 07 X 53.2 Y 85.5	台径4.6cm	底部回転糸切り	〃
105	須恵器	杯	X 52.1 Y 85.5 I 層			飛鳥前期

表16－1　第2調査区遺物一覧表(1)

番号	種　類	器　種	出土遺構・地区・層位	大　き　さ	特　徴	時　期
1	土師器	甕	X 46 Y 85.9古墳面	口径18cm、器高26.8cm	くの字口縁、丸底	古墳中期
2	〃	〃	X 47.4 Y 86.4 VI 層	口径22.6cm	くの字口縁	〃
3	〃	〃	屋根材下	口径18.4cm	〃	古墳前期
4	〃	〃	X 47.8 Y 86.4 VI 層	口径19.2cm	〃	古墳中期
5	〃	〃	X 46.6 Y 85.9古墳面	口径13.8cm	〃　頸部丸く反る	〃
6	〃	〃	X 46.8 Y 86 VI 層	口径13cm	〃	〃
7	〃	〃	X 47.2 Y 86.5 III 層	口径17.5cm	くの字口縁	古墳中期
8	〃	小型甕	X 46.9 Y 86.1古墳面	口径9cm	〃	〃
9	〃	〃	X 46.6 Y 85.9 VI 層	口径11cm	〃	〃
10	〃	壺	X 47 Y 86.2古墳面	口径15cm	有段口縁、外面の稜肥厚	〃
11	〃	椀	X 46.6 Y 85.9古墳面	口径12.8cm、器高5.5cm	口縁部内湾	〃
12	〃	〃	X 46.9 Y 86.1古墳面	口径15.2cm	口縁部内湾	〃
13	〃	〃	X 46.8 Y 86	口径17cm	口縁部外反	〃
14	〃	〃	X 47.5 Y 86.7 VI 層	口径15cm	〃	〃
15	〃	高杯	X 46.9 Y 85.9	口径17.2cm	口縁部外反、底部境に稜	〃
16	〃	〃	X 47 Y 86.3古墳面	口径15.2cm		〃
17	〃	〃	X 47 Y 不明	脚部径10cm	脚部ラッパ状に開く	〃
18	〃	〃	X 46.9 Y 86.1古墳面	口径15.6cm	口縁部内湾	〃
19	〃	〃	X 46.8 Y 86古墳面？	口径19cm	口縁部外反、底部境に稜	〃
20	〃	〃	X 47 Y 86.3古墳面	脚部径12cm	脚部ラッパ状に開く	〃
21	〃	〃	X 46.9 Y 86.1古墳面	脚部径10cm	〃	〃
22	〃	〃	X 46.9 Y 86.1古墳面	脚部径11cm	〃	〃
23	〃	高杯	X 47 Y 86.3古墳面		脚部折れて開く	古墳中期
24	〃	小型甕	屋根材下 X 46 Y 85.9古墳面		ゆるいくの字口縁、口縁端部肥厚、内面接合痕	古墳前期
25	須恵器	瓶	X 47.1 Y 86.2	口径17.5cm	口縁部下に沈線巡る	〃
26	〃	〃	X 46.9 Y 86.5古墳面	口径14.2cm、器高16.6cm、胴部径9.6cm		〃
27	須恵器	杯	X 46.6 Y 86古墳面	口径12cm	立ち上がり短い	飛鳥前期

表16－2　第2調査区遺物一覧表(2)

番号	種　類	器　種	出土遺構・地区・層位	大　き　さ	特　徴	時　期
28	土師器	小型土器	X46.9Y85.9古墳面	口径3.5cm、器高2.9cm	丸底鉢形	古墳前期
29	木製品	鍬先	X47.5Y86.5SD05の下の溝	長さ38.6cm、幅15.6cm、厚さ5mm	ナスビ型、中央にスリット、樹種	古墳前期
30	須恵器	高台杯	SD05	台径6cm	台径小さい、底部境丸い	奈良後期
31	滑石製品	温石か	SD05	幅6.7cm、厚さ1.7cm	三方面取り、左欠け、左寄りに径5mmの穿孔、表面下部に段、裏面に径2mmの未貫通穴	中世か

表17－1　第3調査区遺物一覧表(1)

番号	種　類	器　種	出土遺構・地区・層位	大　き　さ	特　徴	時　期
1	弥生土器	甕	X45.1Y86.2Ⅶ層	口径16cm	口縁部外反、口唇部に連続刻み	弥生中期
2	土師器	〃	SD92X44.4Y86.6	口径14.4cm	口縁部外面に面取り	古墳前期
3	〃	〃	X不明Y86.5Ⅲ層	口径13cm	有段口縁、内面に段なし	〃
4	〃	〃	SD92X44.4Y86.6	口径16cm	くの字口縁	〃
5	〃	〃	SD92X44.2Y86.5	口径13cm	〃	〃
6	〃	〃	SX76	口径20cm	〃	〃
7	〃	〃	X47.2Y86.5Ⅲ層	底径4cm	小さい底あり	〃
8	〃	〃	X46Y86Ⅶ層	口径22.6cm	有段口縁、内面に段なし	〃
9	〃	小型壺	SD92X44.1Y86.5	口径8cm、器高14cm	口頸部直立、胴部扁平	古墳前期
10	〃	〃	X44.6Y86.7Ⅶ層	胴部径8.3cm	口頸部開く、胴部丸い	〃
11	〃	杯	SD92X44.4Y86.7	口径10.6cm	口縁部短く反る	古墳中期
12	〃	〃	X46.5Y86.5Ⅲ層	口径13.2cm	口縁部やや内湾	〃
13	〃	〃	X46.5Y86.5Ⅱ層	口径13cm	口縁端部内傾	〃
14	〃	〃	SD92X44.4Y86.6	口径13cm	口縁部短く反る	〃
15	〃	〃	X46.5Y86.5Ⅲ層	口径15cm	口縁部やや内湾、内面黒色	〃
16	〃	〃	不明	口径14.8cm	口縁部外反、内面黒色	〃
17	〃	〃	〃	口径17cm	口縁部外反	〃
18	〃	高杯	SD92X44.4Y86.6	口径13.6cm	口縁部やや内湾ぎみ	〃
19	〃	〃	SX76X46.4Y86.5	口径17cm	口縁部外反	〃
20	〃	〃	X47.2Y86.5Ⅲ層	口径16cm	口縁部直線的に開く	〃
21	〃	〃	SD92X44.3Y86.7	脚径10.4cm	脚部ラッパ状に開く	〃
22	〃	〃	X46Y86Ⅶ層	口径14cm	〃	〃
23	須恵器	杯	X45.7Y86.3Ⅰ層 X46.5Y86.5Ⅲ層	口径12cm	立ち上がりが短い	飛鳥前期
24	土師器	製塩土器	X46.4Y86.3表採	胴部径9.6cm	棒状尖底型	〃
25	須恵器	杯	X46.3Y86.2Ⅲ層	底径8cm	底部平坦	奈良後期
26	土師器	高台椀	第4調査区東Ⅱ層	台径7cm	高台断面四角、内面黒色	〃
27	須恵器	壺か	SD92		口唇部水平	〃
28	珠洲	壺	X44.3Y86.2Ⅰ層		綾杉状叩き目、珠洲Ⅲ期	鎌倉後期
29	〃	すり鉢	X44.5Y86.8		口唇部外傾　〃	〃
30	〃	〃	X45.5Y86.9試掘2層		口唇部水平、珠洲Ⅳ期	南北朝
31	〃	〃	X45.5Y86.2Ⅰ層		口唇部外傾、珠洲Ⅲ期	鎌倉後期
32	〃	〃	SD92X44.2Y86.5		〃　〃	〃

表17－2　第3調査区遺物一覧表(2)

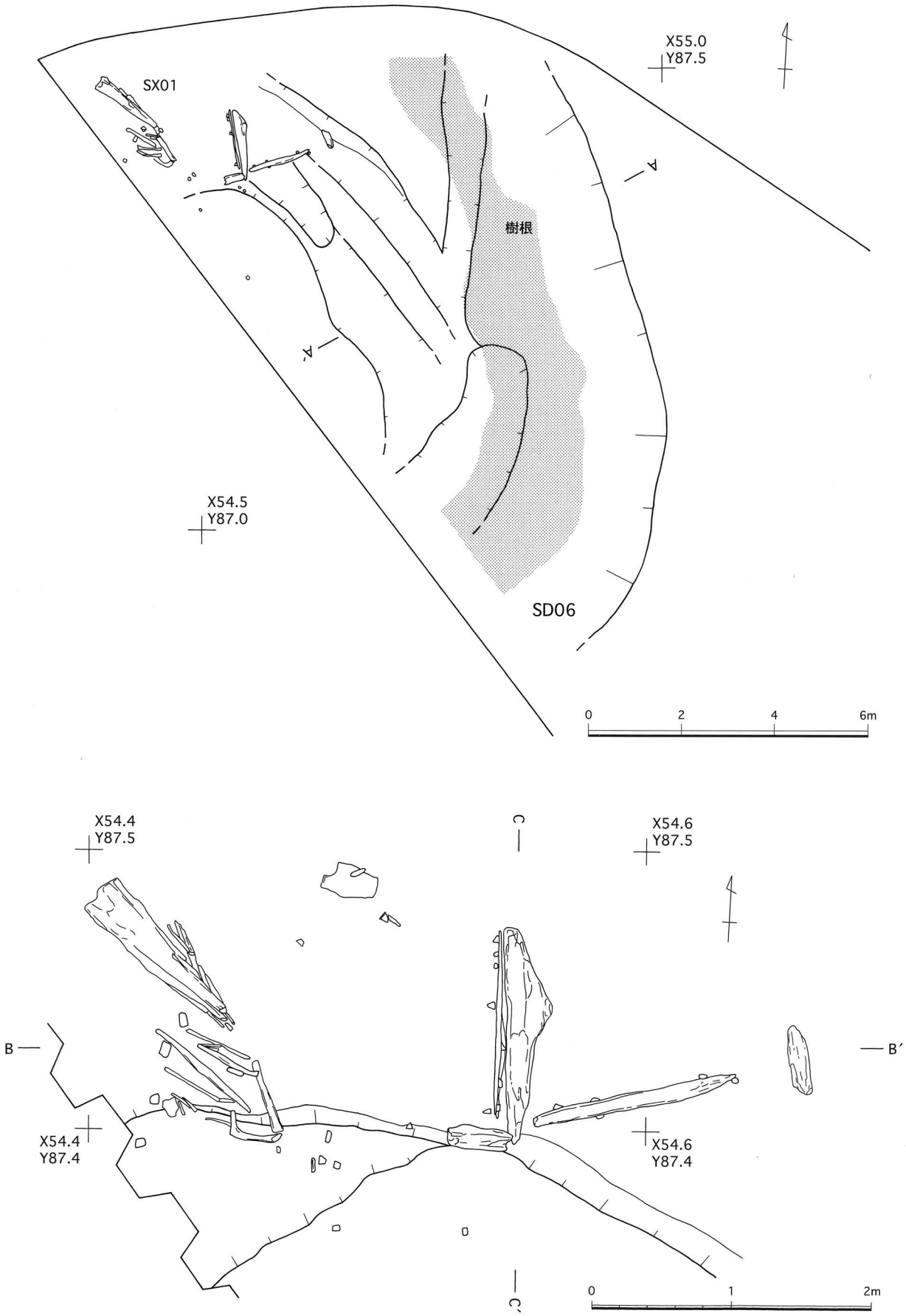
番号	種　類	器　種	出土遺構・地区・層位	大きさ	特　徴	時　期
33	珠洲	すり鉢	X45.7Y86.3Ⅰ層	底径12cm	卸し目粗い、珠洲Ⅲ期	鎌倉後期
34	〃	〃	X45.5Y86.1Ⅰ層	底径10cm	〃　〃	〃
35	〃	〃	表採		口唇部水平、珠洲Ⅳ期	南北朝
36	加賀	甕	X45.5Y87Ⅶ層		口縁端部丸く立つ、白い砂粒	鎌倉
37	青磁	椀	X45.5Y87Ⅲ層	台径6.2cm	内面に劃花文、ｵﾘｰﾌﾞ釉	〃
38	土師器	小皿	X45.5Y86.9ⅠB層	口径7cm、器高1.2cm	手づくね	〃
39	〃	〃	P78	口径7.2cm、器高1.1cm	〃	〃
40	〃	〃	X45.3Y86.5Ⅱ層	口径7.6cm、器高1.6cm	〃	〃
41	〃	〃	X45.2Y86.9試掘2層	口径10cm、器高2cm	〃	〃
42	越中瀬戸	皿	X44.7Y86.9試掘2層	口径10cm、器高2.7cm	黄白色灰釉、削出し高台	江戸前期
43	〃	すり鉢	X44.5Y86.8黒		小豆色鉄釉	〃
44	銅製品	こうがい	X44.5Y87Ⅰ層	長さ12.3cm、幅1.4cm	みみかき部分欠け、表面に筋溝	江戸前期か
45	弥生土器	甕	X44.9Y86.3Ⅶa層		口縁部外反、口唇部に連続刻み	弥生中期
46	須恵器	蓋	X45.1Y86.7表採		天井部ヘラ削り	飛鳥前期
47	土製品	支脚	X46.3Y86.5	太さ4.8cm	両端欠け、棒状	〃
48	土師器	小皿	X45Y86.8Ⅰ層	口径3.5cm、器高1.6cm	底部平坦、底部境直立	鎌倉
49	青磁	椀	X43.9Y86.6Ⅰ層		鎬蓮弁文、オリーブ釉薬	鎌倉後半
50	瀬戸	卸し皿	第4調査区東Ⅱ層		黄緑色灰釉	南北朝
51	〃	瓶子	〃		〃	〃
52	〃	壺	X43.9Y86.6Ⅰ層		黒色鉄釉	中世か
53	土師器	高杯	SK19	口径22cm	杯部有段	古墳中期
54	〃	杯	〃	口径9cm	口縁部内湾	〃
55	〃	〃	〃	口径15cm	口縁部外反	古墳後期
56	〃	高杯	〃	台径12cm	脚端部開く	古墳中期
57	〃	甕	〃	底径3.5cm	小さい平底	〃
58	須恵器	高杯	〃	口径13cm	立ち上がり低い、口縁脚部に透かし	飛鳥前期

報告書抄録

ふ り が な	さくらまちいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	桜町遺跡発掘調査報告書
副 書 名	縄文遺構編Ⅰ　弥生・古墳・古代・中世編Ⅱ
巻　　次	
シリーズ名	小矢部市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第53冊
編 著 者 名	久々忠義　塚田一成　中井真夕
編 集 機 関	小矢部市教育委員会
所　在　地	〒932－8611　富山県小矢部市本町１番１号
発行年月日	西暦2004年３月31日

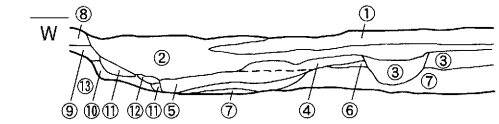
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
さくらまち 桜町	おやべしさくらまち 小矢部市桜町 なかで・ふなおか 中出・舟岡	16209	209021	36° 41′ 00″	136° 52′ 40″	19870520～ 19871110	3500	道路（国道８号小矢部バイパス）建設に伴う事前調査
						19880509～ 19881227	2600	
						19900626～ 19901016	1270	
						19960422～ 19970124	同上継続	
						19980519～ 19981225	同上継続	
						19990401～ 20000128	2752	
						20000421～ 20001222	同上継続	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
桜町	散布地	縄文時代早期・前期	なし	縄文土器・玦状耳飾り	
	食料･木器加工場	縄文時代中期～後期初頭	川２・焼土21・木柱根15・土坑194・埋甕７木組み及び木材集中箇所22・土器溜まり５	縄文土器･石器･斧柄･弓･網物･貫穴やえつり穴などの加工のある柱材・板材・柱根	水場木組みの木材は建築材が転用されたものと考えられている。
	散布地	縄文時代後期・晩期	なし	縄文土器	
	散布地	弥生前期･中期･後期・終末期	なし	弥生土器	
	生産地	古墳時代前期・	樹皮列を伴う木組み１・川１	土師器・鍬	
	散布地	古墳時代中期・後期	なし	土師器	
	不明	飛鳥時代前期	土坑１	土師器・須恵器・製塩土器・土製支脚	
	散布地	奈良時代	なし	土師器・須恵器	
	生産地	平安時代前期・後期	水路４	土師器･須恵器･灰釉陶器･土錘･羽口・るつぼ	
		中世・近世	掘立柱建物１・畠１・水路１・土坑１・道路１	土師器・珠洲・加賀・青磁・瀬戸･美濃･唐津･越中瀬戸･瓦器･銭貨・滑石・こうがい	

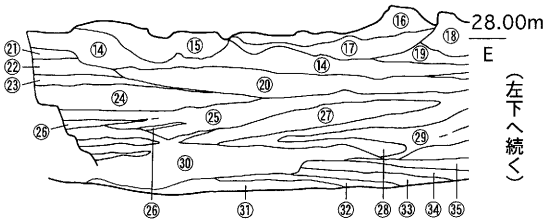


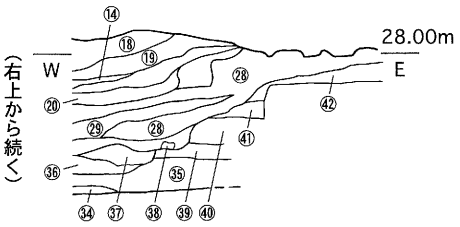
第6図　中出地区遺構図(1) 遺構全体図・SX01

舟岡地区第6調査区



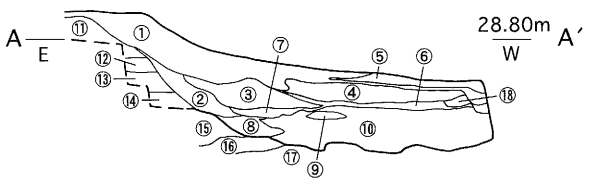
中出地区SD06北壁





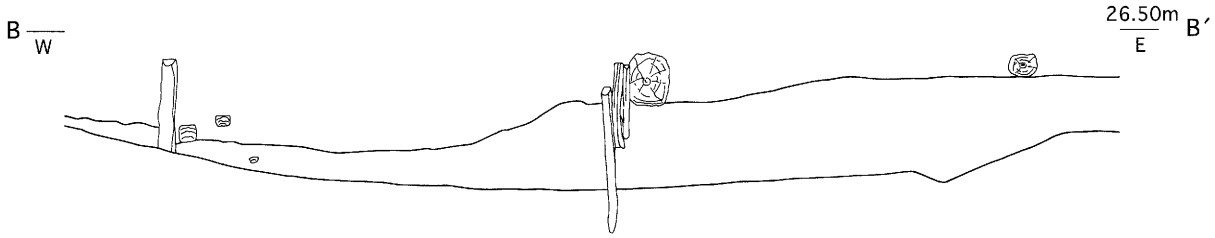
① 青灰色細砂
② 黒褐色土（炭含む）
③ 暗青灰色砂
④ 暗灰色粘質土
⑤ 暗青灰色シルト
⑥ 青灰色砂
⑦ 黄褐色砂礫
⑧ 黄色砂礫
⑨ 黒色シルト
⑩ 青灰色砂
⑪ 黄色砂礫（黒色粘土ブロック混ざる）
⑫ 青灰色粘土ブロック
⑬ 暗青灰色粘土
⑭ 青灰色粗砂
⑮ 暗黄色砂礫
⑯ 黄色砂礫
⑰ 黄灰色砂
⑱ 白黄色砂礫
⑲ 黄色砂礫
⑳ 暗灰色粗砂
㉑ 黒青灰色粗砂
㉒ 黒青灰色粗砂
㉓ 黒灰色粘質土
㉔ 暗青灰色砂
㉕ 暗青灰色砂
㉖ 黒色細砂
㉗ 青灰色砂
㉘ 黒灰色細砂
㉙ 青灰色細砂
㉚ 青灰色砂
㉛ 青灰色砂
㉜ 黒色土
㉝ 青灰色砂
㉞ 黒色土
㉟ 青灰色砂
㊱ くさり礫
㊲ 砂礫
㊳ 黒色粘質土
㊴ 黒灰色細砂
㊵ 青灰色砂（φ1～2cm）
㊶ 黒色粘質土
㊷ 青灰色砂

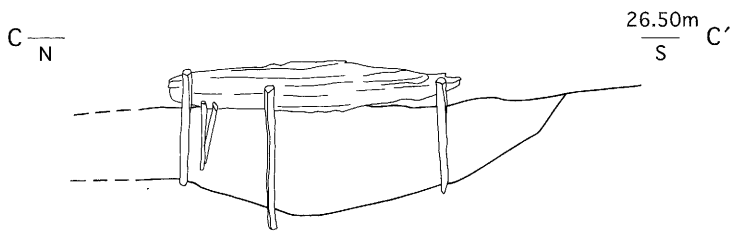
SD06



① 黒灰色細砂
② 黒青灰色砂
③ 青灰色砂
④ 青灰色砂
⑤ 褐色砂
⑥ 褐色砂（有機物含む）
⑦ 青灰色粗砂（トチの実含む）
⑧ 青灰色粗砂
⑨ 青灰色粗砂
⑩ 青灰色砂礫
⑪ 青灰色砂
⑫ 黒色細砂
⑬ 暗灰色砂
⑭ 暗灰色細砂
⑮ くさり礫
⑯ 青灰色砂
⑰ 黒色粘質土
⑱ 青灰色砂

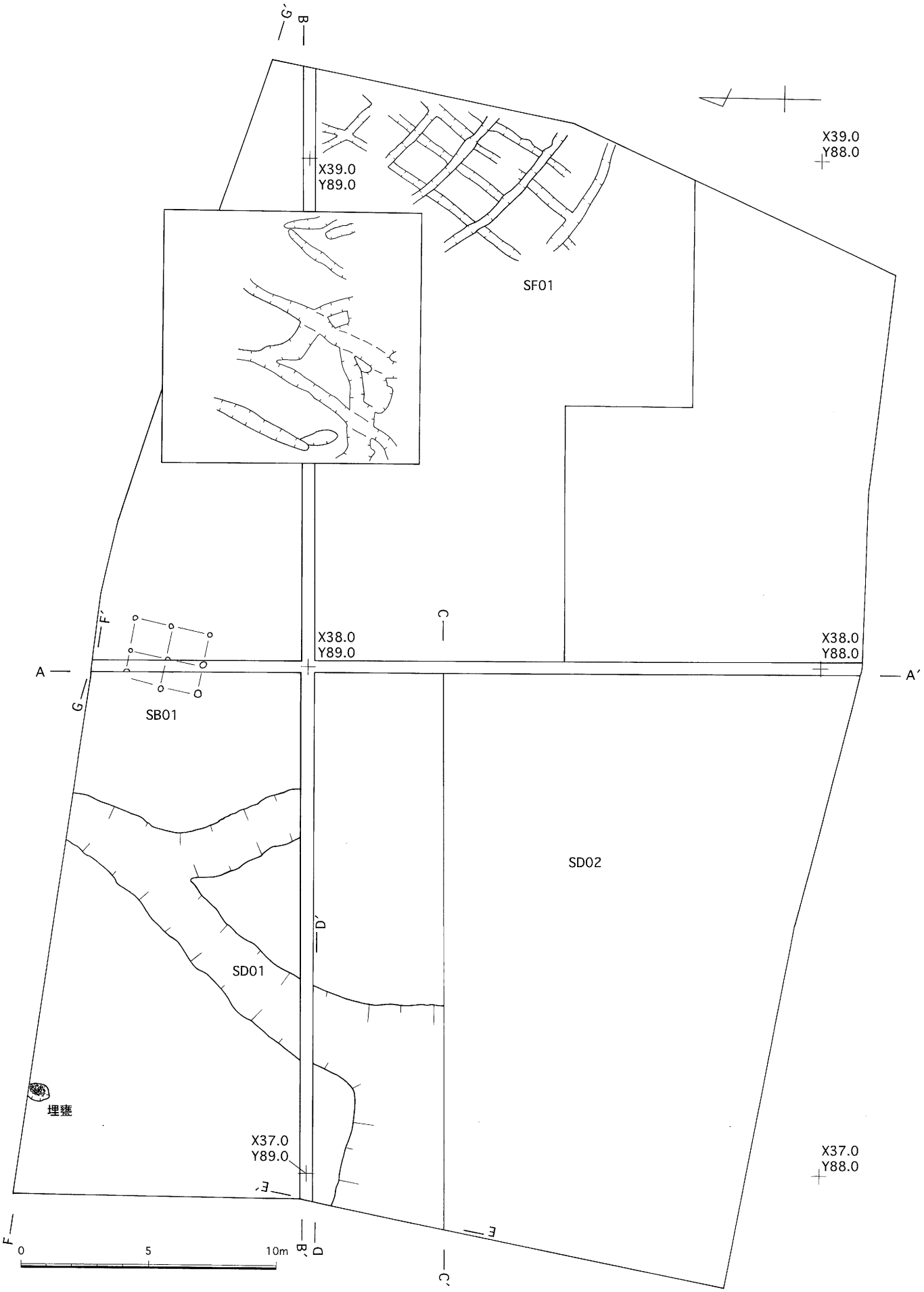
0 2 4 6m



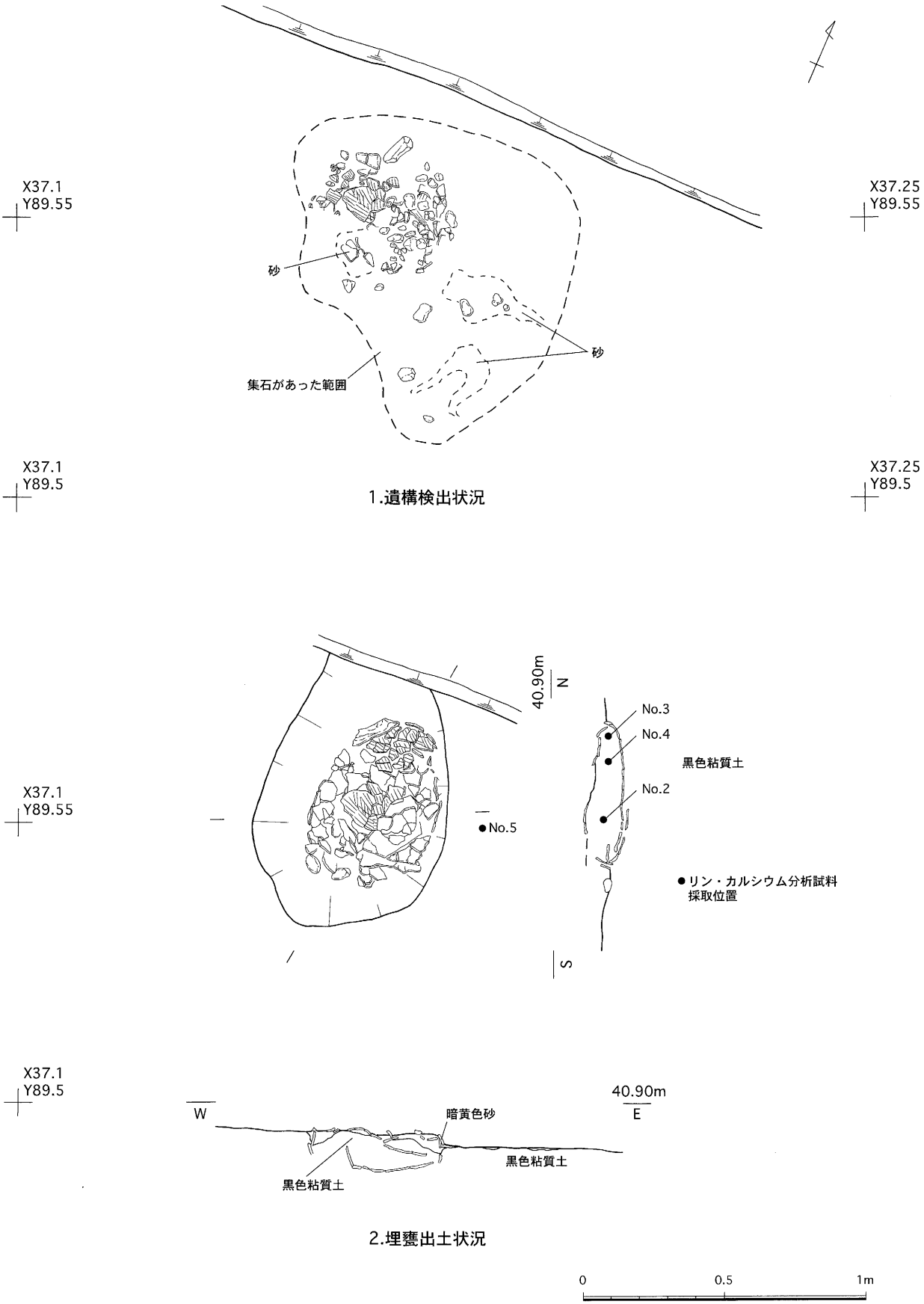


0 1 2m

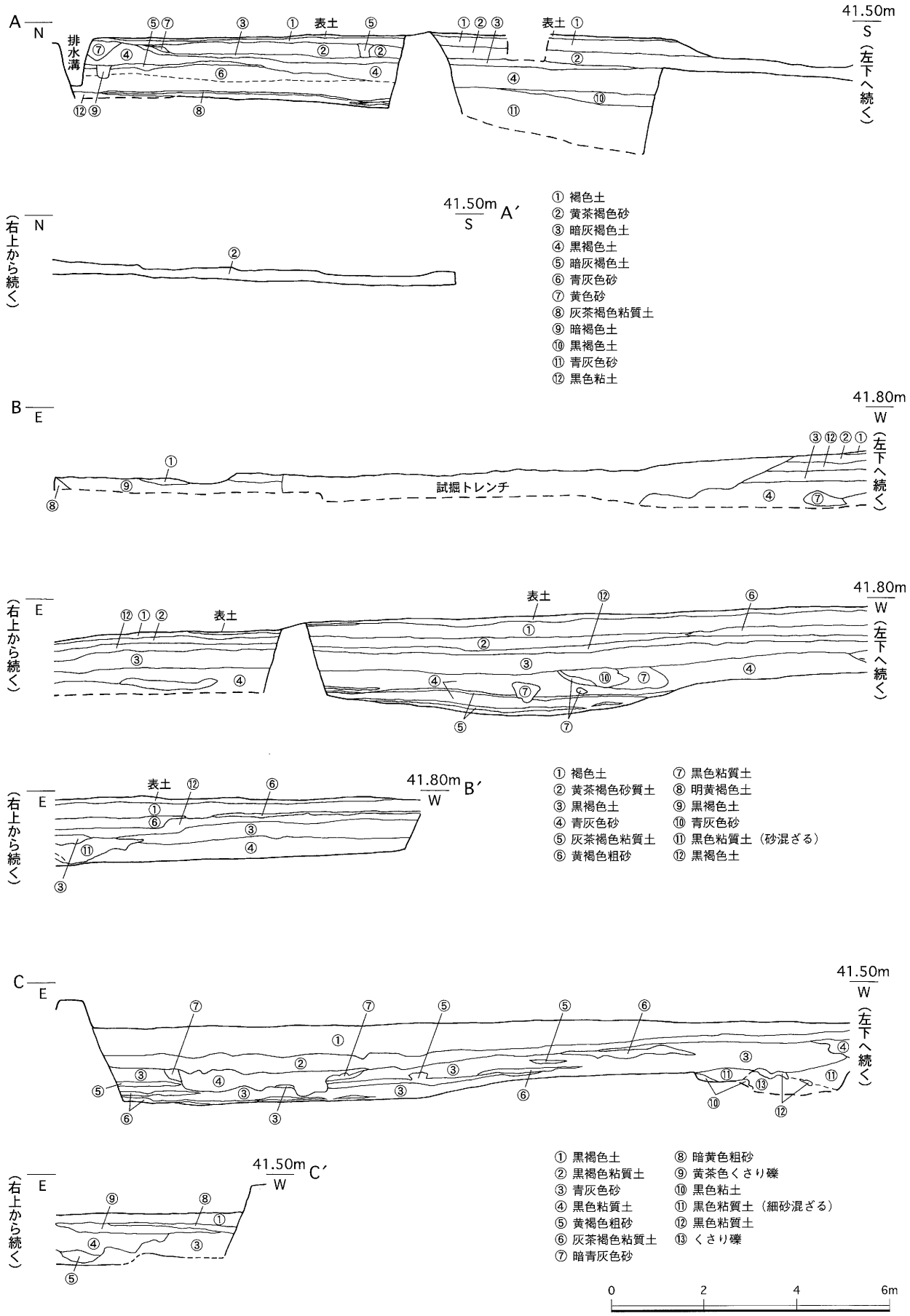
第7図　中出地区遺構図(2) 土層・SX01断面図



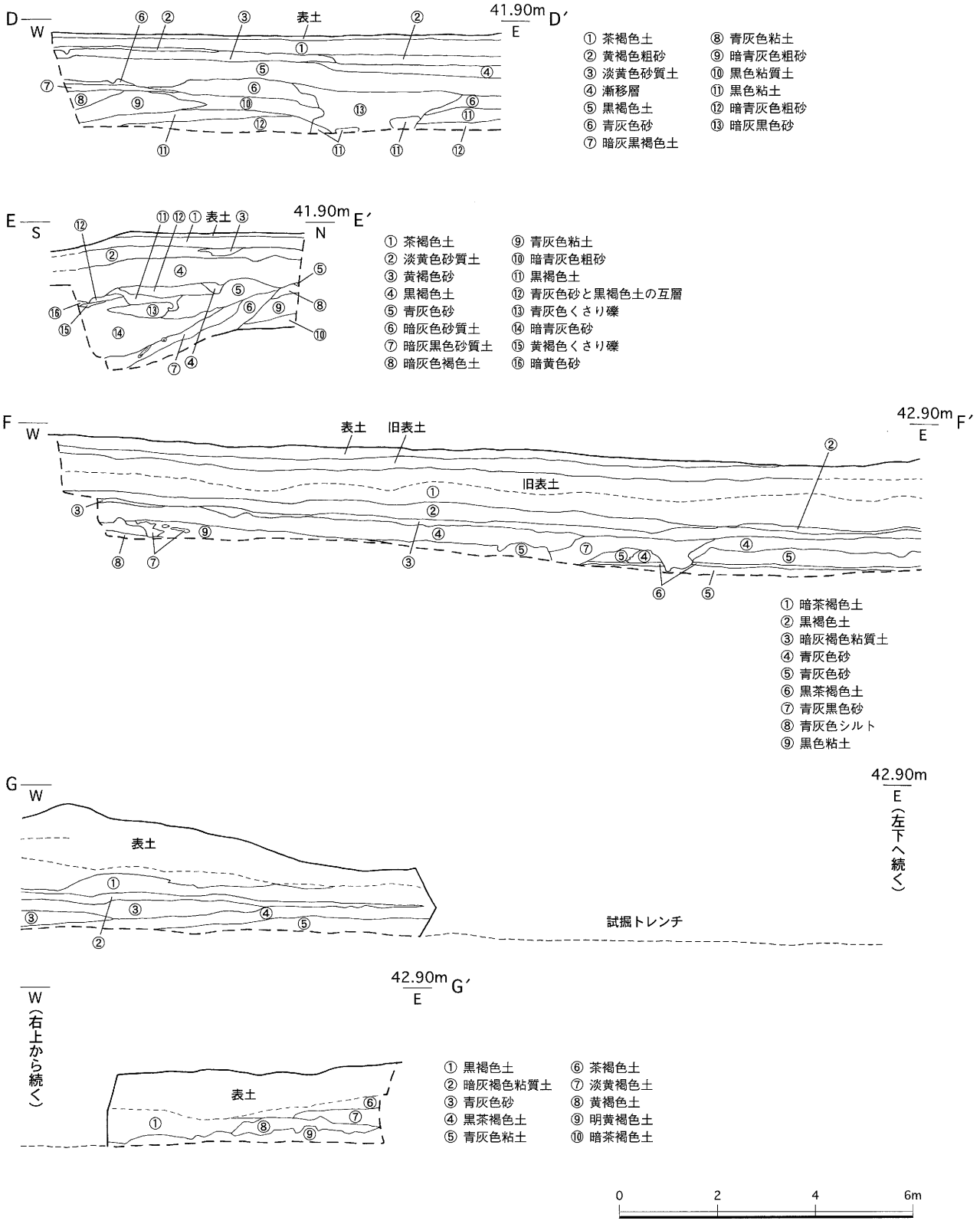
第8図　第10調査区遺構図(1)　遺構全体図



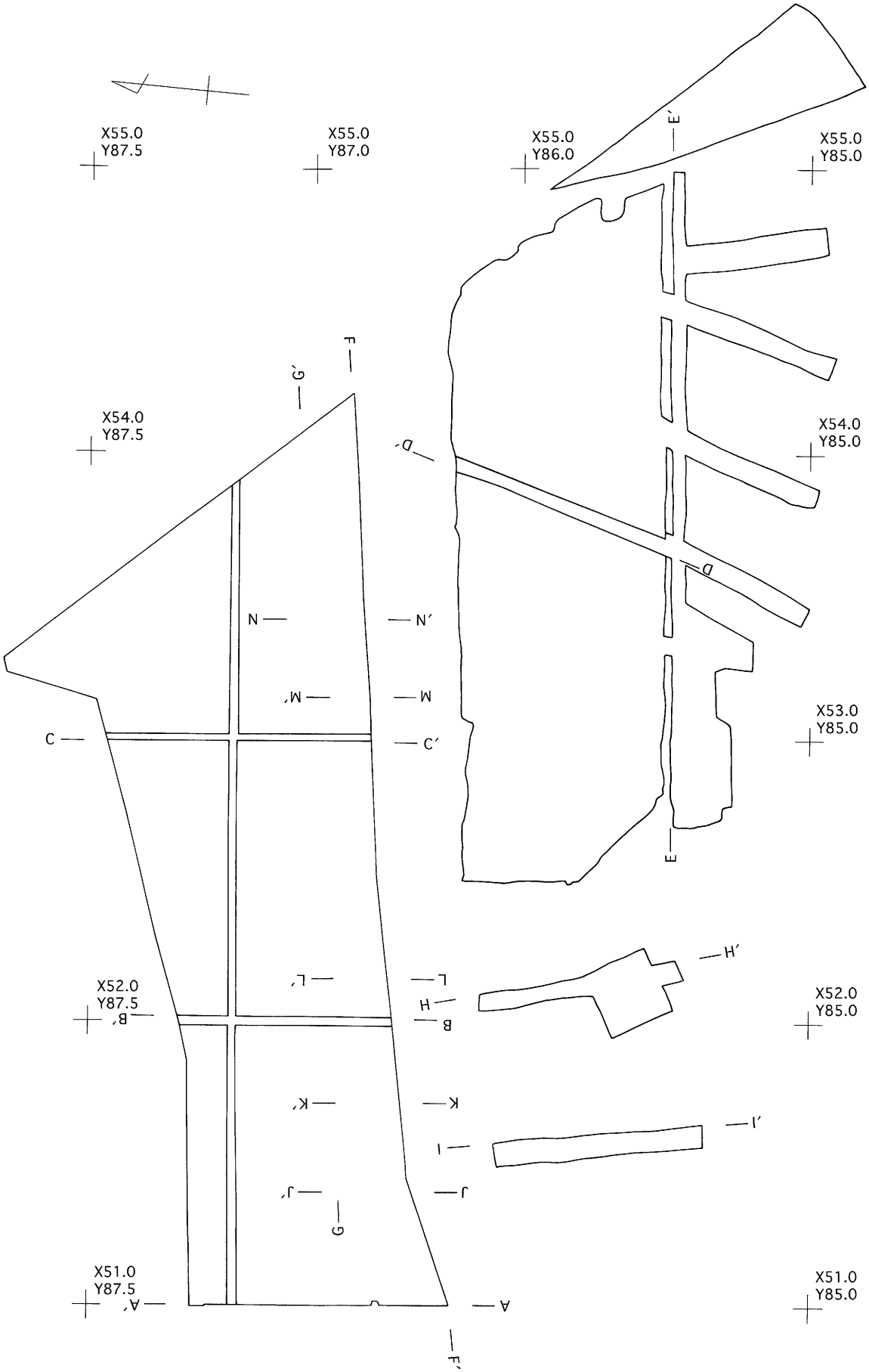
第9図　第10調査区遺構図(2)　埋甕



第10図　第10調査区遺構図(3) 土層

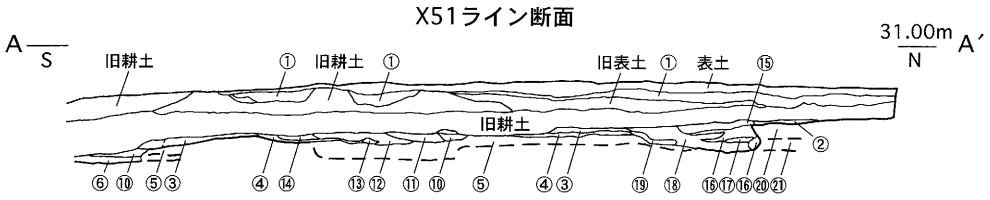


第11図　第10調査区遺構図(4)　土層



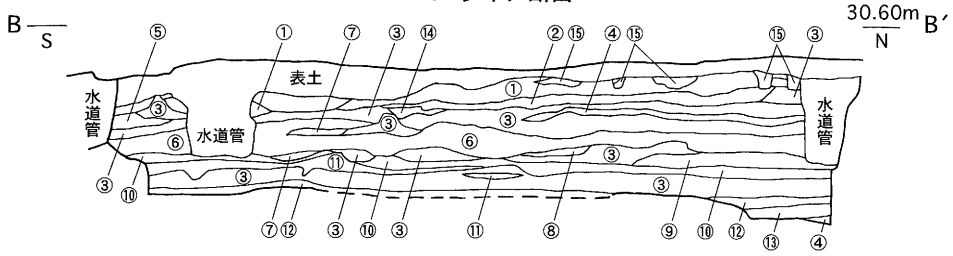
第12図　第1・6調査区遺構図(1) 土層位置図

X51ライン断面



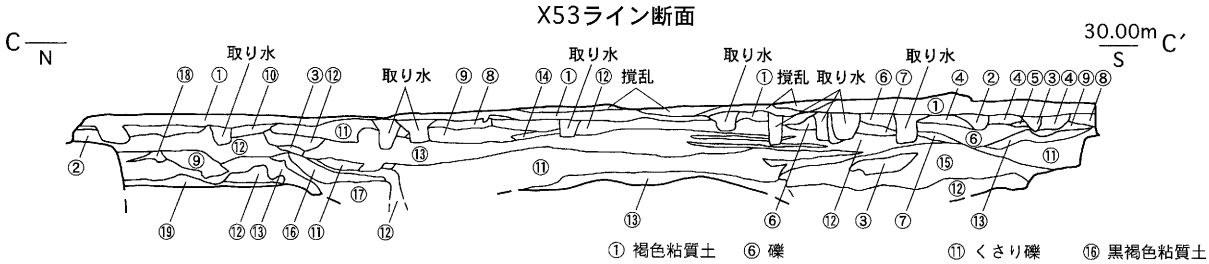
① 明黄色砂
② 白色細砂
③ 青灰色砂
④ 灰色粘質土（有機物含む）
⑤ 青灰色粗砂
⑥ 暗青灰色砂
⑦ 黒色粘質土
⑧ 青灰色粘土
⑨ 青灰色粘土
⑩ 暗灰色粘質砂（有機物含む）
⑪ 暗灰褐色砂礫（川原石φ5～10cm）
⑫ 暗灰黄褐色砂礫（粘土ブロックφ2～5cm）
⑬ 暗青灰色砂（有機物含む）
⑭ 暗黄褐色粘土（粘土ブロックφ2～5cm）
⑮ 暗青灰色砂（有機物含む）
⑯ 灰色砂（有機物含む）
⑰ 黄褐色粗砂
⑱ 黄褐色砂礫
⑲ 青灰色粘土
⑳ 黒色粘土（炭含む）
㉑ 暗青灰色粘土

X52ライン断面



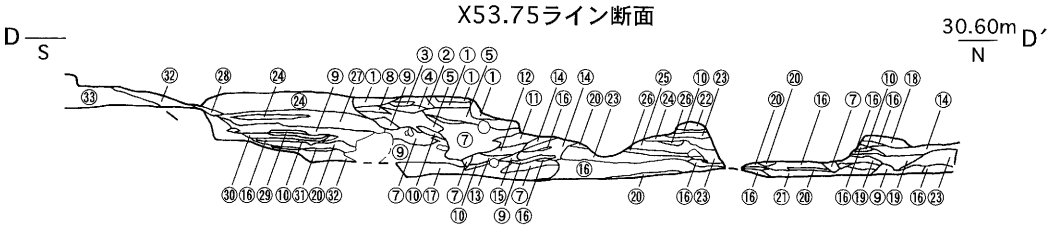
① 黄褐色粘質細砂
② 黄褐色細砂
③ 青灰色粗砂
④ 青灰色細砂
⑤ 礫
⑥ 砂礫
⑦ くさり礫（青灰色）
⑧ 暗灰色粘質土
⑨ 青灰色粗砂（くさり礫混ざる）
⑩ 暗褐色砂（石器含む）
⑪ 青灰色砂（くさり礫混ざる）
⑫ 暗灰色砂質土
⑬ 青灰色粘土
⑭ 赤褐色砂礫
⑮ 暗褐色土

X53ライン断面



① 褐色粘質土
② 赤褐色礫
③ 青灰色細砂
④ 暗青褐色粗砂
⑤ 褐色粗砂
⑥ 礫
⑦ 赤褐色粗砂
⑧ 赤褐色粗砂（礫混ざる）
⑨ 暗青灰色粗砂
⑩ 褐色土
⑪ くさり礫
⑫ 青灰色粗砂
⑬ 砂礫
⑭ 黄褐色粗砂
⑮ 暗灰色砂質土
⑯ 黒褐色粘質土
⑰ 暗青灰色細砂
⑱ 青灰色砂
⑲ 青灰色粘質土

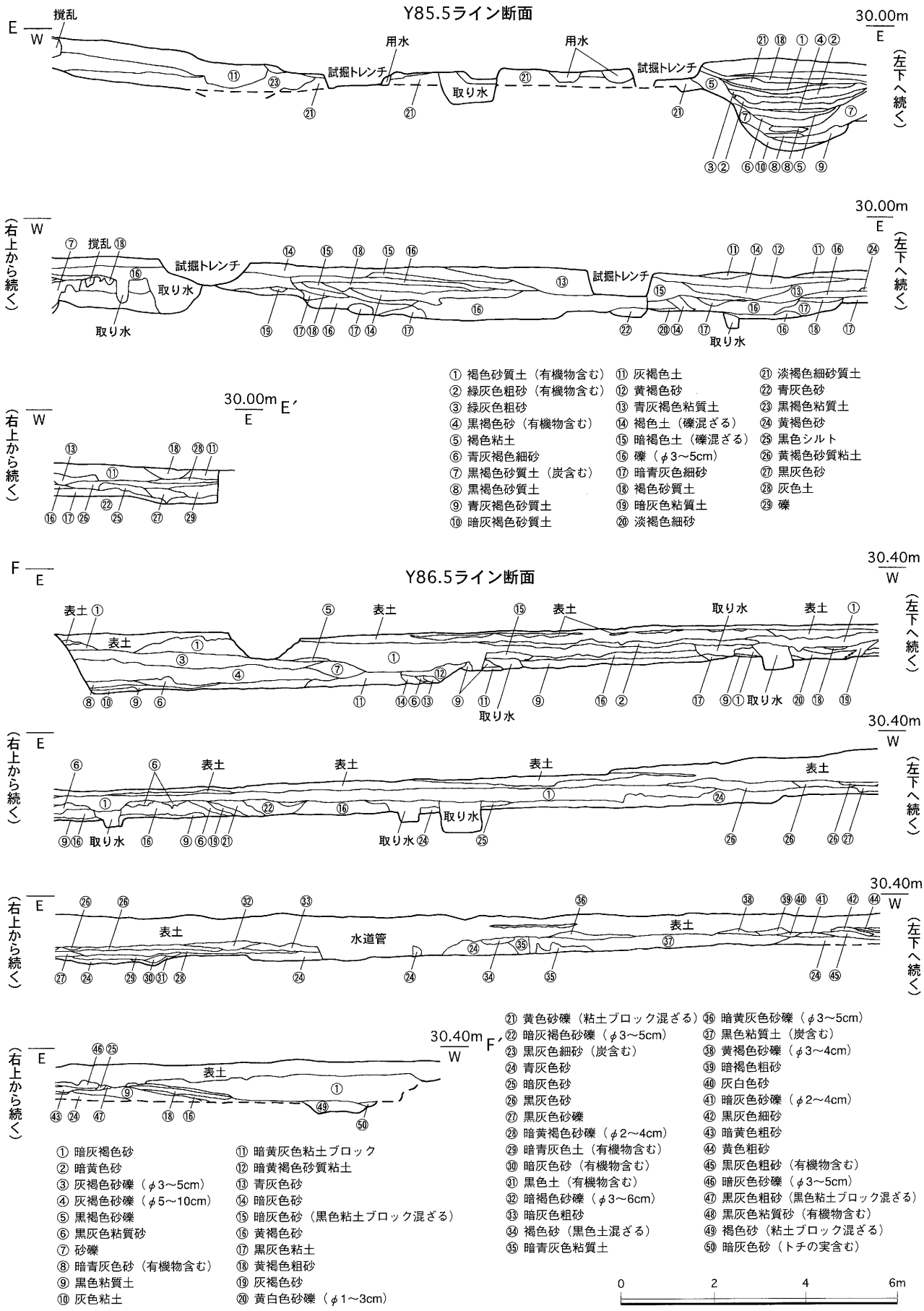
X53.75ライン断面



① 褐色土
② 黄褐色細砂
③ 暗褐色細砂（トチの実含む）
④ 黄褐色細砂（トチの実含む）
⑤ 黄褐色粗砂（トチの実含む）
⑥ 暗黄褐色砂（トチの実含む）
⑦ くさり礫
⑧ 暗青灰色砂質土
⑨ 青灰色粗砂
⑩ 黄褐色粗砂
⑪ 青灰色細砂（トチの実含む）
⑫ 暗褐色砂質土（トチの実含む）
⑬ 赤褐色粗砂
⑭ 暗青灰色細砂
⑮ 青灰色粗砂（トチの実含む）
⑯ 青灰色細砂
⑰ 礫（土器含む）
⑱ 黄褐色粗砂（くさり礫混ざる）
⑲ 青灰色粗砂（くさり礫混ざる）
⑳ 暗褐色粘質土
㉑ 青灰色砂礫
㉒ 暗青灰色粘土
㉓ 暗青灰色細砂
㉔ 黄褐色砂
㉕ 暗青灰色粗砂（有機物含む）
㉖ 黄褐色粗砂（トチの実含む）
㉗ 暗青灰色砂質土（有機物含む）
㉘ 青灰色砂質土
㉙ 暗青灰色土
㉚ 暗褐色砂質土
㉛ 青灰色粘質土
㉜ 黒褐色粘質土
㉝ 黄褐色粘質土

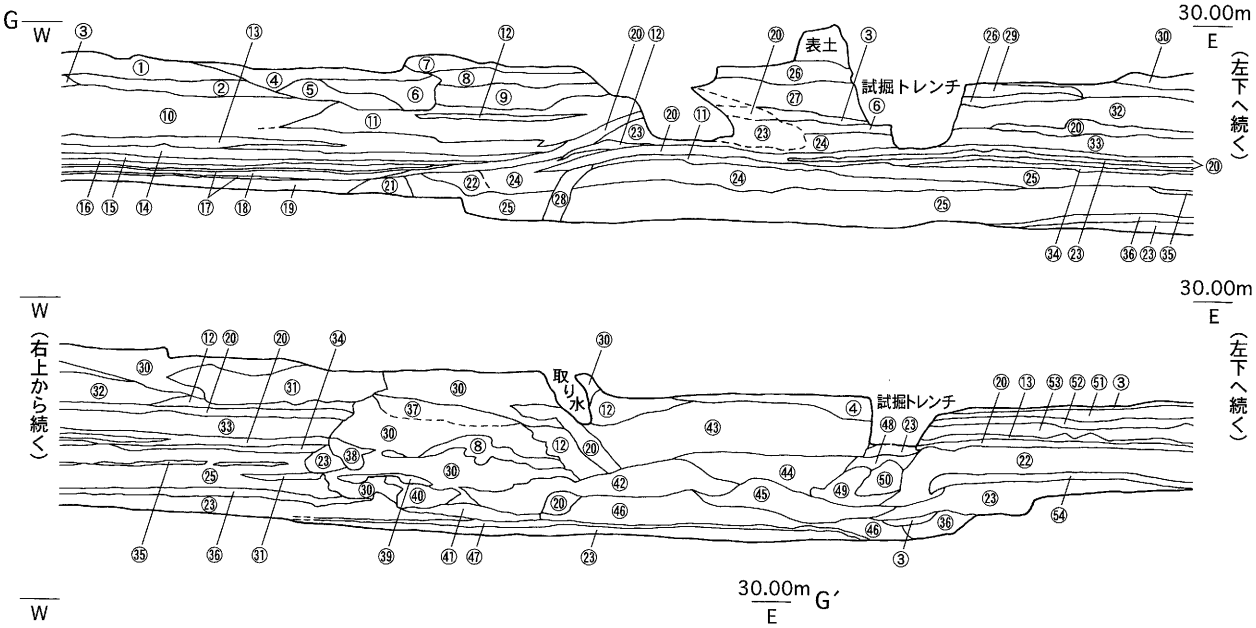
0　2　4　6m

第13図　第1・6調査区遺構図(2) 土層



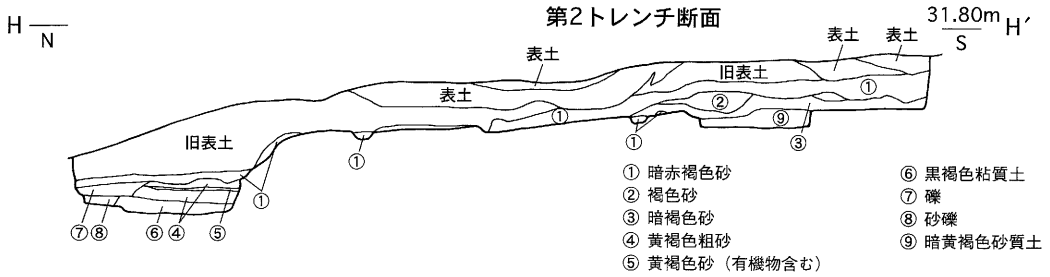
第14図　第1・6調査区遺構図(3) 土層

X86.6ライン断面



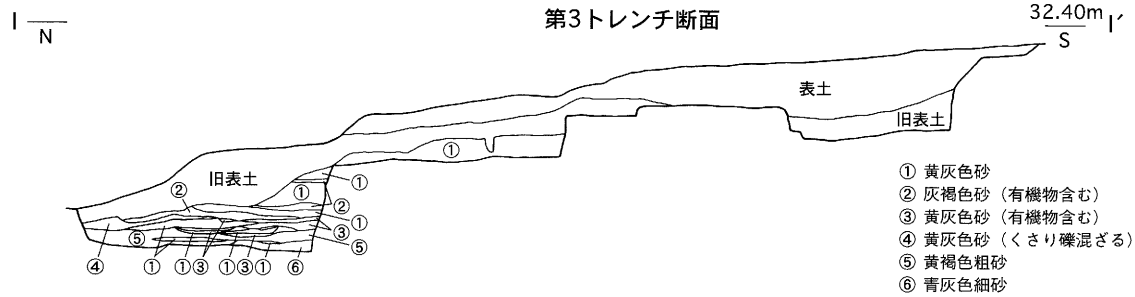
① 明灰褐色砂質土
② 黄色砂礫（円礫、くさり礫混ざる、φ4～5cm）
③ 黒色土
④ 円礫（φ3～5cm）
⑤ 礫（φ2～3cm）
⑥ 砂礫（くさり礫混ざる）
⑦ 黄灰褐色土
⑧ 黒灰褐色砂質土
⑨ 青黄色砂
⑩ 青灰色細砂
⑪ 青灰色粘質土
⑫ 黄色粗砂
⑬ 青黄色粗砂
⑭ 灰褐色シルト
⑮ 明黒褐色粘土
⑯ 暗灰褐色シルト
⑰ 暗茶褐色土（有機物含む）
⑱ 明灰褐色シルト
⑲ 灰黒色粘質土
⑳ 黒色土（シルト）
㉑ 黒色砂質土
㉒ 青灰色粗砂（くさり礫混ざる）
㉓ 青灰色砂
㉔ 青灰色粗砂
㉕ 青灰色細砂
㉖ 白色砂
㉗ 円礫（φ4～5cm）
㉘ 黒灰色土（シルト）
㉙ 礫
㉚ 黄色砂
㉛ 砂礫
㉜ 礫（φ3～10cm）
㉝ 黄色粗砂（くさり礫混ざるφ1～2cm）
㉞ 暗青灰色粘土
㉟ 黄色粗砂礫
㊱ 青灰色砂礫
㊲ 黄色砂（くさり礫混ざる）
㊳ 黒色土（有機物含む）
㊴ 黄色砂礫
㊵ 黒色粘土
㊶ 礫
㊷ くさり礫（有機物含む）
㊸ 白色くさり礫
㊹ くさり礫（φ3～10cm）
㊺ 礫
㊻ 青灰色砂（有機物含む）
㊼ 青灰色粘土
㊽ 黄色粗砂（円礫混ざる）
㊾ くさり礫
㊿ 青灰色粗砂（有機物含む）
51 暗灰褐色土
52 暗灰色砂礫（くさり礫混ざる）
53 黄色砂礫（くさり礫混ざる）
54 黒色粘質土

第2トレンチ断面



① 暗赤褐色砂
② 褐色砂
③ 暗褐色砂
④ 黄褐色粗砂
⑤ 黄褐色砂（有機物含む）
⑥ 黒褐色粘質土
⑦ 礫
⑧ 砂礫
⑨ 暗黄褐色砂質土

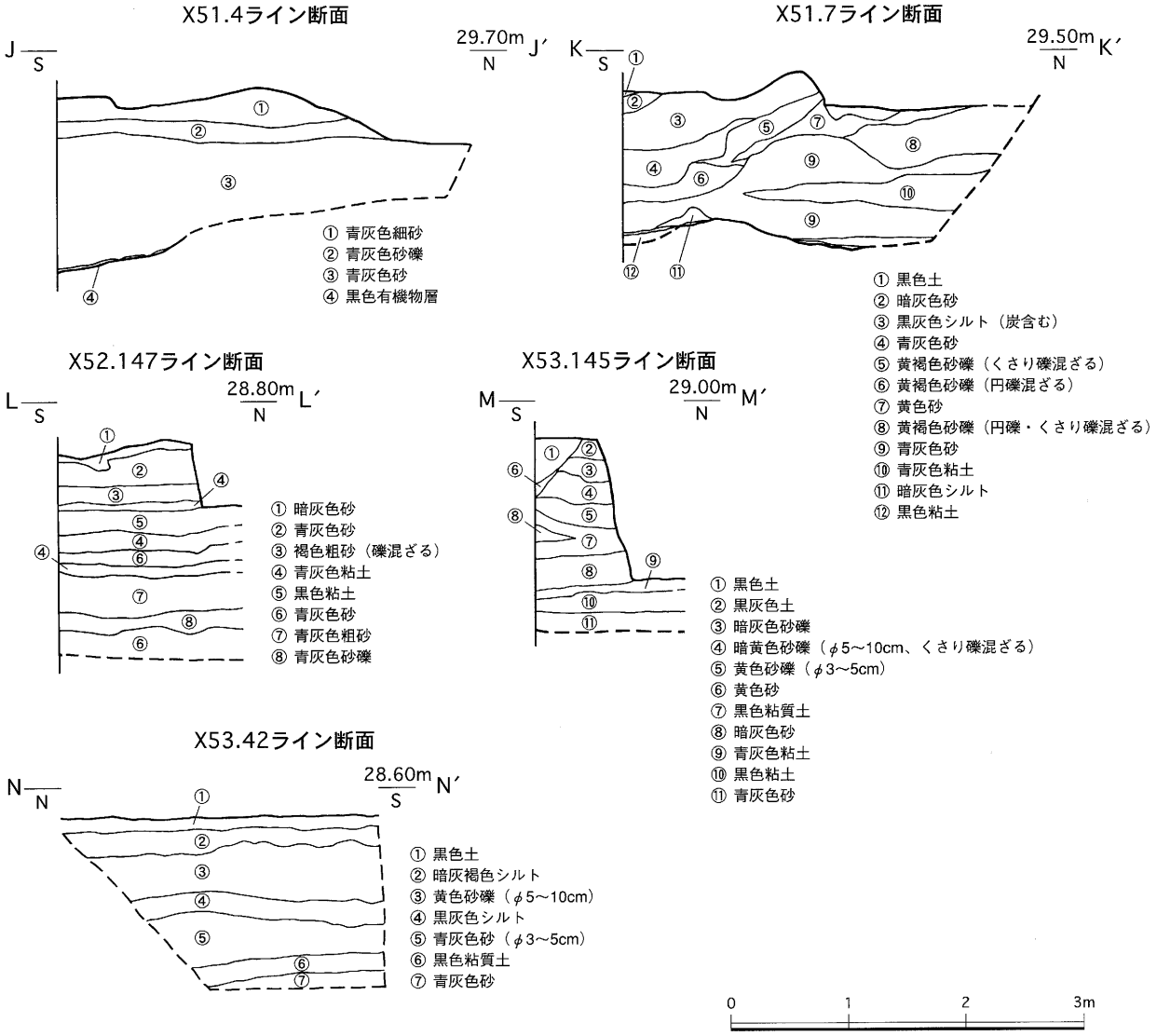
第3トレンチ断面



① 黄灰色砂
② 灰褐色砂（有機物含む）
③ 黄灰色砂（有機物含む）
④ 黄灰色砂（くさり礫混ざる）
⑤ 黄褐色粗砂
⑥ 青灰色細砂

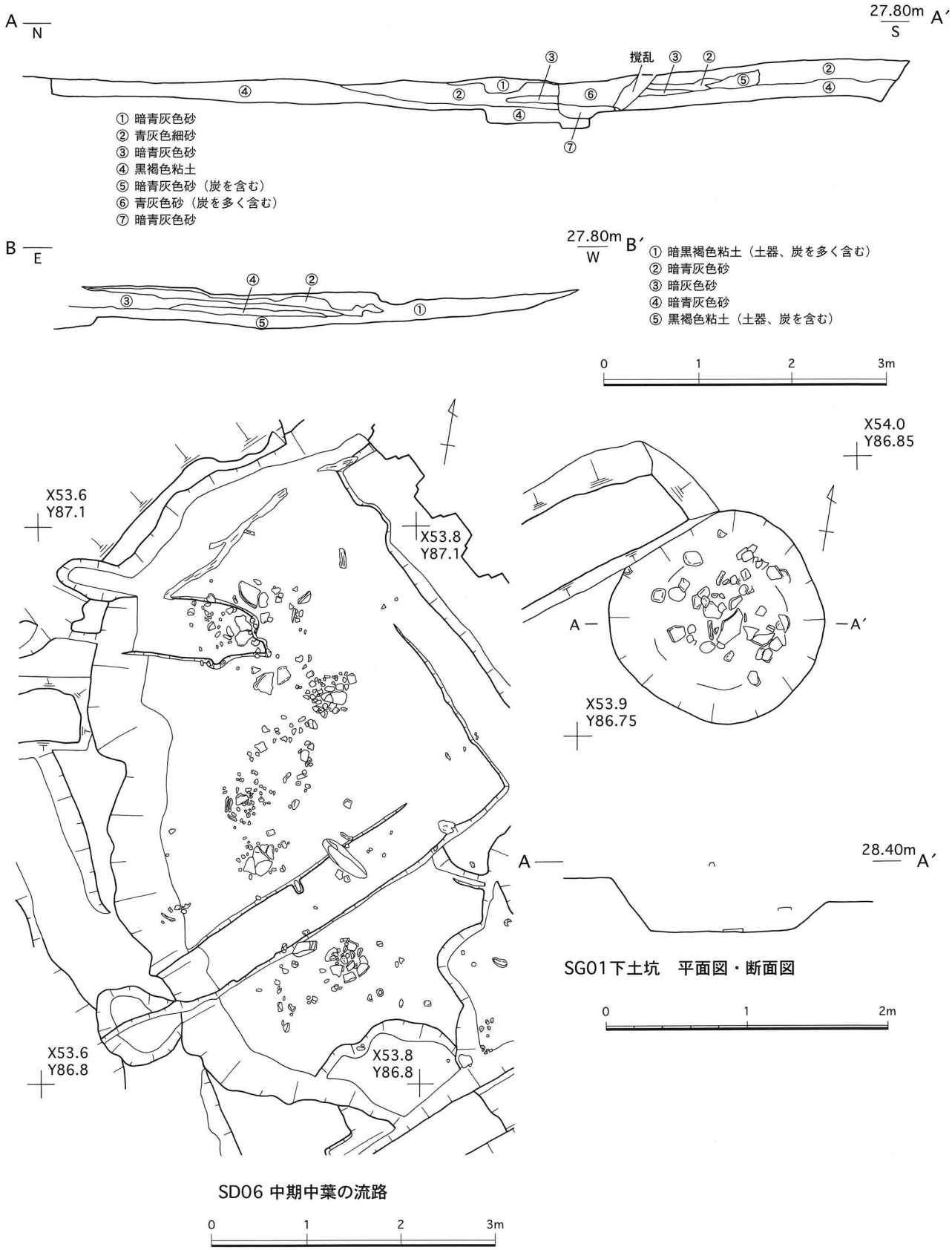
0 2 4 6m

第15図　第1・6調査区遺構図(4) 土層

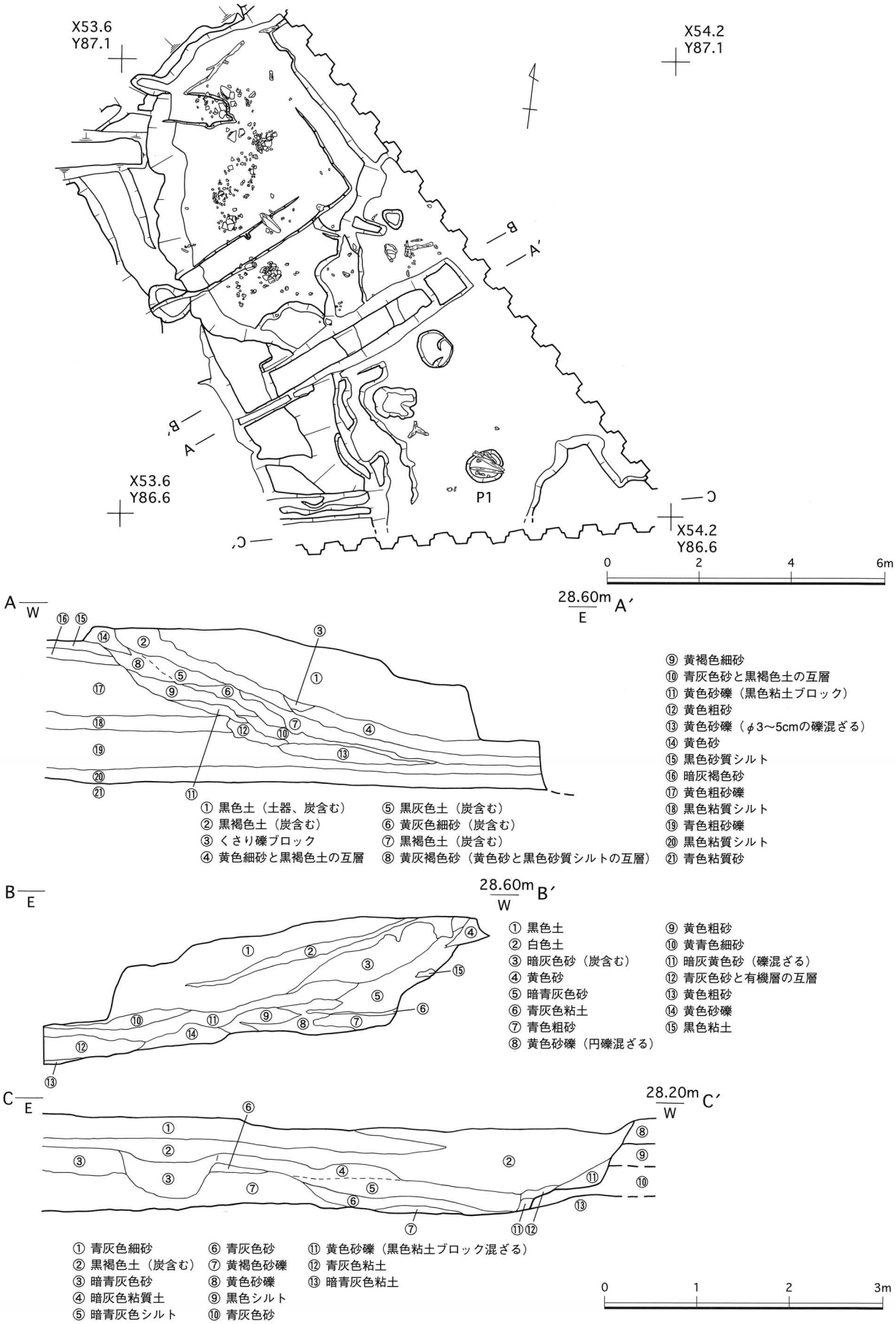


第16図　第1・6調査区遺構図(5) 土層

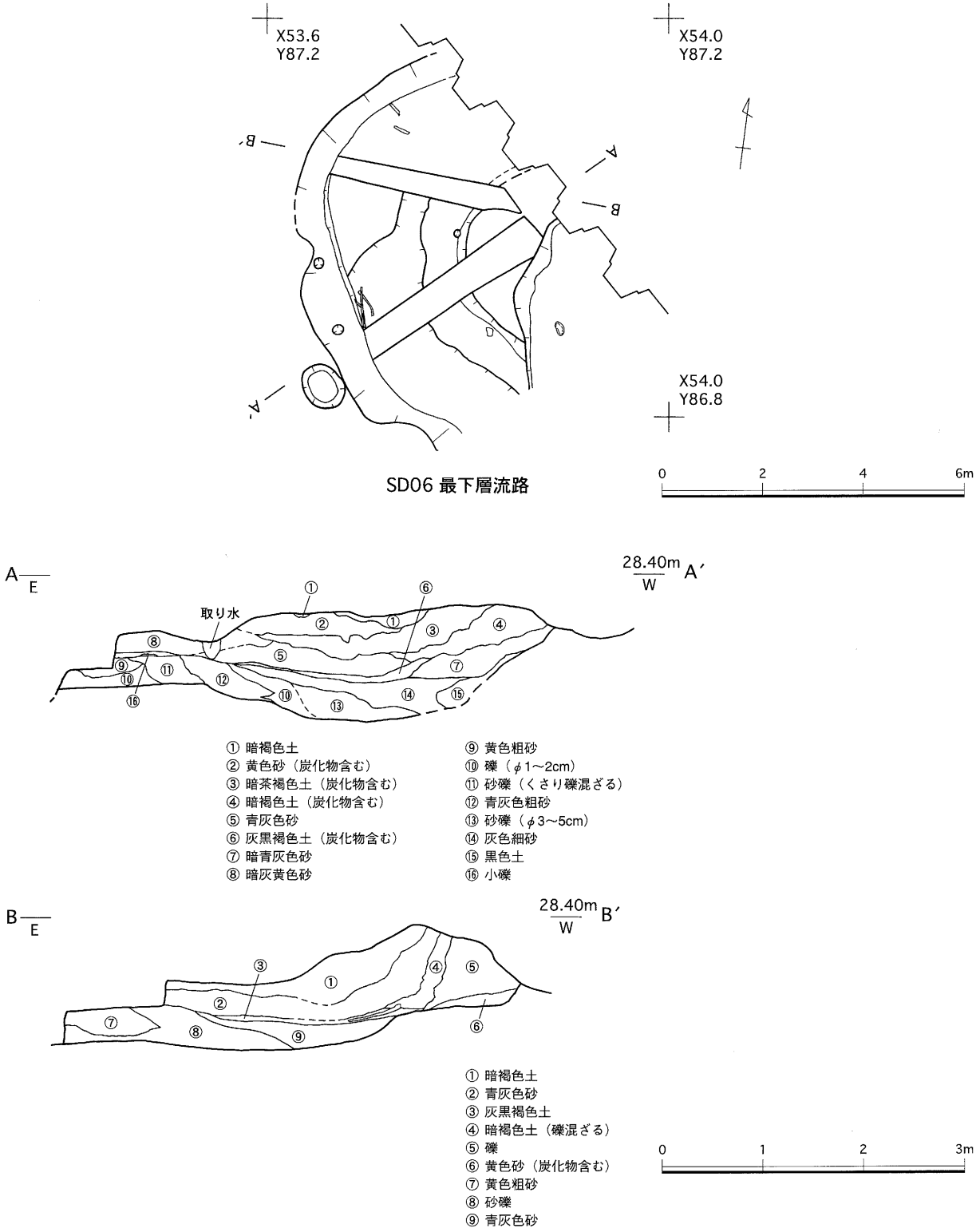
第17図　第6調査区遺構図(1) SG01 上層



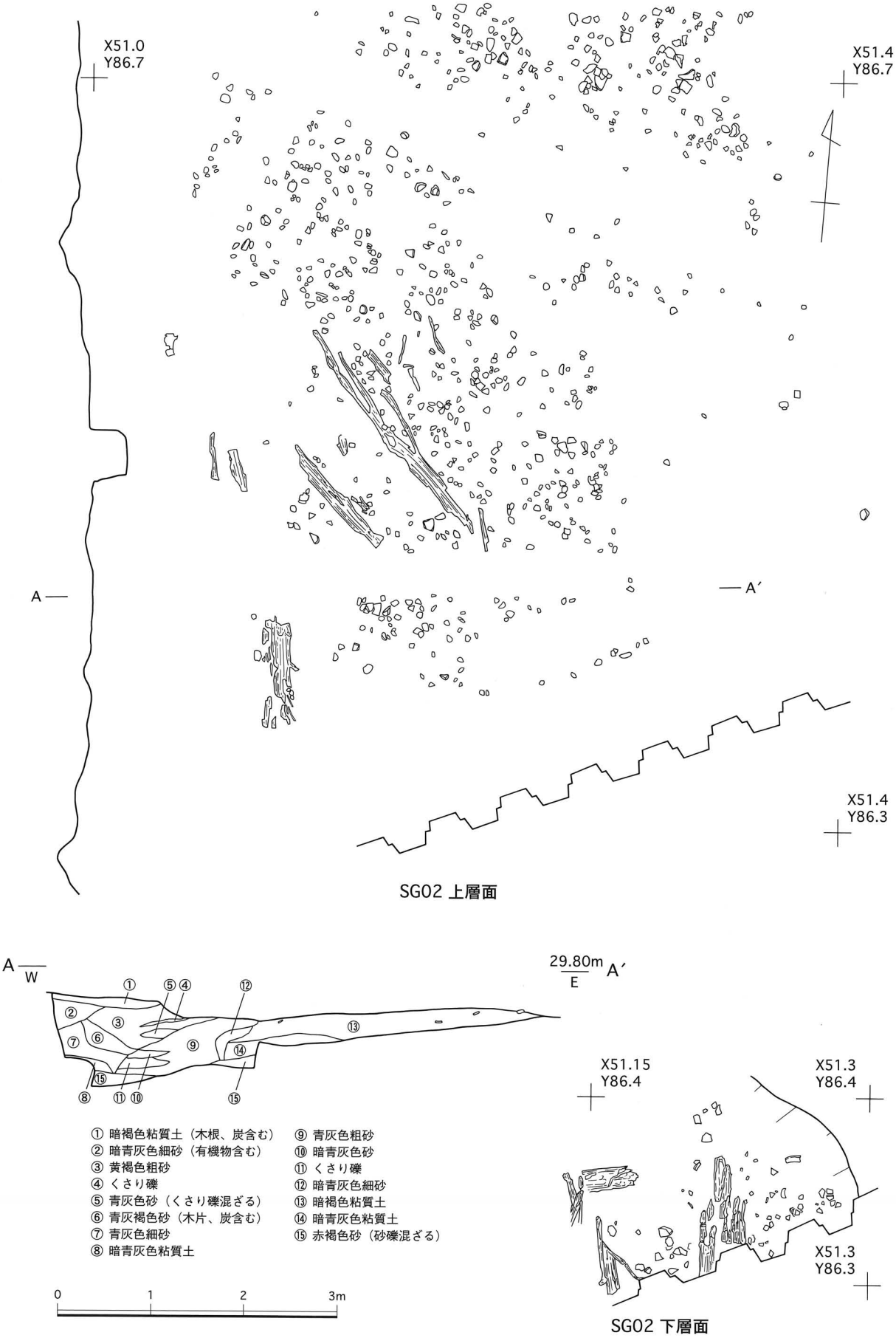
第18図　第6調査区遺構図(2) SG01 下層流路・土層



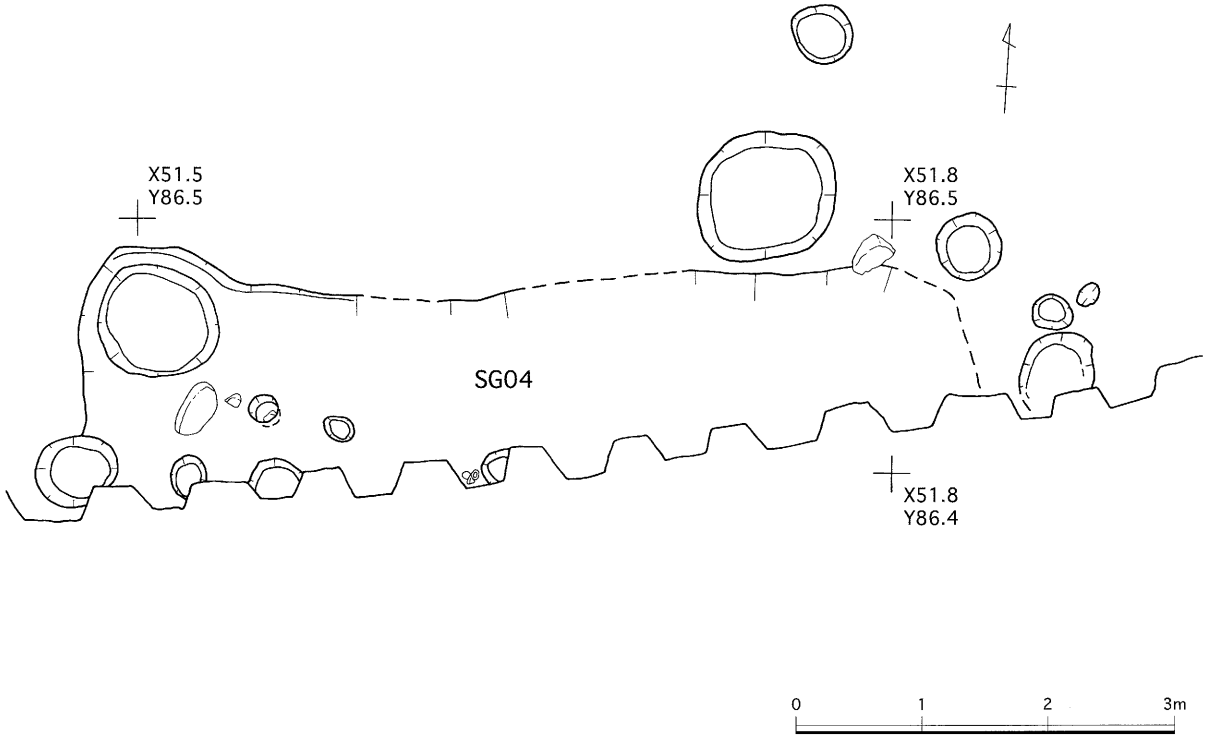
第19図　第6調査区遺構図(3) SG01 土層



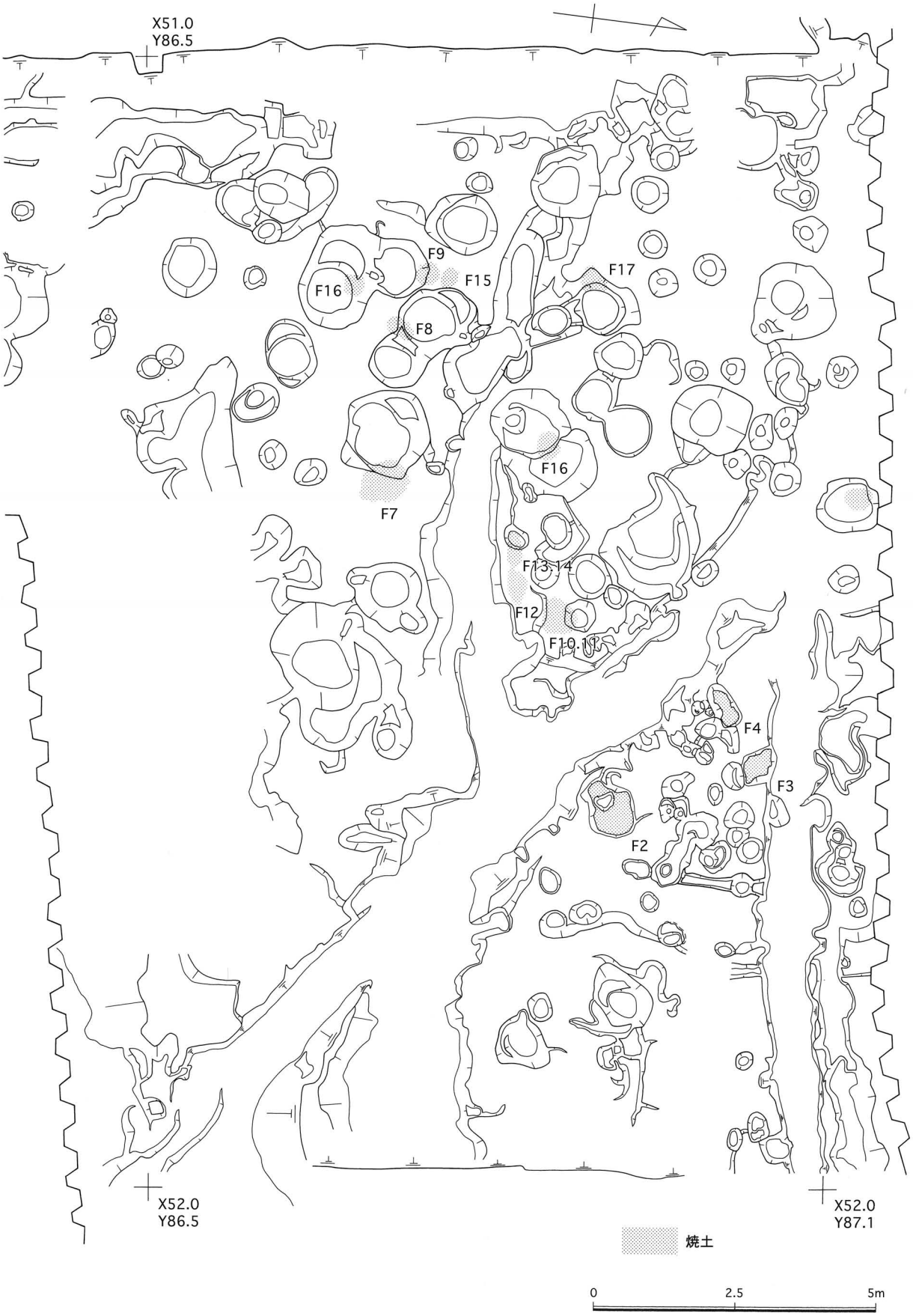
第20図　第6調査区遺構図(4) SG01 最下層流路・土層



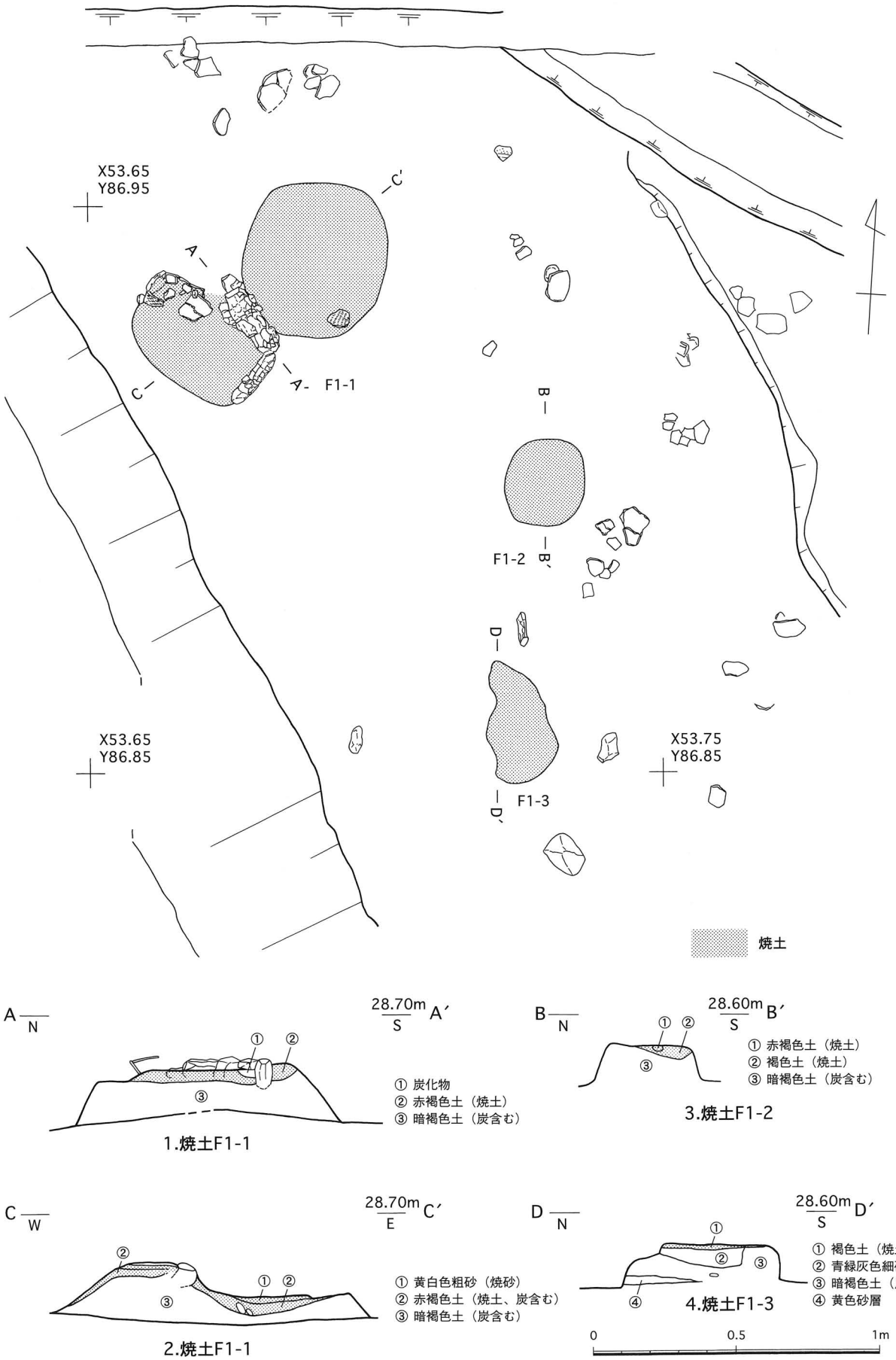
第21図　第6調査区遺構図(5) SG02 遺物出土状況



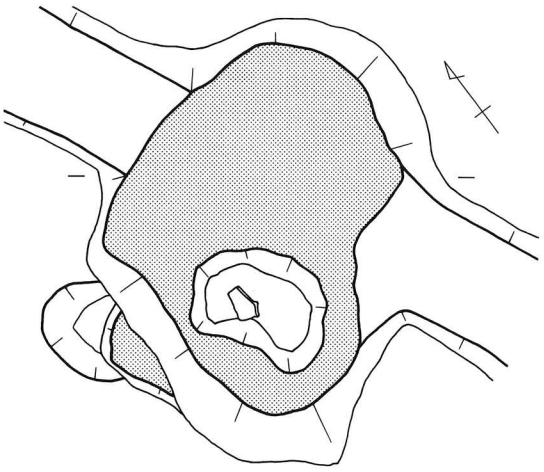
第22図　第6調査区遺構図(6) SG04

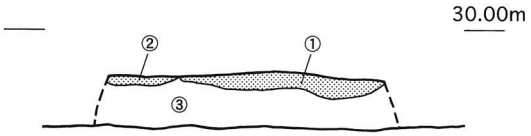


第23図　第6調査区遺構図(7) 焼土位置



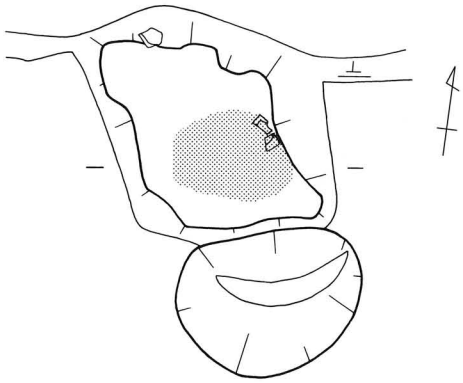
第24図　第6調査区遺構図(8)　焼土F1

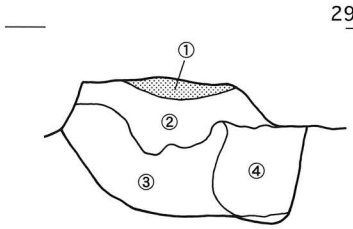




1.焼土F2

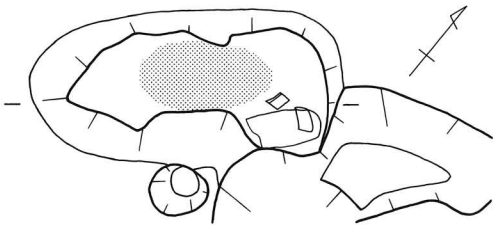
① 赤褐色土（焼土）
② 黒褐色土（焼土）
③ 黒褐色土

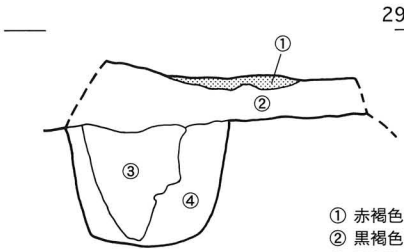




2.焼土F3

① 赤褐色土（焼土）
② 黒褐色土
③ 黄白色砂
④ 黒褐色土（P67）





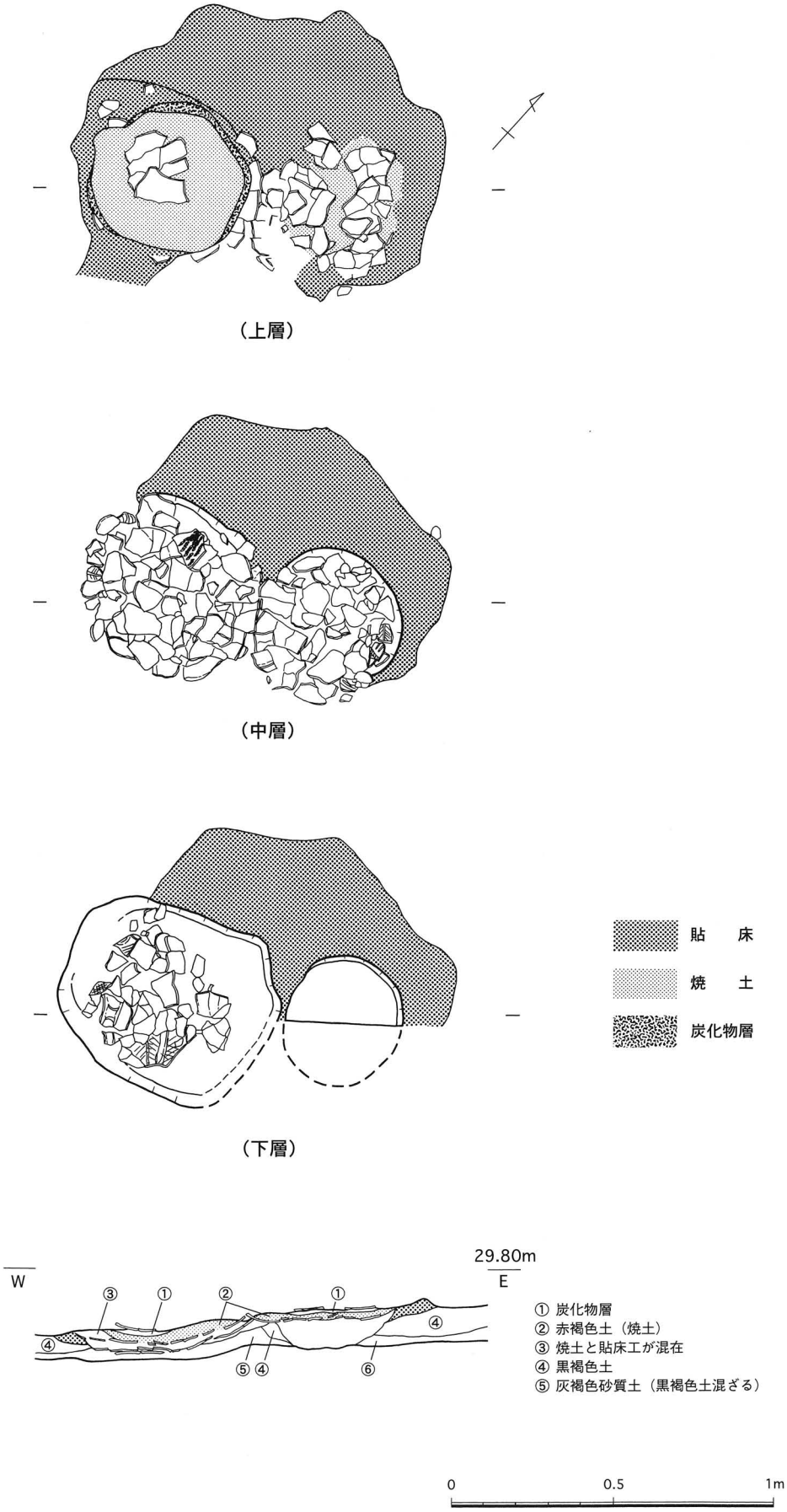
① 赤褐色土（焼土）
② 黒褐色土
③ 黒褐色土（黄白色砂混ざる）
④ 黄白色砂

3.焼土F4

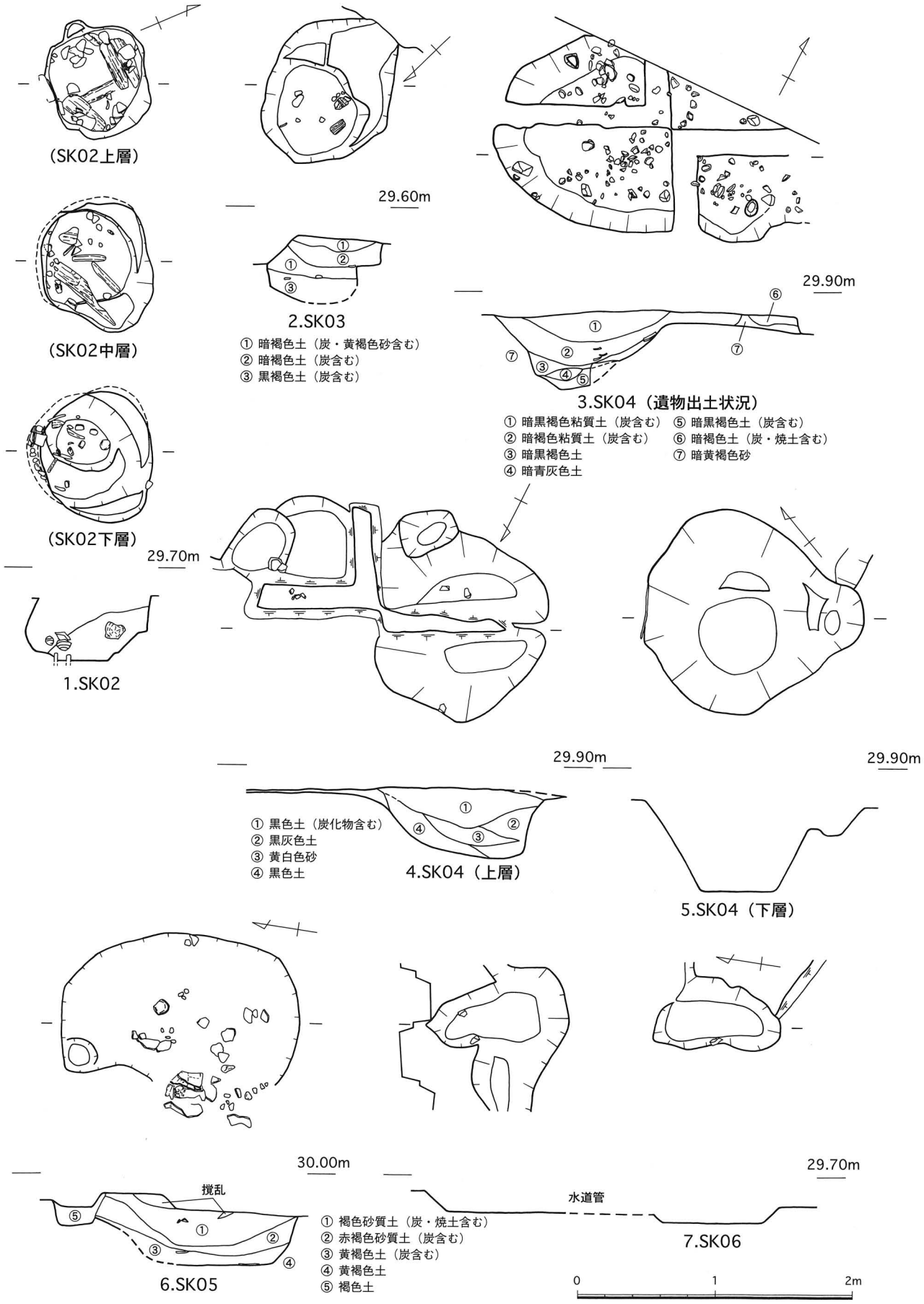
焼土

0　0.5　1m

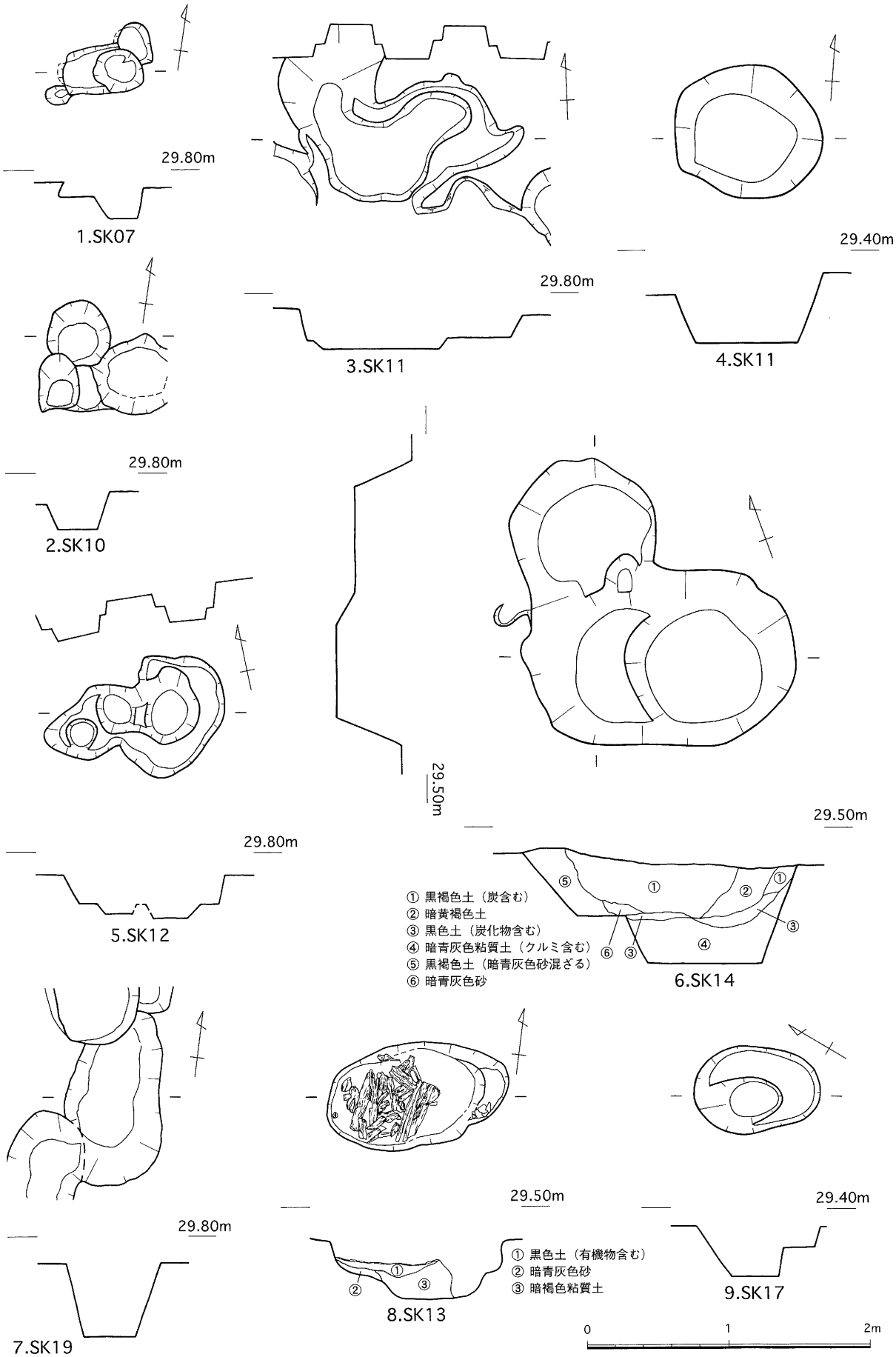
第25図　第6調査区遺構図(9)　焼土F2～4



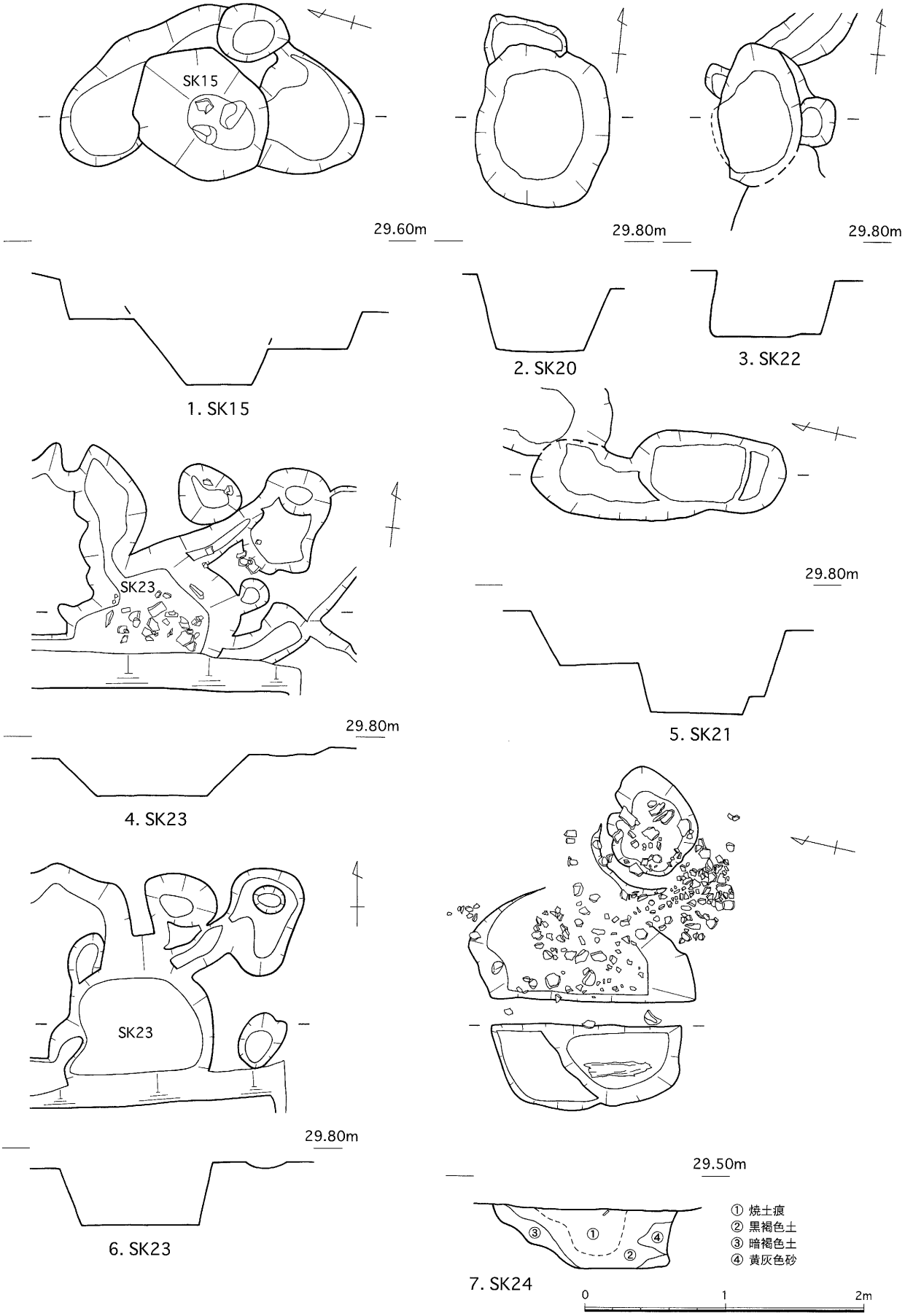
第26図　第6調査区遺構図（10）焼土F10・11



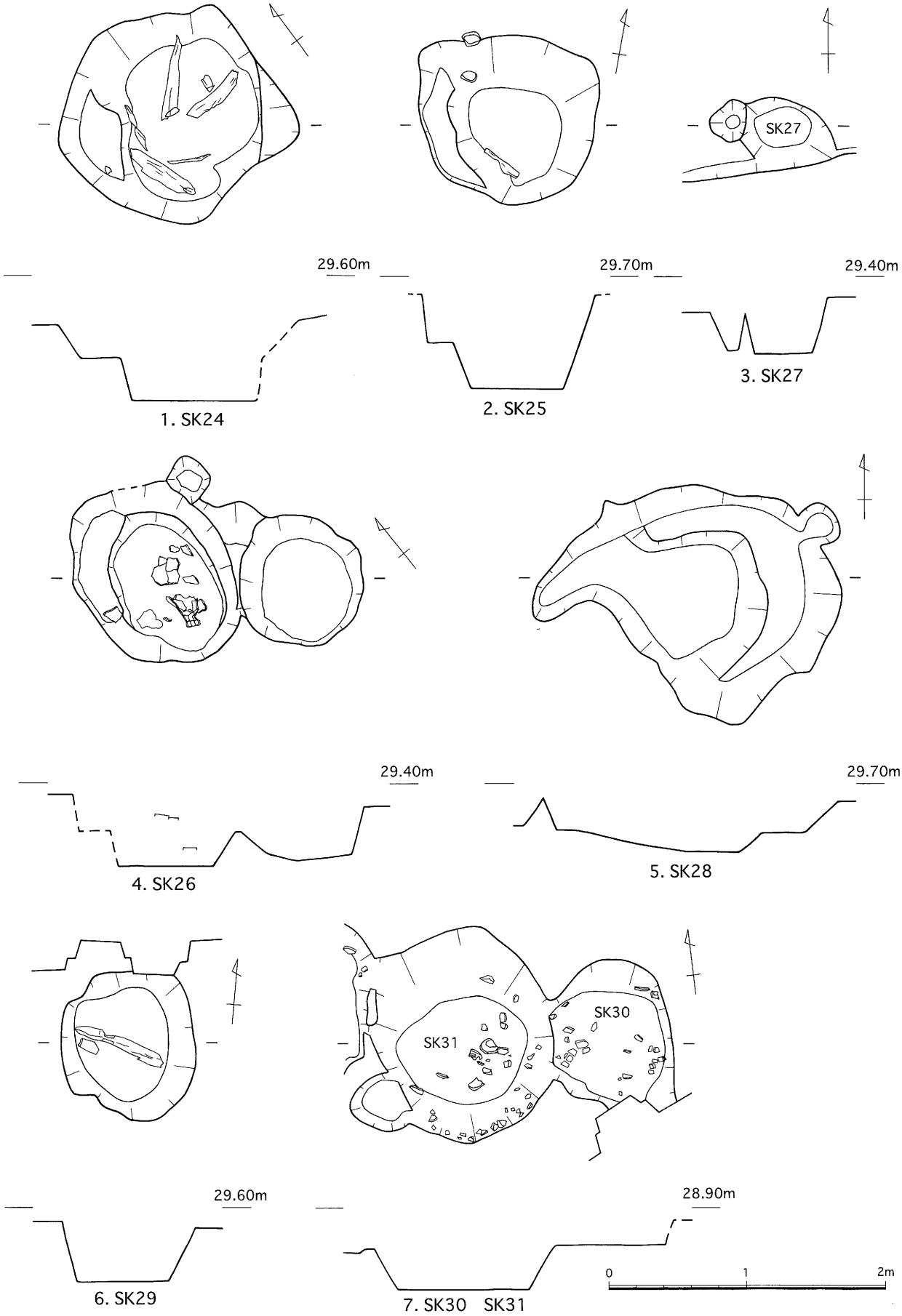
第27図　第6調査区遺構図（11）土坑



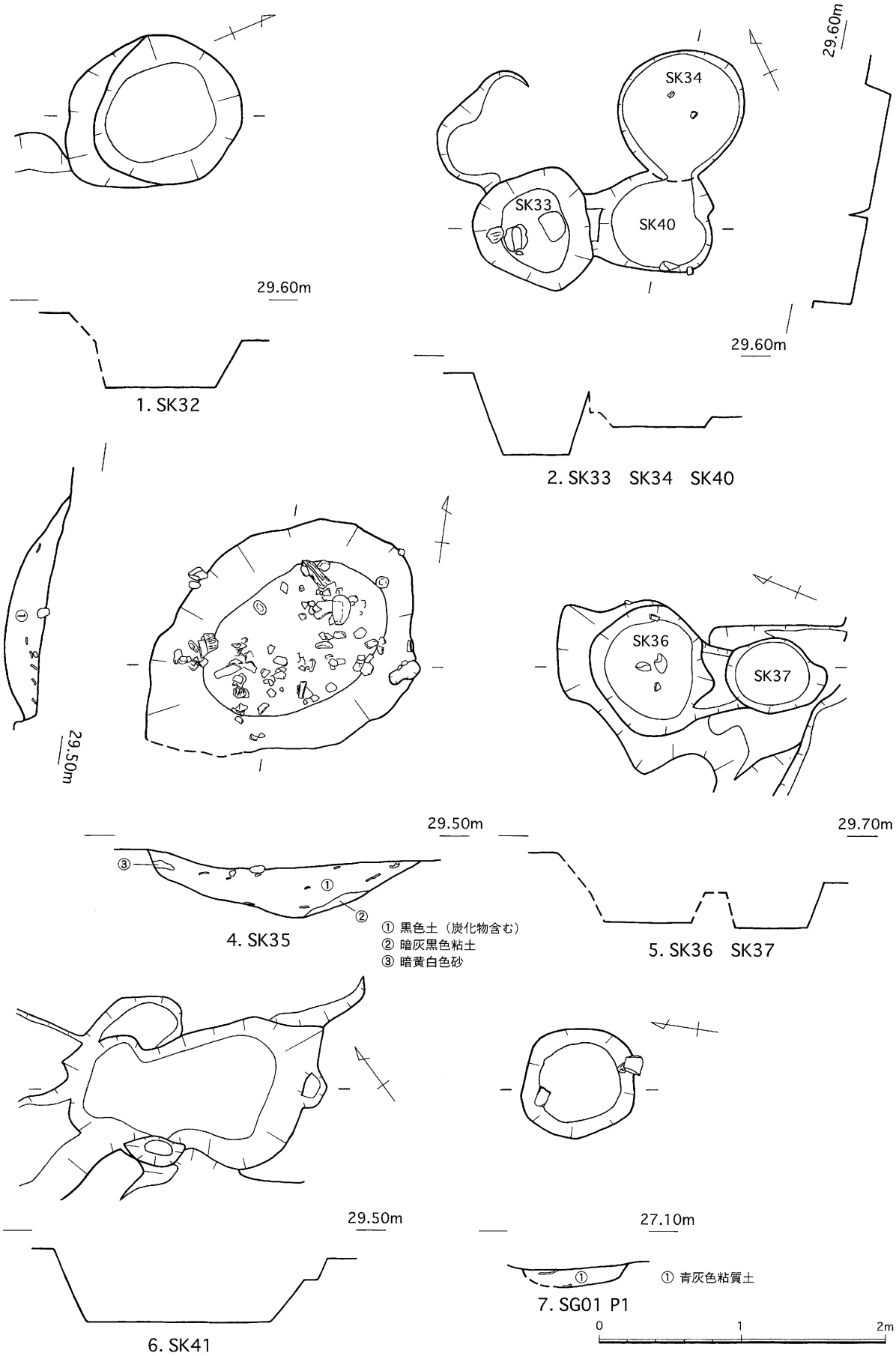
第28図　第6調査区遺構図（12）土坑



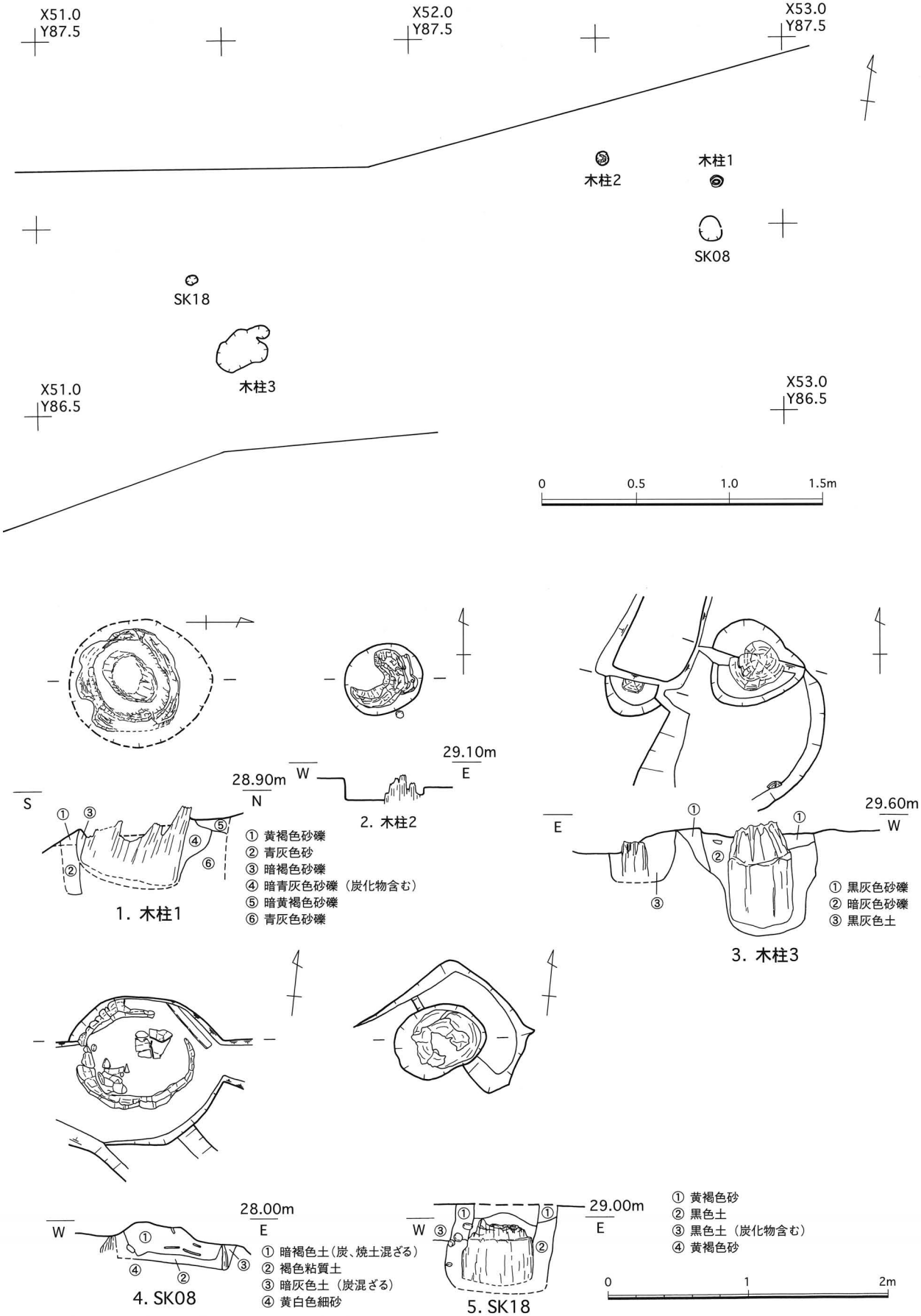
第29図　第6調査区遺構図(13) 土坑



第30図　第6調査区遺構図(14)　土坑

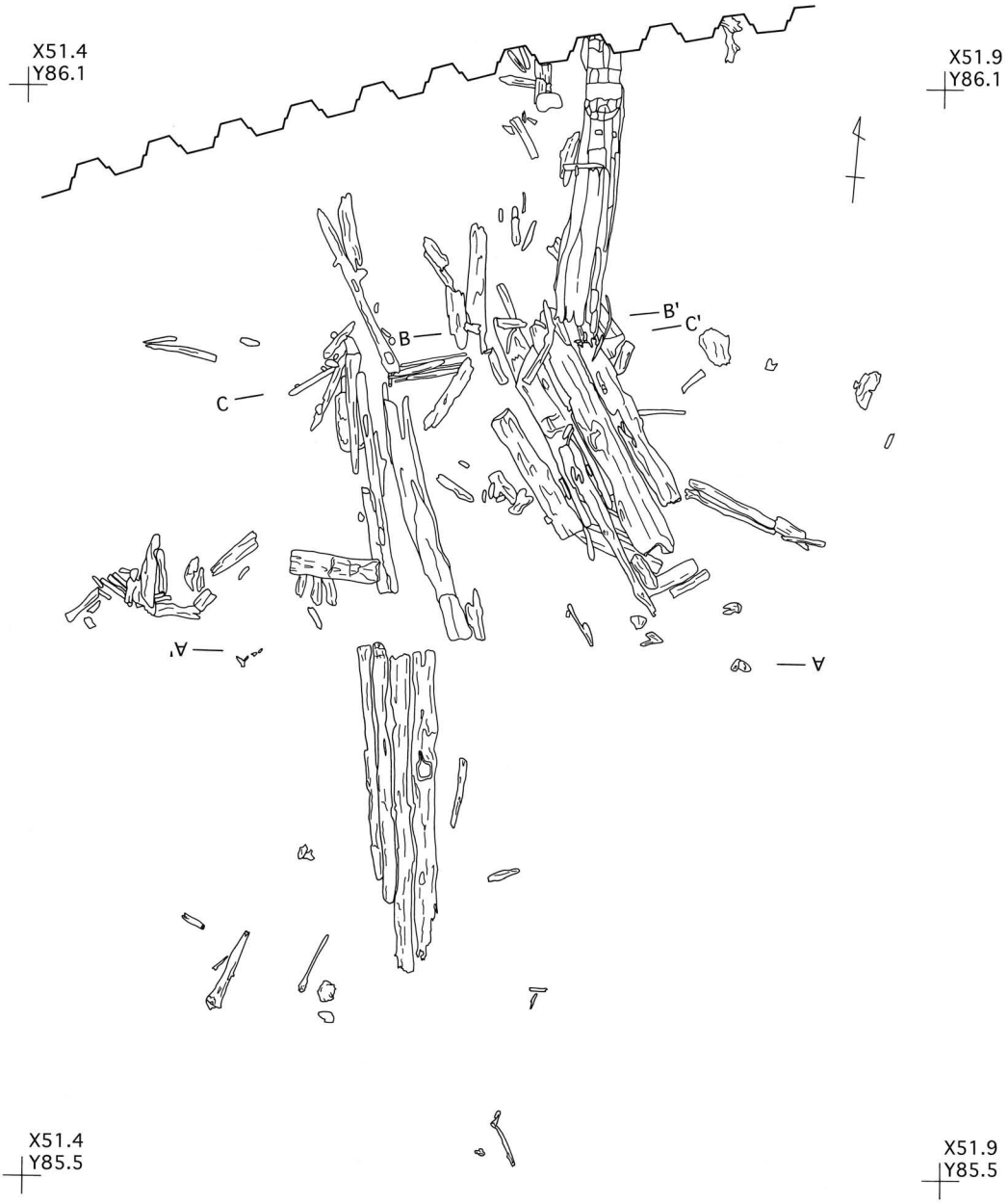


第31図　第6調査区遺構図（15）土坑

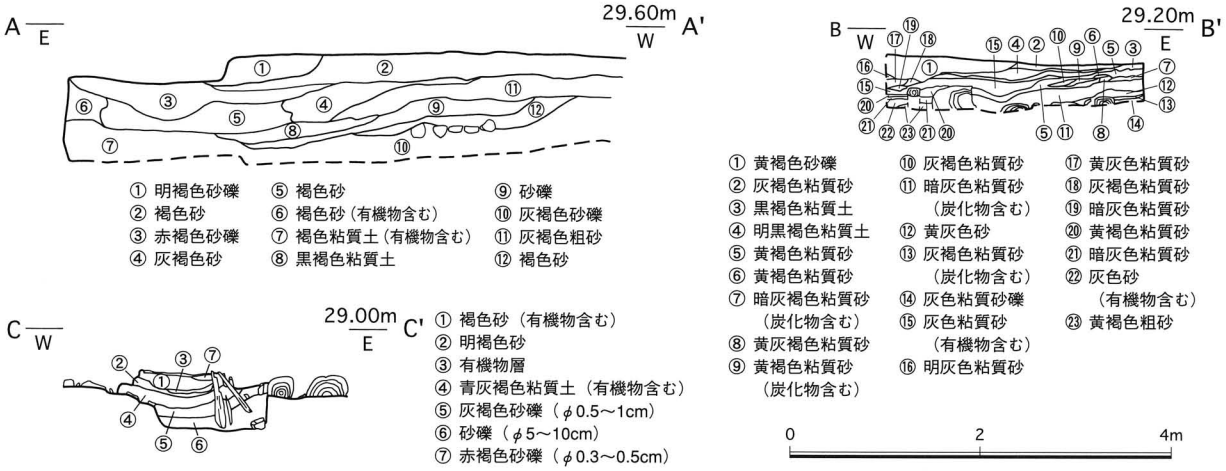


第32図　第6調査区遺構図（16）木柱

SX01平面図

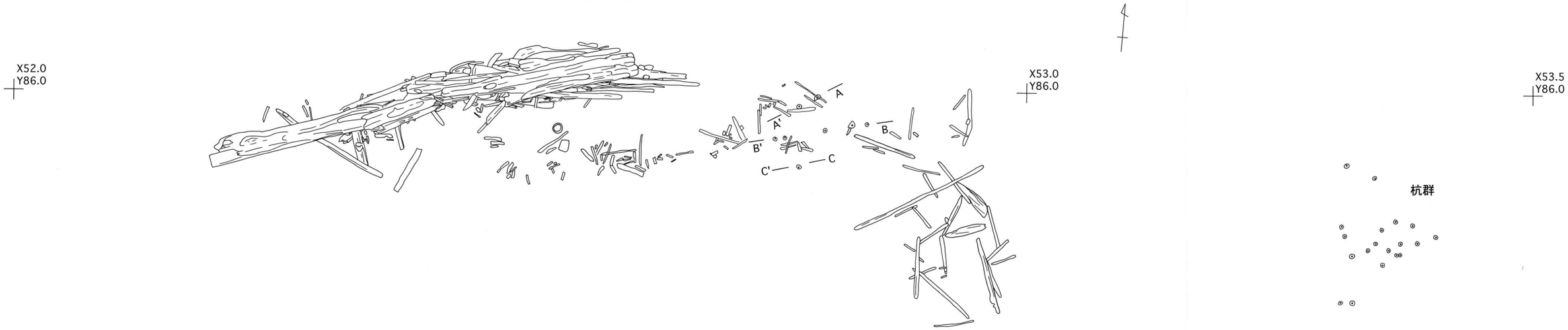


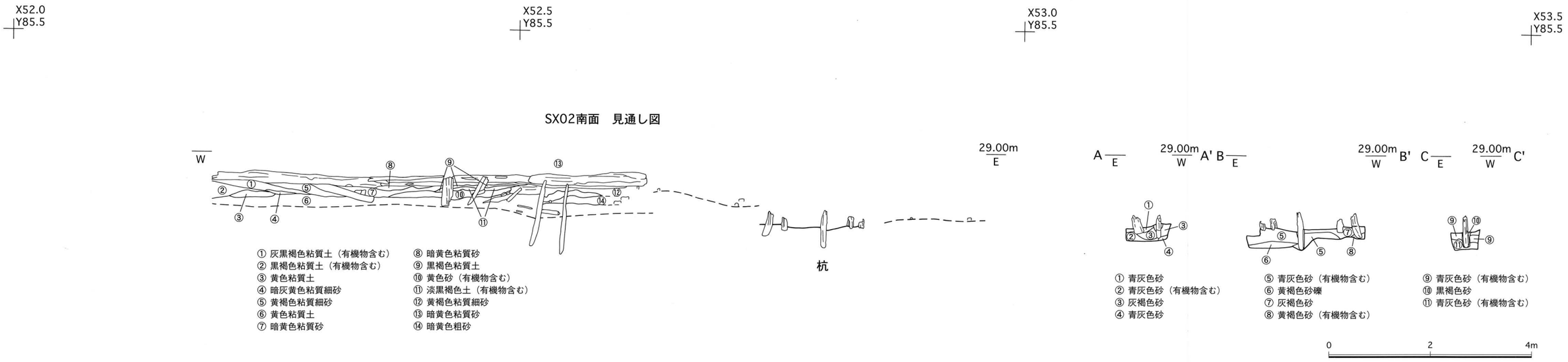
SX01断面図



第33図　第1調査区遺構図（1）SX01

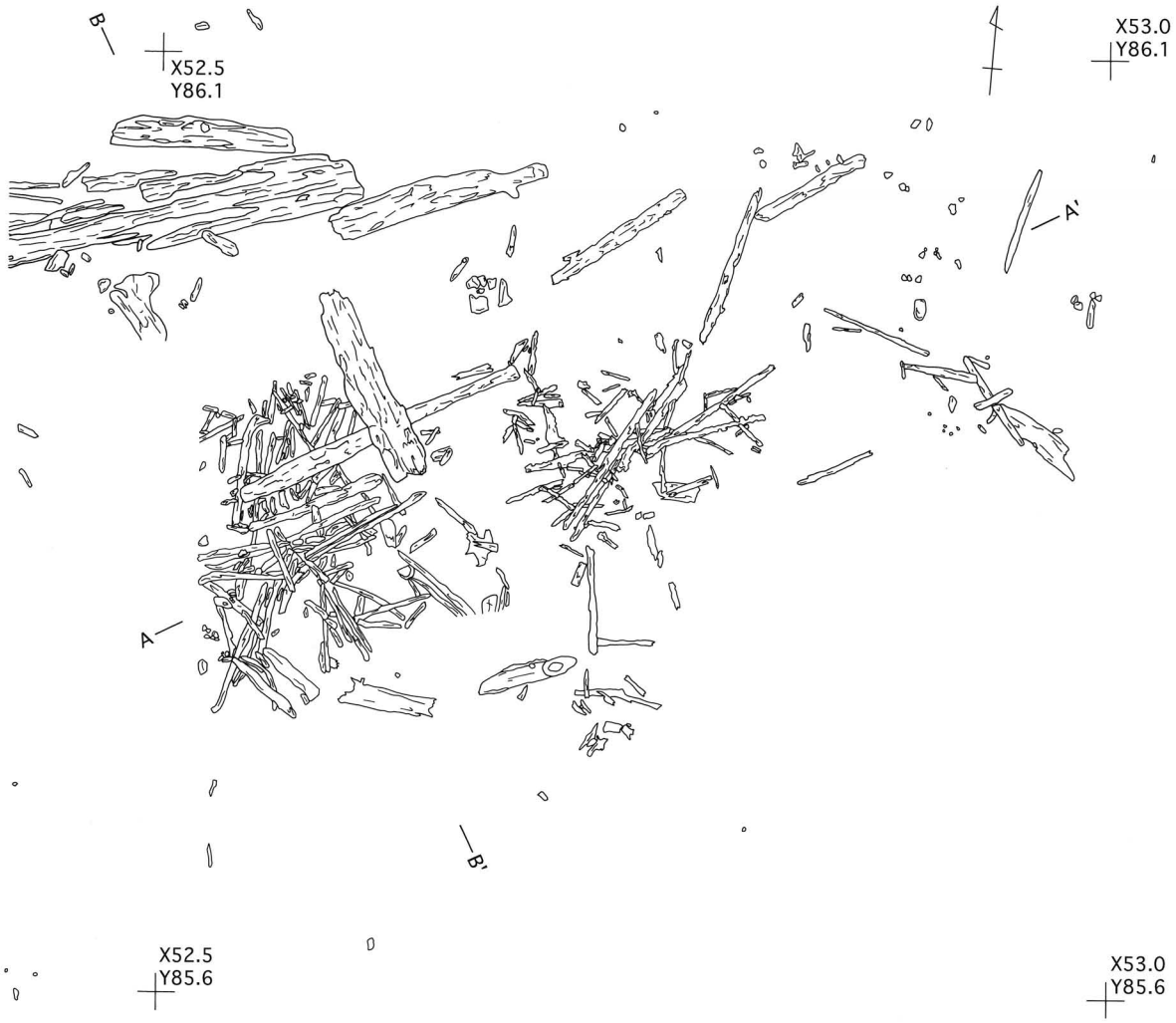
SX02平面図



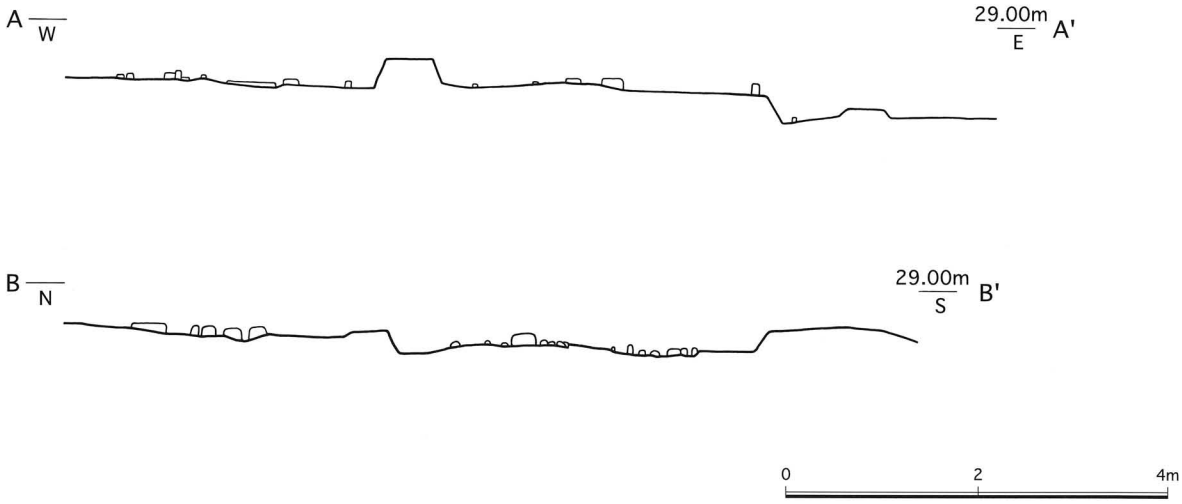


第34図　第1調査区遺構図(2) SX02

SX03平面図

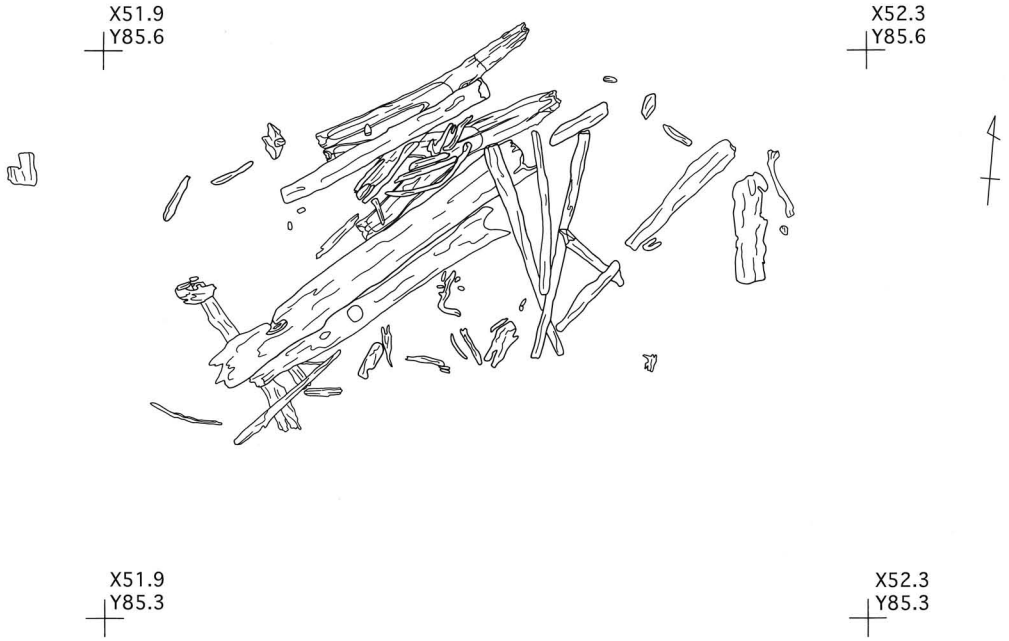


SX03断面図

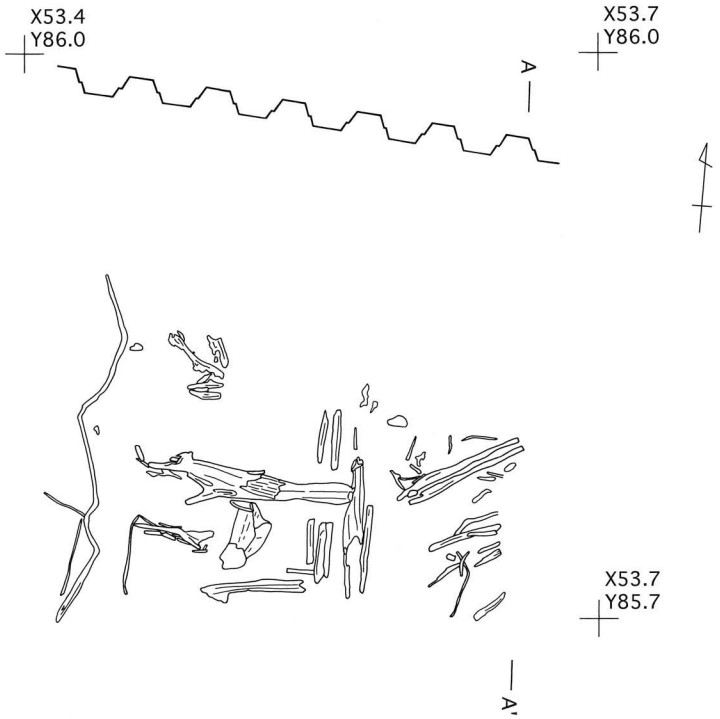


第35図　第1調査区遺構図(3) SX03

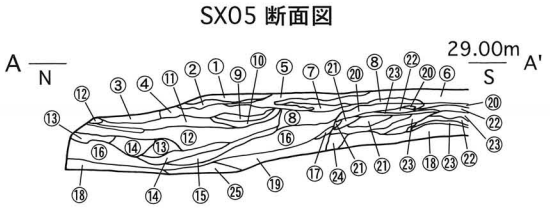
SX04 平面図



SX05 平面図



SX05 断面図

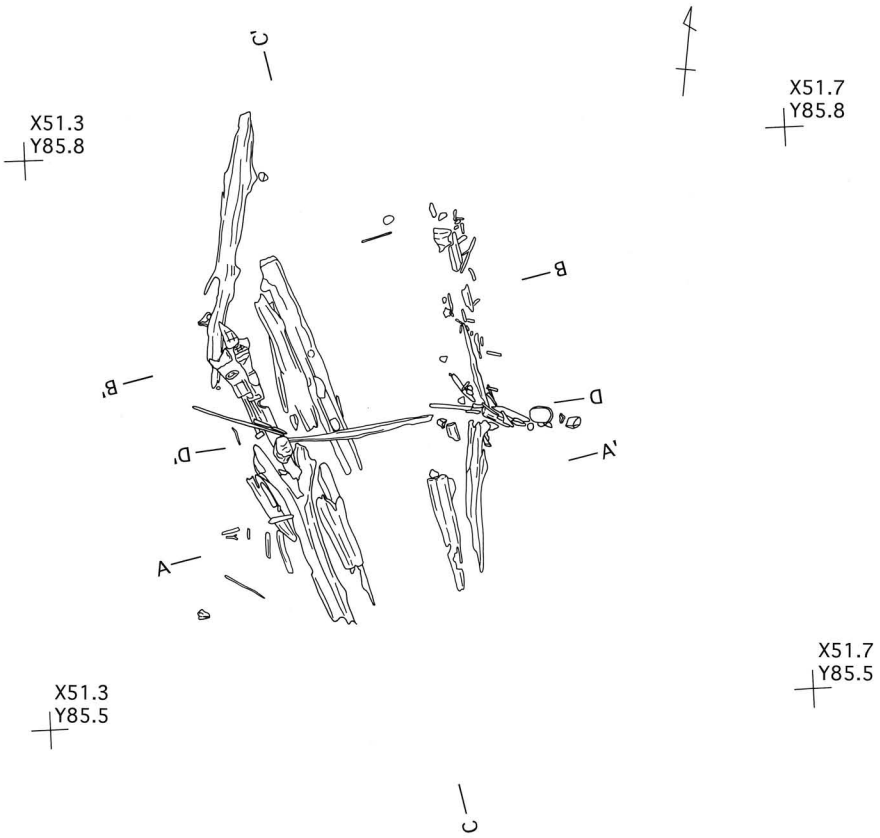


① 灰褐色砂質土
② 暗灰褐色砂質土
③ 暗褐色土
④ 黄褐色土
⑤ 明黄褐色土
⑥ 白黄褐色砂
⑦ 白灰色砂
⑧ 黄褐色砂
⑨ 褐色細砂
⑩ 褐色粗砂
⑪ 明褐色砂礫
⑫ 褐色粗砂
⑬ 暗褐色砂
⑭ 暗褐色砂礫
⑮ 明褐色砂礫
⑯ 褐色細砂
⑰ 青白色細砂
⑱ 黒褐色粘質土
⑲ 砂礫
⑳ 明褐色細砂
㉑ 灰褐色粘質土
㉒ 灰色粘質土
㉓ 明褐色細砂
㉔ 暗灰色砂質土
㉕ 明灰褐色粗砂（有機物含む）

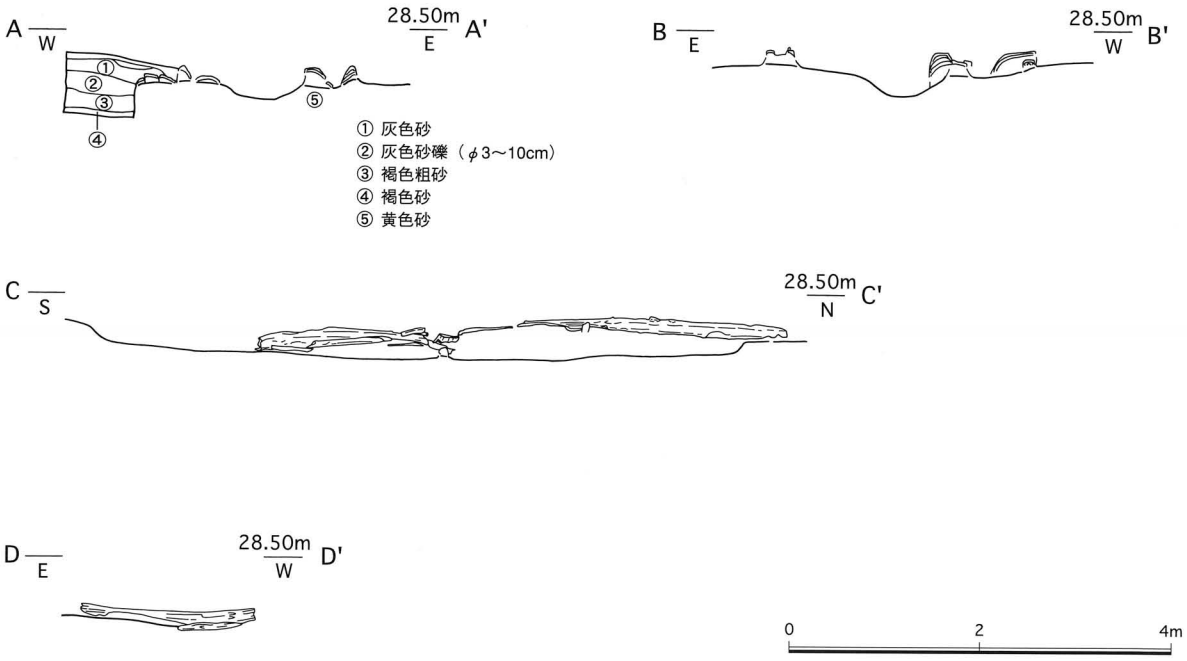
0 2 4m

第36図　第1調査区遺構図(4) SX04・05

SX14 平面図

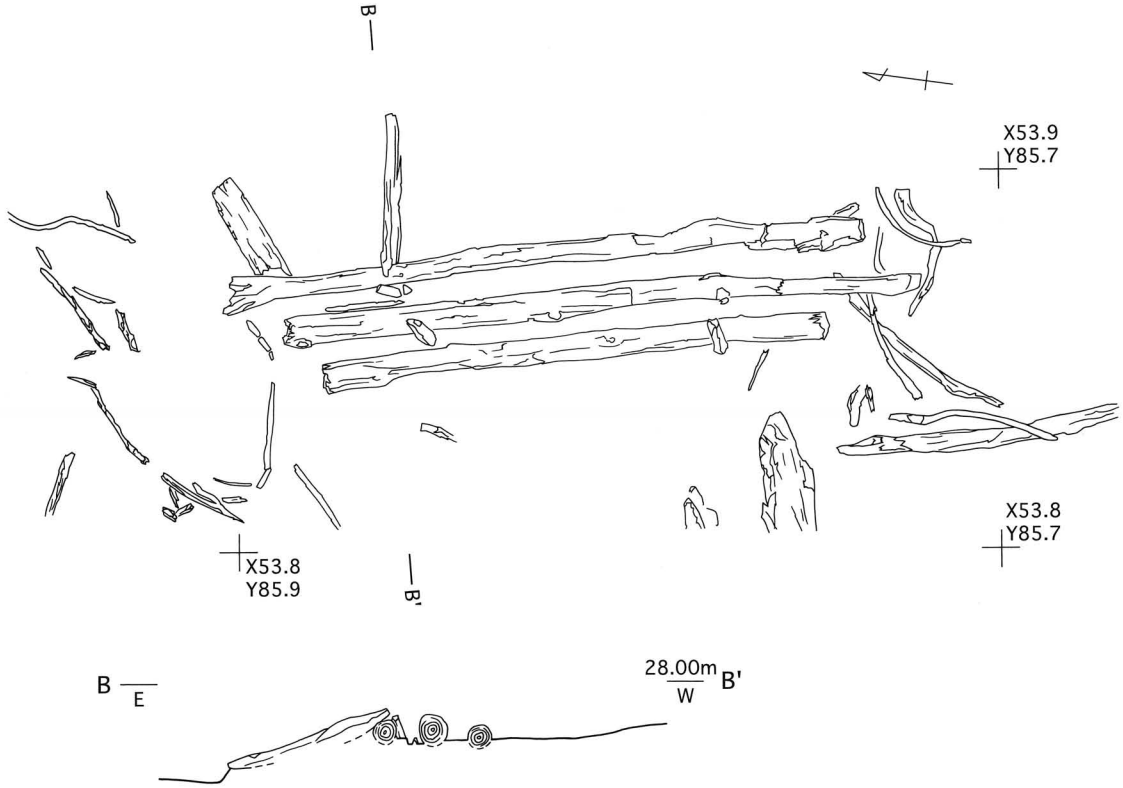


SX14 断面図

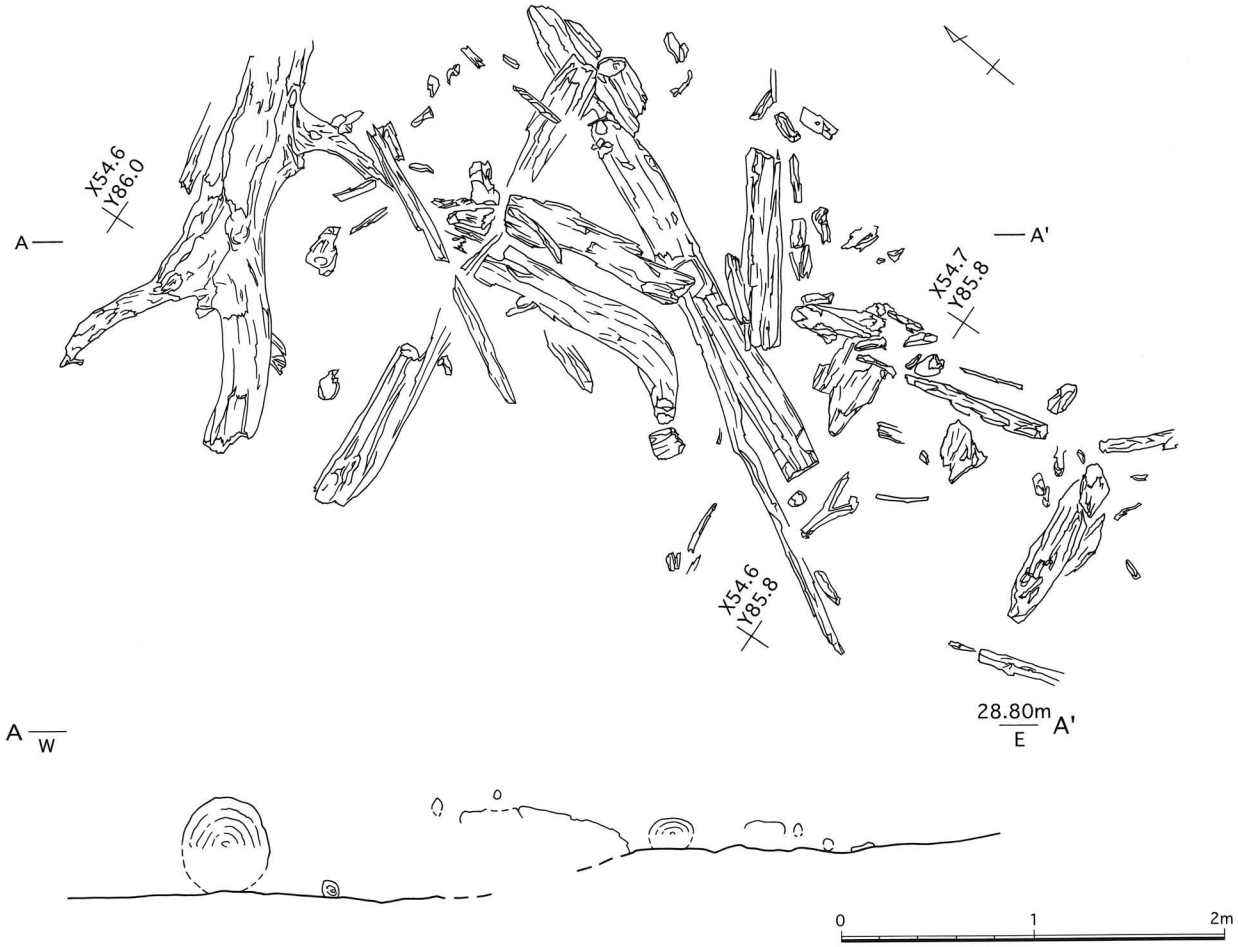


第37図　第1調査区遺構図(5) SX14

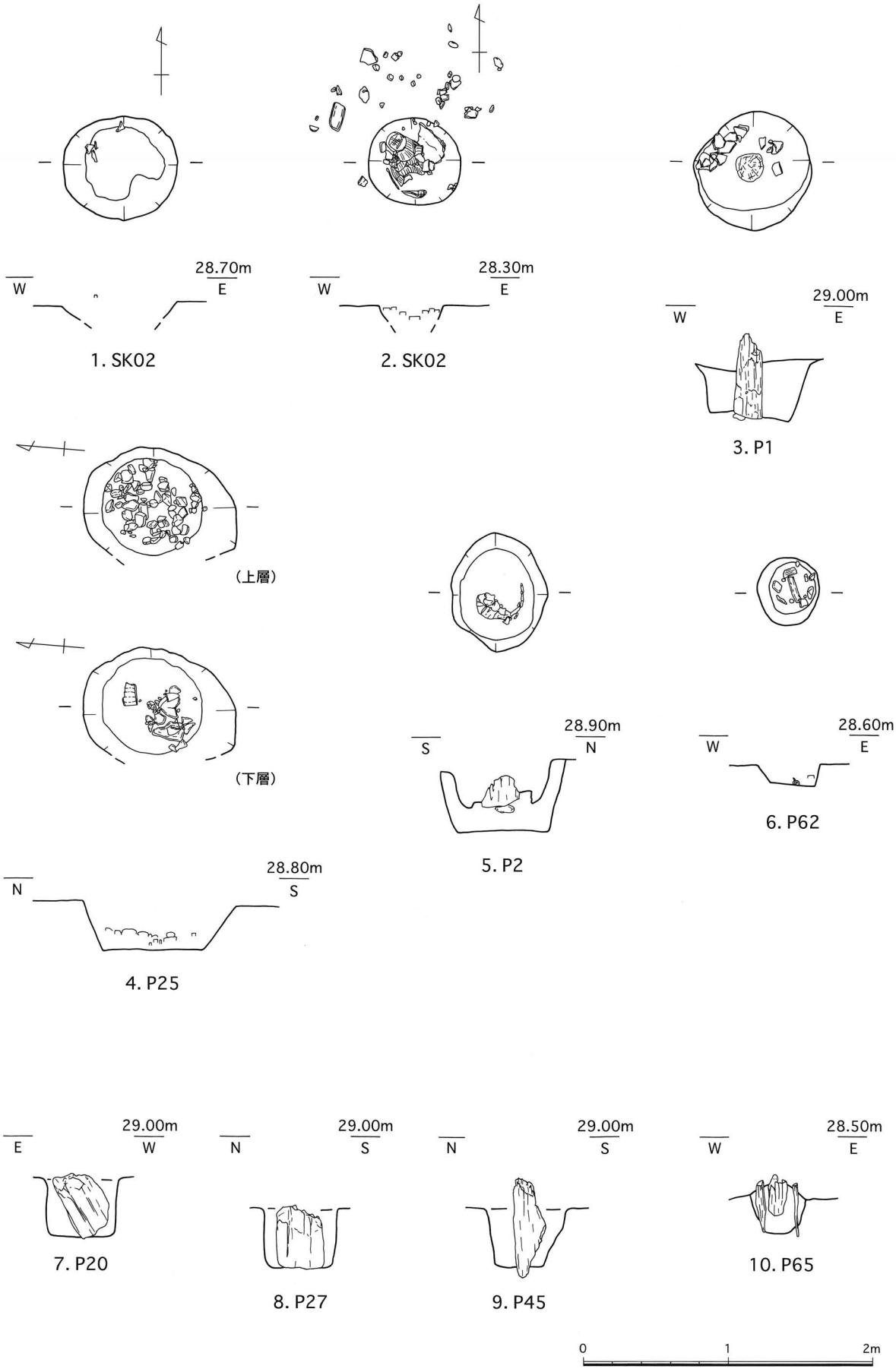
SX08 平面図



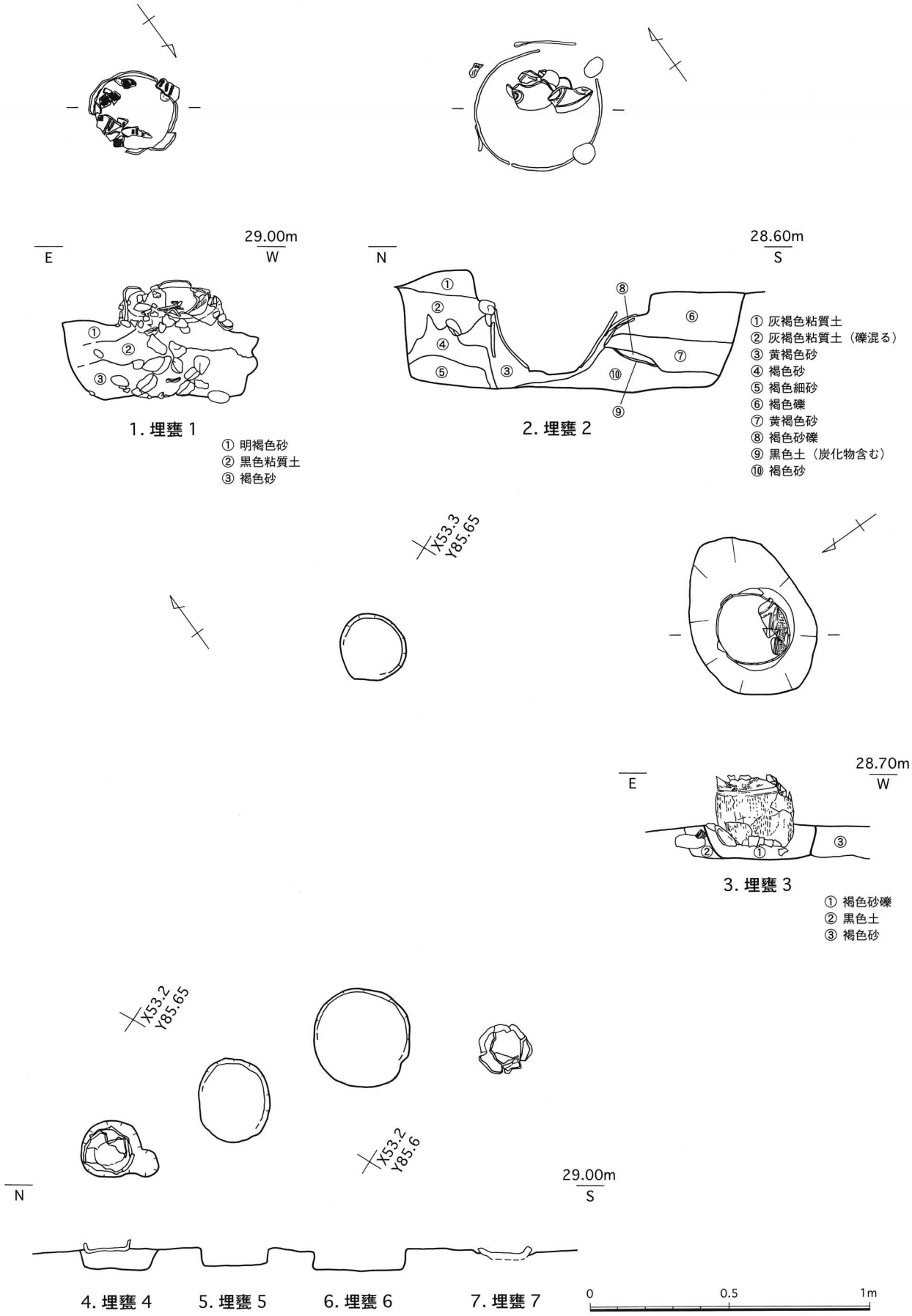
SX09 平面図



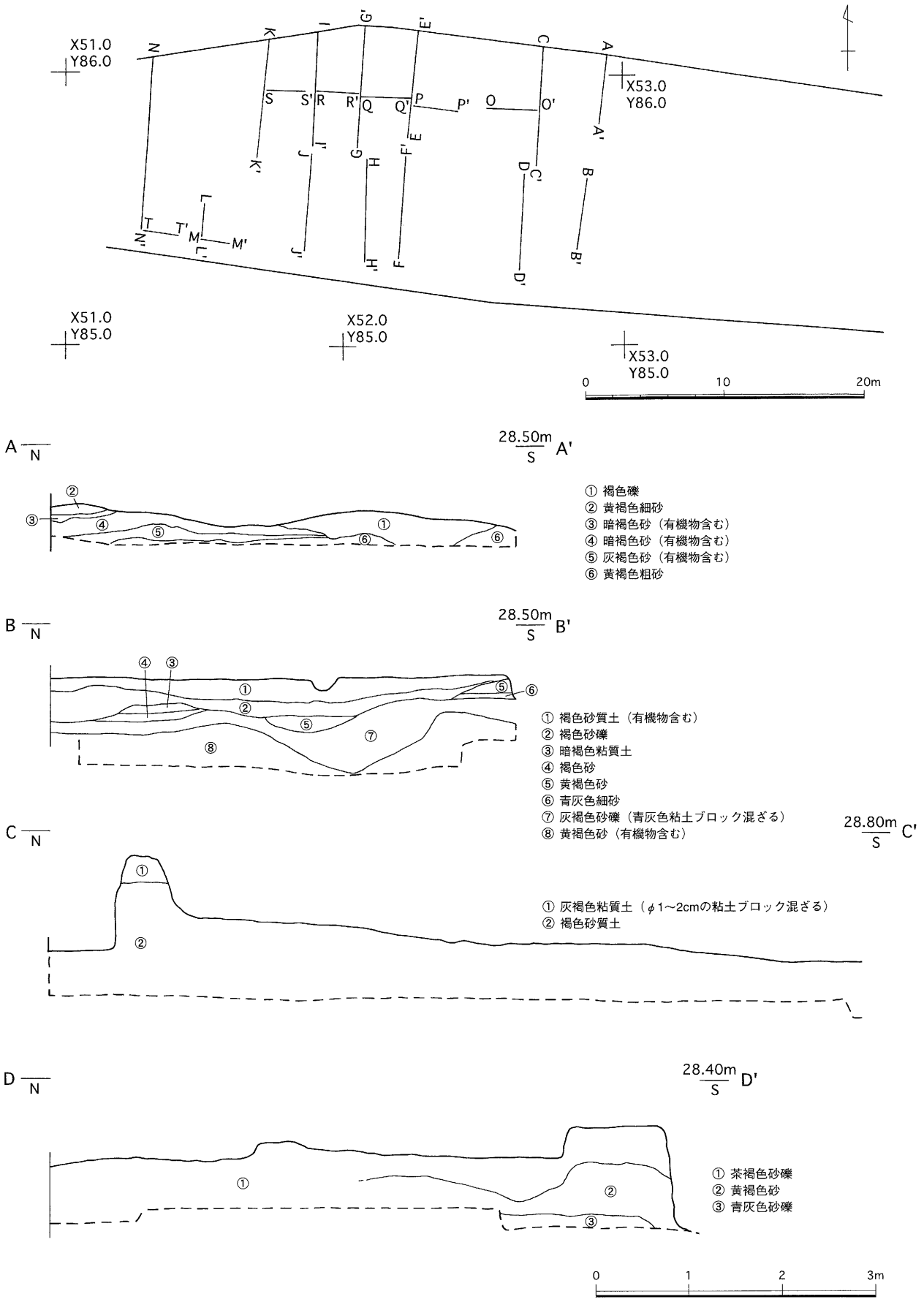
第38図　第1調査区遺構図(6) SX08・09



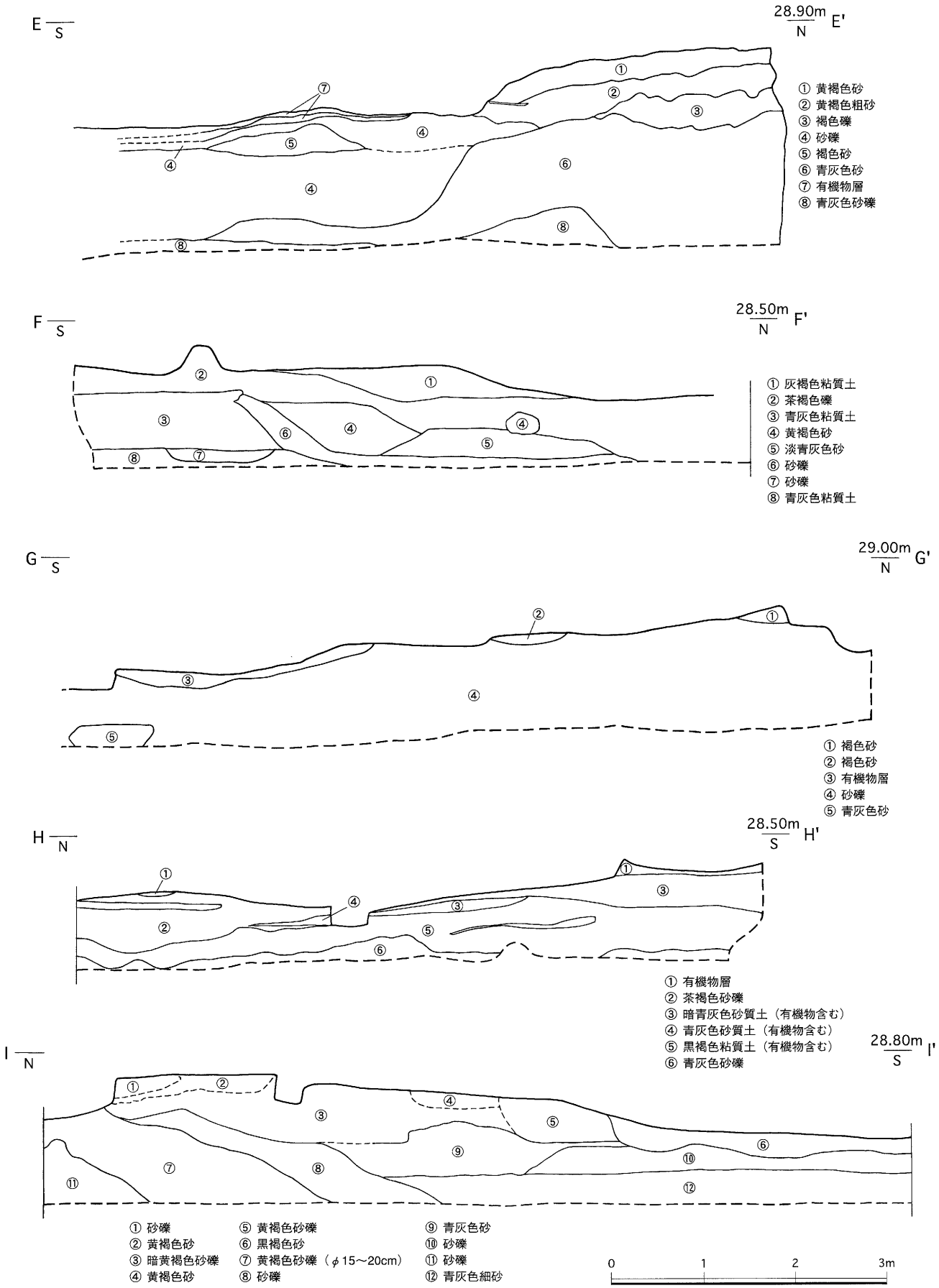
第39図　第1調査区遺構図(7)　土坑



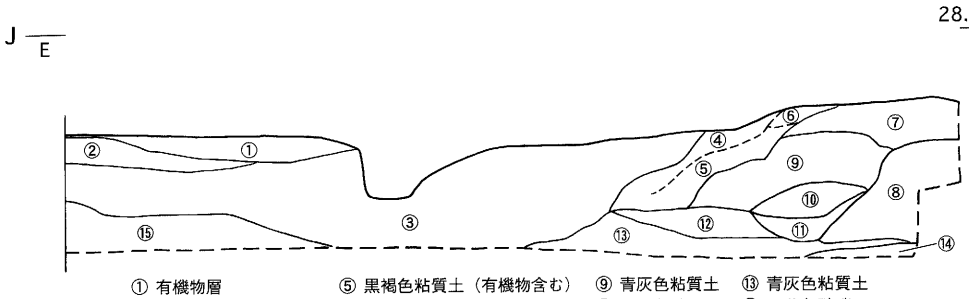
第40図　第1調査区遺構図(8)　埋甕



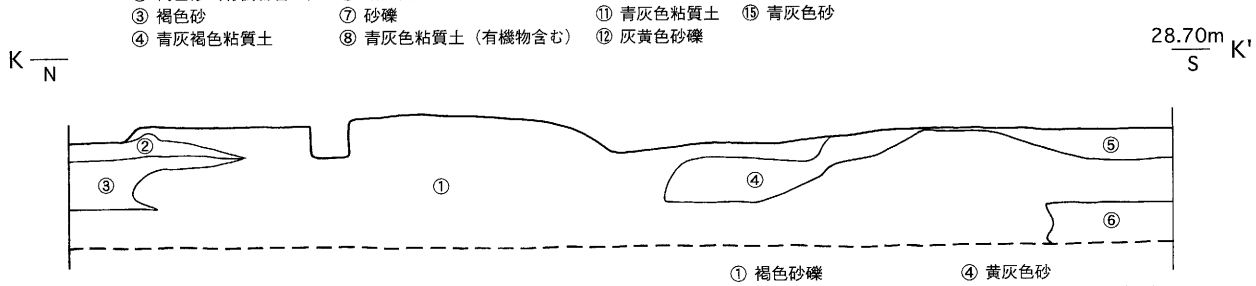
第41図　第1調査区遺構図(9) 土層



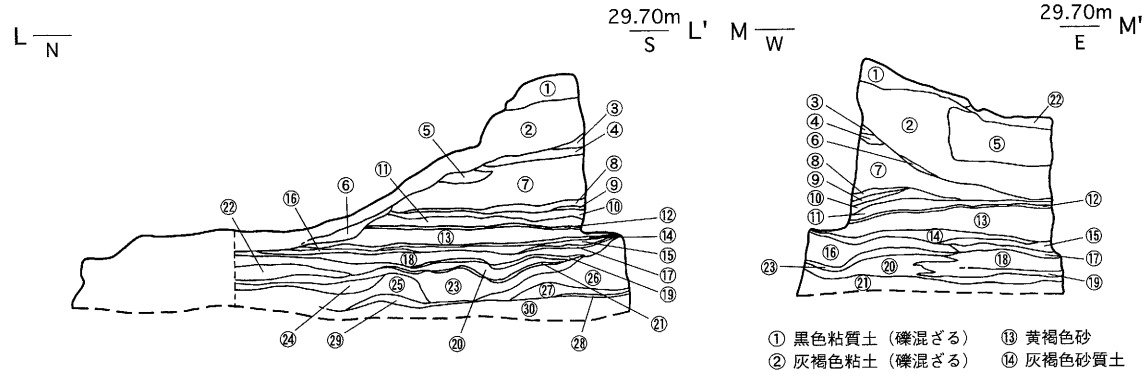
第42図　第1調査区遺構図(10)　土層



① 有機物層
② 褐色砂（有機物含む）
③ 褐色砂
④ 青灰褐色粘質土
⑤ 黒褐色粘質土（有機物含む）
⑥ 暗黒褐色粘質土
⑦ 砂礫
⑧ 青灰色粘質土（有機物含む）
⑨ 青灰色粘質土
⑩ 青灰色砂
⑪ 青灰色粘質土
⑫ 灰黄色砂礫
⑬ 青灰色粘質土
⑭ 灰黄色砂礫
⑮ 青灰色砂

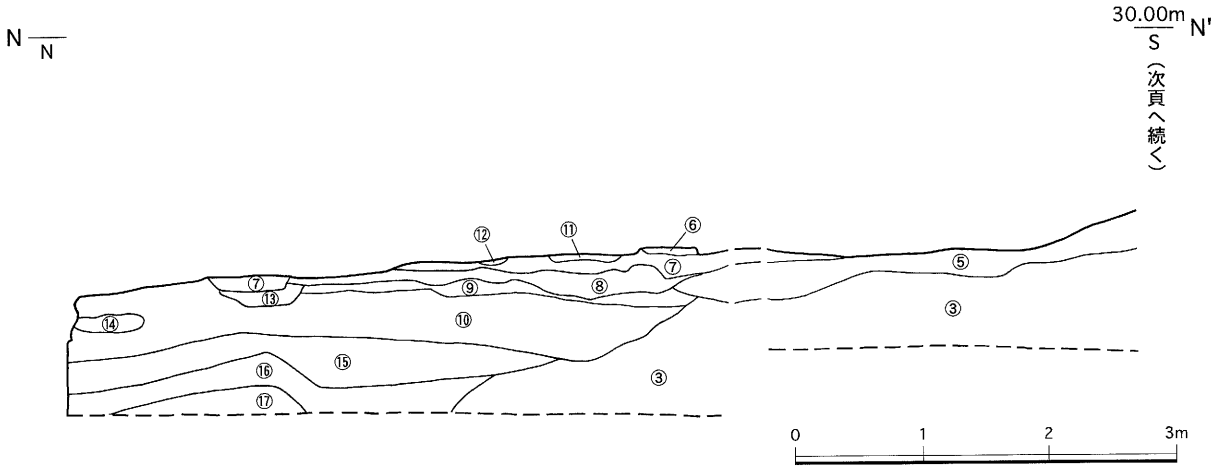


① 褐色砂礫
② 褐色砂
③ 青灰色砂（有機物含む）
④ 黄灰色砂
⑤ 黄褐色砂（有機物含む）
⑥ 青灰色砂

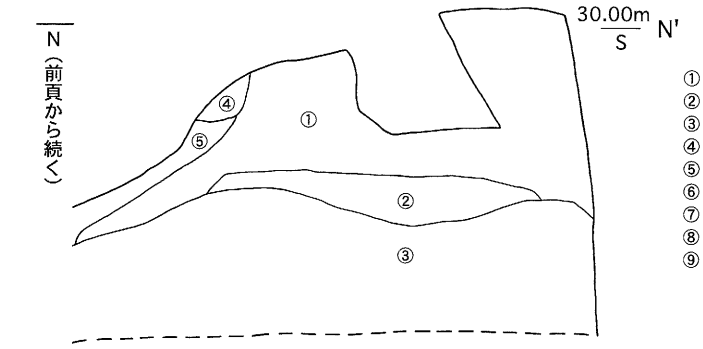


① 黒色粘質土（礫混ざる）
② 灰褐色粘土（礫混ざる）
③ 灰褐色砂
④ 灰褐色粘質土
⑤ 青灰褐色砂
⑥ 茶褐色砂質土
⑦ 青灰色砂質土
⑧ 明茶褐色粘質土
⑨ 明茶褐色砂
⑩ 明茶褐色粘土
⑪ 明茶褐色砂
⑫ 灰褐色粘質土
⑬ 黄褐色砂
⑭ 灰褐色粘質土
⑮ 灰褐色砂
⑯ 黄褐色砂
⑰ 灰褐色砂質土
⑱ 灰褐色砂
⑲ 灰褐色粘質土
⑳ 灰褐色砂
㉑ 灰褐色粘質土
㉒ 青灰色砂
㉓ 黄灰褐色砂
㉔ 明茶褐色粗砂
㉕ 茶褐色砂礫
㉖ 灰褐色砂
㉗ 灰褐色粘土
㉘ 明茶褐色粘土
㉙ 黒灰褐色砂質土
㉚ 灰褐色砂礫

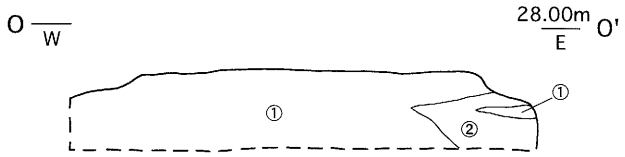
① 黒色粘質土（礫混ざる）
② 灰褐色粘土（礫混ざる）
③ 灰褐色砂
④ 灰褐色粘質土
⑤ 黒褐色粘土
⑥ 灰褐色砂質土
⑦ 青灰色砂質土
⑧ 灰褐色粘質土
⑨ 灰褐色砂
⑩ 灰褐色粘土
⑪ 明茶褐色砂
⑫ 灰褐色粘質土
⑬ 黄褐色砂
⑭ 灰褐色砂質土
⑮ 赤褐色砂（炭化物含む）
⑯ 灰褐色砂
⑰ 赤褐色粗砂
⑱ 赤灰褐色粗砂
⑲ 赤褐色粗砂
⑳ 灰褐色砂
㉑ 灰褐色砂質土（礫混ざる）
㉒ 褐色砂質土
㉓ 灰褐色粘質土



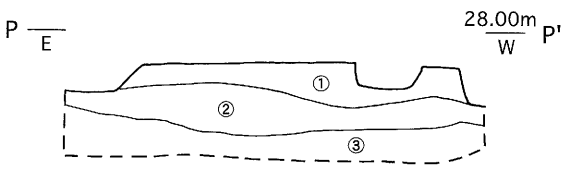
第43図　第1調査区遺構図(11) 土層



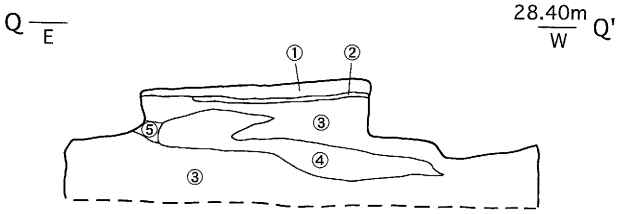
① 砂礫
② 褐色砂礫
③ 褐色砂
④ 黒色土（礫混ざる）
⑤ 砂礫
⑥ 暗灰色土（炭化物含む）
⑦ 褐色砂
⑧ 褐色粗砂
⑨ 灰褐色砂礫
⑩ 褐色砂礫
⑪ 灰褐色細砂
⑫ 黒色土
⑬ 灰褐色砂
⑭ 灰褐色砂礫
⑮ 明褐色砂礫
⑯ 砂礫
⑰ 砂礫



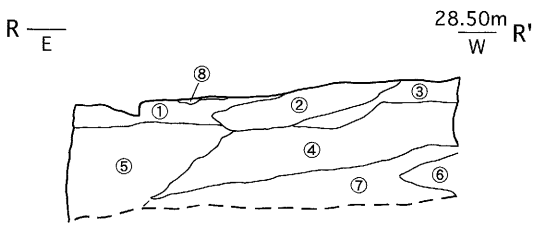
① 砂礫
② 青灰色砂



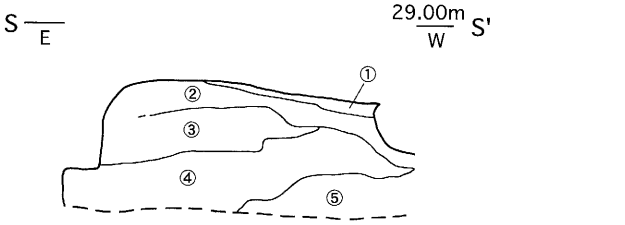
① 赤褐色砂礫
② 青灰色砂礫
③ 青灰色砂（有機物含む）



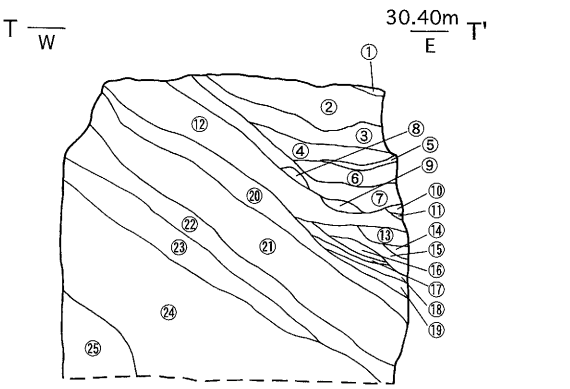
① 黄褐色砂（炭化物、有機物含む）
② 褐色粘質土（炭化物含む）
③ 黄褐色砂礫
④ 青灰色砂（炭化物含む）
⑤ 黄褐色砂



① 暗青灰色砂質土
② 青灰褐色砂質土（有機物含む）
③ 茶褐色砂礫
④ 青灰褐色砂（炭化物含む）
⑤ 茶褐色砂礫
⑥ 黄褐色砂（有機物含む）
⑦ 黄褐色砂礫
⑧ 黒褐色土

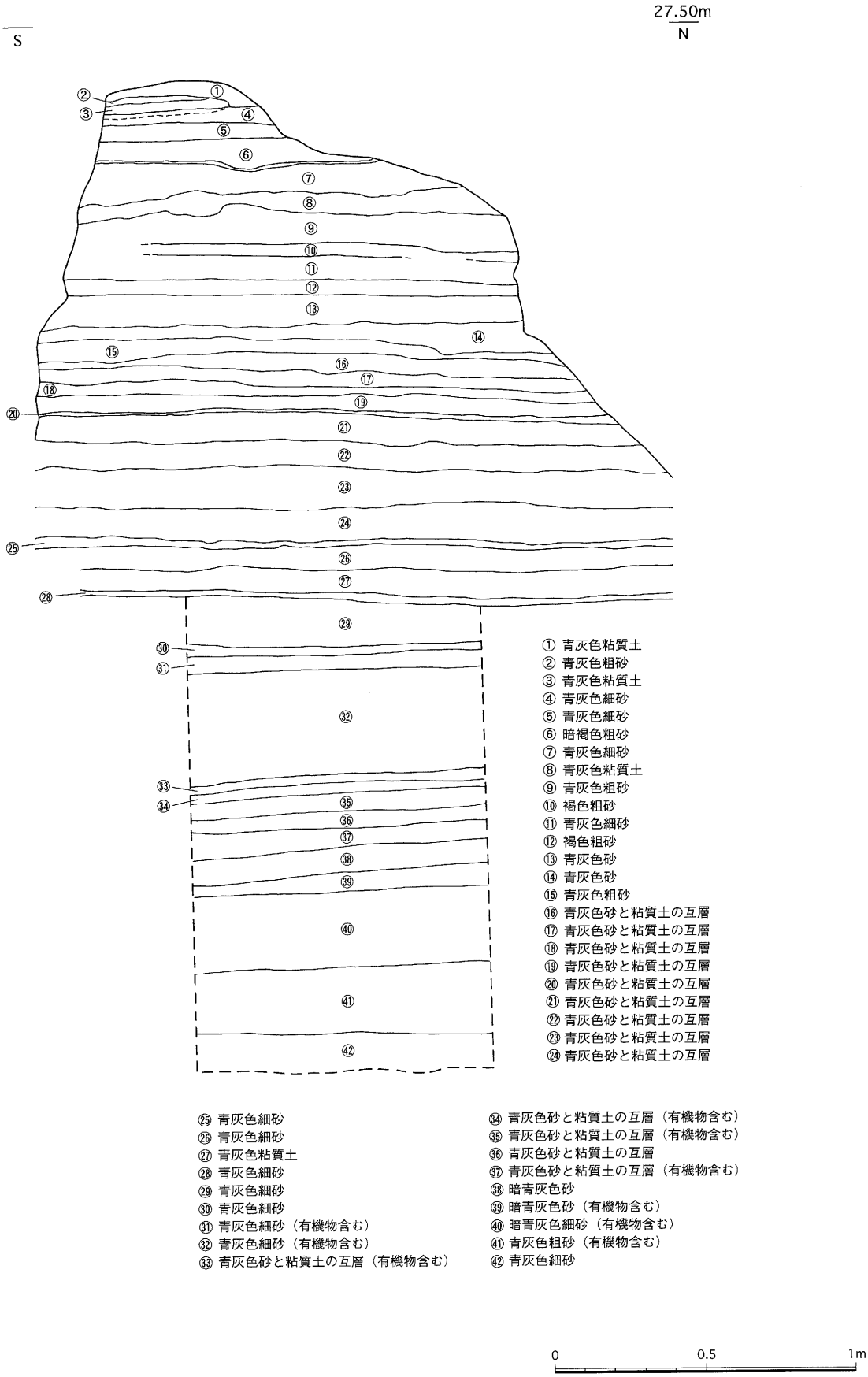


① 青灰褐色砂（有機物含む）
② 黄褐色砂礫
③ 青灰色砂（粘土ブロック混ざる）
④ 暗青灰色砂（有機物、炭化物含む）
⑤ 黄褐色砂礫（粘土ブロック混ざる）



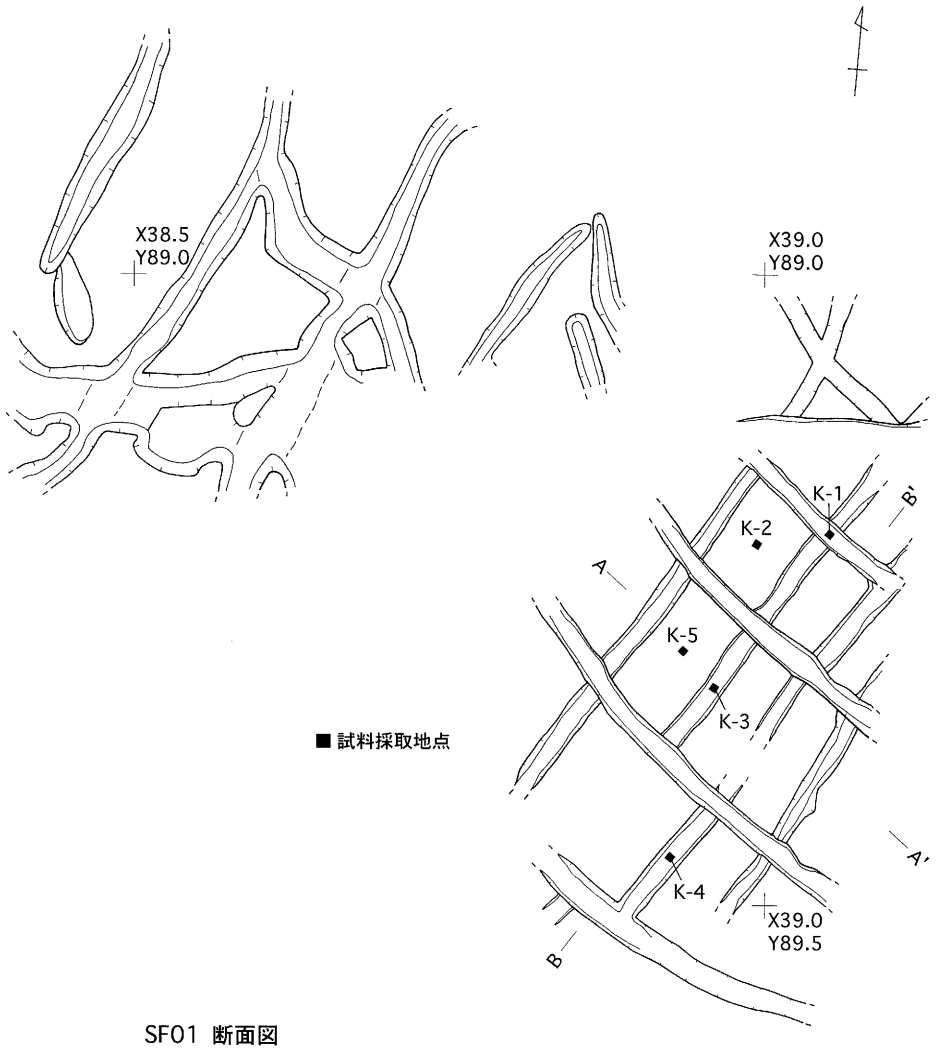
① 黒褐色砂質土
② 黄褐色粘質土（礫混ざる）
③ 黄褐色粘質土（礫混ざる）
④ 灰褐色粘質土
⑤ 灰褐色粘質土
⑥ 黄褐色砂質土
⑦ 黄褐色砂質土
⑧ 黄褐色砂質土
⑨ 黄褐色砂
⑩ 灰褐色粘質土
⑪ 黄褐色砂質土
⑫ 黄褐色粘質土
⑬ 明黄褐色砂
⑭ 黄褐色砂
⑮ 茶褐色粘質土
⑯ 茶褐色粘質土
⑰ 茶褐色粘質土（砂礫混ざる）
⑱ 茶褐色粘質土
⑲ 茶褐色粘質土
⑳ 茶褐色粘質土（礫混ざる）
㉑ 茶褐色粘質土（砂礫混ざる）
㉒ 黄褐色砂礫
㉓ 黄褐色砂礫
㉔ 黄褐色砂礫
㉕ 褐色砂

第44図　第1調査区遺構図(12)　土層

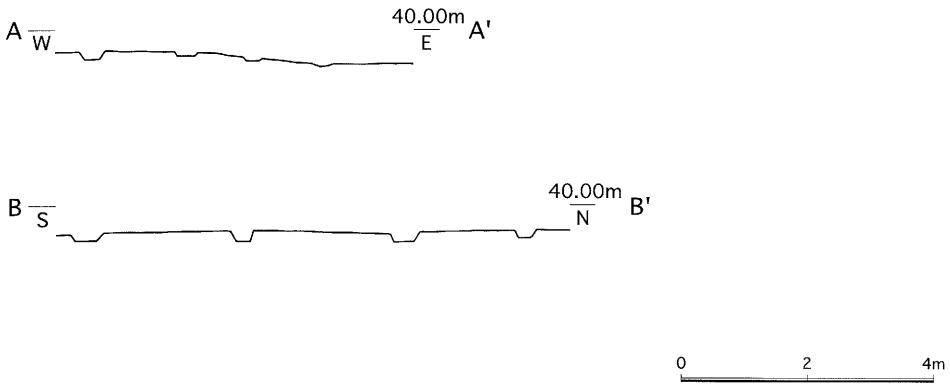


第45図　第1調査区遺構図(13) 湖沼堆積

SF01 平面図

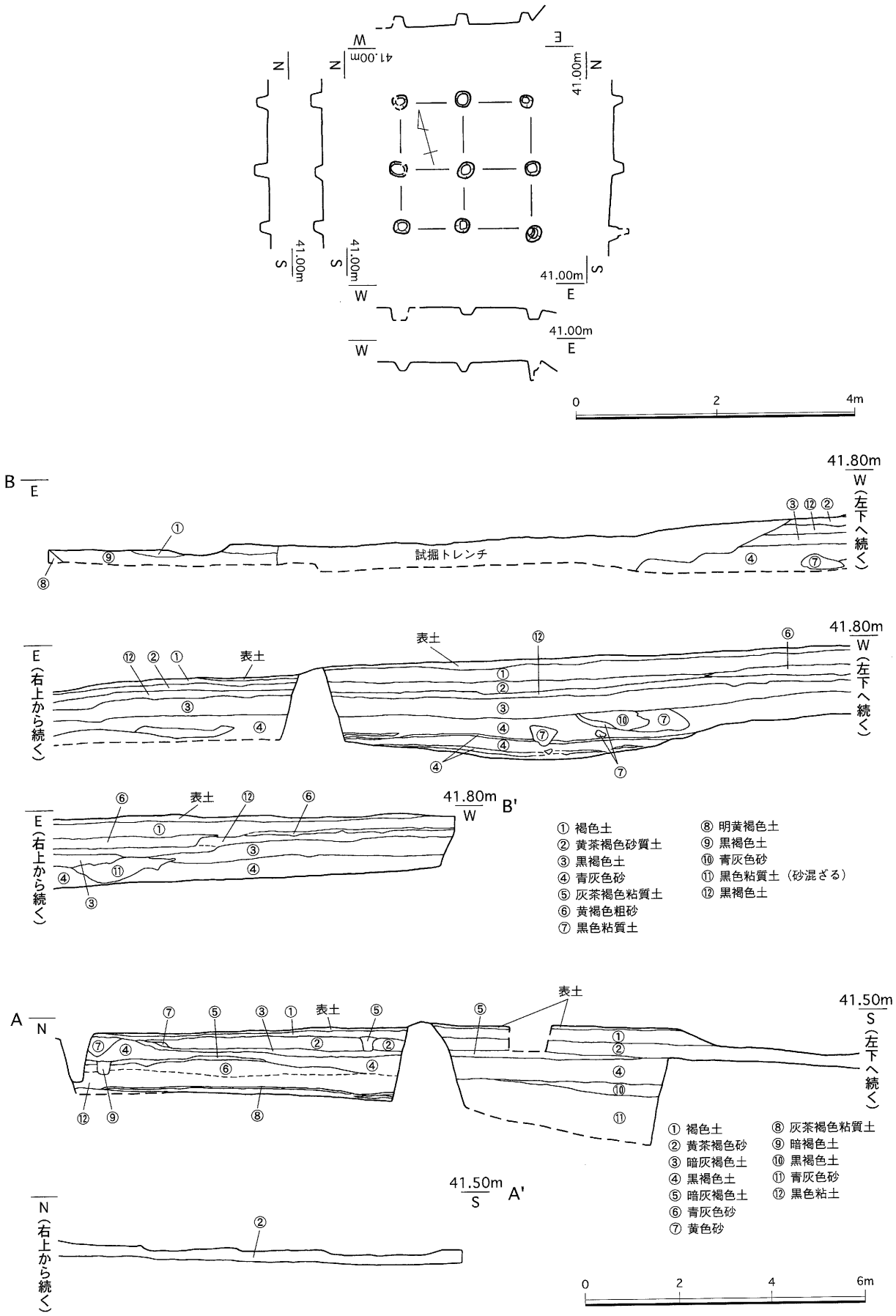


SF01 断面図

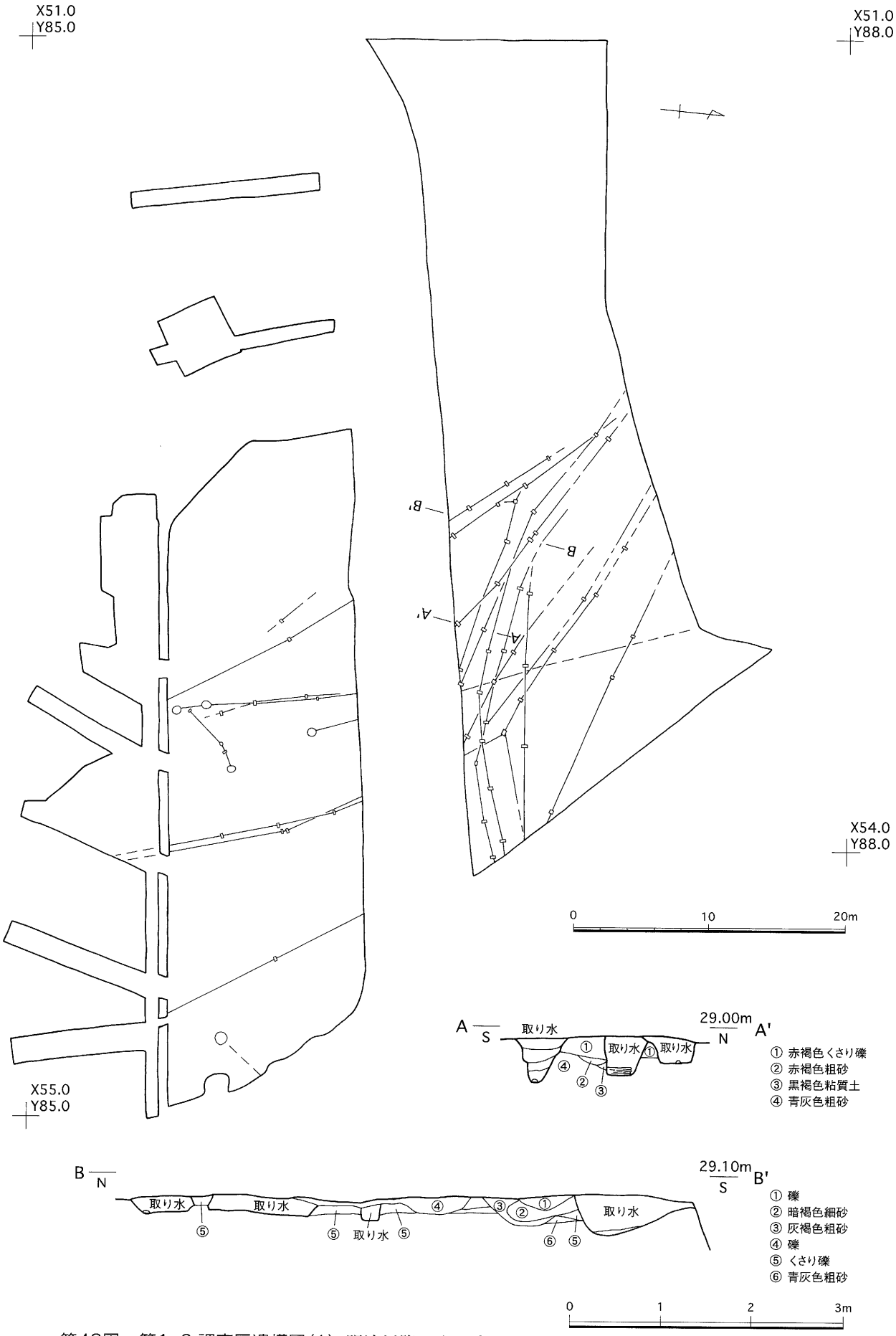


第46図　第10調査区遺構図(1)　畠

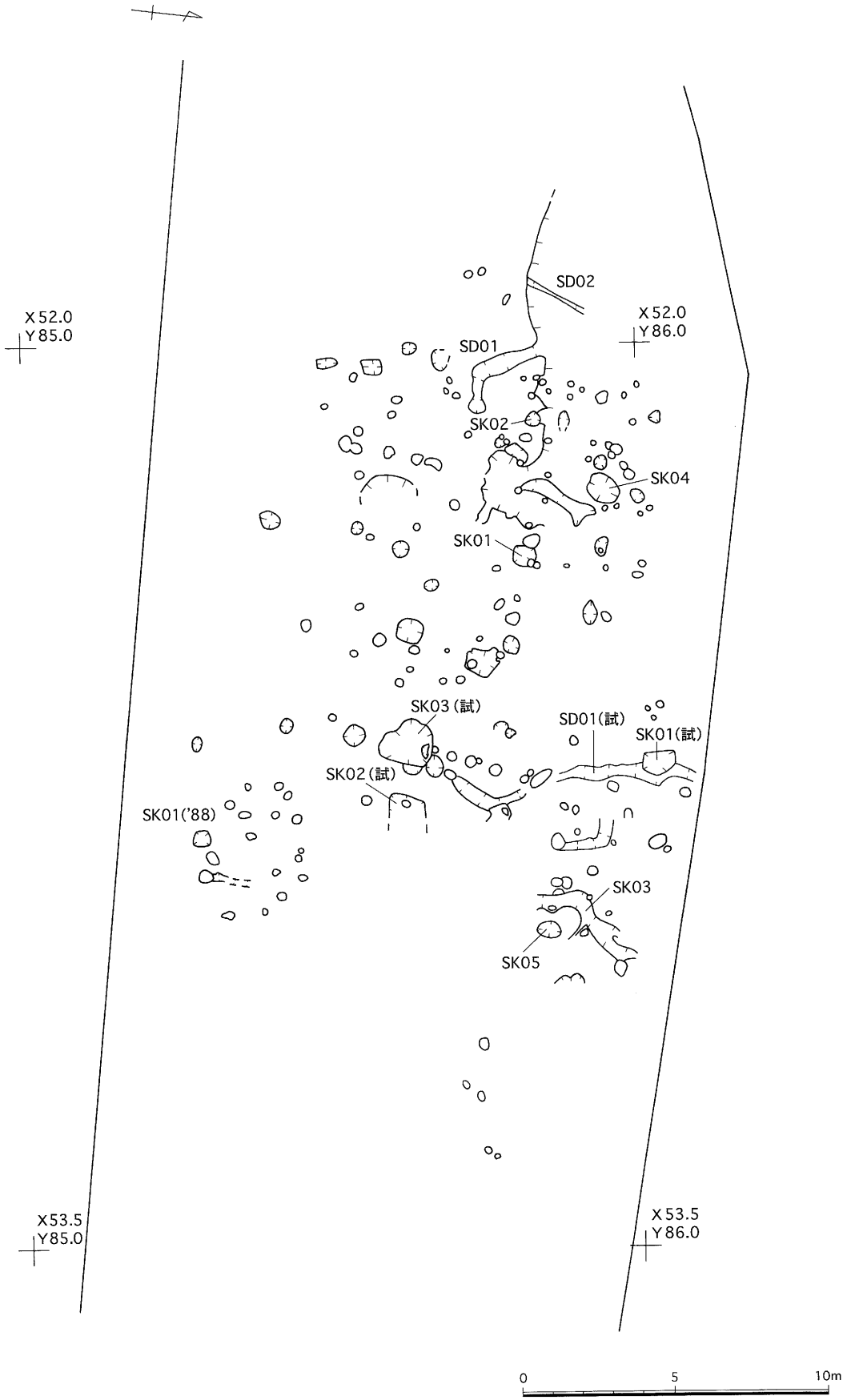
SB01



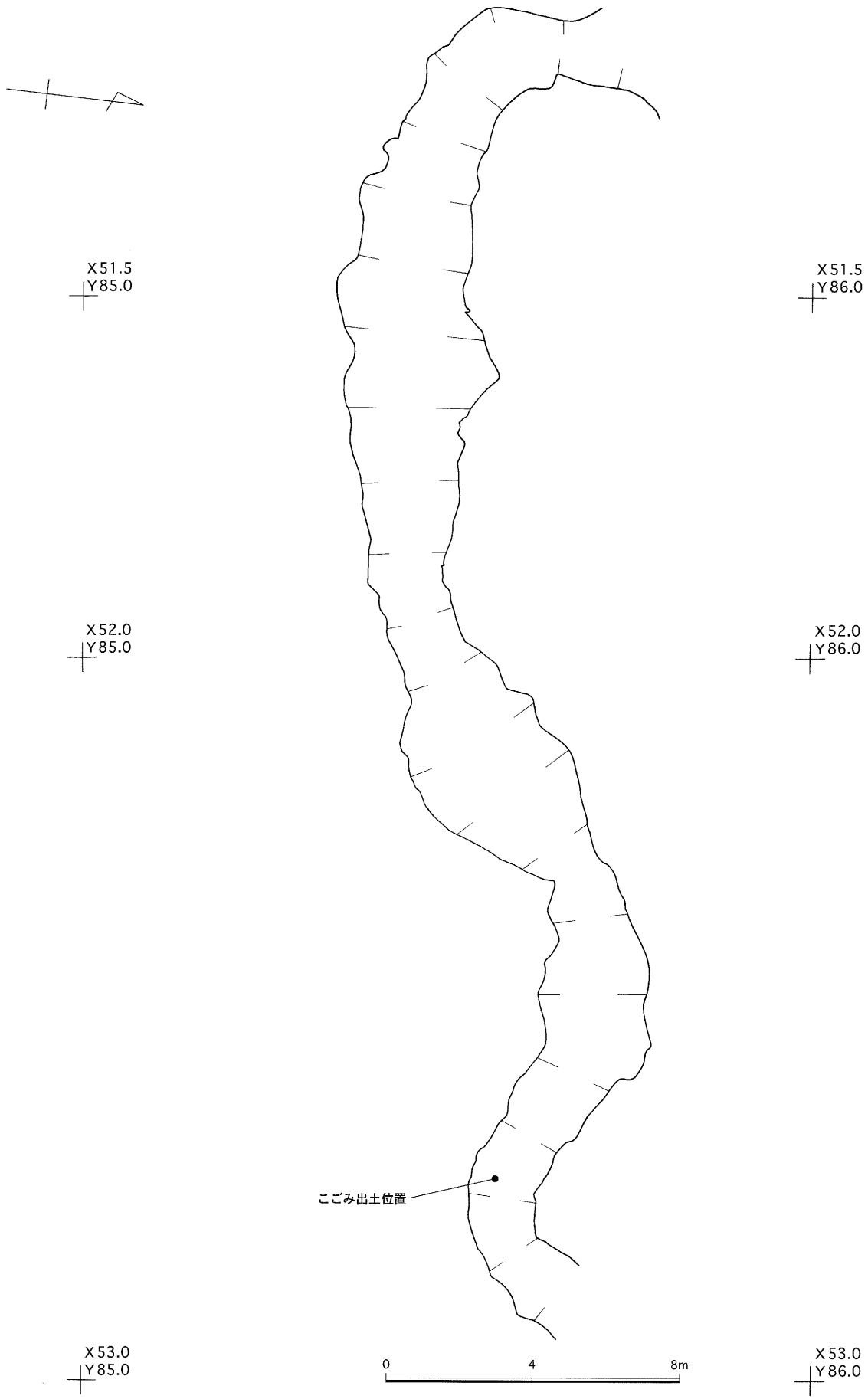
第47図　第10調査区遺構図(2) 掘立柱建物・土層



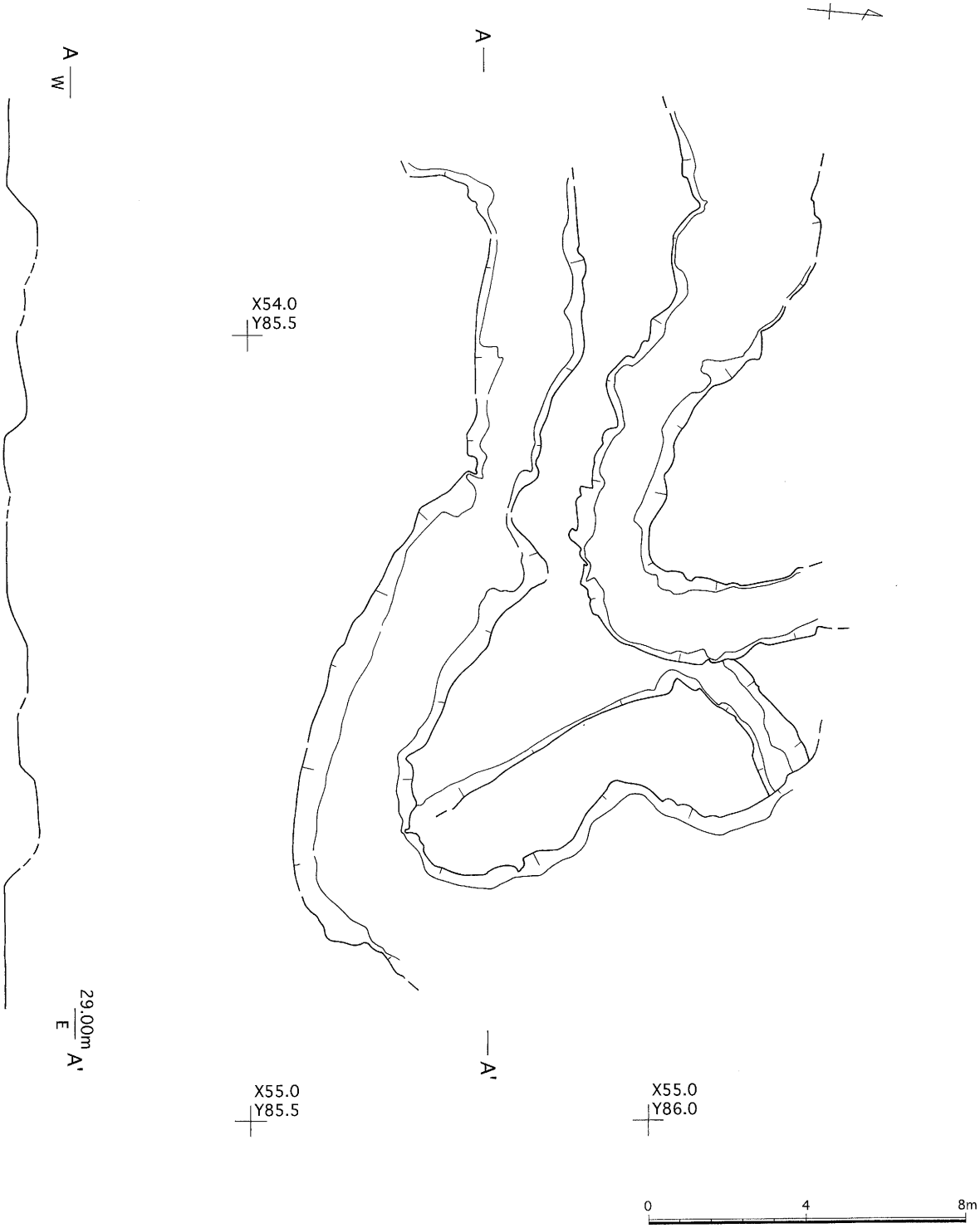
第48図　第1・6調査区遺構図(1)　明治以降の取り水



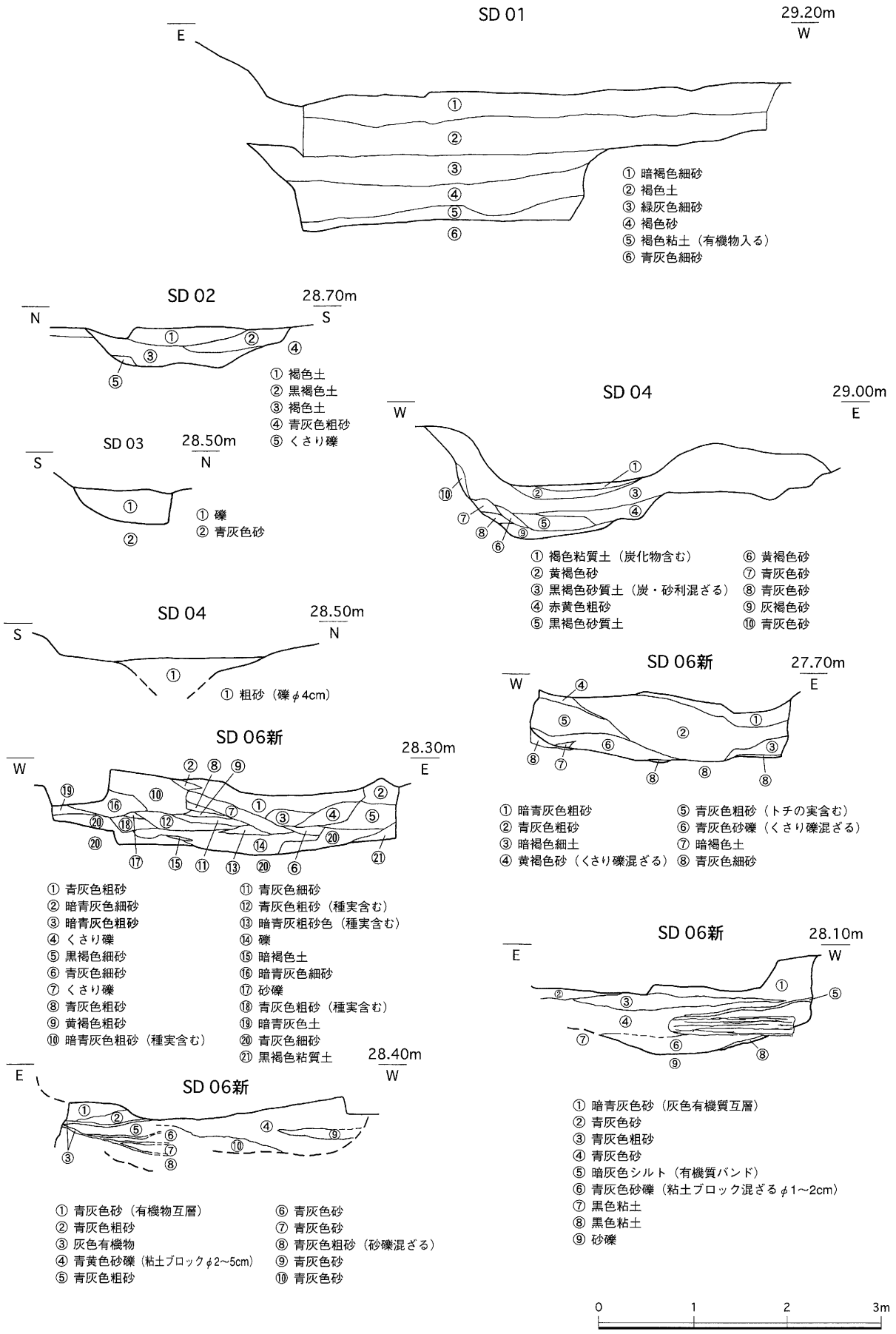
第49図　第1調査区遺構図（1）中世の柱穴群



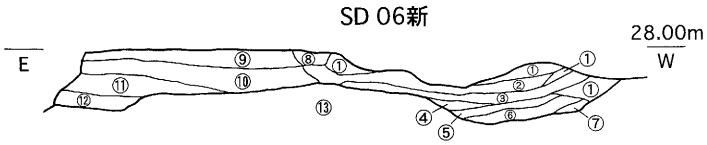
第50図　第1調査区遺構図(2)　平安時代の川　SD06新



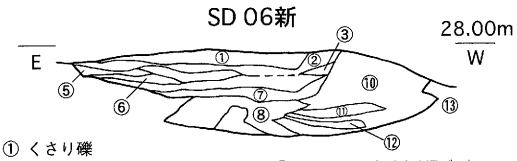
第51図　第1調査区遺構図（3）平安時代の川　SD06新



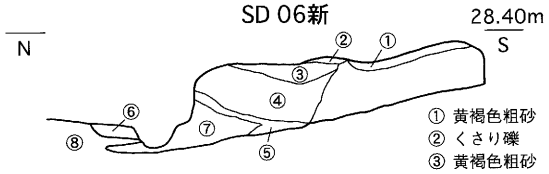
第52図　第1・6調査区遺構図(1) 溝の土層



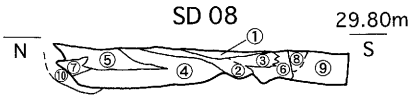
① 青灰色粗砂（木片、トチの実含む）
② くさり礫（黄褐色粗砂ベース）
③ 青灰色粗砂
④ くさり礫
⑤ 黄褐色粗砂
⑥ 砂礫
⑦ 青灰色粗砂
⑧ 暗褐色砂
⑨ 礫（くさり礫混ざる）
⑩ 青灰色粗砂
⑪ 礫（粗砂ベース）
⑫ 暗青灰色粗砂
⑬ 暗青灰色砂



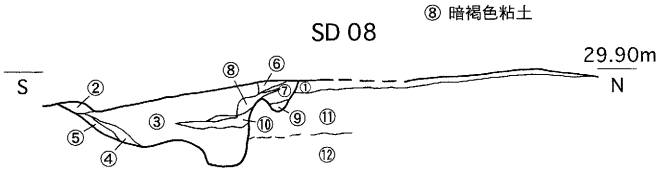
① くさり礫
② 黄褐色粗砂
③ 青灰色粗砂（トチの実、木片含む）
④ くさり礫（黄褐色砂ベース）
⑤ 青灰色粗砂
⑥ くさり礫（黄褐色砂ベース）
⑦ 暗青灰色砂（トチの実、木片含む）
⑧ 黄褐色粗砂（砂礫混ざる）
⑨ 暗青灰色細砂
⑩ 暗青灰色細砂（トチの実含む）
⑪ 青灰色粗砂
⑫ 青灰色粗砂
⑬ 暗褐色粘土



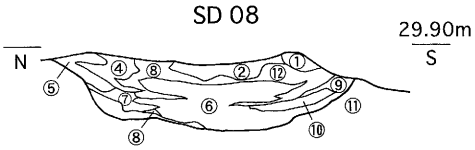
① 黄褐色粗砂
② くさり礫
③ 黄褐色粗砂
④ くさり礫（黄褐色砂ベース）
⑤ 青灰色粗砂
⑥ 青灰色粗砂（有機物）
⑦ 青灰色砂礫
⑧ 暗褐色粘土



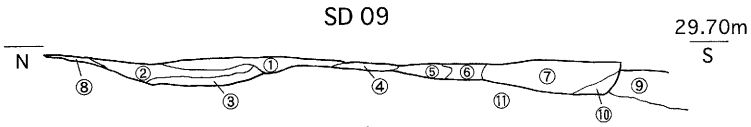
① 黄褐色砂礫
② 暗灰黄色砂
（有機物互層、トチの実含む）
③ 黄色粗砂
④ 黄褐色砂礫
（φ3～5cm粘土ブロック）
⑤ 暗青灰色細砂（有機物含む）
⑥ 黄褐色砂礫（φ0.5～1cm）
⑦ 暗青灰色細砂
（有機物含む）
⑧ 黒色粘土
⑨ 白色砂
⑩ 黒色粘質土（炭含む）
⑪ 灰色粘質砂



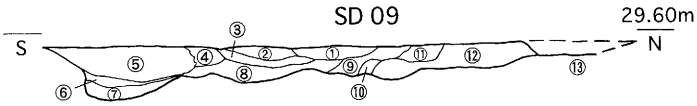
① 白色細砂
② 黒灰色砂
③ 黄褐色砂礫（φ3～5cm）
④ 黄色砂
⑤ 青灰色砂
⑥ 黄白色砂
⑦ 黒色砂質土
⑧ 黄色細砂
⑨ 黄灰色砂
⑩ 暗灰色砂
⑪ 黒色粘土（炭・土器含む）
⑫ 青灰色砂



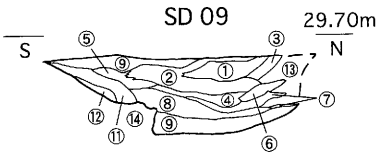
① 黒灰色砂
② 黄褐色砂礫
（粘土ブロック混ざるφ3～5cm）
③ 黄褐色砂
④ 黒灰色砂
⑤ 黄白色砂
⑥ 黄褐色砂礫
（φ5～10cm礫、粘土ブロック混ざる）
⑦ 黒色砂（有機物含む）
⑧ 黒色粗砂
⑨ 黒色砂（有機物含む）
⑩ 黄褐色粗砂
⑪ 青灰色粘土ブロック
⑫ 明黄褐色砂



① 黄色砂礫（φ3～5cm川原石混ざる）
② 黄灰色砂と有機物の互層
③ 黄色砂礫（川原礫粗砂混ざる）
④ 黄色粗砂
⑤ 灰色細砂（有機物含む）
⑥ 灰白色砂
⑦ 黄くさり礫
⑧ 黄褐色土
⑨ 青灰色砂
⑩ 暗黄色粗砂（礫混ざる）
⑪ 黒色粘質土

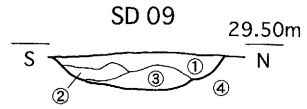


① 灰色砂礫（φ3～5cm）
② 暗灰褐色砂
③ 青灰色粘土
④ 黒灰褐色砂（有機物含む）
⑤ 黒灰色有機物と砂の互層
⑥ 黄灰色粗砂
⑦ 暗灰色砂礫（φ2～5cm）
⑧ 暗灰褐色砂礫（φ5～10cm）
⑨ 暗灰褐色砂
⑩ 暗黒灰色細砂
⑪ 黒灰色細砂
⑫ 青灰色粘土と粗砂の互層
⑬ 青灰色砂

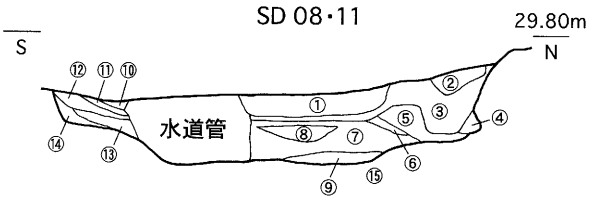


① 暗灰褐色砂礫（粘土ブロック、粗砂、砂礫φ0.3～0.5cm）
② 黒色土と有機物の互層
③ 黒灰色細砂
④ 暗灰色粗砂
⑤ 暗灰色砂
⑥ 黒色有機物と砂の互層
⑦ 黒灰色有機物と砂の互層
⑧ 暗灰褐色粗砂
⑨ 暗青灰色砂礫（φ3～5cm）
⑩ 黄色砂礫（φ3～10cm）
⑪ 黄褐色粗砂（φ2mm前後の砂礫混ざる）
⑫ 青灰色砂
⑬ 青灰色砂
⑭ 青灰色砂

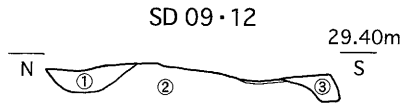
第53図　第1・6調査区遺構図(2) 溝の土層



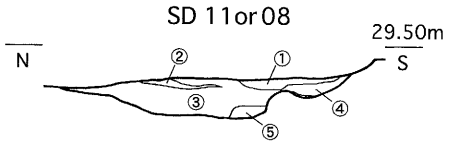
① 灰褐色細砂（有機物含む）
② 黄褐色粗砂
③ 褐色砂礫（φ1～2cm）
④ 黒色粘質土



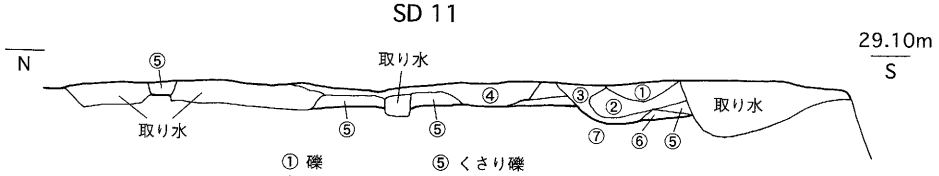
① 赤褐色礫
② 黒褐色砂
③ 緑灰色細砂（有機物含む）
④ 褐色粗砂
⑤ くさり礫
⑥ 赤褐色粗砂
⑦ 礫
⑧ 黒褐色砂（トチの実含む）
⑨ 青灰色粗砂
⑩ 緑灰色細砂
⑪ くさり礫
⑫ 黒褐色砂
⑬ くさり礫
⑭ 黒褐色砂
⑮ 青灰色細砂



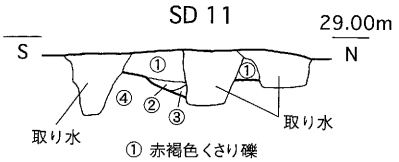
① 黄褐色砂礫
② 青灰色細砂
③ 黄褐色砂礫



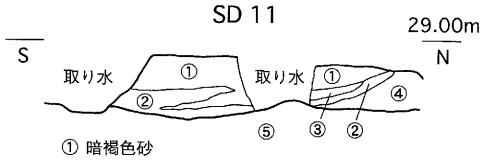
① 暗灰色砂（有機物含む）
② 暗灰色砂（トチの実含む）
③ 黄褐色砂礫（川原石混ざる）
④ 有機物層
⑤ 暗灰色砂（有機物含む）



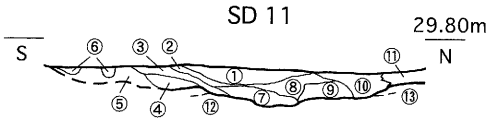
① 礫
② 暗褐色細砂
③ 灰褐色粗砂
④ 礫
⑤ くさり礫
⑥ 青灰色粗砂
⑦ 青灰色粗砂



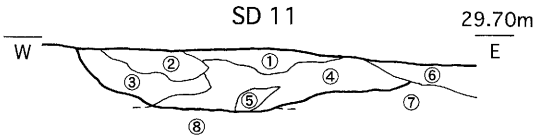
① 赤褐色くさり礫
② 赤褐色粗砂
③ 黒褐色粘質土
④ 青灰色粗砂



① 暗褐色砂
② 礫（暗褐色砂ベース）
③ 黒褐色砂
④ 赤褐色粗砂
⑤ 黒褐色粘質土

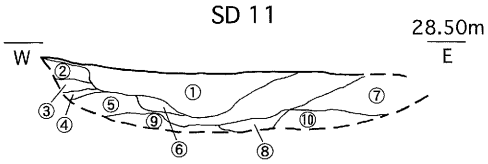


① 黄褐色砂礫（φ3～5cm）
② 黄灰色粗砂
③ 黒灰色砂
④ 暗灰色
（青灰色粘土ブロック混ざる）
⑤ 黄褐色砂（粘土礫混ざる）
⑥ 黒灰砂ブロック
⑦ 暗黄褐色砂礫（φ3～5cm）
⑧ 黄灰色粗砂（有機物含む）
⑨ 灰色砂と黒色粘土の互層
⑩ 黒褐色砂質土
⑪ 黒灰色砂
⑫ 黒色粘土
⑬ 黄灰色砂

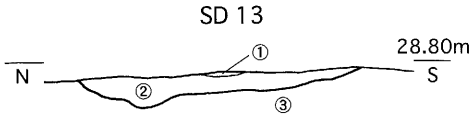


① 黒灰色砂
② 黒褐色砂
③ 暗黄褐色粘土
④ 黄褐色砂礫
（φ3～10cm川原石粘土ブロック）
⑤ 黒褐色砂ブロック
⑥ 黒灰色砂
⑦ 黄緑色砂
⑧ 黒色粘土

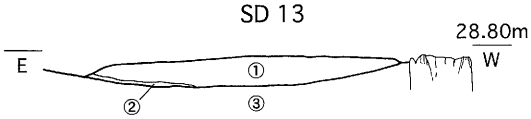
第54図　第1・6調査区遺構図(3) 溝の土層



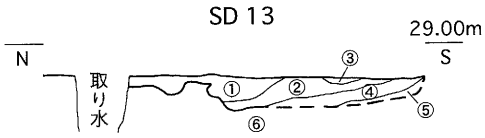
① 黒褐色砂礫（φ3～5cm）
② 黄白色砂
③ 褐色砂礫（粘土ブロック混ざる）
④ 青灰色砂
⑤ 黄褐色砂礫（φ2～4cm）
⑥ 青灰色砂
⑦ 黄褐色粘土（φ3～5cm）
⑧ 青灰色粗砂
⑨ 青灰色粘土
⑩ 青灰色粘土



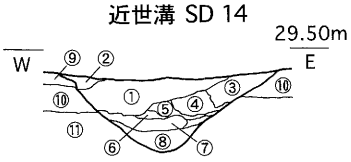
① 黄褐色粗砂
② 黄褐色砂礫
（φ5～7cm粘土ブロック、砂礫混ざる）
③ 黄褐色砂



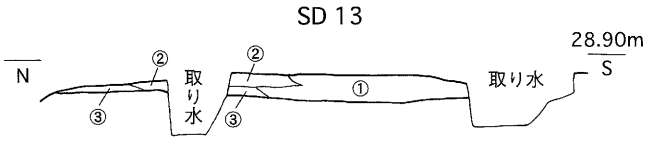
① くさり礫
② 黄褐色粗砂
③ 赤褐色細砂



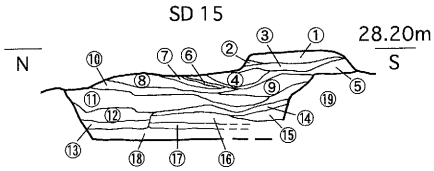
① 黄褐色砂礫（砂礫、粘土ブロック混ざる）
② 黄色粗砂
③ 黄褐色砂礫（砂礫、粘土ブロック混ざる）
④ 黄褐色粘土ブロック
⑤ 黄褐色砂
⑥ 黄褐色砂



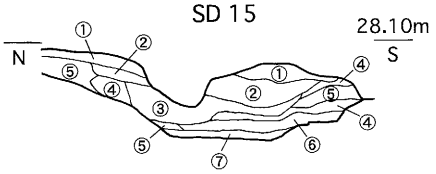
① 黒灰色粘質砂と青灰色砂の互層
② 黒灰色砂
③ 青褐色砂
④ 灰色粘質砂
⑤ 青灰色砂
⑥ 灰色粘質砂
⑦ 青灰色砂
⑧ 黒色粘土と青灰色砂の互層
⑨ 青灰色砂
⑩ 黒色粘土（炭含む）
⑪ 青灰色砂



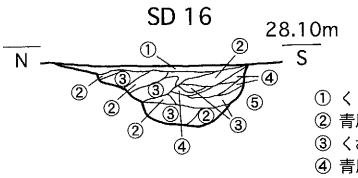
① くさり礫
② 緑灰色細砂
③ 青灰色細砂



① 暗褐色土（黄褐色砂混ざる）
② 青灰色粗砂
③ 黄褐色砂（トチの実含む）
④ 青灰色細砂（トチの実含む）
⑤ 黒褐色粘質土
⑥ 黄褐色粗砂
⑦ 青灰色細砂
⑧ 青灰色粗砂
⑨ 青灰色細砂
⑩ 黄褐色粗砂（くさり礫混ざる）
⑪ 青灰色細砂
⑫ 青灰色粗砂
⑬ 青灰色粗砂（トチの実含む）
⑭ 青灰色粗砂（くさり礫混ざる）
⑮ 青灰色細砂（トチの実含む）
⑯ 青灰色粗砂
⑰ 青灰色粗砂（くさり礫混ざる）
⑱ くさり礫
⑲ 暗青灰色細砂



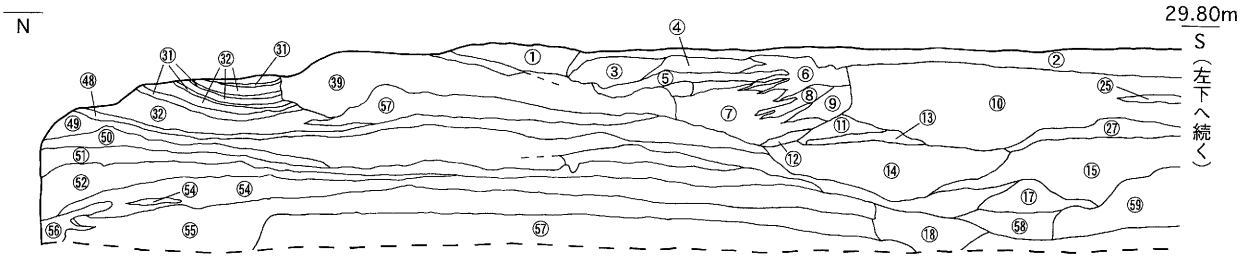
① 暗青灰色細砂
② 黄褐色粗砂（青灰色細砂混ざる）
③ くさり礫（青灰色粗砂ベース）
④ 青灰色細砂
⑤ 暗青灰色砂（有機物含む）
⑥ 青灰色粗砂（トチの実、木片含む）
⑦ 青灰色粗砂



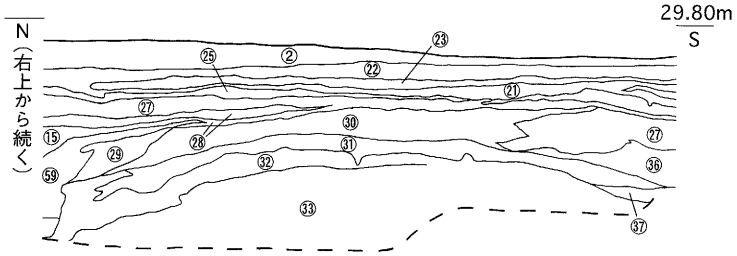
① くさり礫
② 青灰色粗砂
③ くさり礫（青灰色粗砂ベース）
④ 青灰色砂（トチの実、木片含む）
⑤ 暗青灰色細砂

第55図　第1・6調査区遺構図(4) 溝の土層

第1調査区 南北壁



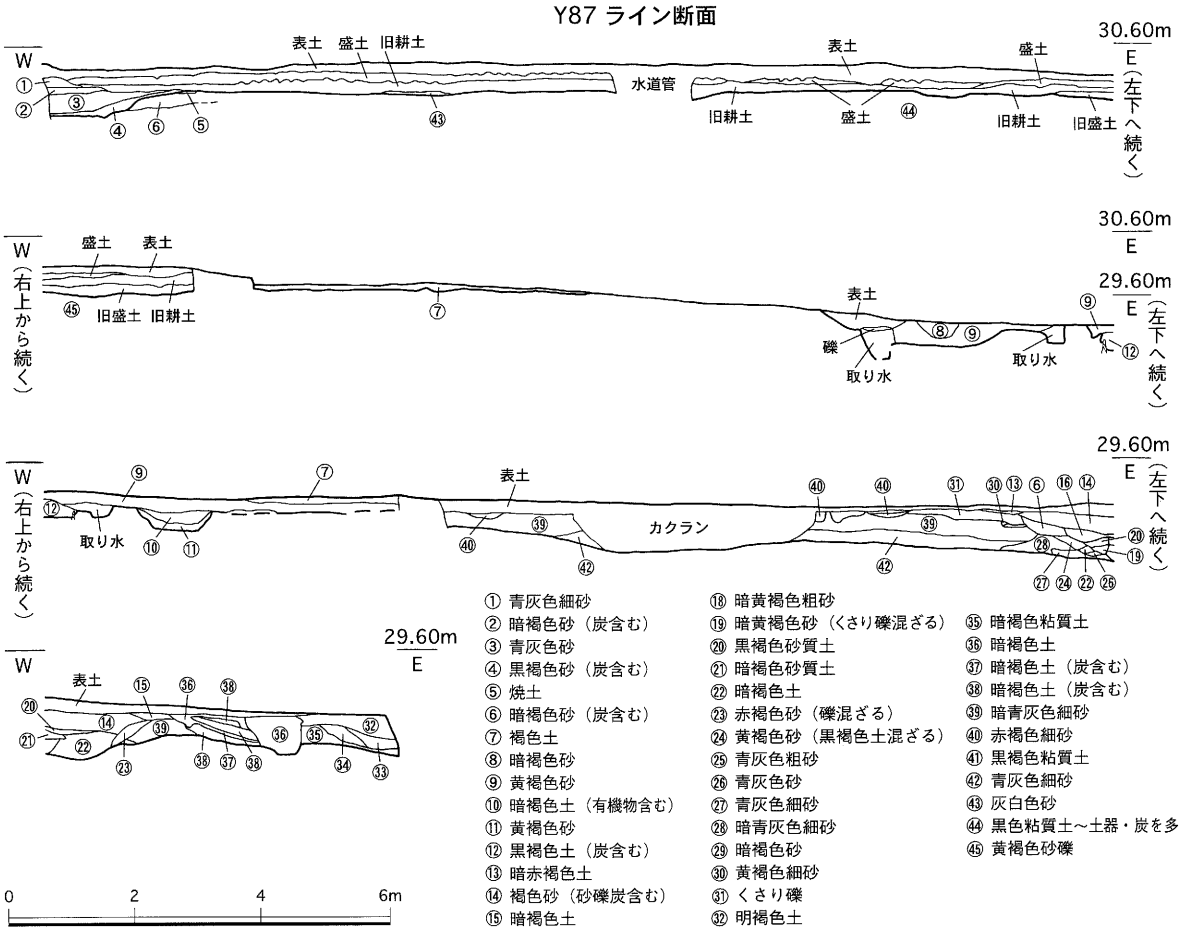
第1調査区 南北壁



① 黄褐色砂礫
② 黄褐色砂
③ 黄褐色砂礫
④ 黄褐色砂層
⑤ 黄褐色砂層
⑥ 灰色砂質土
⑦ 暗灰色砂質土
⑧ 暗褐色砂質土
⑨ 暗褐色砂
⑩ 明褐色砂質土（有機物含む）
⑪ 灰褐色砂層
⑫ 暗灰褐色砂
⑬ 明褐色砂質土
⑭ 灰褐色砂礫層
⑮ 褐色砂層（有機物含む）
⑯ 欠番
⑰ 褐色粗砂
⑱ 褐色砂礫
⑲ 褐色砂
⑳ 欠番
㉑ 黄褐色砂
㉒ 灰色粘質土
㉓ 明灰白色粘質土
㉔ 暗灰色粘質土
㉕ 明灰白色粘質土
㉖ 暗灰色粘質土
㉗ 暗灰色粘質土
㉘ 暗灰色粘質土
㉙ 明褐色砂質土
㉚ 明褐色粘質土
㉛ 黒褐色粘質土
㉜ 褐色粘質土
㉝ 青灰色粘質土
㉞ 欠番
㉟ 褐色砂質土（炭含む）
㊱ 褐色細砂層
㊲ 明褐色粘質土
㊳ 黒褐色粘質土
㊴ 褐色砂
㊵ 黒褐色粘質土
㊶ 明黄褐色シルト
㊷ 黒褐色粘質土
㊸ 明黄褐色シルト
㊹ 黒褐色粘質土
㊺ 明黄褐色シルト
㊻ 黒褐色粘質土
㊼ 明黄褐色シルト
㊽ 暗褐色土（有機物含む）
㊾ 灰褐色砂
㊿ 褐色細砂
51 黒色土
52 青灰色シルト層
53 欠番
54 灰青色砂質土
55 明青灰色シルト
56 青灰色シルト
57 褐色粗砂
5' 黄褐色粗砂
5'' 褐色砂
58 褐色砂
59 褐色砂

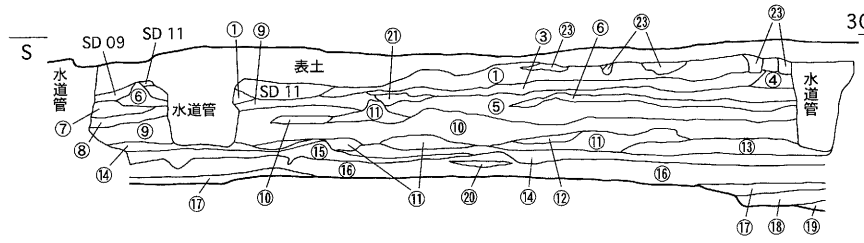
第56図　第1・6調査区遺構図(5) 包含層・SD06土層

Y87 ライン断面



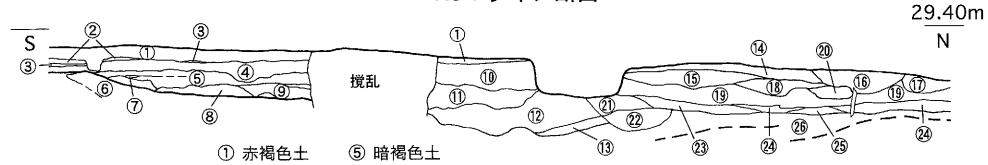
① 青灰色細砂
② 暗褐色砂（炭含む）
③ 青灰色砂
④ 黒褐色砂（炭含む）
⑤ 焼土
⑥ 暗褐色砂（炭含む）
⑦ 褐色土
⑧ 暗褐色砂
⑨ 黄褐色砂
⑩ 暗褐色土（有機物含む）
⑪ 黄褐色砂
⑫ 黒褐色土（炭含む）
⑬ 暗赤褐色土
⑭ 褐色砂（砂礫炭含む）
⑮ 暗褐色土
⑯ 暗褐色土（炭含む）
⑰ 黒褐色土（砂含む）
⑱ 暗黄褐色粗砂
⑲ 暗黄褐色砂（くさり礫混ざる）
⑳ 黒褐色砂質土
㉑ 暗褐色砂質土
㉒ 暗褐色土
㉓ 赤褐色砂（礫混ざる）
㉔ 黄褐色砂（黒褐色土混ざる）
㉕ 青灰色粗砂
㉖ 青灰色砂
㉗ 青灰色細砂
㉘ 暗青灰色細砂
㉙ 暗褐色砂
㉚ 黄褐色細砂
㉛ くさり礫
㉜ 明褐色土
㉝ 暗褐色土
㉞ 礫
㉟ 暗褐色粘質土
㊱ 暗褐色土
㊲ 暗褐色土（炭含む）
㊳ 暗褐色土（炭含む）
㊴ 暗青灰色細砂
㊵ 赤褐色細砂
㊶ 黒褐色粘質土
㊷ 青灰色細砂
㊸ 灰白色砂
㊹ 黒色粘質土～土器・炭を多く含む）
㊺ 黄褐色砂礫

X52 ライン断面



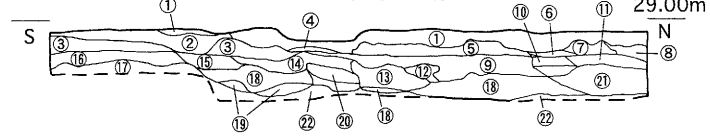
① 黄褐色粘質土
② 黄褐色細砂
③ 青灰色粗砂
④ 青灰色粗砂
⑤ 青灰色細砂
⑥ 青灰色粗砂
⑦ 礫
⑧ 青灰色粗砂
⑨ 砂礫
⑩ くさり礫
⑪ 青灰色粗砂
⑫ 暗灰色粘質土
⑬ 青灰色粗砂（くさり礫混ざる）
⑭ 暗褐色砂（石器含む）
⑮ 青灰色砂（くさり礫混ざる）
⑯ 青灰色粗砂
⑰ 暗灰色砂
⑱ 青灰色粘土
⑲ 青灰色細砂
⑳ 青灰色砂（くさり礫混ざる）
㉑ 赤褐色礫
㉒ 暗褐色土

X54 ライン断面



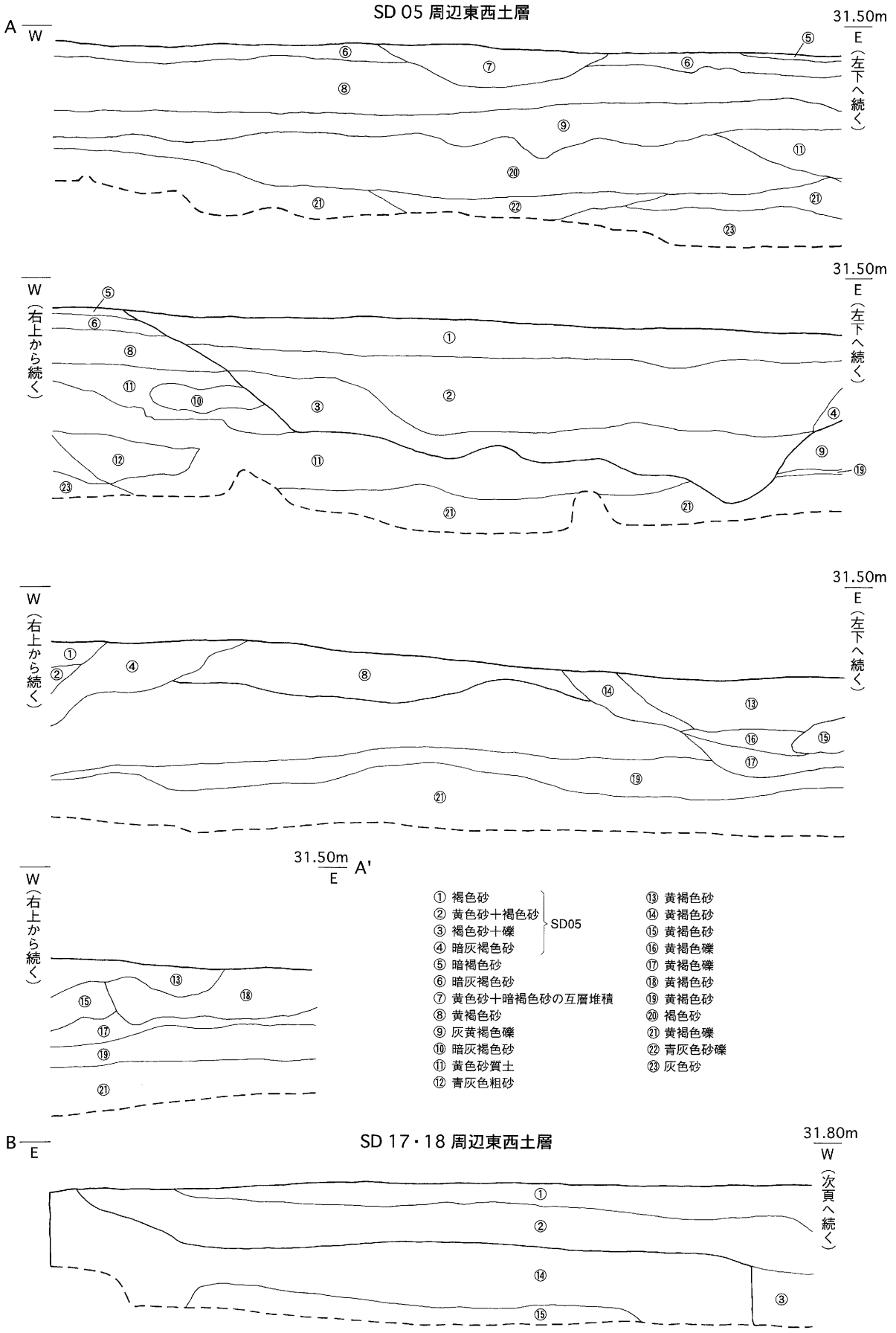
① 赤褐色土
② 黄褐色土
③ 黒色土
④ 砂礫
⑤ 暗褐色土
⑥ 黒色土
⑦ 白色細砂
⑧ 黄褐色粗砂
⑨ 砂礫（くさり礫ブロック）
⑩ 暗赤褐色土
⑪ 暗灰色土
⑫ 砂礫
⑬ くさり礫
⑭ 黒褐色土
⑮ 赤褐色土
⑯ 礫
⑰ 黄褐色砂
⑱ 黄褐色砂
⑲ 暗灰色粘質土
⑳ 白色粘土ブロック
㉑ 砂礫
㉒ 砂礫
㉓ 砂礫
㉔ 黒色粘土
㉕ 黒褐色土
㉖ 青灰色粗砂

X54・4 ライン断面

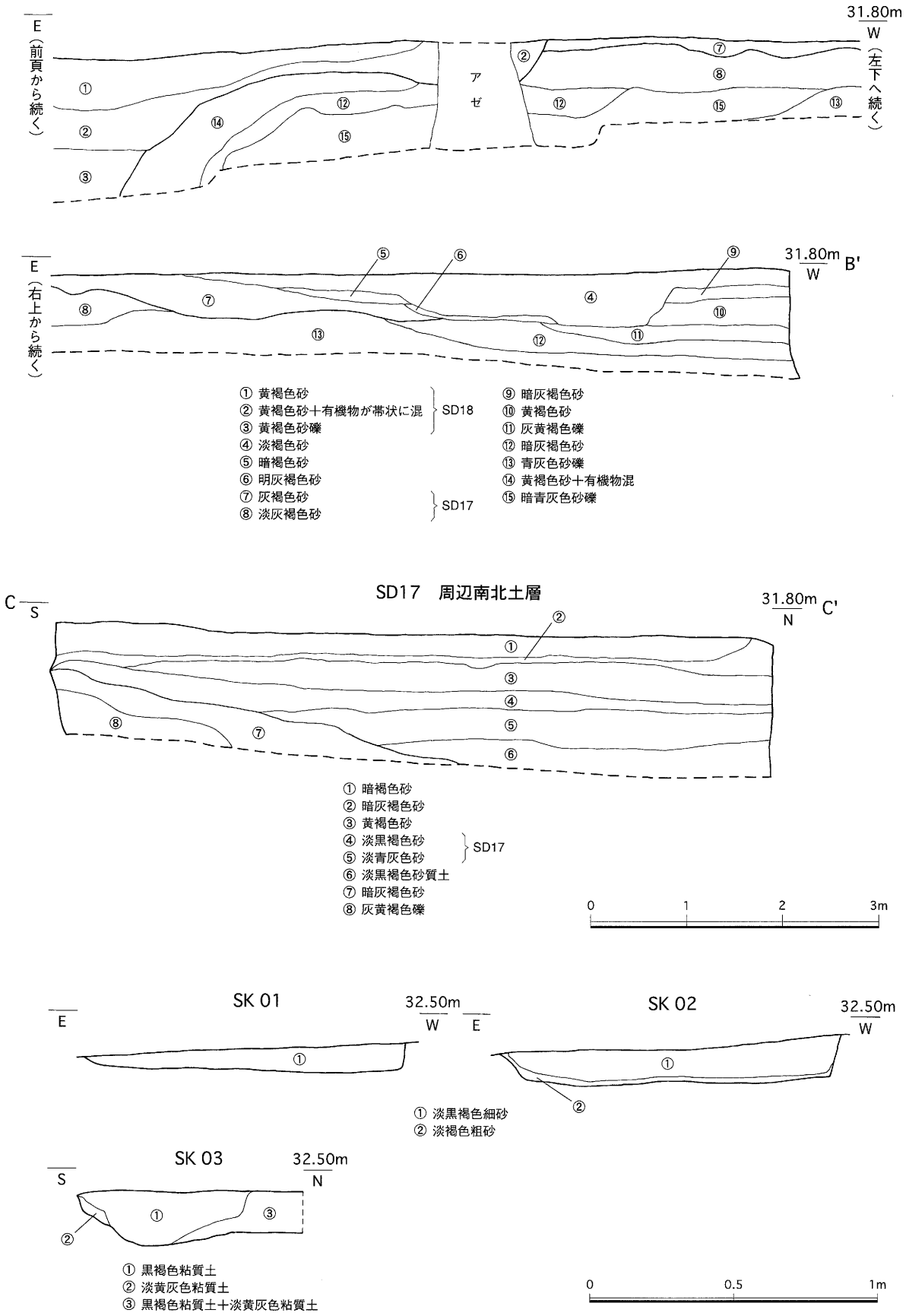


① 暗灰色砂質土
② 灰褐色砂
③ 暗灰色砂
④ 白色粘土
⑤ 灰褐色砂
⑥ 灰褐色粘質土
⑦ 灰褐色砂
⑧ 撹乱
⑨ 黒灰色粘質土
⑩ 混暗灰色砂
⑪ 撹乱
⑫ 黒褐色砂礫
⑬ 黒褐色粘土
⑭ 黒色粘土
⑮ 黒色粘土（白色砂ブロック混る）
⑯ 黄褐色砂礫
⑰ 明青座灰色砂
⑱ 暗褐色砂
⑲ 黒褐色砂
⑳ 青灰色粗砂
㉑ 砂礫
㉒ 明青灰色細砂

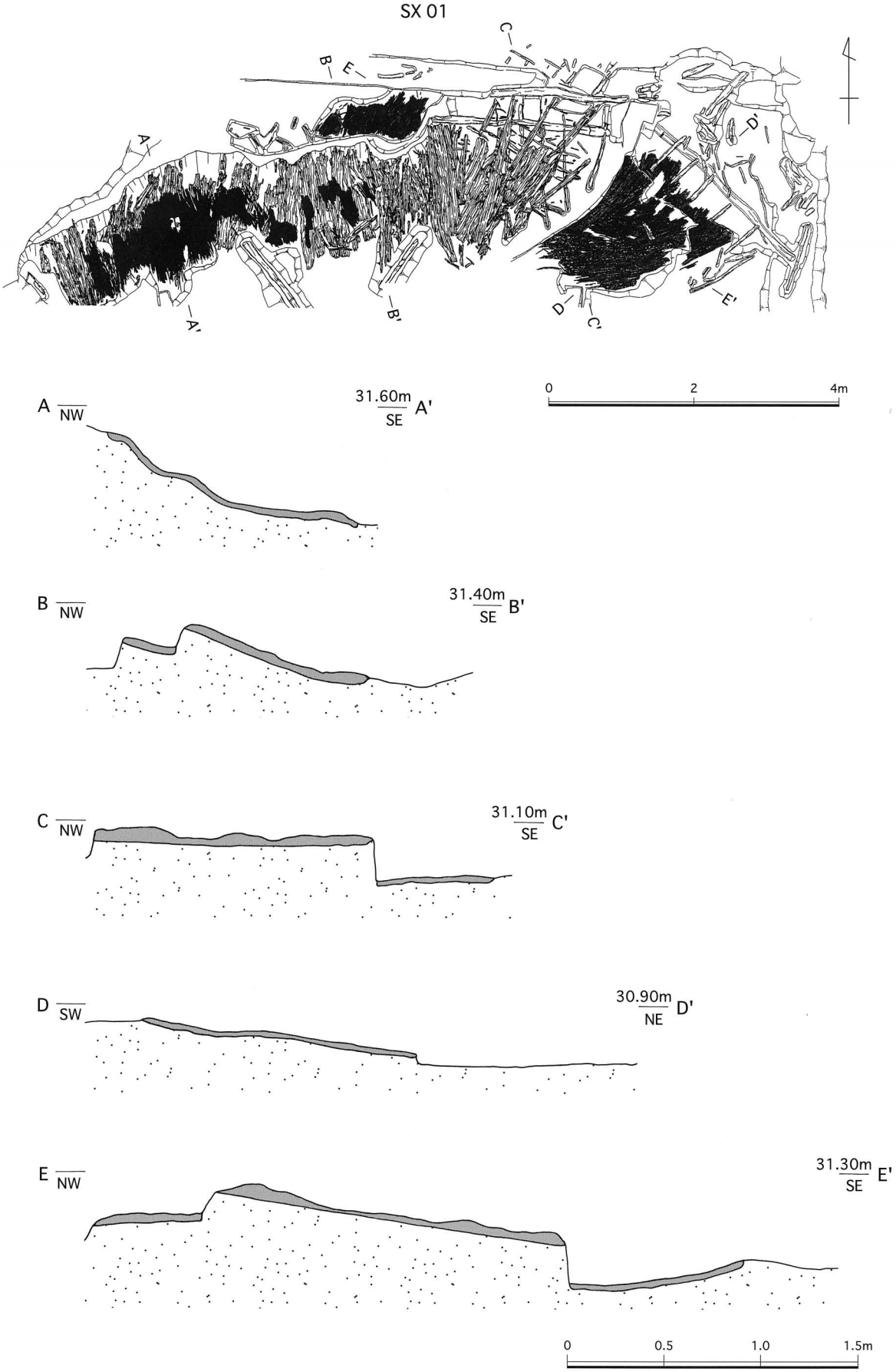
第57図　第1・6調査区遺構図(6)　包含層



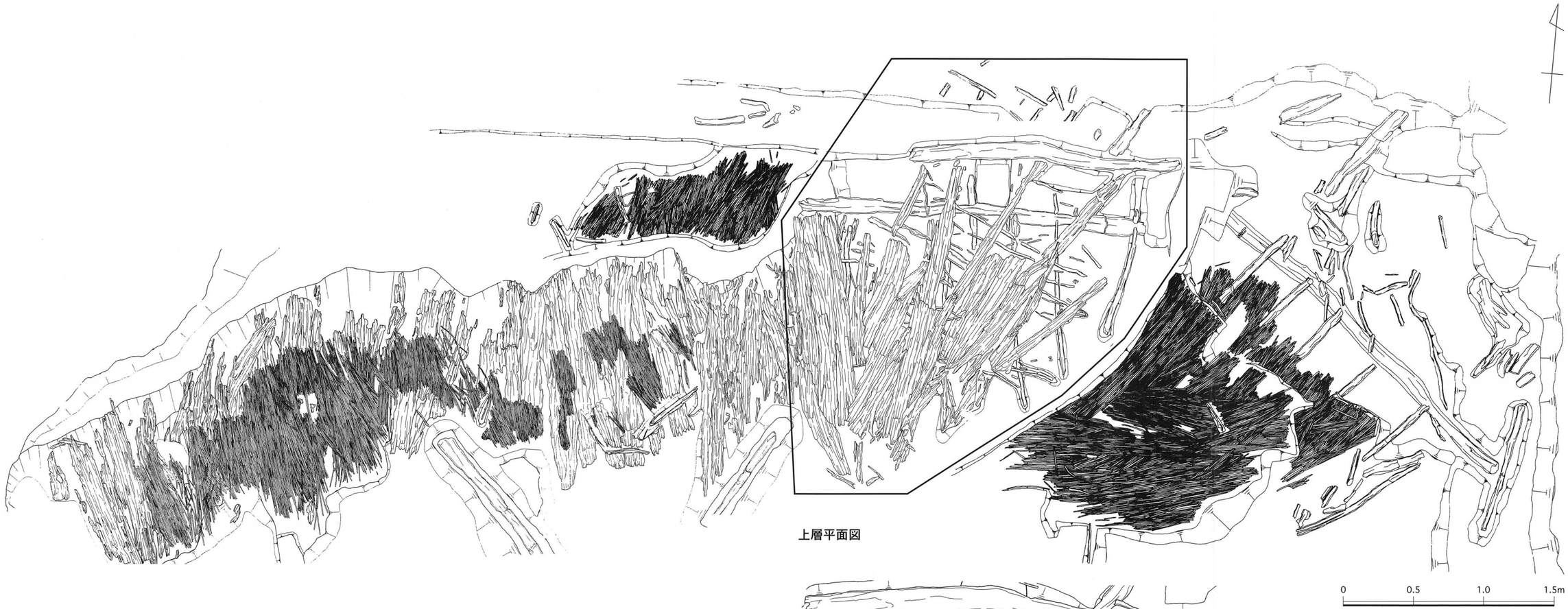
第58図　第2調査区遺構図（1）土層

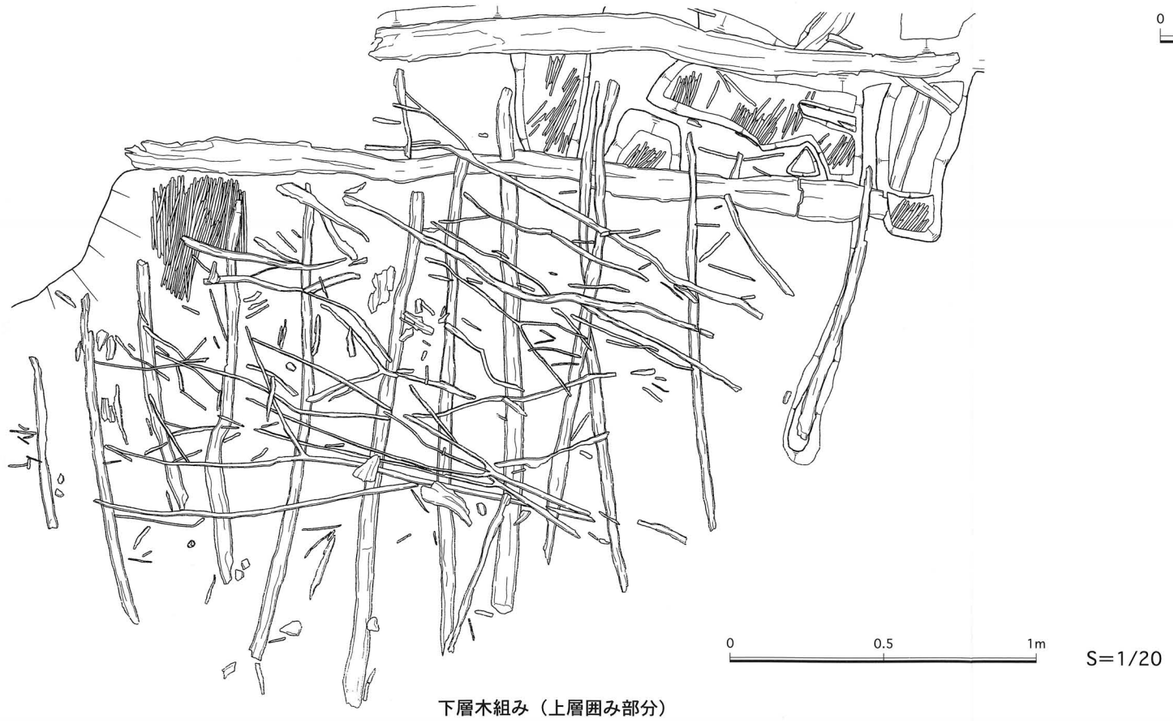


第59図　第2調査区遺構図(2)　土層

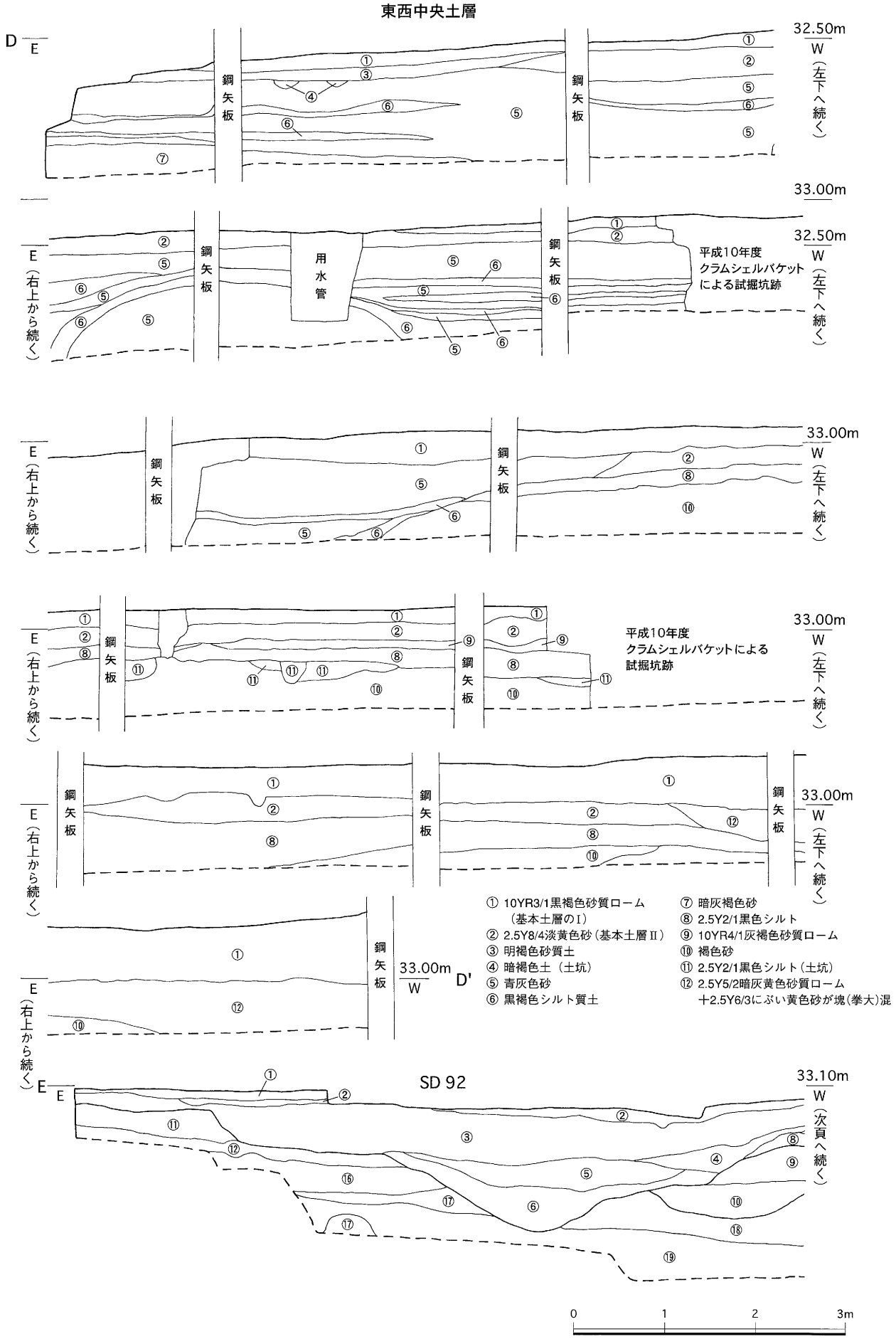


第60図　第2調査区遺構図(3)　樹皮列を伴う木組み

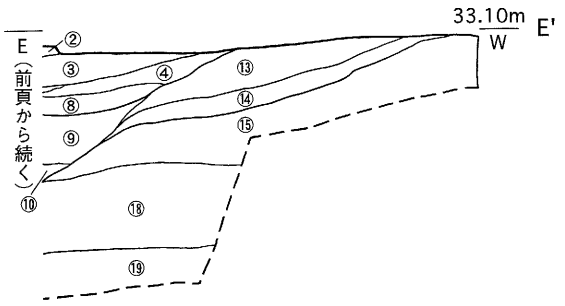




第61図　第2調査区遺構図(4)　樹皮列を伴う木組み

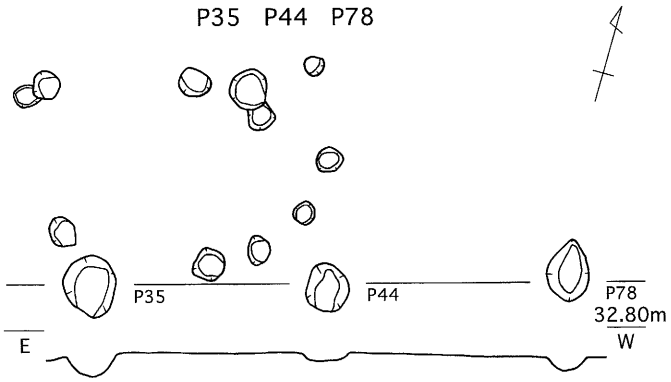


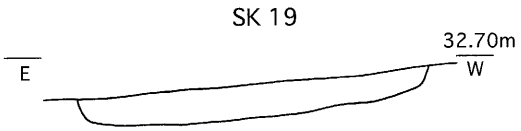
第62図　第3調査区遺構図（1）土層



① 10YR3/1黒褐色砂質ローム
② 2.5Y5/3黄褐色砂層
＋10YR3/1黒褐色砂質ローム
③ 2.5Y5/2暗灰黄色砂質ローム
＋2.5Y6/3にぶい黄色砂が
塊(拳大)で20%混
④ 10YR3/2黒褐色シルト
⑤ 10YR3/1黒褐色シルト
＋2.5Y6/3にぶい黄色砂が帯状に混
⑥ 5Y5/1灰色砂＋有機物混
⑦ 10YR3/1黒褐色シルト
⑧ 2.5Y5/4黄褐色砂層＋有機物が帯状に混
⑨ 2.5Y5/3黄褐色砂層＋薄い帯状の有機物混
＋10YR3/2黒褐色シルトが塊で20%混
} SD92
⑩ 2.5Y4/2暗灰黄色砂＋礫
⑪ 2.5Y4/2暗灰黄色砂
⑫ 2.5Y2/1黒色シルト
⑬ 2.5Y6/4にぶい黄色砂
⑭ 10YR3/1黒褐色シルト
⑮ 2.5Y5/2暗灰黄色砂
⑯ 5Y5/1灰色砂質ローム
⑰ 5Y5/1灰色砂＋10GY6/緑灰色
シルト質ロームが塊で70%混
⑱ 65Y5/1灰色砂＋礫80%混

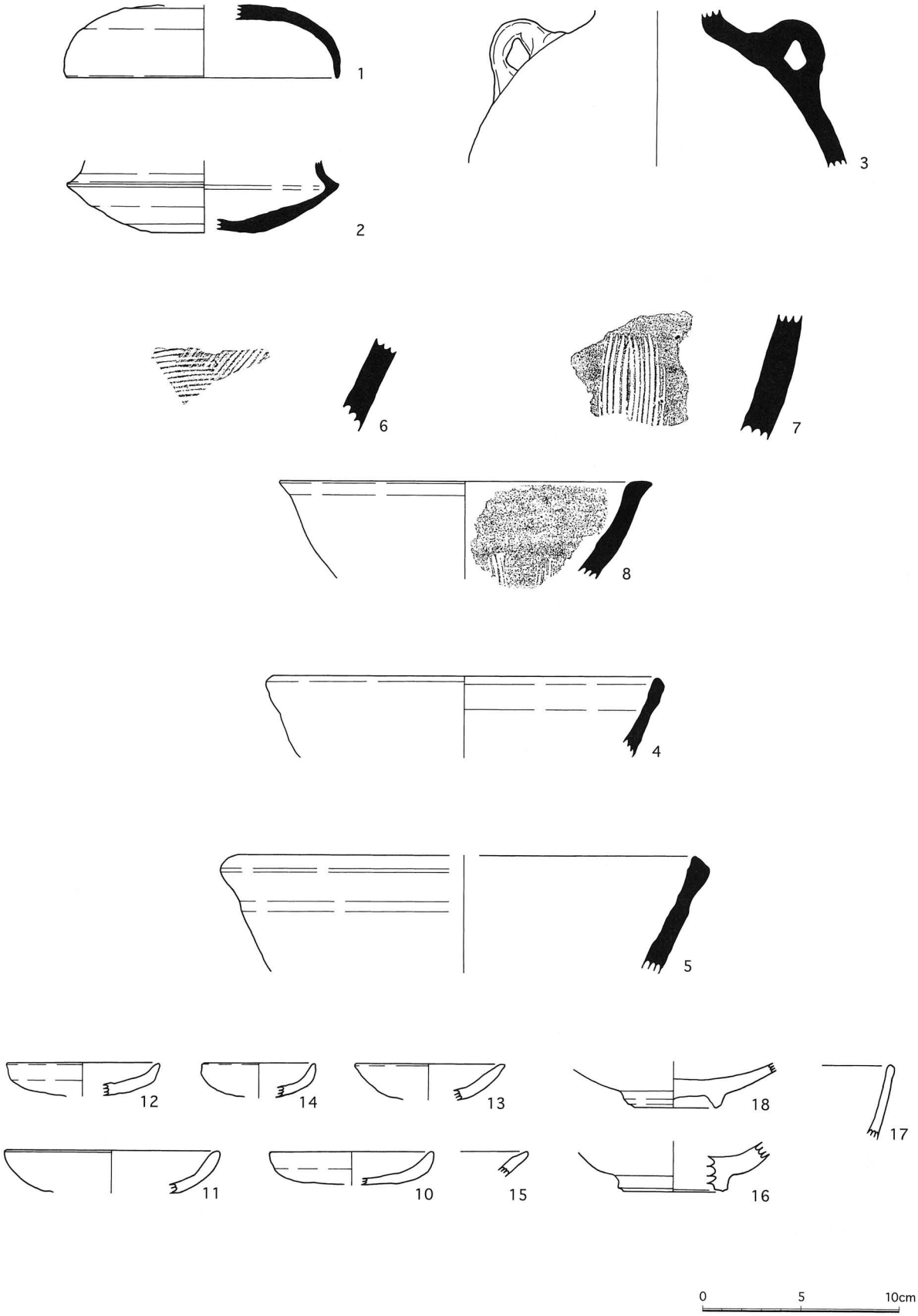
0 1 2 3m



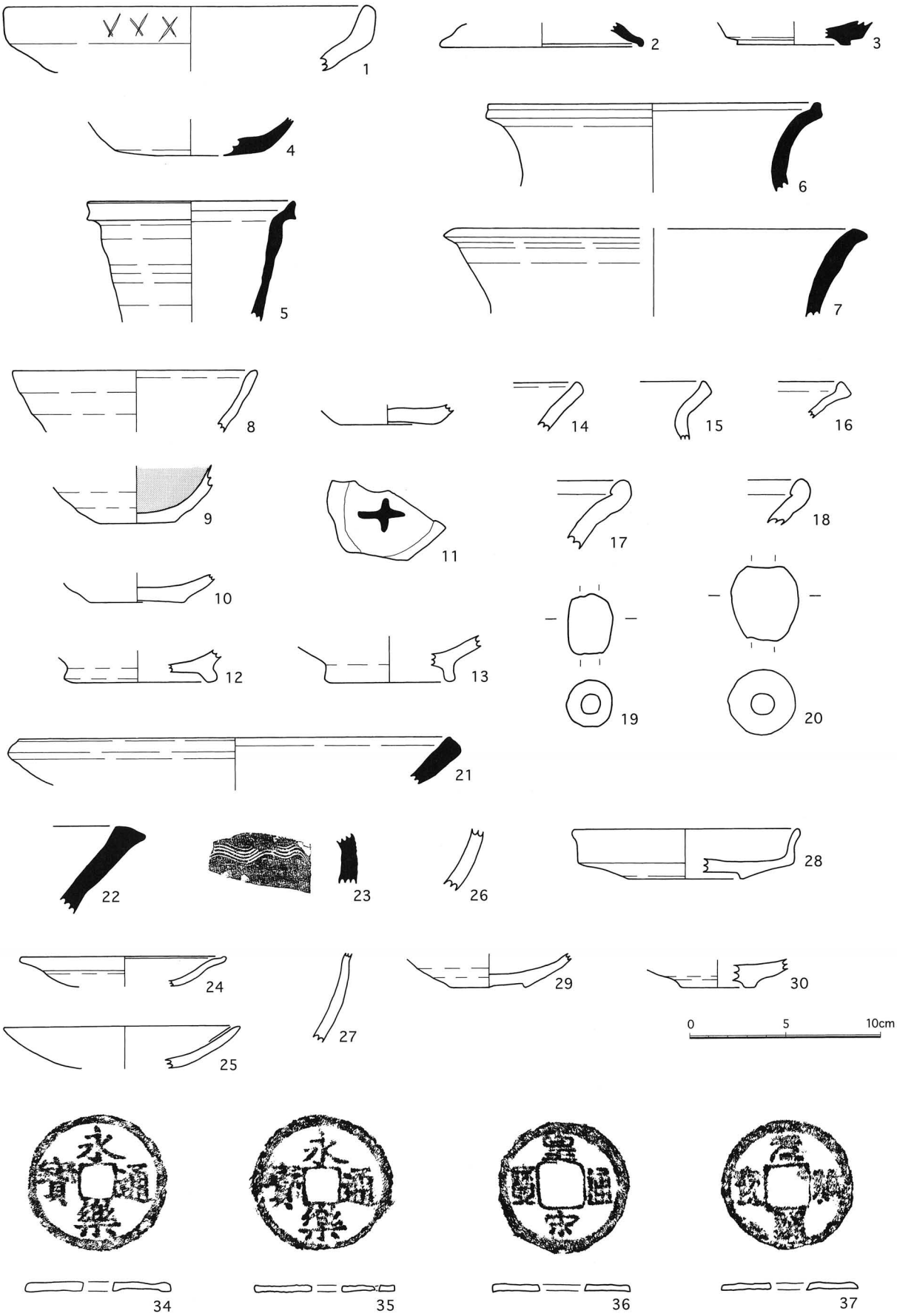


0 0.5 1.0 1.5m

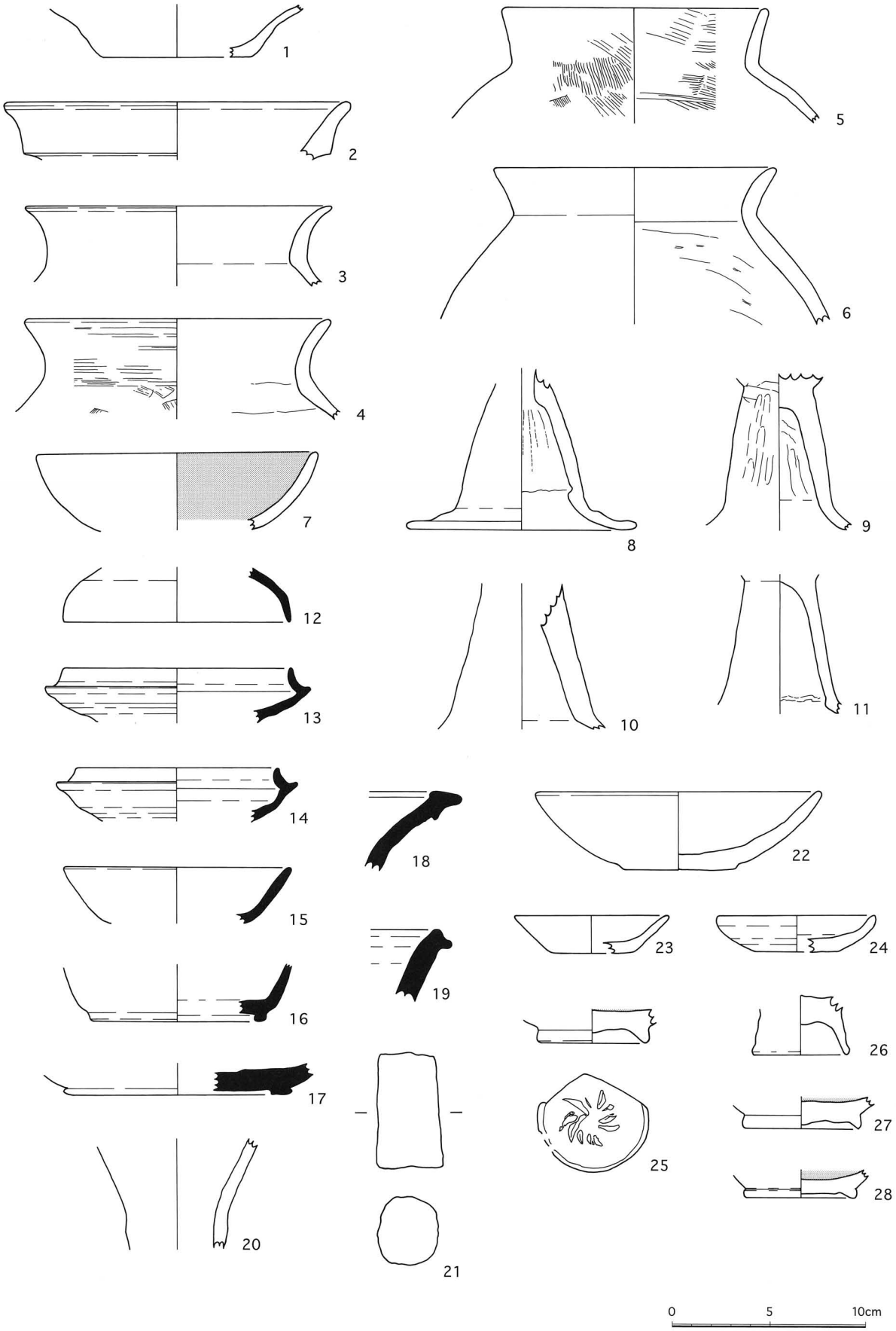
第63図　第3調査区遺構図(2) 土層・土坑



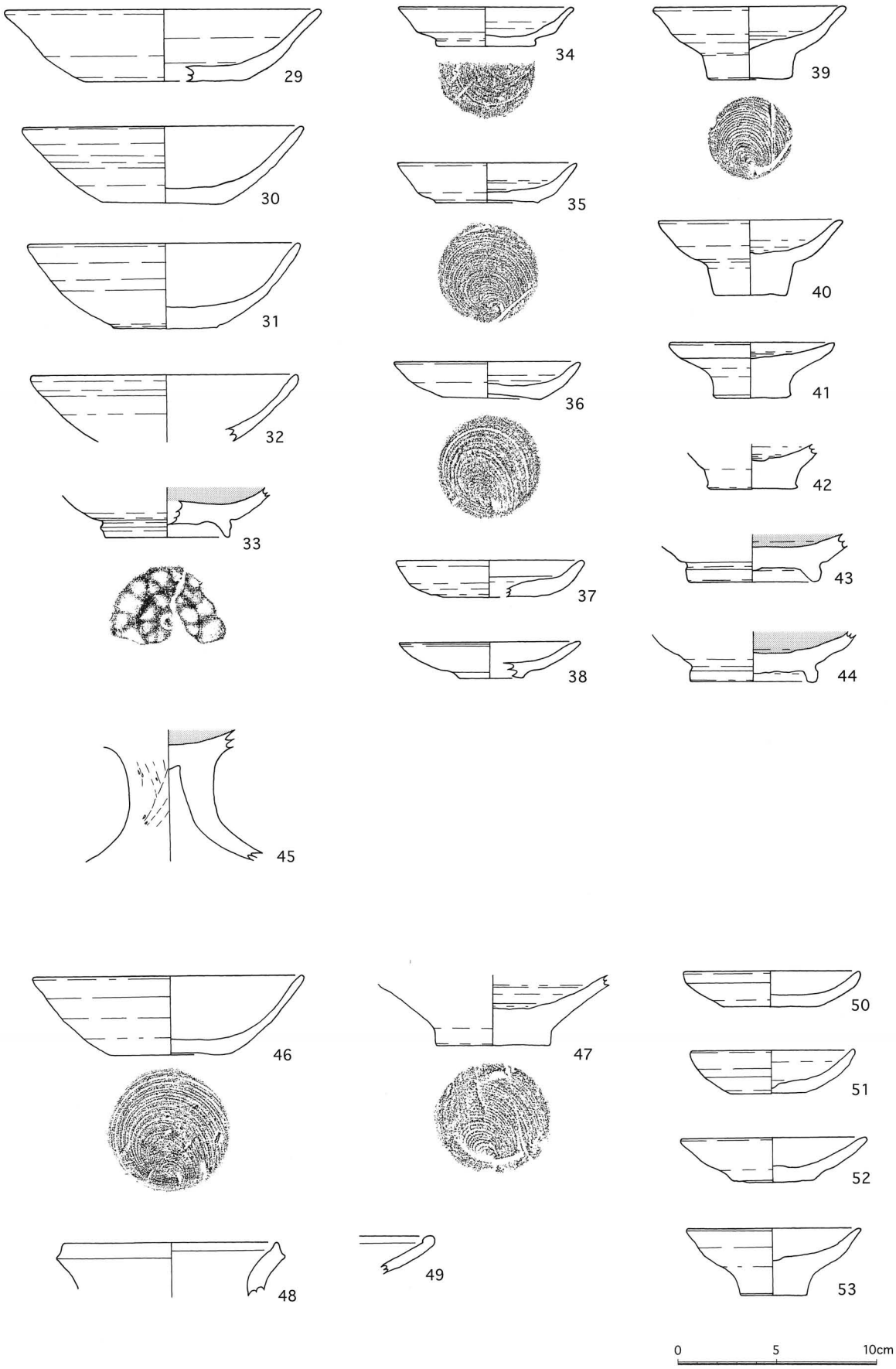
第64図　第8調査区遺物図　須恵器・珠洲・土師器・青磁



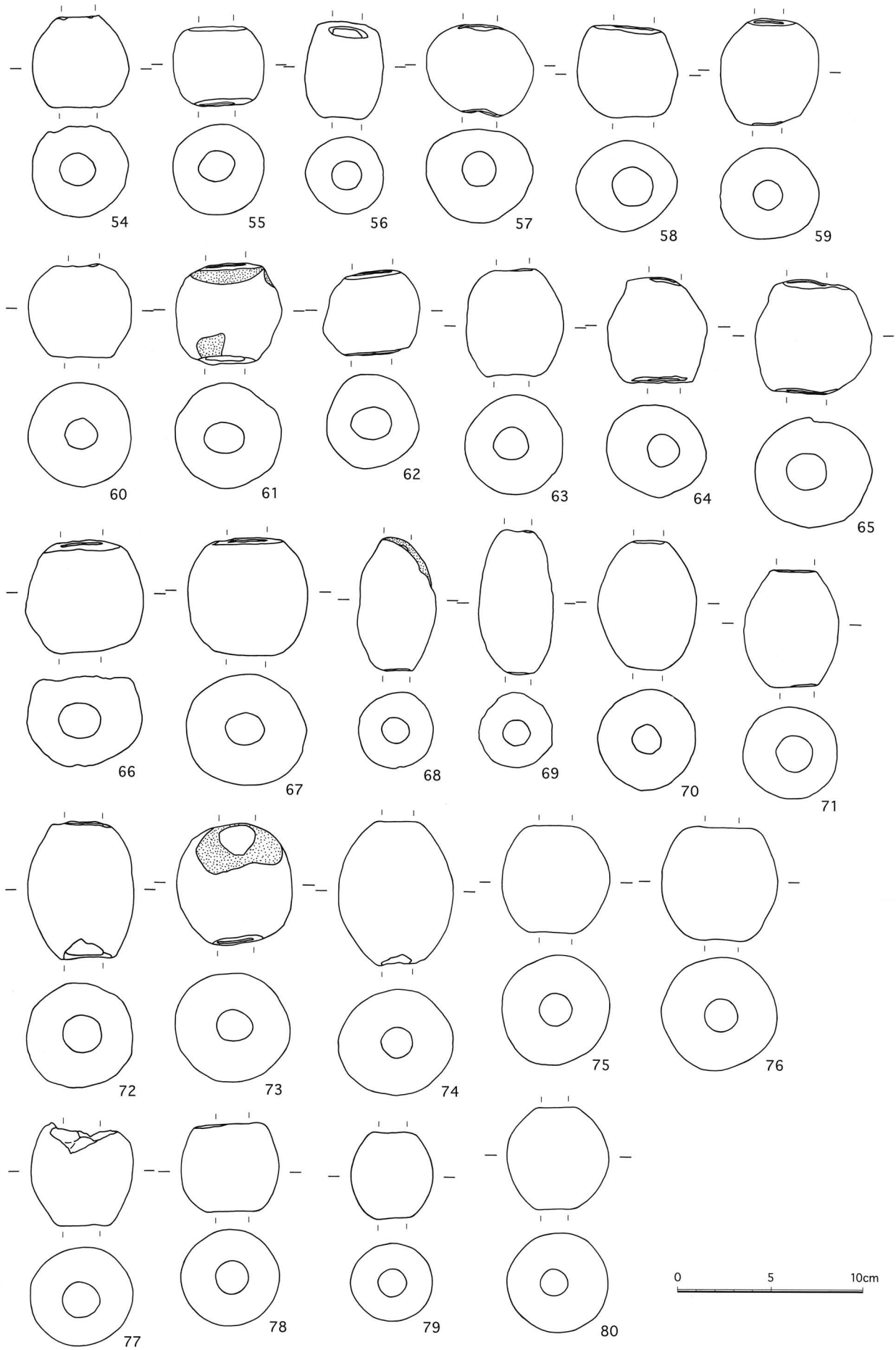
第65図　第10調査区遺物図　弥生土器・須恵器・土師器・土錘・珠洲・越中瀬戸・銭



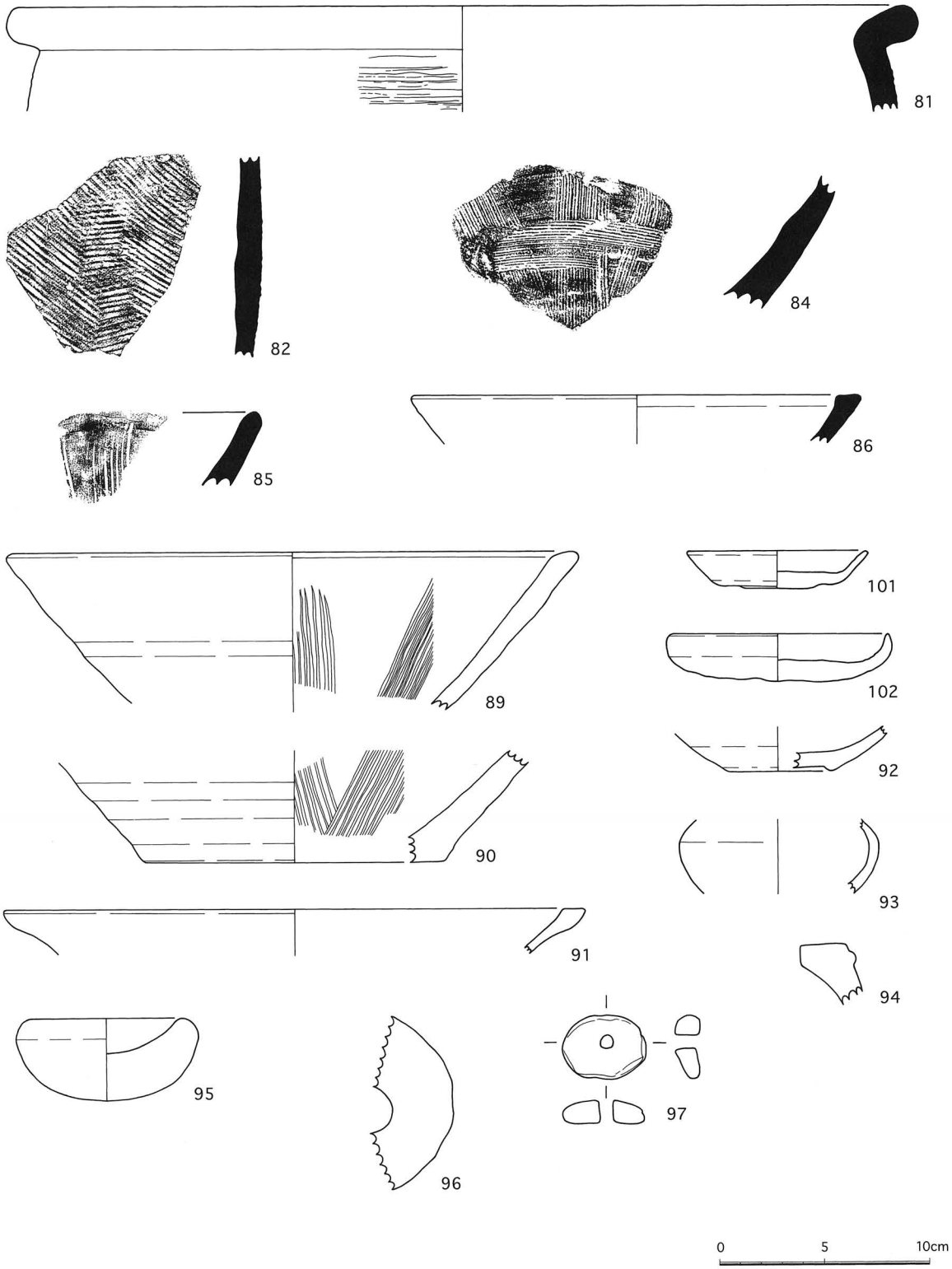
第66図　第1・6調査区遺物図(1)　土師器・須恵器・製塩土器・支脚



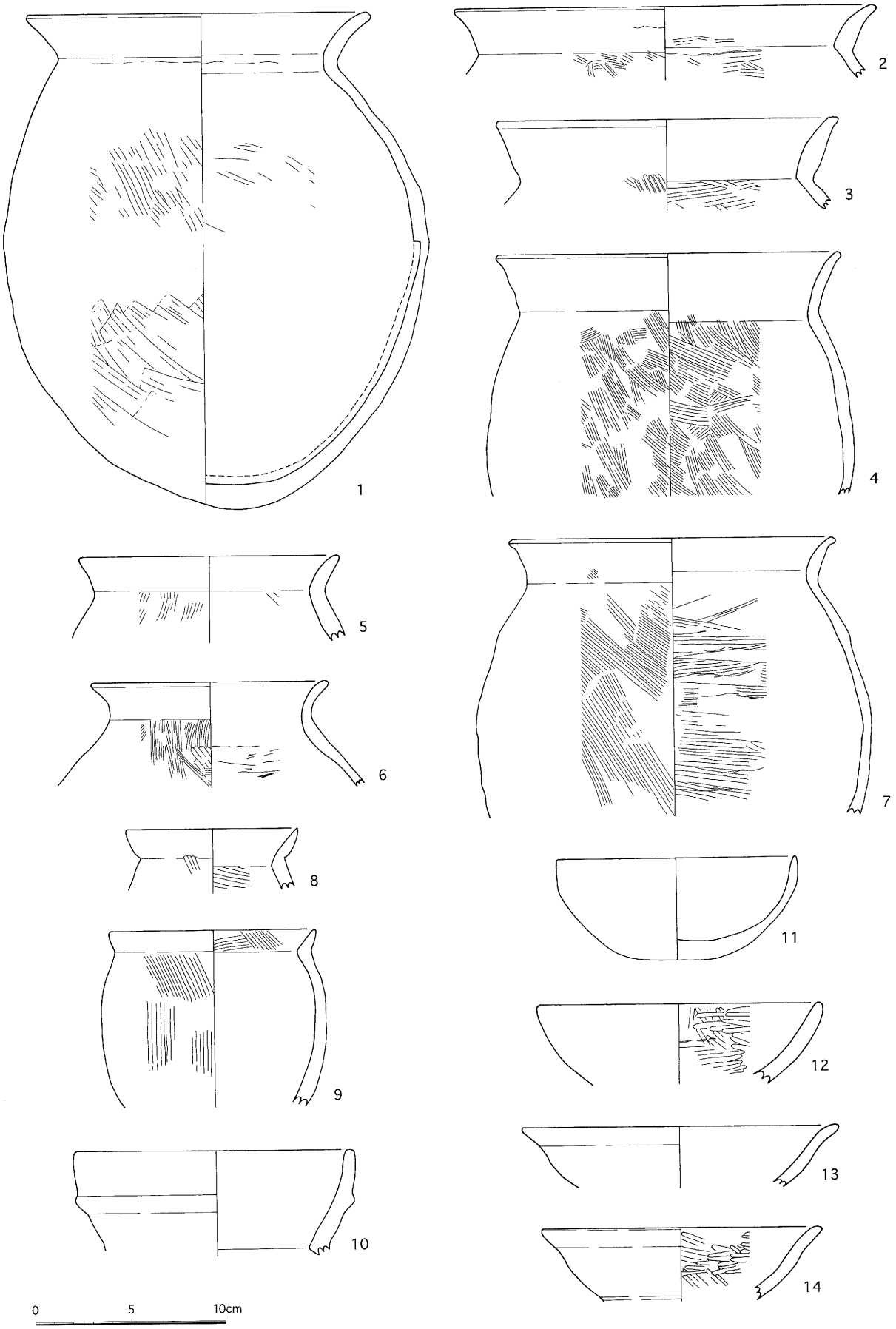
第67図　第1・6調査区遺物図(2) 土師器



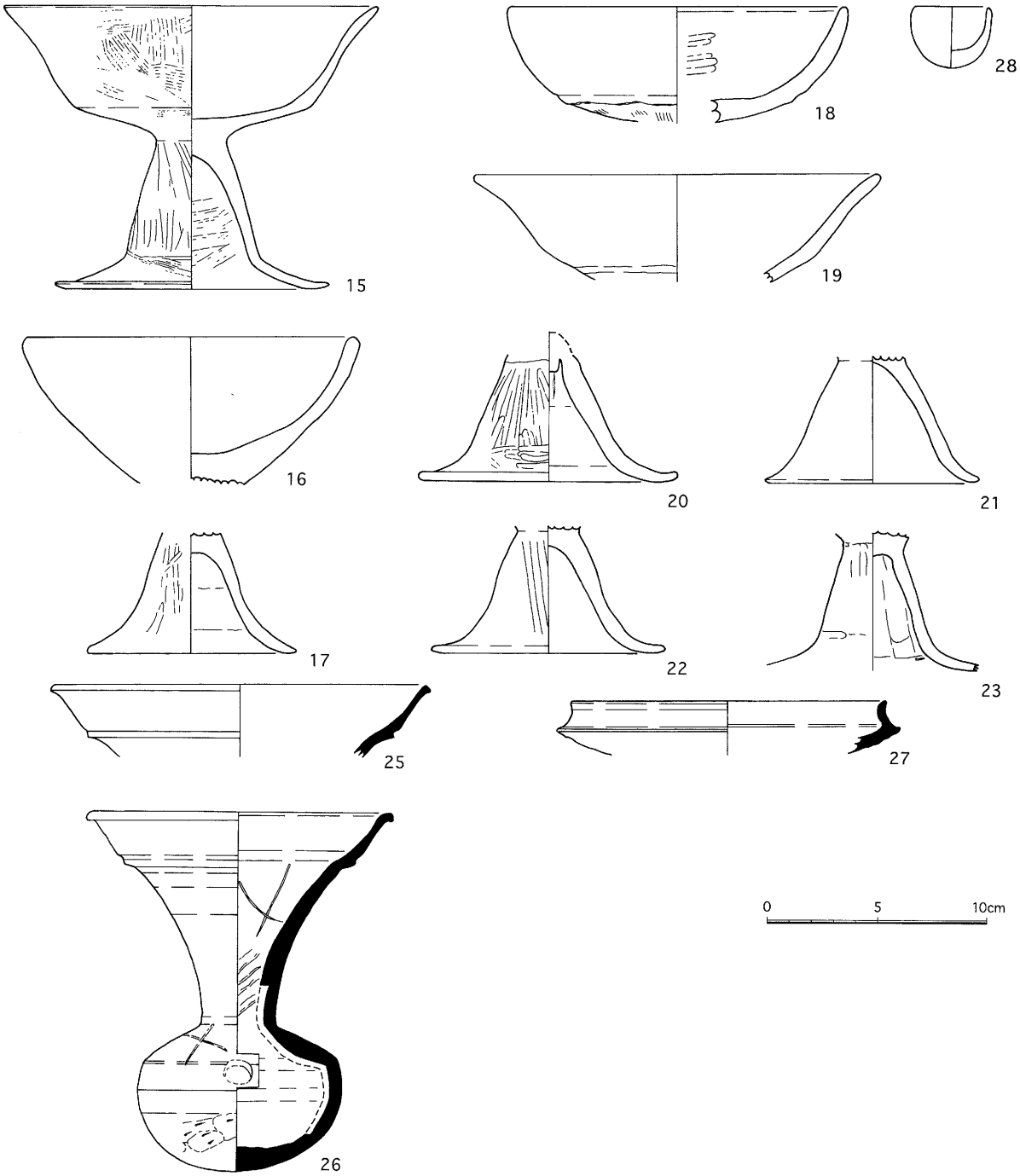
第68図　第1・6調査区遺物図(3)　土錘



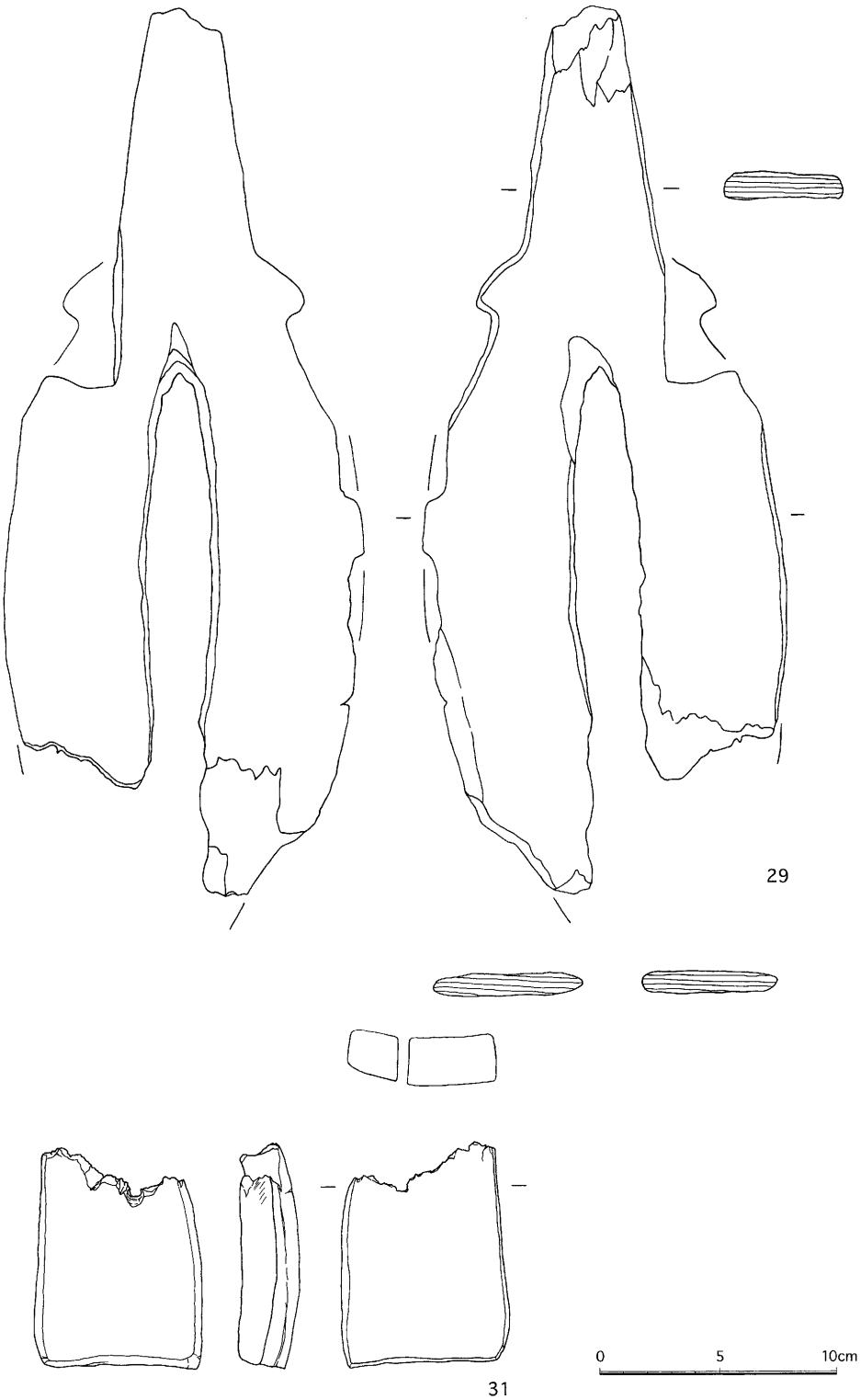
第69図　第1・6調査区遺物図(4)　珠洲・瓦器・越中瀬戸・るつぼ・羽口・火鉢



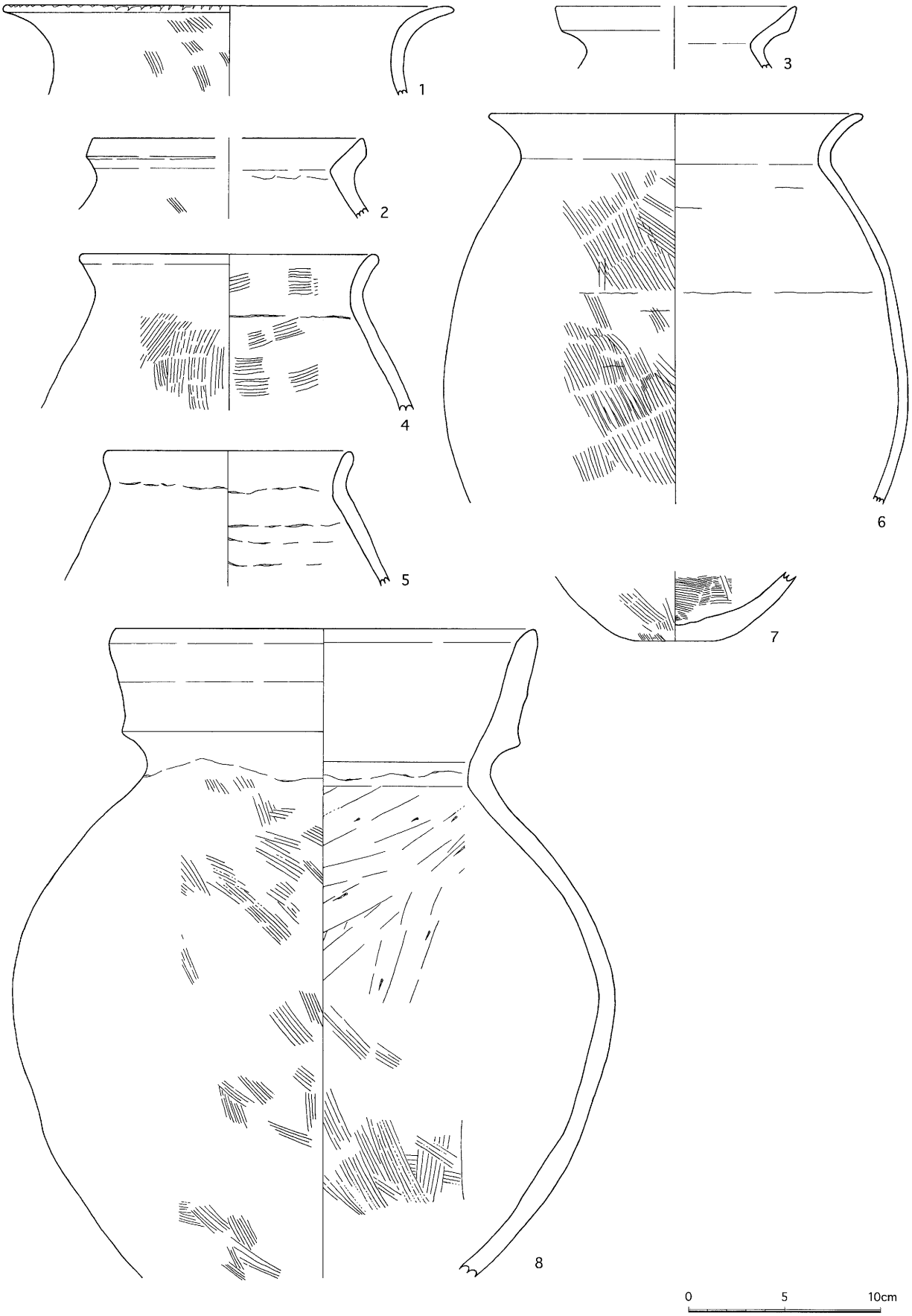
第70図　第2調査区遺物図(1)　土師器



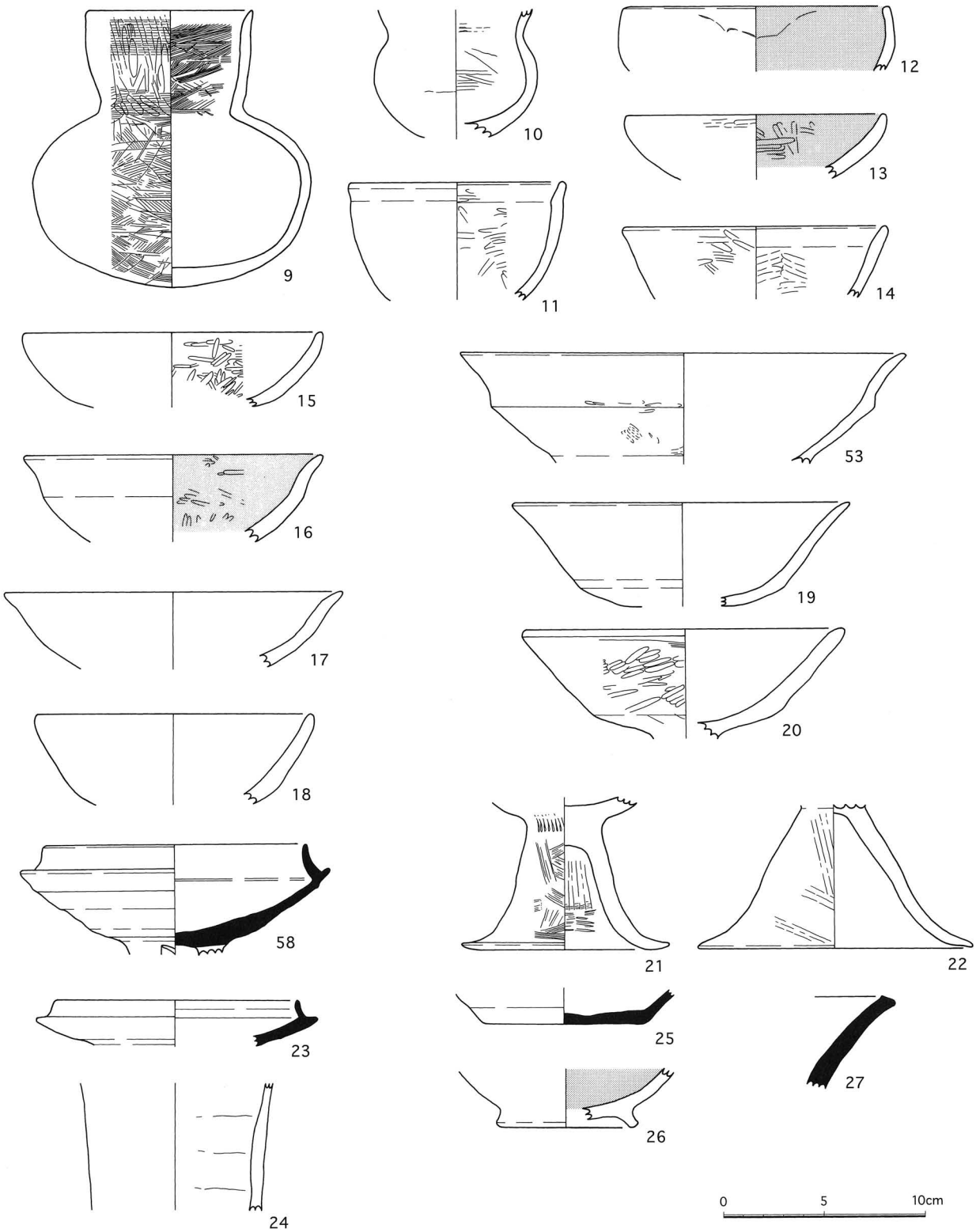
第71図　第2調査区遺物図(2) 土師器・須恵器



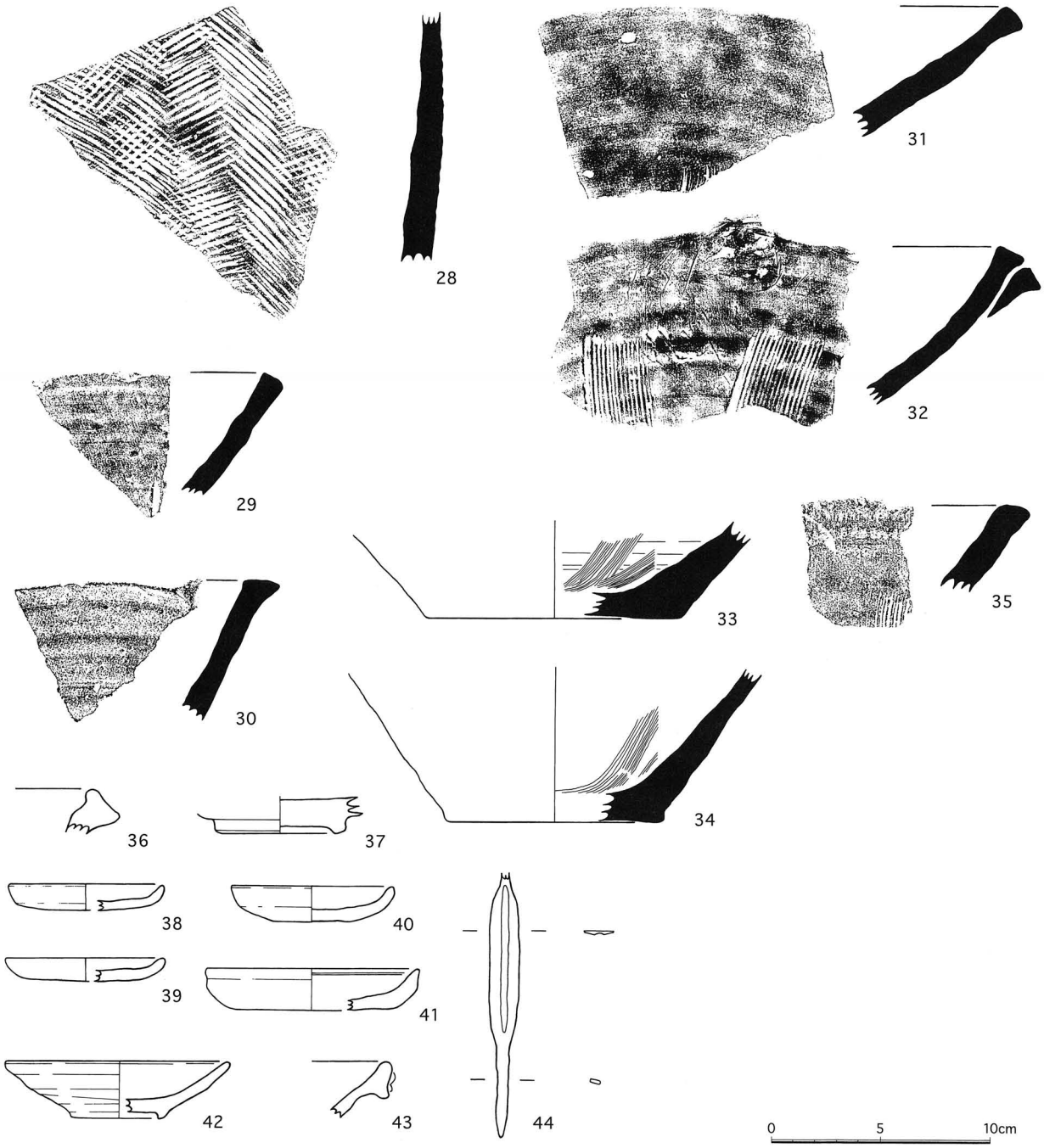
第72図　第2調査区遺物図(3) 鍬・滑石製品



第73図　第3調査区遺物図(1) 弥生土器・土師器



第74図　第3調査区遺物図(2) 土師器・須恵器・製塩土器



第75図　第3調査区遺物図(3) 珠洲・加賀・青磁・土師皿・こうがい

富山県小矢部市

桜町遺跡発掘調査報告書

縄　文　遺　構　編Ⅰ

弥生・古墳・古代・中世編Ⅱ

第1分冊

発　行　日　平成16年3月31日
編集・発行　小矢部市教育委員会
〒932-8611　富山県小矢部市本町1－1
TEL　0766-67-1760
印　　刷　39デザイン印刷

桜町遺跡発掘調査報告書

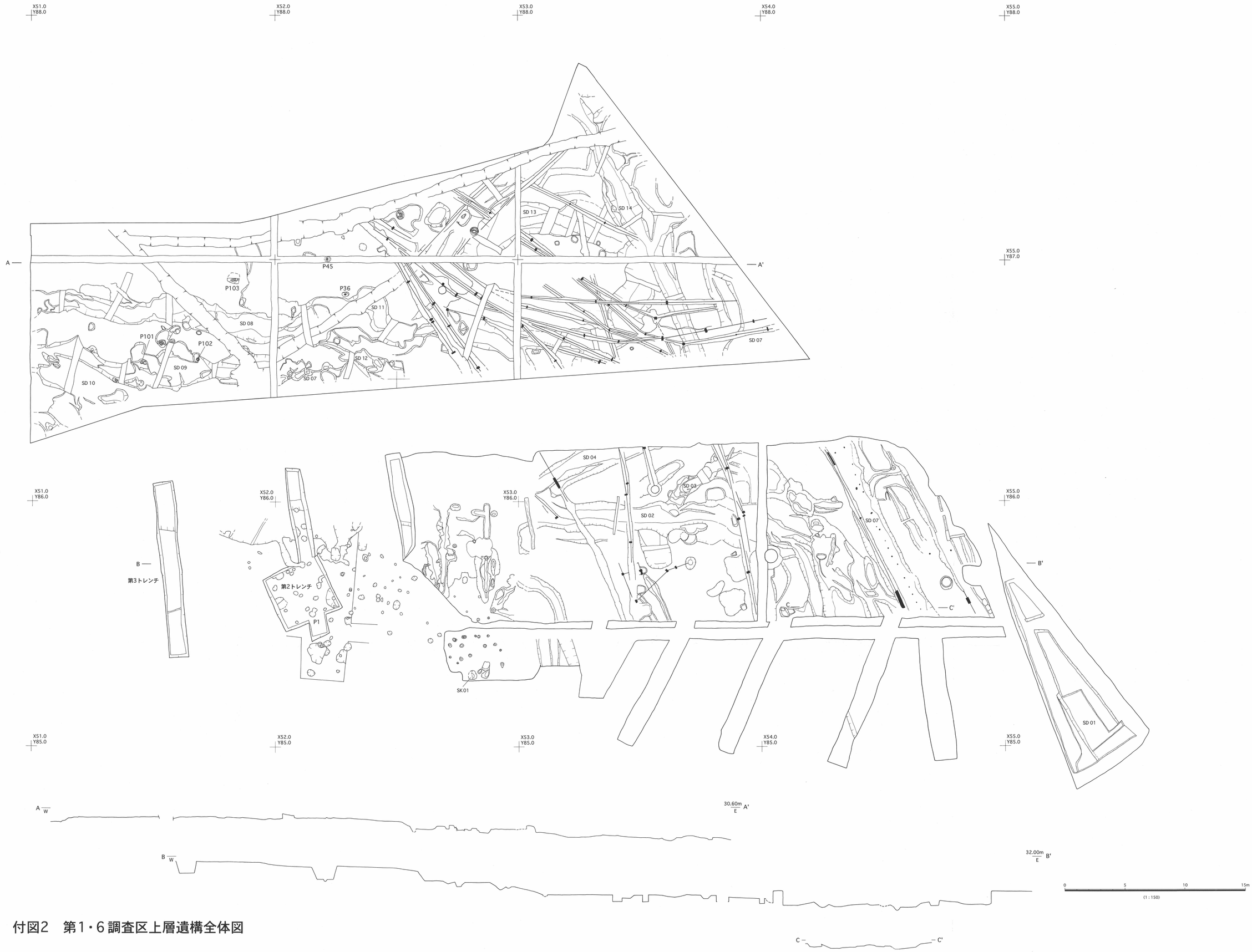
縄文遺構編Ⅰ

弥生・古墳・古代・中世編Ⅱ

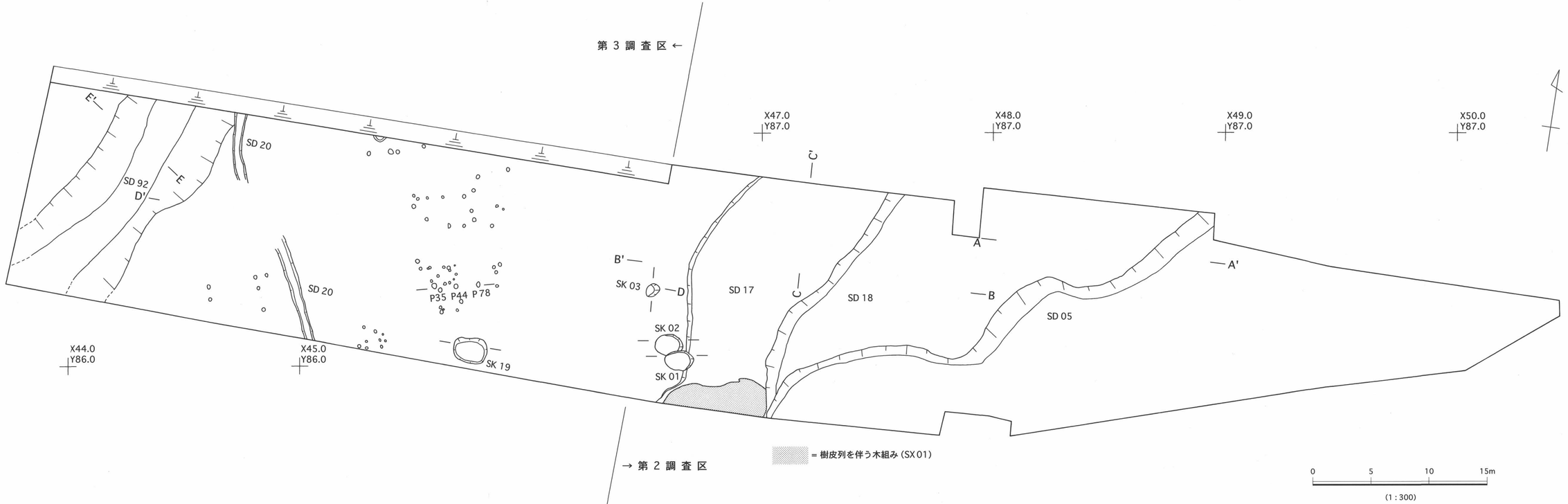
付　図

1．第１・６調査区縄文遺構全体図
2．第１・６調査区上層遺構全体図
3．第２・３調査遺構全体図
4．第１調査区中世遺構図
~~5．CD-ROM（PDF）~~

付図1　第1・6調査区縄文遺構全体図



付図2　第1・6調査区上層遺構全体図



付図3　第2・3調査遺構全体図

第2トレンチ（1988年）

試掘トレンチ（1996年）

試掘トレンチ拡張部（1988年）

付図4　第1調査区中世遺構図